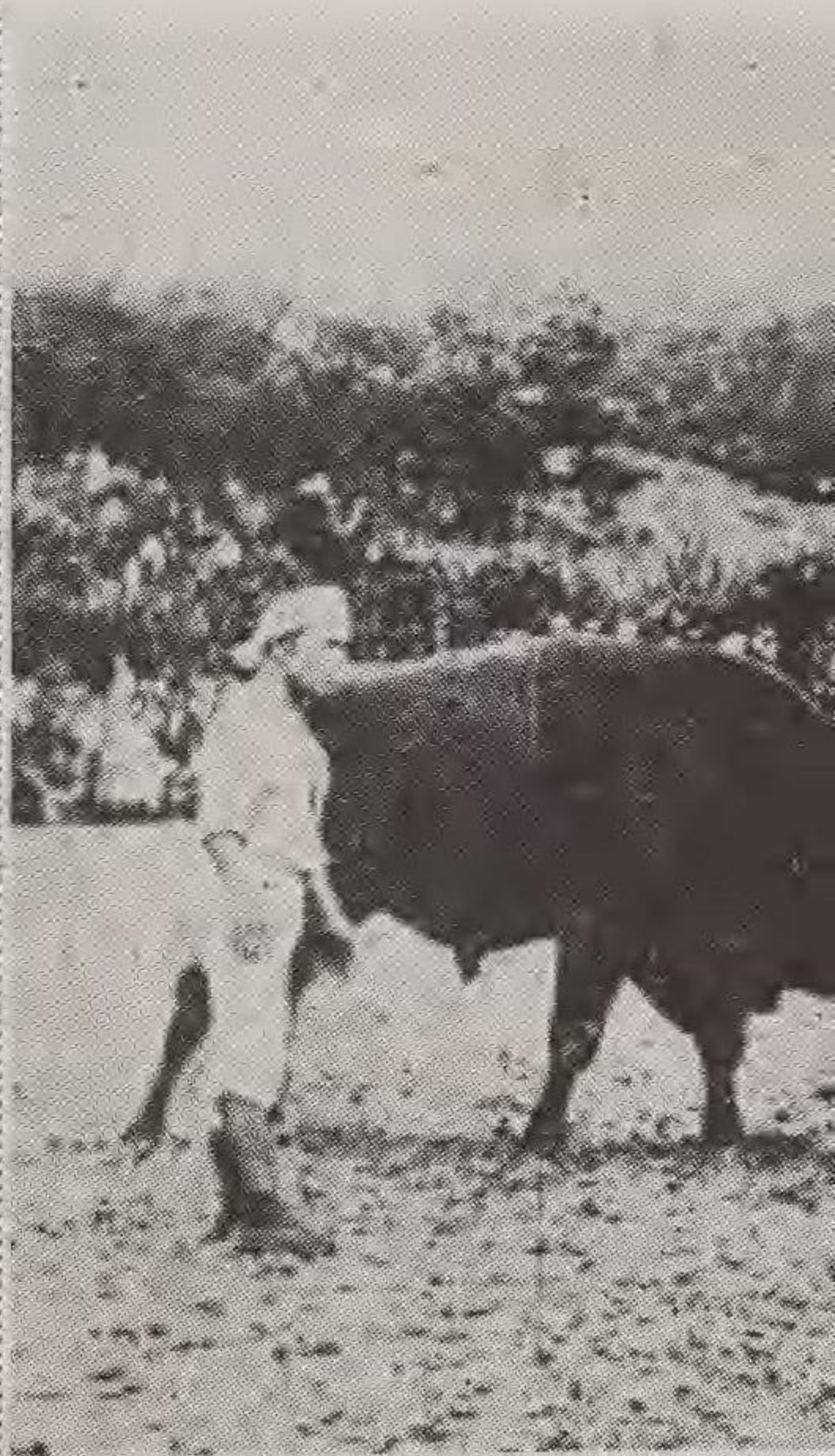
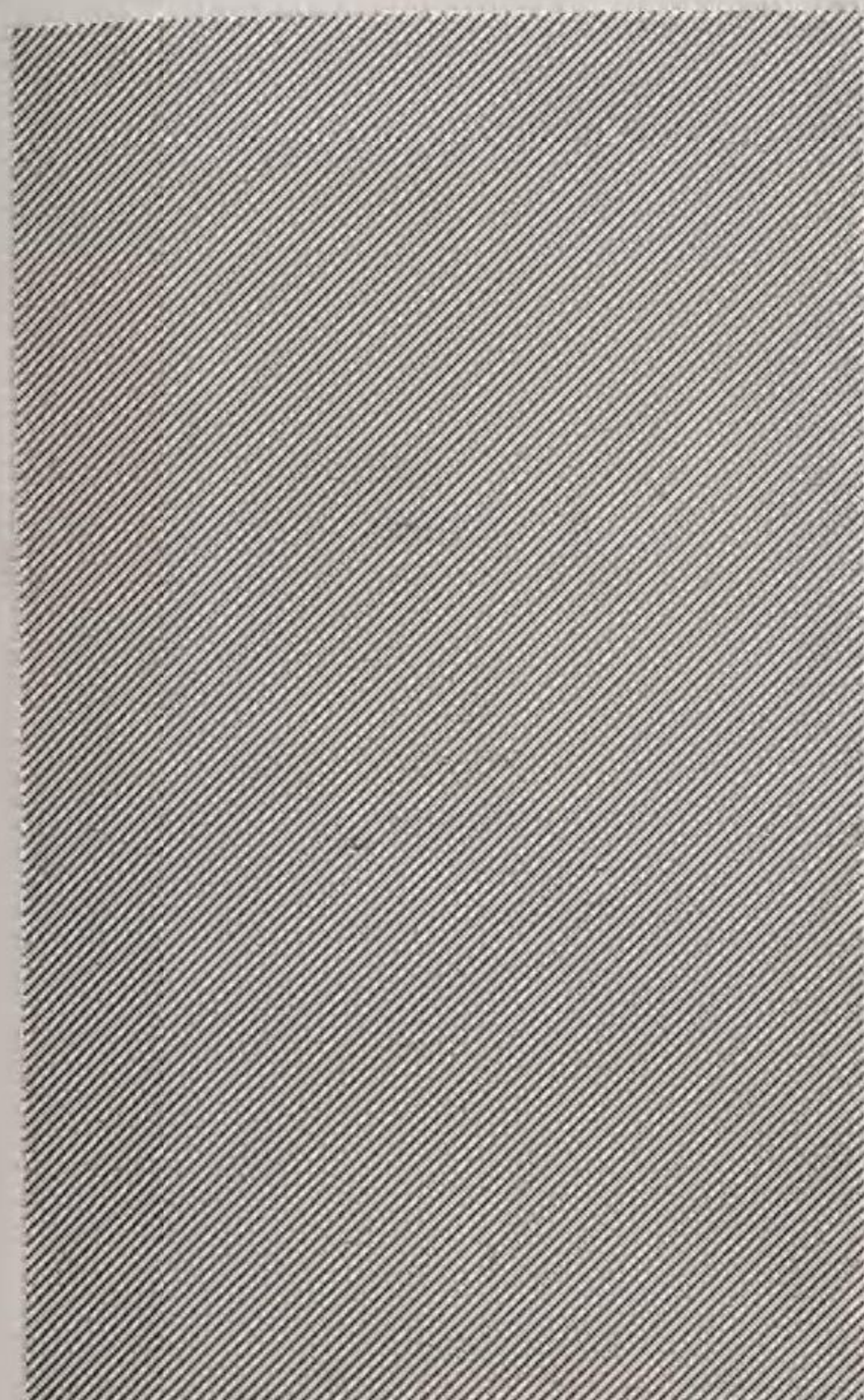


場工所鋼製倉小野淺(右下) 場工多博酒麥本日大(中) 景全社會ルービ櫻の司門(上)  
店支多博力電邦東(左下)



く如の圖がるあで質強美優は純島大のりすがこよ  
米一き高白摺稻の島大るけ分り摺をと粒米と穀粒  
るなりよ部二

害に罹り易き缺點なきにあらざるも収量多く、栽培面積最も廣く、本縣水稻の代表的品種。

(6)、宮神力 (晚稻) 神力に白笹を交配して育成せる新品種にして出穂期成熟期、米質、收量、其他一般の性状改良神力と大差ないが、草丈稍低きと耐病性强き特徴を有し當業者の歓迎する所となり、栽培面積著しく増加の傾向がある。

(7)、旭 (晚稻) 大體九月七日頃出穂、十一月二日頃成熟、粒は神力に比し稍大きく腹白なく品質良好。分蘖は神力に比し少く、草丈稍高く病害に對する抵抗強き純系淘汰より選出したる品種。

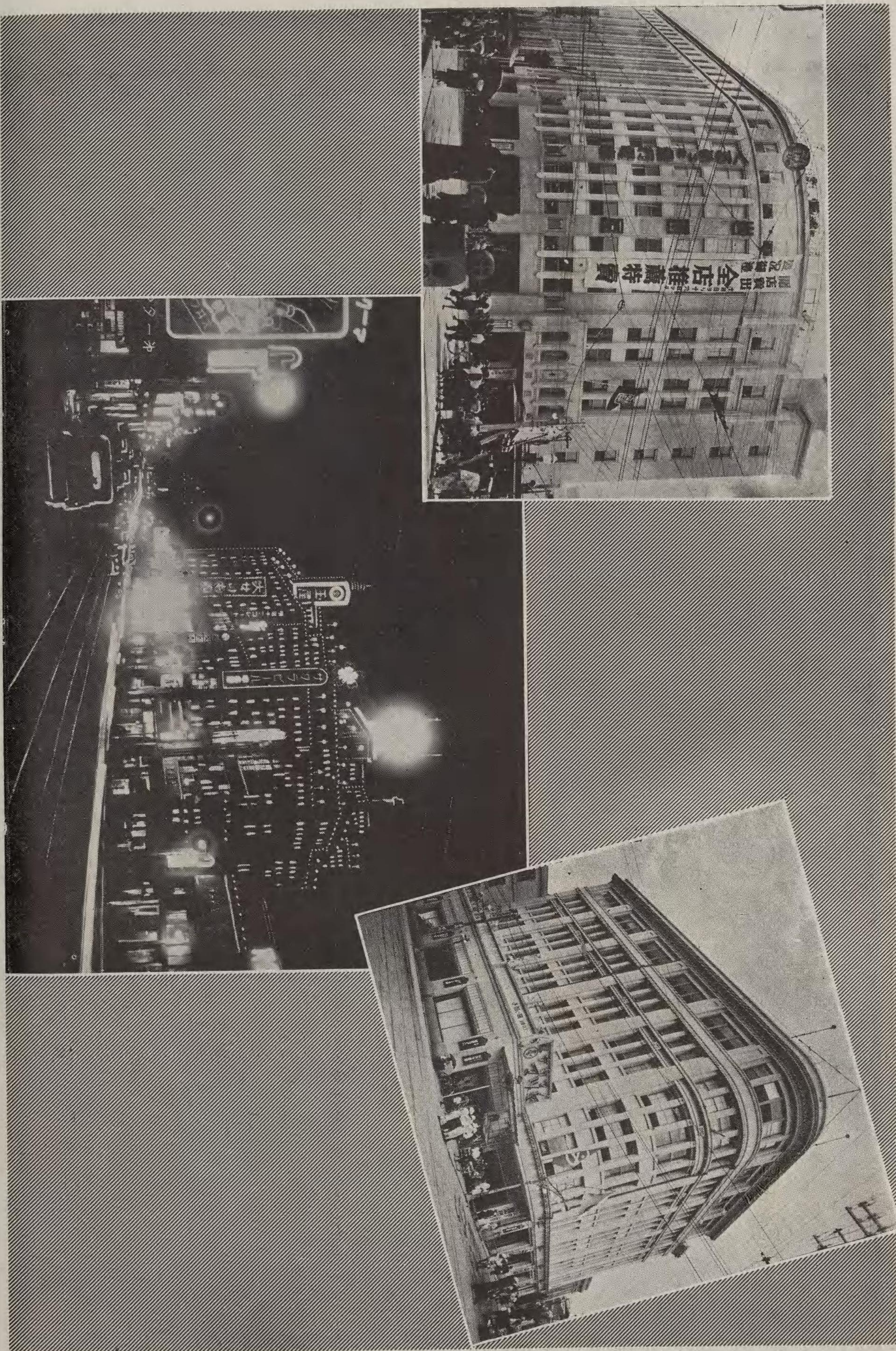
(8)、三井 (晚稻) 本種は元來畿内支場に於て神力と愛國とを交配して作りし雜種第二代目の中より三井郡の故田中新吾氏が選出せしが、其後年と共に雜駁となり固有特性を失はんとせしを、さらに本縣農事試驗場に於て純系淘汰により選出した。出穂期成熟期等旭と大差なく又病害に對する抵抗力強く米質の優良なる點等、旭に類似し、全長三尺二寸五分にして旭より稍低く

る整理、育苗はその範である。又肥料の配合と施用法の合理化をはかるのは稲作上最も緊要なことなので、縣下土性の基本的調査を斷行し配合施用法の確を期するとともに堆肥の増製、綠肥の栽培を奨励し、肥料の自給につとめ、增收と併せて生産費の遞減をはかつてゐる。なほ又産米の收量と品質とに非常の影響を及ぼす螟蟲、浮塵子、椿象、稻熱病、葉枯病等の被害防除につとめた結果、稲作增收は目ざましく發達してゐる。

平均年次

平均年次	反當收量
明治二三—同三二	一石四五〇
明治三三—同四二	一石八二一
明治四三—大正八	二石一〇〇
昭和五—同九	二石一六〇

右表のやうに反當一石四斗五升の收量が農業經營改善の結果、平年作二石一斗六升になつたのだから驚異的である。



屋松右 屋玉中 屋田岩左 店貨百大田の市岡福



屋松右 屋玉中 屋田岩左 店貨百六三の市岡福

害に罹り易き缺點なきにあらざるも収量多く、栽培面積最も廣く、本縣水稻の代表的品種。

(6)、宮、神力 (晩稻) 神力に白笹を交配して育成せる新品種にして出穂期成熟期、米質、收量、其他一般の性状改良神力と大差ないが、草丈稍低きと耐病性強き特徴を有し當業者の歡迎する所となり、栽培面積著しく増加の傾向がある。

(7)、旭 (晩稻) 大體九月七日頃出穂、十一月二日頃成熟、粒は神力に比し稍大きく腹白なく品質良好。分蘖は神力に比し少く、草丈稍高く病害に對する抵抗強き純系淘汰より選出したる品種。

(8)、三井 (晩稻) 本種は元來畿内支場に於て神力と愛國とを交配して作りし雜種第二代目の中より三井郡の故田中新吾氏が選出せしが、其後年と共に雜駁となり固有特性を失はんとせしを、さらに本縣農事試験場に於て純系淘汰により選出した。出穂期成熟期等旭と大差なく又病害に對する抵抗力強く米質の優良なる點等、旭に類似し、全長三尺二寸五分にして旭より稍低く分蘖は十六本位にして旭より稍多く稀に短芒を有する優良品種。

生産獎勵については耕地の整理改良を行ひ、動力機による灌溉設備を施し水稻栽培上最も緊要な灌溉排水の自由適量を期し、また増收の基礎たる土地の深耕については特に獎勵した結果、技術の進歩と鋤の改良と相俟つて著しく進歩の跡をたどり、良苗の育成は「苗代半作」の稱あるやうに増收上の要諦たるを以て鹽水撰その他種子の精選特に薄播きの勵行によつて強剛な苗の育成につとめたゝめに一般に改良進歩の跡顯著である。殊に三瀨地方におけ

る整理、育苗はその範である。又肥料の配合と施用法の合理化をはかるのは稲作上最も緊要なことなので、縣下土性の基本的調査を斷行し配合施用法の的確を期するとともに堆肥の増製、綠肥の栽培を獎勵し、肥料の自給につとめ、増收と併せて生産費の遞減をはかつてゐる。なほ又産米の収量と品質とに非常の影響を及ぼす螟蟲、浮塵子、椿象、稻熱病、葉枯病等の被害防除につとめた結果、稲作増收は目ざましく發達してゐる。

平均年次	反當收量
明治二三——同三二	一石四五〇
明治三三——同四二	一石八二一
明治四三——大正八	二石一〇〇
昭和五——同九	二石一六〇
五ヶ年平均	

右表のやうに反當一石四斗五升の収量が農業經營改善の結果、平年作二石一斗六升になつたのだから驚異的である。

### イ、麥

本縣における麥作は作付反別六萬六千九百四十四町歩餘にして生産高は百三萬四千三百七十三石(昭和十年)の多きを算してゐる。(明治十六年三十八萬石作付反別五萬五千町歩に比較すれば如何に増加してゐるか明瞭である)。このうち九二%迄は田の裏作で、八女、山門、三瀨、三井、朝倉等の筑後平野や乾田の多い築上地方に産出が多いが、福岡地方に比較的少いのは米の裏作に茶種を多作する關係である。(昭和十年現在)

種類	作付反別	收穫高	一反當收穫高
大麥	二、五三七二	三八、四二〇	一、五一一
裸麥	二〇、五二八、四	三一三、一三五	一、五二五
小麥	四三、八一四、五	六八二、三五一	一、五五七
燕麥	三四、一	四六七	一、三七〇
計	六六、九一四、二	一、〇三四、三七三	一、五四六

反當の多いのは山門、三瀨、早良、粕屋、田川の五郡で概して南部に多いことは、米と同様土質の關係にも依らう。縣の平均は約一石五斗強となつてゐるから農家の一戸平均の收穫高は作付平均四反五畝のなかゝら七石といふことになつて米の凡そ三分の一にしか當らない。麥の中、作付も收高も最も多いのは小麥で全體の六割五分を占め、全國第一位の小麥生産縣となつてゐる。

麥作の大勢を観るに、麥は米に亞ぐ重要農産物にして、特に中小農家の經濟に至大の關係を有するに拘らず、一般の生活程度の上昇に伴ひ、麥の混食減少の結果需要減少したのと、勞銀及び肥料代の關係上利潤少いため、作付反別漸減するので、國策により昭和七年度より小麥増殖五ヶ年計畫を樹立し獎勵したため右表の如き増産傾向にある。

昭和六年 (小麥)	作付反別	收穫高
	三八、六〇〇	五一三、〇〇〇
昭和十年 (小麥)	四三、八一五	六八二、三五一

縣は稻に準じ農事試験場において純系淘汰又は人工交配の方法により優良品種を育成し、原種栽培を行ひ、市町村の農事組合採種圃を経て各農家に頒

で品質優良の麥酒用大麥。

麥作の經營進歩による増收の結果を比較して見よう。

平均年次	大麥	裸麥	小麥	平均
自明治二三	〇、八四三	〇、八四四	〇、九〇六	〇、八六八
至同三二	〇、八四三	〇、八四四	〇、九〇六	〇、八六八
自同三三	〇、八八一	〇、八六一	〇、八七三	〇、八六八
至同四二	〇、八八一	〇、八六一	〇、八七三	〇、八六八
自同四三	〇、八二四	〇、八二四	一、〇七九	一、〇七九
至同四八	〇、八二四	〇、八二四	一、〇七九	一、〇七九
自同四九	一、一七九	一、一七九	一、一三四	一、一三四
至同五五	一、一七九	一、一七九	一、一三四	一、一三四
自同五五	一、一七九	一、一七九	一、一三四	一、一三四
至同五九	一、一七九	一、一七九	一、一三四	一、一三四

(4) 菜種

昭和十年における菜種の作付は二萬六百五十六町四反歩で、全國作付反別の約二割に相當し、生産額は二十七萬七千六百七十五石で全國の二割六分餘に達し、價格四百三十六萬九千四百六十二圓を超え、菜種の本場として全國

布し、普及に努めてゐる。今その品種を挙げると次のやうである。

(1) 小麥

- 1、赤坊主、五月二日頃出穂し、六月七日頃成熟、穂は紡錘狀で割合に小なるも、分蘗多く粒小にして品質中等に屬し、在來種中の代表的品種。
- 2、江島神力、神力小麥と江島種の交配種にして、四月二十七日頃出穂、六月五日頃成熟、長芒を有し大粒で品質良好收量多い。
- 3、幾内銹シラズ、熟期は江島神力と大差なく、稈強く大粒で品種良好なるも、收量幾分劣るのが缺點。
- 4、早小麥、稈短く粒大きく品質良好。

(2) 裸麥

- 1、竹下、出穂期は四月三十日頃にして、六月二日頃成熟、穗形六條、中芒中粒、品質收量共に優秀、縣下に最も多く栽培せらるゝ代表的なもの。
- 2、神保裸、收量相當多いが稈脆く折れ易い缺點がある。粒は圓味を帯び豊富な品質も竹下に劣る。
- 3、膝八、稈丈夫にして多肥に堪へ收量多し。

(3) 大麥

- 1、ゴールデン・メロン、五月六日頃出穂、分蘗力甚だ旺盛な二條長芒種

る、參考迄に最近五ヶ年平均を示せば左の如し。

△作付反別	一萬七千八百六十七町五反
△收穫高	二十一萬五千四百七十五石
△價格	二百九十七萬二千三百五十二圓
△一反歩平均收穫高	一石二斗六合

農家の現金収入と多角的農業經營と産業組合の販賣統制、増産獎勵でますます漸増の傾向を辿つてゐる。

(5) 蔬菜園藝

都市人口の膨脹と地理的關係から販路も極めて廣いため蔬菜、園藝物、果實の需要は日一日と増大してゐる、その上風土は氣温々和地味肥沃といふのだから好條件が完全に具備し、最近は滿鮮、臺灣、米國、南洋に販路が延びて前途洋々たるものがある、果樹類は柑橘類を主とし、昭和八年の調査によれば總面積約二千二百町歩、生産額約三百萬圓、蔬菜類の栽培反別一萬五千

多いのは小麦で全体の六割五分を占め、全国第一位の小麦生産縣となつてゐる。

麦作の大勢を観るに、麦は米に亞ぐ重要農産物にして、特に中小農家の經濟に至大の關係を有するに拘らず、一般の生活程度の上昇に伴ひ、麥の混食減少の結果需要減少したのと、勞銀及び肥料代の關係上利潤少いたため、作付反別漸減するので、國策により昭和七年度より小麦増殖五ヶ年計畫を樹立し獎勵したため右表の如き増産傾向にある。

年次	作付反別	收穫高
昭和六年 (小麦)	三八、六〇〇 <small>町</small>	五一三、〇〇〇 <small>石</small>
昭和十年 (小麦)	四三、八一五	六八二、三五一

縣は稻に準じ農事試験場において純系淘汰又は人工交配の方法により優良品種を育成し、原種栽培を行ひ、市町村の農事組合採種圃を経て各農家に頒

て品質優良の麥酒用大麥。

麥作の經營進歩による増收の結果を比較して見よう。

平均年次	大麥	裸麥	小麥	平均
自明治二三	〇、八四三	〇、八九四	〇、九八六	〇、八八八
至同三二	〇、八四三	〇、八九四	〇、九八六	〇、八八八
自同三三	〇、八一八	〇、八七三	〇、八七三	〇、八六六
至同四二	〇、八一八	〇、八七三	〇、八七三	〇、八六六
自同四三	〇、九一四	一、〇〇一	一、〇一七	一、〇一七
至大正四	〇、九一四	一、〇〇一	一、〇一七	一、〇一七
自同四八	一、一六五	一、一七九	一、一四四	一、一四四
至昭和九	一、一六五	一、一七九	一、一四四	一、一四四
自同四九	一、一六五	一、一七九	一、一四四	一、一四四
至同五五	一、一三三	一、一七一	一、一九〇	一、一六四
自同五九	一、一三三	一、一七一	一、一九〇	一、一六四

#### (4) 茶種

昭和十年における茶種の作付は二萬六千五百六十四反歩で、全國作付反別の約二割に相當し、生産額は二十七萬七千六百七十五石で全國の二割六分餘に達し、價格四百三十六萬九千四百六十二圓を超え、茶種の本場として全國に冠を占めてゐる。生産物の大部分は原料のみ、阪神地方に移出するが、縣内において製油業者百七、八十戸、その取扱數量三千萬斤に達し、福岡、兩筑、三瀨、柳河地方に組合があるが、十一年六月より縣購販聯が農村工業化の試練として福岡市外竹下に製油工場を開設、搾油を開始してゐる、本縣重要産物の一たるを以つて之が販賣上品質改善は最も急務とするため昭和五年六月より茶種検査を施行してゐる。昭和十年度においては前年に比すれば作付反別千九百九十一町九反(一割〇六)三萬九千七百七十三石(一割六四)を激増して

るも、收量幾分劣るのが缺點

#### (2) 裸麥

- 1、竹下 出穂期は四月三十日頃にして、六月二日頃成熟、穗形六條、中芒中粒、品質收量共に優秀、縣下に最も多く栽培せらるゝ代表的なもの。
- 2、神保裸 收量相當多いが稈脆く折れ易い缺點がある。粒は圓味を帯び豊富な品質も竹下に劣る。
- 3、膝八 稈丈夫にして多肥に堪へ收量多し。

#### (3) 大麥

- 1、ゴイルデン・メロン 五月六日頃出穂、分蘗力甚だ旺盛な二條長芒種

る、參考迄に最近五ヶ年平均を示せば左の如し。

△作付反別	一萬七千八百六十七町五反
△收穫高	二十一萬五千四百七十五石
△價格	二百九十七萬二千三百五十二圓
△一反歩平均收穫高	一石二斗六合

農家の現金収入と多角的農業經營と産業組合の販賣統制、増産獎勵でますます漸増の傾向を辿つてゐる。

#### (5) 蔬菜園藝

都市人口の膨脹と地理的關係から販路も極めて廣いため蔬菜、園藝物、果實の需要は日一日と増大してゐる、その上風土は氣温々和地味肥沃といふのだから好條件が完全に具備し、最近は滿鮮、臺灣、米國、南洋に販路が延びて前途洋々たるものがある、果樹類は柑橘類を主とし、昭和八年の調査によれば總面積約二千二百町歩一年産額約三百萬圓、蔬菜類の栽培反別一萬五千町歩、年産額一千万圓、果樹苗木類の栽培面積三十町歩、十五萬圓、花卉類二十四萬圓、その他園藝加工品生産額は、實に一千四百萬餘圓にのぼつてゐる。然しこれらは縣内の需要を満たすに足らずして、年々輸入する果實柑橘類百三十八萬圓、バナナ五十萬圓、梨四十萬圓、里芋三十五萬圓、葡萄三十萬四千圓、計百三十三萬圓に達し、蔬菜類では瓜類六十九萬五千圓、甘藷、葱頭、里芋なども輸入計百四十八萬圓、合計四百八十一萬圓にのぼり、これらの需要は年々増大するばかりである。

1、柑、橘、昭和八年に於て其の面積一千町歩、年産額百萬圓に達してゐる。温州種其の主位を占め、品種の改良と共に、益々増植してゐる。

主産地は八女郡串毛、邊春、光友、白木の各村、粕屋郡立花村、青柳村、立花蜜柑、筑紫郡南畑村、岩戸村地方、山門郡山川村の温州、糸島郡元岡村、可也村、粕屋郡席内村、青柳村に於ける「ネーヴル、オレンジ」等がある。なほ近年粕屋郡青柳村、立花村、宗像郡開興村、上西郷村等、金柑の宗像郡神興村の栽培隆盛をきたし、阪神各都市に搬出して頗る好評を博してゐる。

2、梨、梨は明治三十年前後より栽培され、四十三年以來漸次隆盛に向ひ最近その生産額五十萬圓以上に達し、京都郡仲津村、萩郷村、築上郡築城村一帯は新田原と稱して其の栽培最も盛である。次いで朝倉郡上秋月、夜須の兩村、福岡市立花寺、三井郡上津荒木村、八女郡中廣川、下廣川の諸村、三池郡高田村等本縣に於ける梨の産地と稱すべきである。

3、柿、柿は栽培最も古いもので、生柿白柿を合すれば、其の生産額六十五萬圓餘にのぼる、殆んど宅地を利用して栽植し、三井郡正月柿(甘)、企救郡金月柿(澁)、八女郡元山柿(甘)、嘉穂郡大分柿(甘)、尾谷柿(澁)、田川郡葉隠(澁)、築上郡川底柿(澁)、等は本縣特有の品種なりとす。近年富有柿(甘)、次郎柿(甘)、横野柿(澁)等の果園栽培も増加して來てゐる。

4、桃、桃は年産額二十五萬圓に達し、新田原(仲津村、萩郷、築城村)、築上郡千束村、筑紫郡大野村、水城村の各村栽培盛である。

11、里芋、里芋は大根に次ぎ、産額百二十萬五千六百餘圓にして、朝倉、八女、三井の各郡産額多く特に京都郡今元村文久里芋は、品質良好で名が高い。

12、漬菜類、年産額八十一萬七千六百餘圓、山門郡主位を占め、其他若松市島郷、三井郡宮ノ陣、久留米市等有名にして、特に結球白菜に於て優品を産してゐる。

13、牛蒡、年産額五十二萬三千餘圓、三井郡筑後川沿岸の牛蒡は、本縣に於ける古き名産地にして千代島牛蒡の名あり。近年京都郡椿市村、宗像郡上西郷村等其栽培盛になつて來た。

14、葱頭、年産額二十萬三千八百圓内外にして、葱の産額に及ばざれども水田裏作奨励により、年々作付反別増加して、三池、山門、三潞、八女、宗像等各郡其栽培盛んにして著名である。

5、枇杷、枇杷は年産額七萬圓に達し、需要の増加と共に、各地適地を選び増植せられ、遠賀郡岡垣村(高倉枇杷)、粕屋郡志賀島村等が著名である。

6、葡萄、葡萄は最近需要の増加と共に、隆盛をきたし、糸島郡櫻井村、福岡市立花寺、八女郡下廣川村、田川郡勾金村等良品を産してゐる。

7、栗、栗は山林原野の利用上販路確實、特に海外出荷品として有望なるを以て、山野自生の笹栗に、高接更新を行ひ、なほ栗園の經營を計畫するもの多く、將來有望である。産額年六萬圓にして、朝倉郡寶珠山村、八女郡白木村、京都郡伊良原村等を産地としてゐる。

8、梅、梅は年産額十九萬圓以上に達してゐるが、梅林とし經營するものは少く、農村各地に散在せるものを集め、市場に出荷するに過ぎなかつたが近時果園栽培を行ふもの増加の傾向がある。

9、無花果、無花果は從來北九州小倉、門司地方に於て販賣せられしに過ぎず、産地は豊前新田原、企救郡の一部にして在來種を栽培してゐるが、近年需要の増加と共に、品種の改善行はれ、各地漸次増植の傾向にある。

10、蘿蔔、蘿蔔は本縣蔬菜の主位を占め、年産額百六十二萬三千五百圓に達し、筑紫、嘉穂、山門、三井の各郡最も産額多く著名なる産地は、福岡市小田部大根、若松市島郷、遠賀郡上津役村、八幡市、戸畑市の一部、筑紫郡東光寺大根、三井郡合川村、山門郡瀬高町、山川村、田川郡添田町、京都郡仲津村、築上郡八屋町。

17、瓜類、胡瓜は博多胡瓜及久留米胡瓜は本縣に於ける特産と稱すべく、南瓜は築上郡三毛門南瓜、八屋南瓜産額多く粕屋郡箱崎南瓜、福岡市比惠南瓜等世に知られ、西瓜は大和及び新大和西瓜の栽培盛んにして、八女、宗像、糸島、遠賀、築上、三井、山門の諸郡が産額多い。

18、高等蔬菜、最近高等蔬菜の需要著しく増加し、温床栽培より漸次温室經營に移つて來て、縣では之が奨励を圖らんが爲め、昭和九年度より、之が栽培並經營調査のため、温室建設補助費を交付して縣下五ヶ所に指定交付し實際の調査に當つてゐるが、氣候の關係上軟化栽培は其成績良好なるため、各地で計畫を行ひ、早熟、抑制栽培と共に縣下一般隆盛に向つて來てゐる。

(6) 花卉園藝

花卉類は久留米市、浮羽郡、山門郡を中心とし、觀賞植物の栽培と共に、益々隆盛をきはめ、特に躑躅の栽培は、米國、南洋、滿鮮地方に搬出せられ著名だが、生花、盛花の流行とも栽培は流行して來た。

2、梨 梨は明治三十年前後より栽培され、四十三年以來漸次隆盛に向ひ最近その生産額五十萬圓以上に達し、京都郡仲津村、秋郷村、築上郡築城村一帯は新田原と稱して其の栽培最も盛である。次いで朝倉郡上秋月、夜須の兩村、福岡市立花寺、三井郡上津荒木村、八女郡中廣川、下廣川の諸村、三池郡高田村等本縣に於ける梨の産地と稱すべきである。

3、柿 柿は栽培最も古いもので、生柿白柿を合すれば、其の生産額六十萬圓餘にのぼる、殆んど宅地を利用して栽植し、三井郡正月柿(甘)、企救郡金月柿(澁)、八女郡元山柿(甘)、嘉穂郡大分柿(甘)、尾谷柿(澁)、田川郡葉隠(澁)、築上郡川底柿(澁)、等は本縣特有の品種なりとす。近年富有柿(甘)、次郎柿(甘)、横野柿(澁)等の果園栽培も増加して來てゐる。

4、桃 桃は年産額二十五萬圓に達し、新田原(仲津村、秋郷、築城村)、築上郡千束村、筑紫郡大野村、水城村の各村栽培盛である。

11、里芋 里芋は大根に次ぎ、産額百二十萬五千六百餘圓にして、朝倉、八女、三井の各郡産額多く特に京都郡今元村文久里芋は、品質良好で名が高い。

12、漬菜類 年産額八十一萬七千六百餘圓、山門郡主位を占め、其他若松市島郷、三井郡宮ノ陣、久留米市等有名にして、特に結球白菜に於て優品を産してゐる。

13、牛蒡 年産額五十二萬三千餘圓、三井郡筑後川沿岸の牛蒡は、本縣に於ける古き名産地にして千代島牛蒡の名あり。近年京都郡椿市村、宗像郡上西郷村等其栽培盛になつて來た。

14、葱頭 年産額二十萬三千八百圓内外にして、葱の産額に及ばざれども水田裏作奨励により、年々作付反別増加して、三池、山門、三瀬、八女、宗像等各郡其栽培盛んにして著名である。

15、馬鈴薯 馬鈴薯は葱頭、甘藍と共に、水田裏作として、最も適當し、また海外出荷品として、特に有望なため三池、八女、三瀬、朝倉、京都等に於ては出荷計畫により、早熟栽培を行ひ、年々其栽培盛んとなり、全縣下を通じて、栽培反別千九百二十町歩に及び年産額百萬圓に達せんとしてゐる。

16、茄子 年額六十萬圓に達し、博多長茄子、久留米長茄子は福岡市、久留米市を中心とし、全縣下に栽培され、又地方によりては由比茄子、企救長茄子等著名である。

8、梅 梅は年産額十九萬圓以上に達してゐるが、梅林とし經營するものは少く、農村各地に散在せるものを集め、市場に出荷するに過ぎなかつたが近時果園栽培を行ふもの増加の傾向がある。

9、無花果 無花果は從來北九州小倉、門司地方に於て販賣せられしに過ぎず、産地は豊前新田原、企救郡の一部にして在來種を栽培してゐるが、近年需要の増加と共に、品種の改善行はれ、各地漸次増植の傾向にある。

10、蘿蔔 蘿蔔は本縣蔬菜の主位を占め、年産額百六十二萬三千五百圓に達し、筑紫、嘉穂、山門、三井の各郡最も産額多く著名なる産地は、福岡市小田部大根、若松市島郷、遠賀郡上津役村、八幡市、戸畑市の一部、筑紫郡東光寺大根、三井郡合川村、山門郡瀬高町、山川村、田川郡添田町、京都郡仲津村、築上郡八屋町。

17、瓜類 胡瓜は博多胡瓜及久留米胡瓜は本縣に於ける特産と稱すべく、南瓜は築上郡三毛門南瓜、八屋南瓜産額多く粕屋郡箱崎南瓜、福岡市比惠南瓜等世に知られ、西瓜は大和及び新大和西瓜の栽培盛んにして、八女、宗像糸島、遠賀、築上、三井、山門の諸郡が産額多い。

18、高等蔬菜 最近高等蔬菜の需要著しく増加し、温床栽培より漸次温室經營に移つて來て、縣では之が奨励を圖らんが爲め、昭和九年度より、之が栽培並經營調査のため、温室建設補助費を交付して縣下五ヶ所に指定交付し實際の調査に當つてゐるが、氣候の關係上軟化栽培は其成績良好なるため、各地で計畫を行ひ、早熟、抑制栽培と共に縣下一般隆盛に向つて來てゐる。

## (6) 花卉園藝

花卉類は久留米市、浮羽郡、山門郡を中心とし、觀賞植物の栽培と共に、益々隆盛をきはめ、特に躑躅の栽培は、米國、南洋、滿鮮地方に搬出せられ著名だが、生花、盛花の流行とともに栽培は流行して來た。

(1)、果樹苗木 果樹苗木は本邦四大苗木産地の一つにして、浮羽郡を中心とし、年産額十五萬圓に及び、逐年隆盛に向ひつゝあるが、元來同地の苗木育成は、正徳四年に創始せられ、幾多の消長を経て遂に現時の盛況を見るに至つたもので、土質肥沃なる筑後川流域の沖積層は苗木栽培に好適し、天恵の地といふべきである。

目下浮羽郡苗木同業組合は、山門苗木準則同業組合、三井苗木準則同業組

合、朝倉苗木同業組合を設立し果樹苗木に就ては縣母木園の設置、病害蟲驅除豫防共同計畫、及び苗木検査を勵行し、聲價の發揚に努め九州各縣は素より滿鮮地方に其の販路を擴張し、これ等の輸送で久大線田主丸驛は常に賑はつてゐる。

### 第三節 茶業

#### ア、概説

お茶といへば靜岡、京都の特産物と見てゐるが、福岡縣こそわが國茶業の發祥地である。後鳥羽天皇の建久二年（皇紀一八五一年）博多聖福寺の開祖にして後京都建仁寺の開祖となつた榮西禪師が宋より歸朝の際、茶種子を持つて筑前春振山に栽培したのが初まりで、世に岩上茶といふのは是で、さらに榮西は喫茶養生記に「茶は養生の仙藥也、延齡の妙術也、山谷之を生ずれば其地神靈也、人倫之を採れば其人長命也、天竺唐土同じく之を貴重す……云々」と大いに茶の効用を鼓吹したため各地に茶業興隆し今日の盛況を見る

に至つた。本縣の茶はかくて幕末文久年間には早くも長崎港から海外に輸出されたが、明治初期輸出貿易の隆盛に伴ひ、粗製濫造に陥つたので明治十七年八女郡に茶業組合を組織し、その後各地に組合生れたが、昭和三年縣下全郡茶業を一團とした福岡縣茶業組合を組織し、今日に至つたものであるが、最近養蠶の不況等に伴ひ副業として茶栽培は農家現金収入には喜ばれて發展し、名産地靜岡、京都に及ばんとしてゐる。

#### イ、現勢

八女郡を中心とする筑後地方が主産地であるが、近時全縣下に發展して、鞍手、嘉穂、京都、築上、早良、筑紫は新興茶業地となつて來た、製茶産額は煎茶最も多いが、近時玉露の生産著しく増加し、京都府につぐ全國第二位の産地となりつゝある。販路は縣内消費が主であるが、玉露は京阪地方始め全國各地に、釜煎茶は沖繩その他に移出されてゐる。尙滿鮮地方に輸出される量も増加の傾向にあるが、縣内消費量莫大なため年々數十萬貫を他府縣より移入してゐるので、なほ増殖獎勵の必要がある。

### 最近三ヶ年の茶業統計

（福岡縣農政課調査に據る）

年次	玉露		煎茶		紅茶		番茶		其他		總額	
	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格
昭和八年	六、五九六	七五、二二	八三、七六六	三、七〇四	二、四一	二、八六	四、七二	一、七五	三、〇九	一、三四	九、九五	三、一八三
同 九年	七、六六八	八五、三九七	八一、〇〇五	三、三、九六九	四、四七	一、三三	四、七、七二	五、九、六七	二、三、二	一、七、四九	一、三、〇九	三、六、〇九
同 十年	九、〇九〇	九一、一〇四	八〇、八六三	三、三、九四	四、四二	一、三三	四、五、四一	五、七、四七五	二、九、五九	五、五、二七	一、三、八、九九	三、七、二、〇〇

### 茶畑面積及製造戸數

年次	面積	製造戸數
昭和八年	一、一七二、二	三四、四九五
同 九年	一、二四二、〇	三三、七四六
同 十年	一、二〇六、六	三二、九七〇

#### ウ、全國における地位

少し古くて昭和八年度農林統計に依らざるを得ないが、茶畑面積は鹿児島熊本より劣つて全國第八位、數量において第十三位、製茶價格において第十一位を示してゐるが、九州一帯の茶業は最近急速な發達をとけてゐるので、將來その地位は高められると信じられる。

### 2 馬

昭和十年末現在馬飼養戸數三七、八一九戸總頭數三九、七六八頭、生産頭數一八六頭で、近時幾分減少して來てゐる。これは都市の發展に伴ふ耕地面積の減少は農家の經營を集約せしめる結果、馬の飼養者を根本的に減少させる外、馬は牛に比較して飼養管理煩雜で、使役後の處分有利ならざるなどが原因してゐるものであるが、馬産事業は産業上、國防上忽せに附し得ないため政府の施設と相俟つて鋭意總頭數の維持増加と資質の改善に努めてゐる。

### 3 豚

昭和十年末現在豚飼養戸數三、七二四戸總頭數一、二、二六二頭、生産頭數七、四三一頭で漸次増加してゐるのは農村窮乏のため自給肥料の増産と簡易な副業として、有畜農業の一分子として食用に供されて行く。

### 第四節 牧畜業

#### 4 山羊、綿羊



お茶といへば静岡、京都の特産物と見てゐるが、福岡縣こそわが國茶業の發祥地である。後鳥羽天皇の建久二年（皇紀一八五一年）博多聖福寺の開祖にして後京都建仁寺の開祖となつた榮西禪師が宋より歸朝の際、茶種子を持つて筑前脊振山に栽培したのが初まりで、世に岩上茶といふのは是で、さらに榮西は喫茶養生記に「茶は養生の仙藥也、延齡の妙術也、山谷之を生ずれば其地神靈也、人倫之を採れば其人長命也、天竺唐土同じく之を貴重す……云々」と大いに茶の効用を鼓吹したため各地に茶業興隆し今日の盛況を見る

### 最近三ヶ年の茶業統計

（福岡縣農政課調査に據る）

年次	玉露		煎茶		紅茶		番茶		其他		總額	
	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格
昭和八年	六、五九八	七五、二二三	八三、七六六	三三、〇四四	二四	二六六	四三、七二	一、七二五	三、〇九一	一、三四、九八五	三、一八三	
同 九年	七、六六八	八五、三九七	八一、〇〇五	二二、三、五九九	四四七	一、二三五	四七、三七	五九、六七	九三	二、三一一	一三七、四八四	三、二〇三
同 十年	九、〇九〇	九一、〇四	八〇、八六三	二二、三、九四一	四四二	一、二五三	四五、六四	五七、四七五	二、九五九	五、五二七	一三八、九九五	三、七二九〇

八女郡を中心とする筑後地方が主産地であるが、近時全縣下に發展して、鞍手、嘉穂、京都、築上、早良、筑紫は新興茶業地となつて來た、製茶産額は煎茶最も多いが、近時玉露の生産著しく増加し、京都府につぐ全國第二位の産地となりつゝある。販路は縣内消費が主であるが、玉露は京阪地方始め全國各地に、釜熱茶は沖繩その他に移出されてゐる。尙滿鮮地方に輸出される量も増加の傾向にあるが、縣内消費量莫大なため年々數十萬貫を他府縣より移入してゐるので、なほ増殖奨励の必要がある。

### 茶畑面積及製造戸數

年次	面積	製造戸數
昭和八年	一、一七二、二〇	三四、四九五
同 九年	一、二四二、〇〇	三三、七四六
同 十年	一、二〇六、六	三二、九七〇

### ウ、全國における地位

少し古くて昭和八年度農林統計に依らざるを得ないが、茶畑面積は鹿児島熊本より劣つて全國第八位、數量において第十三位、製茶價格において第一位を示してゐるが、九州一帯の茶業は輓近急速な發達をとけてゐるので、將來その地位は高められると信じられる。

## 第四節 牧畜業

### 1 牛

昭和十年末現在畜牛飼養戸數四五、九三一戸、總頭數五二、五四三頭にして生産頭數三、八九七頭で、年々減少の傾向にある。役肉用牛は大部分黒毛改良和種に屬し筑前、豊前部に生産される縣内産のほか長崎、大分より移入され、勞役及び採肥に利用され農業經濟上重要な一役を演じてゐる。

乳牛頭數一、九五七頭、殆んど搾乳專業家の飼育で十年における搾乳高は二二、九〇六石、七十三萬五千五百六十六圓にのぼつてゐる。

### 2 馬

昭和十年末現在馬飼養戸數三七、八一九戸總頭數三九、七六八頭、生産頭數一八六頭で、近時幾分減少して來てゐる。これは都市の發展に伴ふ耕地面積の減少は農家の經營を集約せしめる結果、馬の飼養者を根本的に減少させる外、馬は牛に比較して飼養管理煩雜で、使役後の處分有利ならざるなどが原因してゐるものであるが、馬産事業は産業上、國防上忽せに附し得ないため政府の施設と相俟つて鋭意總頭數の維持増加と資質の改善に努めてゐる。

### 3 豚

昭和十年末現在豚飼養戸數三、七二四戸總頭數二一、二六二頭、生産頭數七、四三二頭で漸次増加してゐるのは農村窮乏のため自給肥料の増産と簡易な副業として、有畜農業の一分子として食用に供されて行く。

### 4 山羊、綿羊

山羊は昭和十年末現在戸數九八五戸頭數一、八四九頭、生産頭數七二二頭綿羊は牝三八、牡三二計七十頭で極く少ないが、昭和十一年六月の濠洲關稅の高壁によるわが國の通商報復による羊毛輸入禁止が急に綿羊飼養熱をあふつてゐるので、縣當局も飼養奨励時代に入つて來たから今後の成果に俟つべきである。

### 5 鶏

養鶏業は人口の増加に伴ひ需要多くなつたため逐年生産増加しても充足

しきれない状況で飼養戸数一〇、三八二戸（總戸数の約二割五分）で朝倉郡の八、三七三戸が首位を占め嘉穂、八女の順で市部は福岡市の四、二九七戸を最多として、戸畑市五二六戸が最少である。飼養羽数は二、〇〇二、七八五羽（二戸平均一八羽）で縣下の産卵數量は一〇一、〇三〇、〇〇一個で價格二百二十六萬九千九百七十二圓、愛知、鹿兒島、千葉、静岡、北海道について全國第六位。

### 6 養 蜂

養蜂も亦盛んで、花の多い久留米や福島地方がその中心である。近時自轉車による轉飼養蜂も行はれ、蜜蜂と蜜蠟の産高が共に全國第三位なのは櫛や菜種の花が多いのと副業が盛んな結果である。

### 7 牛馬需給及移出

人口増加と生活の向上とは漸次乳肉の需要を増加し來り、昭和十年における縣内屠殺頭數成牛一三、二六一頭、犢五六五頭、豚一〇、六五七頭、馬四、六六〇頭でその生體斤量八八六、七三六貫に達してゐる。縣内に於ける仔牛生産は三、八九九頭、屠殺頭數の漸く三分の一に過ぎない。馬は生産頭數一八二に過ぎずして屠殺頭數の二十分の一に過ぎない。豚は移出の頭數でやうやく自給してゐるが、概して生産は需要に應じ難く常に他府縣から供給を仰いでゐるので畜産獎勵の餘地はまだ／＼存在する所以である。

### 8 畜産施設

人口増加と生活の向上とは漸次乳肉の需要を増加し來り、昭和十年における縣内屠殺頭數成牛一三、二六一頭、犢五六五頭、豚一〇、六五七頭、馬四、六六〇頭でその生體斤量八八六、七三六貫に達してゐる。縣内に於ける仔牛生産は三、八九九頭、屠殺頭數の漸く三分の一に過ぎない。馬は生産頭數一八二に過ぎずして屠殺頭數の二十分の一に過ぎない。豚は移出の頭數でやうやく自給してゐるが、概して生産は需要に應じ難く常に他府縣から供給を仰いでゐるので畜産獎勵の餘地はまだ／＼存在する所以である。

桑園に次いで今度は養蠶戸數だが、これも桑園面積の減少と軌を一にしてゐる、即ち春蠶戸數は昭和七年三二、三二八戸、八年は三一、六三三戸、九年は三一、〇三九戸であつたものが、昭和十年にいたつては二八、八四〇戸と二萬臺に低落し、夏秋蠶戸數も昭和七年は三二、二九〇戸だつたものが、昭和十年には二八、七七七戸と約五百戸の減少を示してゐる。この養蠶戸數を縣下の農業戸數に比すれば昭和七年は二〇、九％だつたものが、八年は二〇％、九年は二二％、十年は二〇％と、八、九、十年ともパーセンテージは不變である。これは養蠶戸數の減少と平行しないやうで一見奇異の觀を抱かせるが、縣下の農業戸數は養蠶戸數の減少と平行的に減少しつゝある事實を物語つてゐる。

畜産に關する各種の施設は縣郡の農會がやつて來た關係上畜産組合の發達したるものであつたが、最近二四組合を數へ、縣聯合會を組織して春秋二回飯塚、春日原、久留米に地方競馬を施行して馬匹獎勵に當つて來たが、全國の例に洩れず、地方競馬はいはゆる顔役の下請負となつて馬事獎勵どころか悪評紛々として起つてゐるが、十年秋より斷然、地方競馬の縣畜産聯合會に着手し、全國に魁けて斷行し絶讃を博し、ために一競馬賣上四十五萬圓（十一年春飯塚）の如き好成绩を示してゐる。この直營による地方競馬から福岡縣は昭和十一年度より福岡縣種畜場を遅ればせながら施設し、縣下の有畜農業指導と牛馬羊豚の資質改善に乗り出さんとしてゐる。養鶏は福岡縣種鶏場がその掌に當つてゐる。

## 第五節 蠶糸業界

### 一、概 況

福岡縣の蠶糸業の現況と施設概要を説くに當り、先づ昭和七年より十年にいたる迄の桑園反別、反當收購額、畑反別に對する割合、耕地反別に對する割合を記してゐる。

即ち桑園反別は、昭和七年八、一一七町七、八年七五四町三、九年七、三六四町九、九年六、九二五町四と逐年減少してゐるが、反當收購額はこれに反して一四貫四（七年）一七貫八（八年）一六貫三（九年）一五貫九（十年）と必ずしも減少してゐない。縣下の畑作地の總面積に對する桑園面積の割合は、七年

年一七五四、六四七貫、二、八五四、六四三圓、九年一五七七、〇六七貫、一、四五五、三九七圓、十年一五二一、二七三貫、二、九二〇、五〇九圓となつてをり、春蠶とは全く數量と價格の割合を異にし、十年が最高、七年これにつき八、九年は二者に劣る。

蠶種製造者數は昭和十年現在で原蠶種製造者一九人、普通蠶種製造者二一人で、蠶種製造高は原蠶種二一四、三一二蛾、普通蠶種一一、七七三、八五六蛾で、昭和七年に比すれば製造者は一人しか増加せぬが、原蠶種、普通蠶種共に蛾數増加してゐる。

### 三、業者及釜數

製糸業者數と釜數生糸製造額を、昭和八、九、十年にわたつて比較して見れば、器械製糸工場數は八年一四一ヶ所だつたものが、九年には三二ヶ所、十年には二四ヶ所（中休止七ヶ所）と逐減してゐる、釜數は八年一三、四七

車による轉飼養蜂も行はれ、蜜蜂と蜜蠟の産高が共に全國第三位なのは樫や菜種の花が多いのと副業が盛んな結果である。

## 7 牛馬需給及移出入

人口増加と生活の向上とは漸次乳肉の需要を増加し來り、昭和十年における縣内屠殺頭數成牛一三、二六一頭、犢五六五頭、豚一〇、六五七頭、馬四、六六〇頭でその生體斤量八八六、七三六貫に達してゐる。縣内に於ける仔牛生産は三、八九九頭、屠殺頭數の漸く三分の一餘に過ぎない。馬は生産頭數一八二に過ぎずして屠殺頭數の二十分の一に過ぎない。豚は移出の頭數でやうやく自給してゐるが、概して生産は需要に應じ難く常に他府縣から供給を仰いでゐるので畜産獎勵の餘地はまだく存在する所以である。

## 8 畜産施設

二六、六%、八年二五、五%、九年二四、一%、十年二二、三%と、耕地反別に對する割合は七年五、七%、八年五、四%、九年五、一%、十年四、九%と逐年減少してゐる。

桑園に次いで今度は養蠶戸數だが、これも桑園面積の減少と軌を一にしてゐる、即ち春蠶戸數は昭和七年三二、三二八戸、八年は三一、六三三戸、九年は三一、〇三九戸であつたものが、昭和十年にいたつては二八、八四〇戸と二萬臺に低落し、夏秋蠶戸數も昭和七年は三二、二九〇戸だつたものが、昭和十年には二八、七七一戸と約五百戸の減少を示してゐる。この養蠶戸數を縣下の農業戸數に比すれば昭和七年は二〇、九%だつたものが、八年は二〇%、九年は二二%、十年は二〇%と、八、九、十年ともパーセンテージは不變である。これは養蠶戸數の減少と平行しないやうで一見奇異の觀を抱かせるが、縣下の農業戸數は養蠶戸數の減少と平行的に減少しつゝある事實を物語つてゐる。

## 二、産 額

然らば繭の産額はどうか？ 春蠶に就いて昭和七年から十年迄の數字を擧ぐれば、昭和七年五九〇、〇八五貫、八年六二七、三〇九貫、九年六二〇、〇四三貫、十年五八三、六七四貫と數量は六十萬貫臺を進退してゐるが、價格は必ずしも數量の増減に伴はぬ、即ち七年一、五三二、七三五圓、八年一、〇五八、五二八圓、九年一、六六五、二四六圓、十年二、二二四、〇七四圓と、昭和八年が最高額を示し數量の最も少い十年がこれに次いでゐる。夏秋蠶の數量、價額は七年五八〇、五四〇貫、二、八一、九一七圓、八

がその掌に當つてゐる。

## 第五節 蠶糸業界

### 一、概 況

福岡縣の蠶糸業界の現況と施設概要を説くに當り、先づ昭和七年より十年にいたる迄の桑園反別、反當收繭額、畑反別に對する割合、耕地反別に對する割合を記してみる。

即ち桑園反別は、昭和七年八、一一七町七、八年七五四町三、九年七、三六四町九、九年六、九二五町四と逐年減少してゐるが、反當收繭額はこれに反して一四貫四(七年)一七貫八(八年)一六貫三(九年)一五貫九(十年)と必ずしも減少してゐない。縣下の畑作地の總面積に對する桑園面積の割合は、七年

年七五四、六四七貫、二、八五四、六四三圓、九年五七七、〇六七貫、一、四五五、三九七圓、十年五二一、二七三貫、二、九二〇、五〇九圓となつてゐり、春蠶とは全く數量と價格の割合を異にし、十年が最高、七年これにつき八、九年は二者に劣る。

蠶種製造者數は昭和十年現在で原蠶種製造者一九人、普通蠶種製造者二一人で、蠶種製造高は原蠶種二四、三二二蛾、普通蠶種一一、七七三、八五六蛾で、昭和七年に比すれば製造者は一人しか増加せぬが、原蠶種、普通蠶種共に蛾數増加してゐる。

### 三、業者及釜數

製糸業者數と釜數生糸製造額を、昭和八、九、十年にわたつて比較して見れば、器械製糸工場數は八年四一ヶ所だつたものが、九年には三二ヶ所、十年には二四ヶ所(中休止七ヶ所)と逐減してゐる、釜數は八年三、四七五釜、九年は三、二二〇釜、十年は二、六四九釜と工場數の減少に追従してゐる。然し、これは何も製糸業界の衰微を物語るものではない、それは生糸生産額の漸増が有力に物語つてゐる、即ち八年は一一一、四八七貫だつたものが九年には一三二、二六五貫、十年は一三三、八五〇貫と少しづつながら増産されてゐるではないか、然し價格は必ずしも生産額の増加に伴はない、八年は五、三七〇、三二三圓だつたものが、十年には四、五二七、四二一圓と却て減少してゐるのである。

第六節 蠶糸關係諸機關

この邊で縣の職員並びに機關を誌してみることにする、福岡縣の蠶糸業の元締たる蠶糸課は縣廳新館三階北端に位し、農林技師四名(中課長一名)、屬一名、農林主事補一名、技手一名、農林技手四名、雇員一名が事務を司つてゐる。昭和十年度の蠶糸課の經常部經費豫算は一八、〇八一圓、縣職員費一五、四六六圓、病害蟲驅除豫防費〇、五〇八圓、蠶業講習會費三八〇圓、桑穗木園費一、二九五圓、優良稚蠶共用飼育組合獎勵費二〇〇圓、桑園施設改善指導獎勵費一〇〇圓、繭市況調査費一三二圓、臨時部豫算は二二二、七三五圓、この内譯桑園綠肥栽培獎勵費一、六九九圓、稚蠶共同桑園設置費六七四四圓、稚蠶共用飼育併設置費補助二一、〇〇〇圓、蠶業技術員設置費補助九九、八九三圓、桑園整理改植溫作助成費六一、五七一圓、右同指導費〇、五九四圓、郡市養蠶業獎勵費〇、八〇〇圓、養蠶實行組合共同處理費一、〇〇〇圓、乾繭設置費補助四、〇〇〇圓、縣養蠶補助〇、九八三圓、大日本蠶糸會福岡支所補助〇、九八三圓、水害復舊及應急費補助四三、四六八圓、蠶業取締所 從來縣廳構内又は縣第二公會堂(現在縣信聯產組中央會福岡縣支部縣農會の存在する家屋)に設置されてゐたが、昭和二年十二月、粕屋郡箱崎町原田(元蠶業試驗場)に移轉、農林技師一名、(所長)農林主事補一名、農林技手十二名、蠶業取締員一〇名を以て蠶糸業取締の完璧を期してゐる。尙季節的に、朝倉郡甘本町、築上郡八屋町に短期間支所を設けて處理してゐる、昭和十年度に於ける蠶業取締所の經費は三五、二九七圓、

乾繭取引 (昭和十年度)	二七、二二七圓	二七、四%
特約取引 (同)	五、一、六〇六圓	五、九%
現金取引 (同)	二〇、四、八五二圓	二〇、七%
計	九八、八、六八五圓	一〇〇、〇%

乾繭組合の現況と獎勵 これは昭和三年以來農林省の獎勵と相俟つてこの施設の獎勵をなしたもので、現在次の如き組合を有し、最も健全に發達しつつある。尙縣では助成として設備費に對し、農林省助成以外に、農林省査定額の一割を交付すると共に、乾繭技術員設置費の半額を補助してゐる。

保、證、責任、宗、像、郡、乾、繭、共、同、販、賣、利、用、組、合、 區域は郡一圓に及び、宗像郡東郷町に所在し二、一七一人の組合員を擁し、出資は四、〇七五口、金額四〇、七五〇圓、昭和十年組合員寄託生繭數七六、三七〇貫。

保、證、責任、筑、紫、郡、乾、繭、販、賣、利、用、組、合、 筑紫郡那珂村にありて組合員三、九二一名、筑紫郡一圓を區域とし、出資は一五、一一五口、金額は一五一、一五〇

蠶業試驗場 大正六年箱崎町に原蠶種製造所を建設、大正十一年蠶業試驗場と改稱し爾來試驗研究並びに原蠶種製造を爲してゐたが、蠶糸業の發達に伴ひ擴張の必要を生じ大正十五年度から昭和二年度にわたつて經費一三五、八八七圓を投じて現在の筑紫郡大野村瓦田に移轉建設した、農林技師三名、中場長一名、農林主事補一名、農林技手四名、助手六名で事務を處理してゐる。昭和十年度經常部豫算は三〇、〇五九圓。

繭、檢、定、所 昭和三年度に筑紫郡大野村瓦田にある蠶業試驗場内に三九、六三七圓の設置費で製糸部として誕生、夏秋蠶より檢定事務を開始、繭取引の圓滑公正を期してゐたが、昭和六年農林省檢定規程の發布に伴ひ檢定事務の擴充を圖る爲、昭和十年度に分離獨立したもので、農林技師一名(所長)、農林主事補一名、農林技手一名、助手四名で事務を處理し、昭和十年度經常部豫算二九、四一〇圓、臨時部豫算三、〇五〇圓、昭和十年に於ける檢定事業の實施狀況は、春蠶、初秋蠶、晩秋蠶を通じての檢定件數を示すと生繭一、〇〇四口、乾繭一二二口、計一、一二六口、檢定荷口數量生繭二九四、五八〇貫、乾繭四九、六一四貫、計三四四、一九四貫、檢定證交付件數一、一二六となつてゐる。

養蠶施設獎勵事項

(1) 養蠶その他技術員の設置(昭和十一年一月現在)  
郡農會に一三名、市農會に三名、養蠶業組合に一一五名、町村農會に一九九名、乾繭組合に一〇名、計二六五名の技術員を配置してゐる。

(2) 繭處理の狀況(上繭)

稚、蠶、共、同、飼、育、所、設、置、獎、勵 福岡縣では農林省の助成と相俟つて昭和五年度から稚蠶共同飼育所の設置を獎勵してゐるが、昭和十年度の現在狀況は左記の如くで、昭和十一年度に於ても十四棟を建設せしめる豫定でその助成額は二一、〇〇〇圓(半額國庫補助)となつてゐる。

(ア)棟數は九〇棟(組合員數二、九六三) (イ)建物坪數一五、三八一、九六六平方メートル (ウ)飼育室數三一〇 (エ)掃立蟻量六六、八〇二瓦。

稚蠶共同飼育所數を郡市別に示せば左の如し。

粕屋(一四) 宗像(一〇) 遠賀(六) 鞍手(八) 嘉穂(二) 朝倉(六) 筑紫(六) 早良(一) 糸島(六) 浮羽(七) 三井(二) 八女(六) 三池(一) 田川(四) 京都(五) 築上(六) 合計九〇。

桑園施設獎勵事業

(1) 整理改植混作獎勵 これは全額國庫助成に依るが昭和十年度の實績は昭和十年度整理反別三五九町三五、この助成額三五、九三五圓、改植反別一一二町九、助成額一六、九三五圓、混作反別一二四町三助成額八、七〇一圓、

五圓、この内繭桑園緑肥栽培獎勵費一、六九九圓、稚蠶共同桑園設置費六七四四圓、稚蠶共用飼育併設置費補助二一、〇〇〇圓、蠶業技術員設置費補助九九、八九三圓、桑園整理改植溫作助成費六一、五七一圓、右同指導費〇、五九四圓、郡市養蠶業獎勵費〇、八〇〇圓、養蠶實行組合共同處理費一、〇〇〇圓、乾繭設置費補助四、〇〇〇圓、縣養蠶補助〇、九八三圓、大日本蠶糸會福岡支所補助〇、九八三圓、水害復舊及應急費補助四三、四六八圓、蠶業取締所 從來縣廳構内又は縣第二公會堂（現在縣信聯産組中央會福岡縣支部縣農會の存在する家屋）に設置されてゐたが、昭和二年十二月、粕屋郡箱崎町原田（元蠶業試驗場）に移轉、農林技師一名、（所長）農林主事補一名、農林技師十二名、蠶業取締廳員一〇名を以て蠶糸業取締の完璧を期してゐる、尚季節的に、朝倉郡甘本町、築上郡八屋町に短期間支所を設けて處理してゐる、昭和十年度に於ける蠶業取締所の經費は三五、二九七圓、

乾繭取引（昭和十年度）	二七一、二二七貫	二七、四%
特約取引（同）	五一二、六〇六貫	五、九%
現金取引（同）	二〇四、八五二貫	二〇、七%
計	九八八、六八五貫	一〇〇、〇%

乾繭組合の現況と獎勵 これは昭和三年以來農林省の獎勵と相俟つてこの施設の獎勵をなしたもので、現在次の如き組合を有し、最も健全に發達しつつある。尙縣では助成として設備費に對し、農林省助成以外に、農林省査定額の一割を交付すると共に、乾繭技術員設置費の半額を補助してゐる。

保證責任宗像郡乾繭共同販賣利用組合 區域は郡一圓に及び、宗像郡東郷町に所在し二、一七一人の組合員を擁し、出資は四、〇七五口、金額四〇、七五〇圓、昭和十年組合員寄託生繭數七六、三七〇貫。

保證責任筑紫郡乾繭販賣利用組合 筑紫郡那珂村にありて組合員三、九二一名、筑紫郡一圓を區域とし、出資は一五、一一五口、金額は一五一、一五〇圓、寄託生繭數六四、六〇〇貫。

保證責任糸島郡乾繭販賣利用組合（糸島郡前原町）有限責任早福乾繭共同販賣利用組合（福岡市原にありて早良郡、福岡市を區域とす）有限責任八女郡乾繭販賣利用組合（八女郡福島町）有限責任京都郡乾繭共同販賣利用組合（京都郡行橋町）有限責任築上郡乾繭共同販賣利用組合（築上郡八屋町）保證責任遠賀乾繭共同販賣利用組合（遠賀郡折尾町）等存在し、着々理想實現に邁進してゐる。

圓滑公正を期してゐたが、昭和六年農林省檢定規程の發布に伴ひ檢定事務の擴充を圖る爲、昭和十年度に分離獨立したもので、農林技師一名（所長）、農林主事補一名、農林技師一名、助手四名で事務を處理し、昭和十年度經常部豫算二九、四一〇圓、臨時部豫算三、〇五〇圓、昭和十年に於ける檢定事業の實施狀況は、春蠶、初秋蠶、晩秋蠶を通じての檢定件數を示すと生繭一、〇〇四口、乾繭一二二口、計一、一二六口、檢定荷口數量生繭二九四、五八〇貫、乾繭四九、六一四貫、計三四四、一九四貫、檢定證交付件數一、一二六となつてゐる。

養蠶施設獎勵事項

- (1) 養蠶その他技術員の設置（昭和十一年一月現在）  
郡農會に一三名、市農會に三名、養蠶業組合に一一五名、町村農會に一一九名、乾繭組合に一〇名、計二六五名の技術員を配置してゐる。
- (2) 繭處理の狀況（上繭）

稚蠶共同飼育所設置獎勵 福岡縣では農林省の助成と相俟つて昭和五年度から稚蠶共同飼育所の設置を獎勵してゐるが、昭和十年度の現在狀況は左記の如くで、昭和十一年度に於ても十四棟を建設せしめる豫定でその助成額は二一、〇〇〇圓（半額國庫補助）となつてゐる。

(ア)棟數は九〇棟（組合員數二、九六三）（イ）建物坪數一五、三八一、九六平方米（ウ）飼育室數三一〇（エ）掃立蠶量六六、八〇二瓦。

稚蠶共同飼育所數を郡市別に示せば左の如し。

粕屋（二四） 宗像（一〇） 遠賀（六） 鞍手（八） 嘉穂（二） 朝倉（六） 筑紫（六） 早良（一） 糸島（六） 浮羽（七） 三井（二） 八女（六） 三池（一） 田川（四） 京都（五） 築上（六） 合計九〇。

桑園施設獎勵事業

(1) 整理改植混作獎勵 これは全額國庫助成に依るが昭和十年度の實績は昭和十年度整理反別三五九町三五、この助成額三五、九三五圓、改植反別一一二町九、助成額一六、九三五圓、混作反別一二四町三助成額八、七〇一圓、指導費五九四圓

(2) 水害に依る養蠶應急施設補助（昭和十年度）

桑園改植反別二六四町二反（三九、六三〇圓）、蠶種購入三、八三八〇瓦（三、八三八圓）、合計金額四三、四六八圓。

(3) 稚蠶共同桑園獎勵 これを昭和十一年度の實績に徴するに、反別四五町六反、助成額五、四七二圓、春蠶用反別二八町、夏秋蠶用反別一七町六反となつてゐる。

(4) 施肥改善指導地 昭和九年度に五ヶ所にわたつて設置されたもので、目的は桑園能率の増進と養蠶農家の經濟に於ける現金支出の主たる肥料の合理的改善指導にある。

(5) 自給肥料奨励費 昭和九、十年に共にこの助成費は一、六九九圓。

(6) 害虫驅除豫防の施設奨励

(イ) 桑園能率増進上消極的病虫害の驅除豫防は最も緊要事であるとなし、昭和四年以來左の種類の指導地を設けてこれが趣旨の徹底を圖つてゐる。

介穀並に姫象虫、一反步宛、二ヶ所(遠賀郡折尾町、田川郡金田村)、

スキ虫、一反步宛二ヶ所(嘉穂郡桂川村、福岡市屋形原)、蠶止癭蠅、一

反步宛五ヶ所(粕屋郡香椎村、八女郡三河村、鞍手郡吉川村、築上郡千

束村、筑紫郡那珂村)、病害、一畝一ヶ所(浮羽郡大石村)

(ロ) 病虫害驅除豫防を徹底させる爲、關係職員各蠶業技術員を督勵員に任命又は囑託して常にこの指導の任に當らせてゐる。

桑木穂園設置

桑園能率増進上優良純系桑品種の普及を圖る爲昭和六年以來桑穂木園を設置し、穂木の無償配布を爲してゐる。この設置箇所は朝倉郡立石村(五反步)

田川郡勾金村(五反步)、粕屋郡箱崎町(五反步)で、昭和十年度に於ける配布

數量は一、五二〇、〇〇〇貫、主なる配布先は粕屋、宗像、遠賀、鞍手、朝倉

筑紫、早良、糸島、浮羽、三井、八女、田川、築上の各郡と福岡市

蠶糸業團體の現況と施設奨励

福岡縣蠶糸業組合、昭和十年度豫算六、四四四圓、技術員設置、指導

てみる。

和紙

年額百餘萬圓に達し筑後川平野、矢部川流域、糸島郡福吉村、朝倉郡志波村、秋月町、鞍手郡吉川村、同山口村、京都郡諫山村が主産地、専ら楮皮を原料とする特有の手漉製品で、機械製紙の敢て追従を許さない獨特の技術製法によるもので、産地農家の主要副業として従業員一千餘戸、従業員三千人に達し、毎年八月前後より翌年四月まで凡そ九ヶ月に亘り京花紙障子紙、傘紙等が主で、販路は内地一般と、海外諸國に輸出され好評を博してゐる。けれども製紙原料不足のため消費量約六割を縣外に仰いでゐる。

繭製品

年額百二十餘萬圓、疊表二十萬圓、莫産、花苳百萬圓、蠶網その他二萬圓に達し三潞郡一圓、八女郡水田村、山門郡三橋村が主で、疊表、莫産、花苳の生産地で、蠶網は朝倉、浮羽、築上、糸島、宗像である。なほ門司市、企救郡、松ヶ枝、曾根は市街地附近農家の副業である。本縣の蘭苳は起源古く、筑後方面二市三郡にわたる農家唯一の副業となつて従業戸數七千

員設置、蠶業能率向上共進會、指導桑園設置、養蠶經濟調査、表彰等が主な事業である。

福岡縣蠶種業組合 昭和十年度豫算一四、三四〇圓、冷蔵事業、人工孵化、視察、講習講話等が主なる事業である。

福岡縣蠶糸業組合 昭和十年度豫算一、三六〇圓、表彰、講習講話、九州聯盟會開催等をなす。

大日本蠶糸會福岡支會 昭和十年度豫算五、〇七八圓、雜誌發行、表彰、研究會開催等を爲す。

養蠶業組合 縣下に十六組合存在し、昭和十年度豫算一七九、二四七圓、技術員設置、生繭市場、講習講話、斡旋事業、指導桑園設置、上簇改善、蠶種共同催青、表彰等を爲す。

### 第七節 農家の副業産物

#### 縣の副業奨励現勢

農村の多角的經營に必要なことは農産物の加工である。著大な農産物も恐慌のために不幸に安價をもつて都會に奪取されるが、これに農家が餘剩勞力を活用し、小資本を投じ加工して市場におくり出せば非常に値で消費されるので、副業、農村工業化は殊に最近奨励されるところである。福岡縣の副業は種類多くして相當産額を擧げてゐる。茲に農産關係の副業施設を拾つ

詰の加工利用の手段が普及し、山門郡柳河町、京都郡行橋町におけるトマト加工の十萬本、八女郡下廣川村、浮羽郡山春村、三井郡上津荒木村その他朝倉、田川、筑紫、遠賀各郡に勃興せる葡萄酒醸造は百石餘に及んでゐる。その他枇杷等の果實、グリーンピース、アスパラカス、落などの罐詰が盛んになつて來た。

葉煙草

本縣の煙草耕作はその沿革古く、上座葉として有名で、專賣法實施されてからは栽培地は朝倉、浮羽を始め九年の旱害後は糸島、早良にも栽培許可を得て、三十五ヶ町村二百三町五反餘、賠償金二十九萬圓にのほり他の農産物價の下落、養蠶業一頓挫してゐる關係から比較的安定の事業として増加の傾向がある。

芋麻

農林省より種苗の無償配布をうけ荒廢地利用上栽培したところが成績良好で、すでに九十五町歩におよび縣は農業の多角經營の觀點から極力奨励してゐる。その他農産加工の主なるもの擧げれば次の如し。

反歩宛五ヶ所（粕屋郡香椎村、八女郡三河村、鞍手郡吉川村、築上郡千束村、筑紫郡那珂村）、病害、一畝一ヶ所（浮羽郡大石村）

(口) 病蟲害驅除豫防を徹底させる爲、關係職員各蠶業技術員を督勵員に任命又は囑託して常にこの指導の任に當らせてゐる。

### 桑木穂園設置

桑園能率増進上優良純系桑品種の普及を圖る爲昭和六年以來桑穂木園を設置し、穂木の無償配布を爲してゐる。この設置箇所は朝倉郡立石村（五反歩）田川郡勾金村（五反歩）、粕屋郡箱崎町（五反歩）で、昭和十年度に於ける配布數量は一、五二〇、〇〇〇貫、主なる配布先は粕屋、宗像、遠賀、鞍手、朝倉筑紫、早良、糸島、浮羽、三井、八女、田川、築上の各郡と福岡市

### 蠶糸業團體の現況と施設獎勵

福岡縣蠶業組合聯合會 昭和十年度豫算六、四四四圓、技術員設置、指導

てみる。

### 和紙

年額百餘萬圓に達し筑後川平野、矢部川流域、糸島郡福吉村、朝倉郡志波村、秋月町、鞍手郡吉川村、同山口村、京都郡諫山村が主産地、専ら楮皮を原料とする特有の手漉製品で、機械製紙の敢て追従を許さない獨特の技術製法によるもので、産地農家の主要副業として従業員一千餘戸、従業員三千人に達し、毎年八月前後より翌年四月まで凡そ九ヶ月に亘り京花紙障子紙、傘紙等が主で、販路は内地一般と、海外諸國に輸出され好評を博してゐる。けれども製紙原料不足のため消費量約六割を縣外に仰いでゐる。

### 繭製品

年額百二十餘萬圓、蠶表二十萬圓、莫産、花苳百萬圓、蠶網その他二萬圓に達し三瀨郡一圓、八女郡水田村、山門郡三橋村が主で、蠶表、莫産、花苳の生産地で、蠶網は朝倉、浮羽、築上、糸島、宗像である。なほ門司市、企救郡、松ヶ枝、曾根は市街地附近農家の副業である。本縣の繭苳は起源古く、筑後方面二市三郡にわたる農家唯一の副業となつて従業戸數七千戸、蠶表、莫産は内地一般の需要に應じ、掛川類は本縣獨特のもので精巧優美な模様を織出し、益々需要増加の傾向である。花苳は歐米各國はじめ、印度、南洋方面に向ひさかんに輸出される。

### 藁工品

繩、苳、吠及依など百六、七十萬圓位であるが、最近本縣の筑後筑前米の吠買上が政府に認められてから農家副業として、縣内需給の計畫から吠製の獎勵をしてゐるので藁工産の産額は激増の一途をたどつてゐる。

### 農産壘罐詰

農村の簡単な工業化として恰好なため地方新興特産物に壘罐

福岡縣産業の卷

養蠶業組合 縣下に十六組合存在し、昭和十年度豫算一七九、二四七圓、技術員設置、生繭市場、講習講話、斡旋事業、指導桑園設置、上簇改善、蠶種共同催青、表彰等を爲す。

## 第七節 農家の副業産物

### 縣の副業獎勵現勢

農村の多角的經營に必要なことは農産物の加工である。著大な農産物も恐慌のために不幸に安價をもつて都會に奪取されるが、これに農家が餘剩勞力を活用し、小資本を投じ加工して市場におくり出せば非常に値で消費されるので、副業、農村工業化は殊に最近獎勵されるところである。福岡縣の副業は種類多くして相當産額を擧げてゐる。茲に農産關係の副業施設を拾つ

詰の加工利用の手段が普及し、山門郡柳河町、京都郡行橋町におけるトマト加工の十萬本、八女郡下廣川村、浮羽郡山春村、三井郡上津荒木村その他朝倉、田川、筑紫、遠賀各郡に勃興せる葡萄酒醸造は百石餘に及んでゐる。その他枇杷等の果實、グリーンピース、アスパラカス、落などの罐詰が盛んになつて來た。

葉煙草 本縣の煙草耕作はその沿革古く、上座葉として有名で、專賣法實施されてからは栽培地は朝倉、浮羽を始め九年の旱害後は糸島、早良にも栽培許可を得て、三十五ヶ町村二百三町五反餘、賠償金二十九萬圓にのぼり他の農産物價の下落、養蠶業一頓挫してゐる關係から比較的安定の事業として増加の傾向がある。

苧麻 農林省より種苗の無償配布をうけ荒廢地利用上栽培したところが成績良好で、すでに九十五町歩におよび縣は農業の多角經營の觀點から極力獎勵してゐる。その他農産加工の主なるもの擧げれば次の如し。

種類	産額	主なる生産地方
澤庵漬	四七四、一四二	山門、築上、三井、遠賀、福岡、若松の各都市
茶	三六〇、一九七	八女、山門、浮羽、嘉穂、朝倉、京都、築上の各郡
麥稈眞田	二一、七六五	八幡
干柿	六六、七七六	八女、嘉穂、鞍手の各郡
杞柳製品	九、四八〇	鞍手郡
眞綿	七、一六〇	朝倉郡
澱粉	三五、五九七	八幡市、朝倉郡、大牟田市
繭	三四四、三七九	三瀨、八女、山門、朝倉の各郡
七鳥繭	三二、七四七	八女、築上、宗像の各郡

四四五

第二章 農業及牧畜業

楮	六二、九三八	八女、朝倉の兩郡
大麻	一五、〇四六	八女、朝倉郡
蒟蒻芋	八六、八〇五	八女、三井、朝倉の各郡

第八節 荒廢地復舊問題

福岡縣農業の特徴

都市の發展と素晴らしい軍需景氣の波動につれて、福岡縣には年々宅地建物、大小幾多の工場、産業文化の發達に伴ひ新設補正されて行く道路、鐵道、軌道等の交通施設は遠慮なく美田を潰廢して行く、殊に筑豊炭坑地帯には黒ダイヤ王國の股賑を築くために六千七百餘町歩の炭坑陥落地が存在してゐる。おそろべき産業相剋である。この六千七百餘町歩の鑛業被害地復舊こそ福岡縣政の痛である。年々、自然の躍進に伴ふ耕地の減少こそ却つて本縣産業の發展を物語るかもしれないが、縣の悩みはこゝに存してゐる。縣當局は本省の補助を得て鑛業被害地復舊を志してゐる一方、年々の自然の耕地潰廢にそなへて開墾獎勵を行つてゐるが、なか／＼九牛の一毛の感で追いつかない。

昭和十年末縣下の耕地面積は十四萬三千四百三十三町一反（内田十一萬二千二百九十七町、畑三萬一千三百三十六町一反）、これを九年末に比べると田は三百二十四町二反の減、畑は百四十七町の増であるが、差引百七十七町二反は減少してゐる。多額の開墾開拓荒地復舊補助による耕地擴張に拘はらず年々約二百町の耕地は減少して行くの憂ふべき状態である。

第三章 林業

第一節 概説

昭和九年度中の林産額は三百九十五萬五千圓で全國第卅六位といふ、おそろしく下位にある。地形は文化の關係上比較的林産に乏しいのはやむを得ない實情であらう。林野の面積も十九萬六千六百十六町歩に過ぎない、従つて舊藩時代から植林を奨励し、材木の保護を嚴にしたもので、筑前藩が土民と協力して海岸林の造成につとめ、杉、樟、檜、銀杏等の繁植を奨励し、豊前藩が公私をとはず材木の伐採を嚴に取締つたが如きもそれである。然し明治初年に一時濫伐で荒廢しかけたが、なほ立花山や船小屋の樟林、小石原や英彦山や若杉の杉林、古處山の黄楊、筑前海岸の松原などは當時の面影をの

潰廢	荒地	宅地工場及建物敷地	道路鐵道、軌道河川	水路敷地	計	田	畑	計
	地類及地目變換	地	地	地	計	二四・四	二五二・四	二七六・八
計	一二九町九反	一三三・四	一九二・三	五〇・八	四七〇・三	一四・六	一・九	一六・五
其他の増	四二町四反	四七〇・三	二八四・五	二八四・五	七一八・八	二九・三	九・二	三八・五
其他の減	計	計	計	計	計	四四・一	七八・二	一二二・三
計	一二九町九反	四七〇・三	二八四・五	二八四・五	七一八・八	二四・四	二五二・四	二七六・八
其他の増	四二町四反	四七〇・三	二八四・五	二八四・五	七一八・八	一四・六	一・九	一六・五
其他の減	計	計	計	計	計	二九・三	九・二	三八・五
計	一二九町九反	四七〇・三	二八四・五	二八四・五	七一八・八	四四・一	七八・二	一二二・三

其の他の公共團體有	三、四三〇
神社	九四七
寺院	三四三
私	一一九、〇五七
計	一九六、六一六

B 林産高細別

(1) 森林伐材	一、三一、四九七石	二、〇七一、五三四圓
用材	一、三一、四九七石	五二二、三九二
薪炭	一	一六四、〇三〇
竹	三〇一、三七六束	二、七五七、九五六
計	三〇一、三七六束	二、七五七、九五六
(2) 林野雜産物	二、九三七、三四九貫	五〇四、八二一
木	二、九三七、三四九貫	二九五、〇二三
筍	二、〇五一、八一九	一一五、三五二
造林用苗木	四二、一四七、八一九本	六九、三七二
椎茸（乾もの）	四一、九三二斤	六四、四五五





してブナ、コナラ、シラジ、シデがあるが全森林面積のわずか三分の二に足りない、本縣特有の常緑潤葉樹林は人為的變化をうけたため、各種の林相を呈し神社、靈地などの域内を除いては斧鉞の入りないところがない、林種別面積で見れば針葉樹林の五二%最も多く、針潤混生林の二二%、潤葉樹林二〇%、竹林の六%の順となつてゐる。杉は本縣針葉樹の代表木で至るところに植栽され、ことに八女郡の東部より英彦山脈にわたる一帯は地味最も肥沃で生育に適し、挿木造林、間作林業も盛で峯通の扁柏とともに翠緑天を覆ふ特殊の森林景觀をなしてゐる、松は海岸地方が赤、黒松、内地は赤松が筑後部の西方より筑前部の中央部を北に走り、沿岸地方一帯に擴がり遠賀川流域の丘陵地帯を占め多く炭坑用抗木を供給してゐる。

竹 竹林面積は全國第二位で九千五百三十三町歩、八女郡が最も多く全面積の四分の一を占めてゐる、竹種の主なるものは苦竹で、孟宗竹、白竹、淡竹これについてゐる、筍は殆んど孟宗で北九州地方の需要と罐詰事業の勃興につれて生産増加してゐる。

### 第三節 需給状態

縣の總面積が農業、鑛工業によく開發されてゐるため、林業の比較的不振なことは如上の統計でよく知るところであるが、本縣は林産の消費地として西日本有数なもので、北九州はじめ縣下十市の躍進の裏に木材各種の需要莫大で縣外から移入するものが頗る多い、たとへば昭和十一年六月現在で木材の縣内需要は五百七十七萬二千七百九十九石(千六百六十六萬七千圓)に對し縣内生産は

百十八萬四千二百石(二百七十一萬五千圓)に過ぎず、さらに木炭でみるに縣内需要八百二十一萬四千四百七十六貫(百二十三萬九千九百圓)に對し、縣内生産は二百七十六萬三千三百五貫(四十一萬四千圓)の四分の一に過ぎない状況である、推して本縣の林産は知るべしである。然し一面に於てまたそれだけ消費地として價值のある縣であるとも云へるわけであらう。

## 第四章 水産業

### 第一節 概説

昭和九年度末現在における縣下水産業の生産高は一千四百九十五萬二千四百六十四圓にして、全國第九位を占めてゐるが、このうちに世界的に遠洋漁業で著名な戸畑市における共同漁業株式會社の生産高が包含されてゐる。本縣の沿岸線は二百五十四哩、漁場の廣袤千四百平方哩、豊前、筑前、有明海の三海區のそれ々々特徴を有する漁場を有してゐる。要するにこの三海區を活用した沿岸漁業が主で、戸畑及び博多兩港に根據を有する汽船トロール漁業並に機船底曳網漁業を除く外は遠洋漁業としては見るべきものがない。豊前海は瀬戸内海の西端にして、その面積約百三十平方哩、一帯に淺海で各種延繩漁業、罾網漁業、烏賊漁業並に打瀬網漁業を主として、その他の内海的

干の差著しく、干潟地廣潤で各種魚介類及び海苔の生育旺盛にして、沖合は現數網その他網類、投網、釣、延繩の漁業盛に行はれ、漁獲高六十五萬圓に達し、三千七百の漁民これによつて衣食してゐる。

縣外出稼漁業は山門郡沖端村より西鮮方面に出漁する鮫鱈網漁業及び筑前各漁村より長崎、佐賀沖合に出漁する釣、延繩、五智網や巾着網等を主としてゐる。戸畑市共同漁業株式會社關係漁船の従事する機船底曳網、汽船トロール、捕鯨、蟹鮭鱒工船の各漁業の盛大にして、太平洋上社旗の翻らざるところないのは勿論、地中海、南米方面の沿岸にも出漁して水産日本の誇りを示してゐる。

### 第二節 漁村の現状

本縣漁村の特徴を簡條的に列すれば略次の如くなるであらう。

(一) 貧富の懸隔少く、生活状態は近來の不況に伴ひ漸次窮迫を告げて普通專業者といへども、家屋は勿論若干の耕地等を有するもの多い状態であ

域の丘陵地帯を占め多く炭坑用抗木を供給してゐる。

竹 竹林面積は全國第二位で九千五百三十三町歩、八女郡が最も多く全面積の四分の一を占めてゐる、竹種の主なるものは苦竹で、孟宗竹、白竹、淡竹これについてゐる、筍は殆んど孟宗で北九州地方の需要と罐詰事業の勃興につれて生産増加してゐる。

### 第三節 需給状態

縣の總面積が農業、鑛工業によく開發されてゐるため、林業の比較的不振なことは如上の統計でよく知るところであるが、本縣は林産の消費地として西日本有数なもので、北九州はじめ縣下十市の躍進の裏に木材各種の需要莫大で縣外から移入するものが頗る多い、たとへば昭和十一年六月現在で木材の縣内需要は五百七萬二千七十九石(千六百六十六萬七千圓)に對し縣内生産は

## 第四章 水産業

### 第一節 概説

昭和九年度末現在における縣下水産業の生産高は一千四百九十五萬二千四百六十四圓にして、全國第九位を占めてゐるが、このうちに世界的に遠洋漁業で著名な戸畑市における共同漁業株式會社の生産高が包含されてゐる。本縣の沿岸線は二百五十四哩、漁場の廣袤千四百平方哩、豊前、筑前、有明海の三海區のそれ々々特徴を有する漁場を有してゐる。要するにこの三海區を活用した沿岸漁業が主で、戸畑及び博多兩港に根據を有する汽船トロール漁業並に機船底曳網漁業を除く外は遠洋漁業としては見るべきものがない。豊前海は瀬戸内海の西端にして、その面積約百三十平方哩、一帯に淺海で各種延繩漁業、桝網漁業、烏賊漁業並に打瀬網漁業を主として、その他の内海的小漁業多く、漁業を主業とするもの三千八百餘、漁獲高約六十五萬圓、筑前海は所謂玄海灘及び響灘にして廣袤千二百平方哩、特に風浪高いが、海洋好適、漁礁多く漁族豊富にして、漁業を主業とするもの一萬三千五百餘人、漁獲高二百餘萬圓に達し、本縣漁民の寶庫となつてゐる。そのため沖合においては各種の釣延繩漁業を主とし巾着網、五智網その他網漁業盛に行はれ、沿岸においては曲網、建網、その他定置漁業の敷設多く、且つ定着性魚族頗る豊富である。有海は面積二十平方哩に過ぎずと雖も、河川幾多も流入し、満

干の差著しく、干潟地廣潤で各種魚介類及び海苔の生育旺盛にして、沖合は現數網その他網類、投網、釣、延繩の漁業盛に行はれ、漁獲高六十五萬圓に達し、三千七百の漁民これによつて衣食してゐる。

縣外出稼漁業は山門郡沖端村より西鮮方面に出漁する鯨鯨網漁業及び筑前各漁村より長崎、佐賀沖合に出漁する釣、延繩、五智網や巾着網等を主としてゐる。戸畑市共同漁業株式會社關係漁船の従事する機船底曳網、汽船トロール、捕鯨、蟹鮭鱒工船の各漁業の盛大にして、太平洋上社旗の翻らざるところないのは勿論、地中海、南米方面の沿岸にも出漁して水産日本の誇りを示してゐる。

### 第二節 漁村の現状

本縣漁村の特徴を箇條的に列すれば略次の如くなるであらう。

- (一) 貧富の懸隔少く、生活状態は近來の不況に伴ひ漸次窮迫を告げて普通專業者といへども、家屋は勿論若干の耕地等を有するもの多い状態である。
- (二) 旅船の出入少く従つて一般に風儀悪くない。
- (三) 漁業者として資本家が乏しく又漁業に對する投資額少い。
- (四) 規模比較的大なる漁業は概ね地元の共同經營である。
- (五) 漁業は殆んど小規模にして雇傭關係なく全部歩合制度である。
- (六) 大規模の定置漁業は殆ど他縣人の經營になつてゐる。
- (七) 海洋遠淺で底棲魚族豊富なため底曳漁業に適するを以つて他縣人の侵入

多く密漁船に對する縣の取締を要望すること切。  
(八) 歸りの漁業大部分を占め、従つて漁船の遭難は僅少である。  
(九) 副業は農蠶の外特殊のものを有せず。

### 第三節 海區及水産漁獲物種類

福岡縣の海區は、總里數二一七里で、筑前海が漁業従事者數最も多い。

海區	漁業者數	專業者數	兼業者數	海區里數	組合數
筑前海	二八、五八九	六、六二六	一一、〇一九	八八	四五
豐前海	一一、五二五	一、七九一	六、五四九	二二	一八
有明海	一三、一六二	二、六七三	八、四七七	七	一八
計	五四、二七六	一、四九〇	二〇、五八一	一一七	八一

### (1) 水産漁獲物種類

福岡縣に於ける水産漁獲物の種類は左の如くである。(昭和十一年四月調査に據る)

種類	數量(單位貫)	價格(單位圓)
カレヒ、ヒラメ	五五五、二四五	八五一、二六〇
タ	二一九、八〇四	六七二、一〇六
イワシ	二、二七三、七〇六	三一三、二四一
コヒ	一四九、五二四	二四四、四七九
エビ	八五、〇九八	二四三、一九二
イカ	三四一、九一八	二二三、三二二

サバ	四七四、二六五	二一六、五八七
ボラ	二一二、二〇五	一九九、九七二
クロダヒ	七一、三二九	一五九、三七八
ブリ	九三、一八一	一五〇、三九八
タコ	一四三、九二三	一三二、七七八
アマノコ	二二九、三二七	一一九、一八五
マガロ	五六、五一六	八四、二九五
コノシロ	二三七、一二〇	八一、六七七
アカシ	五六、五一六	七四、五二四
フカ、サメ	一五九、八三二	七三、五九七
トビウヲ	五七、四七六	四八、四五三
ウナギ	一六、八二二	四七、一二二
計	—	七、六五〇、三二五
蒲鉾	一、七〇六、九二二	一一、五九五、八九一
煮乾	一二一、八九八	二、五五八、一九〇
鹽	四、五〇五、七〇〇	二四三、二二六
節類	五四、七一五	一七四、八〇六
スキフノリ	六、六二一	七七、九八〇
肥料	一二四、七一九	二四、五二七
李乾	一九、一六六	二一、四七八
其他	—	一九、一〇二
計	—	二三七、二六四
計	—	三、三五六、五七三

### (2) 漁場

縣内外の漁場を細別すると次の如くである。

#### 縣外漁場

朝鮮東部	鰻刺網
朝鮮南部	鰻刺網、鰻巾着網、鱒流網、鯛延網
朝鮮西部	鮫鱒網、鱒流網、鰻巾着網
東部近縣	鰻延網、鯛縛網、打瀬網
西部近縣	鯛延網、鯨鯖敷網
臺灣東部	羽魚突棒、鯛延網

#### 縣内漁場

筑前海	鰻刺網、鯛延網各種一本釣、鯛地漕網、烏賊巢曳網、大敷網
豐前海	桝網、打瀬網、鱒流網、烏賊巢曳網、鰻旋網
有明海	羽瀬、鮎流網、鮫鱒網、各種延繩、けん敷網、干潟採貝
河川	鮎漁業、圍刺網、築漁

### 第四節 漁船及び船溜

沿岸漁業の能率向上に努力してゐるものと見ることが出来る。  
船溜 漁船の機械化に伴ひ船溜の施設を要するのと、殊に昭和七年以來時局匡救事業によつて國庫補助を得て急増してゐる。

#### (一) トロール漁業

トロール漁業の全國許可數は七十五隻で、本縣は昭和四年下關市より戸畑市に共同漁業株式會社移轉により一躍五十七隻を有することとなり(内四隻は主として臺灣、基隆を根據とするもの)その漁獲高は四百萬圓を突破し、主漁場は朝鮮西南部沖合より支那東海、黄海、關東州沖合である。

#### (三) 機船底曳網漁業

共同漁業會社に屬するもので三十隻、島根縣水産株式會社所有四隻、徳島出漁團二十八隻、その他島根縣、山口縣の個人經營のものは六隻、計六十八隻にして、その他従なる根據地を有するもの四十四隻である。しかして本縣沿岸にあつて他縣の機船底曳網の違反摘發のため神風、鎮西丸の監視船を

(1) 水産漁獲物種類

福岡縣に於ける水産漁獲物の種類は左の如くである。(昭和十一年四月調査に據る)

種 類	數量(單位貫)	價格(單位圓)
カレヒ、ヒラメ	五五五、二四五	八五一、二六〇
タ	二一九、八〇四	六七二、一〇六
イ	二、二七三、七〇六	三一三、二四一
コ	一四九、五二四	二四四、四七九
エ	八五、〇九八	二四三、一九二
イ	三四一、九一八	二二三、三二二

(2) 漁 場

ウ	一六、八二二	四七、一二二
ナ		
キ		
計		
蒲鉾チクラ	一、七〇六、九二二	二、五五八、一九〇
煮 乾	一二一、八九八	二四三、二二六
鹽	四、五〇五、七〇〇	一七四、八〇六
節 類	五四、七一五	七七、九八〇
スキフノリ	六、六二一	二四、五二七
肥 料	一二四、七一九	二一、四七八
李 乾	一九、一六六	一九、一〇二
其 他		二三七、二六四
計		三、三五六、五七三

縣内外の漁場を細別すると次の如くである。

縣外漁場

朝鮮東部	鰻刺網
朝鮮南部	鰻刺網、鰻巾着網、鱒流網、鯛延網
朝鮮西部	鮫鰻網、鱒流網、鰻巾着網
東部近縣	鰻延網、鯛縛網、打瀬網
西部近縣	鯛延繩、鱒鰻敷網
臺灣東部	羽魚突棒、鯛延繩
縣内漁場	
筑前海	鰻刺網、鯛延繩各種一本釣、鯛地漕網、烏賊巢曳網、大敷網
豊前海	柵網、打瀬網、鱒流網、烏賊巢曳網、鰻旋網
有明海	羽瀬、魴流網、鮫鰻網、各種延繩、けん敷網、干潟採貝
河 川	鮎漁業、圍刺網、築漁

第四節 漁船及び船溜

(一) 漁 船

最近の統計によれば六、五五八隻を有し、内動力を有するもの一、五六五隻で全漁船數の約二割に當り、これを過去十年前の大正十四年の五、七五八隻に比べれば全數において八〇〇隻、動力は漁船においてはさらに著しく増加してゐるのは漁船の機械化を如實に物語るもので逐年増加の傾向にある。然るに最近は動力付漁船の船型馬力數低下してゐるのは沖合漁業より却つて

沿岸漁業の能率向上に努力してゐるものと見ることが出来る。

船溜 漁船の機械化に伴ひ船溜の施設を要するのと、殊に昭和七年以來時局匡救事業によつて國庫補助を得て急増してゐる。

(二) トロール漁業

トロール漁業の全國許可數は七十五隻で、本縣は昭和四年下關市より戸畑市に共同漁業株式會社移轉により一躍五十七隻を有することとなり(内四隻は主として臺灣、基隆を根據とするもの)その漁獲高は四百萬圓を突破し、主漁場は朝鮮西南部沖合より支那東海、黃海、關東州沖合である。

(三) 機船底曳網漁業

共同漁業會社に屬するもので三十隻、島根縣水産株式會社所有四隻、徳島出漁團二十八隻、その他島根縣、山口縣の個人經營のものは六隻、計六十八隻にして、その他従なる根據地を有するもの四十四隻である。しかして本縣沿岸にあつて他縣の機船底曳網の違反摘發のため神風、鎮西丸の監視船を縣水産試験場所屬で活躍監視にあたらしめてゐる。

(四) 水産養殖

養殖業の生産額は三十六萬餘圓にして、沿岸總漁獲高の約十分の一で、その主なるものは、内水面における養鯉業二十一萬圓、つぎは海苔養殖の六萬圓でこれを十年前に比較すれば正に百倍の増收である。

有明海方面、本縣養殖業の代表的なもので海苔、あさり、みろく、すみのゑ

かき、たいらぎ等で約十五萬圓を超過する。筑前海方面、玄海灘沿岸は海流の關係から養殖としては僅に海蘊、海苔、鮑の三種をあけるのみである。

豊前海方面、蛤、潮吹、きぬ貝、みろく、牡蠣などの成育に適し奨励中である。

鯉	鰻	鱈	牡蠣	海苔	金魚	其他	合計
昭和九年度	二八、四四	二、六四	六、八九	一三、五六	八六、八六	三、〇六	一六、一七
							三、七五

### 第五節 水産加工品

福岡縣に於ける水産加工品産額は年間三百萬圓を突破の状況で沿岸漁獲高の約八割を占め、しかも従來利用少くなかつた藻類、海膽にも加工製造を施して水産價値を増進してゐる。

#### A 蒲鉾 竹輪

二百三十萬圓の製造高で福岡、大牟田、久留米、若松、小倉の各市、山門郡を産地としてゐる。本縣はトロール機船底曳網の漁獲物聚集に便利な地理的優秀な地位にあるため著しく發達して本邦總生産額の六分に相當してゐる。

#### B 罐詰

有明海沿岸が主産地で、みろく貝、玉瑋貝、姥貝、飯蛸などの味付、蜆の水煮、鰻蒲焼など年産額四十萬圓に達し、將來ますます有望である、味付

### 魚市場一覽 (昭和十一年三月一日現在)

郡市別	名	組織	市場手數料	買受人	最近取扱高
福岡	株式會社 福岡魚市場	株式	100	〇〇〇	四八七、九八二
	姪濱魚市株式會社	株式	100	〇〇〇	一七五、一四八
	若松魚市株式會社	株式	100	〇〇〇	八四、〇九六
	協田魚市合名會社	合名	100	〇〇〇	二六、五六一
八幡	八幡魚市株式會社	株式	100	〇〇〇	一六、七六七
戸畑	戸畑魚市場株式會社	株式	100	〇〇〇	一、〇五、五〇九
宗像	株式會社 神湊新魚市場	株式	100	〇〇〇	五五、〇〇〇
	地ノ島魚市 合資會社	合資	〇八五	〇〇〇	一三、五五四
遠賀	株式會社 長野魚市場	株式	100	〇〇〇	六、〇〇〇
	折尾魚市株式會社	株式	100	〇〇〇	一四三、八九六

の販路は内地、支那及南洋を主とし、蜆水煮は北米に輸出されて來たが、昭和五年六月アメリカの關稅重課で一時憂慮されたが、佐賀縣と協力して對米難局打開につとめてゐる。

#### C 鱈製 品

筑前海に多産する鱈の大半は漁家の副業として煮乾、目刺、唐人乾、櫻乾に製造され、また漁獲に應じ乾鱈、粕肥料に供されその額十萬圓内外である。

#### D 海苔

筑前、豊前、有明の三海何れも産し、總額十五萬圓、有明海産は近年の生産であるが數も多く優良で關西一帯に移出されてゐる。

#### E 鹽

水産製造ではないが、この項で包含して論ずれば、明治二六年に鹽田反別二百八十五町歩、竈數二百四十二ヶ所、産額十四萬石に達してゐたのが、鹽專賣法實施とともに減少の一路をたどり、昭和十年四十二ヘクタール、三百七十六萬四千十噸、十四萬三千三百三十一圓で主に豊前海に集中されてゐる。

### 第六節 水産物取引機關

以上の如き水産物の取引機關として、縣下には魚市五〇、共同販賣所三二

郡市別	名	組織	市場手數料	買受人	最近取扱高
嘉穂	桂川魚市株式會社	株式	100	〇〇〇	六三、一三三
	株式會社 幸袋魚市場	株式	100	〇〇〇	九、四四五
	碓井魚市合資會社	合資	100	〇〇〇	七、二七七
	大隈魚市株式會社	株式	100	〇〇〇	六、二二九
	上山田魚市 株式會社	株式	100	〇〇〇	九、〇〇〇
	甘木魚市株式會社	株式	100	〇〇〇	九、〇〇〇
	二日市魚市 株式會社	株式	100	〇〇〇	五、五八六
	今宿魚市株式會社	株式	200	〇〇〇	二、三九九
	株式會社 前原魚市場	株式	100	〇〇〇	二、〇〇〇
	株式會社 加布里魚市場	株式	100	〇〇〇	六、五五六
	深江魚市合資會社	合資	〇〇〇	〇〇〇	一、〇七九
	福吉魚市株式會社	株式	100	〇〇〇	三、五六五
	久留米魚市 株式會社	株式	100	〇〇〇	八三、四三三
	大牟田魚市 株式會社	株式	100	〇〇〇	一、三五、一〇一
	株式會社 吉井魚市場	株式	100	〇〇〇	五、一三六
浮羽	北野魚市株式會社	株式	100	〇〇〇	二、〇九五
三井	大川魚市株式會社	株式	100	〇〇〇	一〇、一六八
三井	羽犬塚町營魚市場町營(委任)	株式	100	〇〇〇	七、三五四
八女	福島魚市株式會社	株式	100	〇〇〇	一、六五七



第四章 水産業

伊田魚市株式会社	株式	100	24,073
後藤寺魚市株式会社	株式	100	17,163

四五四

計	公營	三五	一四、五六、九九一
	株式	三六	
	合資	四五	
	合名	四五	

第七節 水産業の前途

近時、福岡縣の水産業は漸次沈滞傾向にあることは、一般に認められてるところであつて、これが主要な原因は次章に於て見る如く、農村漁村の甚しき生活困難が、沿岸漁業従事者をして、最近沿岸地一帯に其の觸手を延しつゝある大資本組織による漁業と對抗し得ないこと、殊に石炭採掘の悪水流出及び大工場の悪水放流等が甚しくなつた結果、沿岸漁業が殆んど不可能になつたことに起因するものと見られてゐる。既にこの種の問題では沿岸漁夫と鑛山又は工場側との紛争は、過去に於て幾度か新聞紙によりて報道せられた問題であつて、漁民の生活權擁護のために、縣當局では紛争の度にこれが調停に立つて解決に當つてゐる。

然し乍ら福岡縣の如き大炭田と、重工業及び紡績、化學等の重要産業地帯に於ては、將來永久に悪水放流は絶えないであらうし、従つて九州の他の諸縣と異つて、福岡縣の沿岸漁業の將來は現在以上に發展することは不可能であると言ひ得るであらう。



福岡魚市場の状況

京都 株式会社 行橋魚市場 株式 100 2,010 146,000

第五章 福岡縣の農業問題

以上我々は農業、林業及び水産業について、福岡縣のこの領分における大體の見取圖を見た。そこで以上三箇の章に相關連する農業問題について若干の考察をなして福岡縣農、林、水産業の項を終ることゝしたい。

既に讀者は「九州産業比較」の項で見られた如く、日本農業問題解決の根本的痛となつてゐる零細農について、それが如何に我が農村、漁村の制縛機となつてゐるかを略察知されたであらう。實に我が農村はこの零細農の解決なくしては如何なる救助も役立たないと言ひ得る。政府の自作農創設の意圖は正

等をして負債をさへも生ぜしめる結果に立ち至らしめたのである。福岡縣に於ては、政府の自作農創設の提唱に呼應して、縣下全般に亘つて大正十三年度より縣の直接の事業として、市町村役場及び産業組合等をして、自作農設立維持の資金として、簡易保險積立金の融通をうけ、縣費を以て年一分三厘の利子補給をなし、年三分五厘、二十年償還で町村又は産業組合に貸付け多數の自作農創設維持につとめてゐる。年次貸付表左の如し。

年 度	創 維	貸 付 金	貸 付		貸 付 反 別		
			團 體	同 人 員	田	畑	宅 地
大正十三年	創	300,000	三五	四三	三六・九	八・四	一・三
同 十四年	同	300,000	二七	四三	一〇四・六	五・四	三
昭和元年	同	600,000	四六	六九	一七・二	八・四	一
同 二年	同	450,000	六	四六	一八・六	二・九	三
同 三年	同	600,000	六	七五	一六・三	四・七	四
同 四年	同	570,000	七	六五	一四・〇	五・五	二
同 五年	同	590,000	七	五九	一四・三	六・四	四
同 六年	創	200,000	六	二七	七・四	六・五	四





魚市場の状況

京 都 株式会社 行橋魚市場 株式 100 1,000 19,000

## 第五章 福岡縣の農業問題

以上我々は農業、林業及び水産業について、福岡縣のこの領分における大體の見取圖を見た。そこで以上三箇の章に相關する農業問題について若干の考察をなして福岡縣農、林、水産業の項を終ることゝしたい。

既に讀者は「九州産業比較」の項で見られた如く、日本農業問題解決の根本的痛となつてゐる零細農について、それが如何に我が農村、漁村の制縛機となつてゐるかを略察知されたであらう。實に我が農村はこの零細農の解決なくしては如何なる救助も役立たないと言ひ得る。政府の自作農創設の意圖は正にこゝより發現したものである。先づ福岡縣の自作農創設の状況を見よう。

### 第一節 自作農創設

先に政府は自作農設定を全國の農民に呼びかけ、地方的には可なりの成功を見てゐた。然し過ぐる金融恐慌の嵐は、折角得た田地をして再び放棄せしむの餘儀なきに至らしめた。然も農民のこの新たな自作農權利の放棄は、彼

福岡縣産業の巻

つゝある大資本組織による漁業と對抗し得ないこと、殊に石炭採掘の悪水流出及び大工場の悪水放流等が甚しくなつた結果、沿岸漁業が殆んど不可能になつたことに起因するものと見られてゐる。既にこの種の問題では沿岸漁夫と鑛山又は工場側との紛争は、過去に於て幾度か新聞紙によりて報道せられた問題であつて、漁民の生活權擁護のために、縣當局では紛争の度にこれが調停に立つて解決に當つてゐる。

然し乍ら福岡縣の如き大炭田と、重工業及び紡績、化學等の重要産業地帯に於ては、將來永久に悪水放流は絶えないであらうし、従つて九州の他の諸縣と異つて、福岡縣の沿岸漁業の將來は現在以上に發展することは不可能であると言ひ得るであらう。

等をして負債をさへも生ぜしめる結果に立ち至らしめたのである。福岡縣に於ては、政府の自作農創設の提唱に呼應して、縣下全般に亘つて大正十三年度より縣の直接の事業として、市町村役場及び産業組合等をして、自作農設立維持の資金として、簡易保險積立金の融通をうけ、縣費を以て年一分三厘の利子補給をなし、年三分五厘、二十ヶ年償還で町村又は産業組合に貸付け多數の自作農創設維持にとめてゐる。年次貸付表左の如し。

年 度	年 度	年 度	貸付		貸付 反別		
			貸付金	團體	同人員	田 畑 宅地	
大正十三年	創	三〇〇,〇〇〇	三五	四九三	一三・九	八・四	一・三
同 十四年	同	三〇〇,〇〇〇	二七	四三	一四・六	五・四	一・三
昭和元年	同	六〇〇,〇〇〇	四	六九三	一五・三	八・四	一
同 二年	同	四〇〇,〇〇〇	六	四六	一〇・六	二・九	二
同 三年	同	六〇〇,〇〇〇	六	四六	一〇・六	二・九	二
同 四年	同	七〇〇,〇〇〇	七	五九	一四・三	六・四	二
同 五年	同	五九〇,〇〇〇	七	五九	一四・三	六・四	二
同 六年	同	三〇〇,〇〇〇	六	四六	一〇・六	二・九	二
同 七年	同	三三三,三七五	四	三五〇	八・九	五・九	一・五
同 八年	同	二九二,四三〇	三	三三〇	二・〇	一・六	一・〇
同 九年	同	三三七,五八〇	三	四三	二・九	一・六	一・〇
同 十年	同	三〇七,九〇〇	三	四三	二・九	一・六	一・〇
同 計	同	三,一三三,三三〇	三	四三	二・九	一・六	一・〇
合 計	同	一,五七三,三三〇	三	四三	二・九	一・六	一・〇
總 計	同	一,五七三,三三〇	三	四三	二・九	一・六	一・〇

四五五

以上の如く、自作農創設の運動は著々と縣當局及び關係の諸機關によりて不斷に遂行されつゝある。それは可成りの成功を納めつゝあることは事實である。然し乍ら既にドン底にあへぐ農民に對しては「満足すべき」程度に目的を果して得るであらうか。この理解のためには次の如き農山村漁村の負債状態を知る必要がある。

### 第二節 農漁山村負債状況

近年の經濟不況が深刻となるにつれ、農漁山村の窮乏はいや増し、殊に昭和に入つて政府の緊縮政策時代にはまさに破綻するのではないかにさへ思惟され、昭和七年以來急に農漁山村の更生、救済政策が社會的通念となつてその施設は各方面に現はれて來た。

福岡縣も西日本の雄縣、鑛工業では日本經濟動脈の中樞と云へども、農漁山村の困憊疲弊はその例を免れることが出来なかつた。

#### (一) 農家負債概況

1、農家總戸數	一四九、八四〇戸（縣下總戸數の三一・〇五％）
有債戸數	一二八、四一三戸（農家總戸數の八五・七〇％）
無債戸數	二一、四二七戸（農家總戸數の一四・三〇％）
2、負債總額	一七二、七六五、五二〇圓
3、一戸平均負債額	一、一五三圓

以上の如くであつて、實に國本の中心たるべき農山村漁村の困難は想像以上

である。福岡縣の如き比較的富裕なる縣に於てかくの如きである以上、冷害貧農地方は想像だに出来ないものがあらう。今その借入先を示すと次表の如くなる。

#### (二) 借入先別負債

イ、個 人	五八、四三四、九九九圓（三三・八三％）
ロ、頼母子講	四九、二九三、四五七圓（二八・五三％）
ハ、信用組合	三一、〇三六、二〇〇圓（一七・九六％）
ニ、勸業銀行	一四、七二五、六七六圓（八・五三％）
ホ、一般銀行	一二、五九九、七三七圓（七・二九％）
ヘ、無盡會社	二、四五九、九一七圓（一・四二％）
ト、質 屋	一四一、七三〇圓（〇・〇八％）
チ、其 他	四、〇八一、八〇四圓（二・三六％）

#### (三) 利率別負債金額

（頼母子講、無盡會社、質屋を除く）

イ、八分未滿（年）	三〇、六九八、二四一圓（二五・四〇％）
ロ、八分以上一割未滿	二五、九六二、二二八圓（二一・四八％）
ハ、一割以上一割二分未滿	三四、二二六、〇七四圓（二八・三一％）
ニ、一割三分から一割五分未滿	二五、八七三、一四三圓（二一・四〇％）
ホ、一割五分 以上	四、一一八、七二七圓（三・四一％）

#### (四) 漁家負債概況

1、漁家總戸數	一二、六三三戸（縣下總戸數の二・六二％）
イ、有債戸數	九、六六四戸（漁家總戸數の七六・五〇％）

一年度をもつて百五十ヶ町村の指定を終了、社會教育施設、個人經濟及び町村振興の立場から一路自力更生に邁進してゐると政府も縣も確信してゐる。しかして本縣の經濟更生指定町村の選定方針としては本縣の實狀に従ひ大體次の如き規程が置かれてゐる。

- (一)、町村の經濟状態が中位以下に在ること
- (二)、町村における更生の意氣旺盛と認められ、計畫の樹立實行により更生の餘地比較的大にして將來に効果を收め他町村を啓發する可能性の多いと認められるもの
- (三)、町村農會その他町村における各種團體の活動十分で且つ相互の連絡圓滿なりと認められるもの

### 二、負債整理

昭和八年八月農村負債整理組合法は、農漁村の更生上最も重要視される負債整理問題解決のため施行された。かくて縣は五ヶ年において縣下農山村負債總額一億七千七百二十一萬餘圓に對し、内約四千八百七十五萬圓（負債

イ、七分未滿（年）	八九八、二五七圓（二〇・二〇％）
ロ、七分以上一割未滿	一、二四五、一〇八圓（二八・〇〇％）
ハ、一割 以上	二、三〇三、四五一圓（五一・八〇％）

#### (六) 利率別負債額

イ、個 人	一、六四七、五九九圓（三九・三〇％）
ロ、無盡及頼母子講	一、一六二、七八九圓（二三・九〇％）
ハ、銀行及信用組合	九三八、二七八圓（二一・一〇％）
ニ、政府 資金	六九八、一五〇圓（一五・七〇％）

#### (五) 借入先別負債額

ロ、無債戸數	二、九六九戸（漁家總戸數の二三・五〇％）
2、負債總額	四、四四六、八一六圓
3、一戸平均負債額	三五二圓

即ち農村漁村（山村も包含されてゐる）等の負債總額は一億七千七百二十一萬餘圓で、農村は信用高いために多く、殊にこれ等の利子は高利が大部分

近年の經濟不況が深刻となるにつれ、農漁山村の窮乏はいや増し、殊に昭和に入つて政府の緊縮政策時代にはまさに破綻するのではないかにさへ思惟され、昭和七年以來急に農漁山村の更生、救済政策が社會的通念となつてその施設は各方面に現はれて來た。

福岡縣も西日本の雄縣、鑛工業では日本經濟動脈の中樞と云へども、農漁山村の困憊疲弊はその例を免れることが出来なかつた。

### (一) 農家負債概況

1、農家總戸數	一四九、八四〇戸 (縣下總戸數の三一・〇五%)
有債戸數	一二八、四一三戸 (農家總戸數の八五・七〇%)
無債戸數	二一、四二七戸 (農家總戸數の一四・三〇%)
2、負債總額	一七二、七六五、五二〇圓
3、一戸平均負債額	一、一五三圓

以上の如くであつて、實に國本の中心たるべき農漁山村の困難は想像以上

へ、無盡會社	二、四五二、九一七圓 (二・四二%)
ト、質屋	一四一、七三〇圓 (〇・八%)
チ、其他	四、〇八一、八〇四圓 (二・三六%)

### (三) 利率別負債金額

(頼母子講、無盡會社、質屋を除く)

イ、八分未満(年)	三〇、六九八、二四一圓 (二五・四〇%)
ロ、八分以上一割未満	二五、九六二、二八八圓 (二一・四八%)
ハ、一割以上一割二分未満	三四、二二六、〇七四圓 (二八・三一%)
ニ、一割三分から一割五分未満	二五、八七三、一四三圓 (二一・四〇%)
ホ、一割五分以上	四、一一八、七二七圓 (三・四一%)

### (四) 漁家負債概況

1、漁家總戸數	一二、六三三戸 (縣下總戸數の二・六二%)
イ、有債戸數	九、六六四戸 (漁家總戸數の七六・五〇%)

ロ、無債戸數	二、九六九戸 (漁家總戸數の二三・五〇%)
2、負債總額	四、四四六、八一六圓
3、一戸平均負債額	三五二圓

### (五) 借入先別負債額

イ、個人	一、六四七、五九九圓 (三九・三〇%)
ロ、無盡及頼母子講	一、一六二、七八九圓 (二三・九〇%)
ハ、銀行及信用組合	九三八、二七八圓 (二一・一〇%)
ニ、政府資金	六九八、一五〇圓 (一五・七〇%)

### (六) 利率別負債額

イ、七分未満(年)	八九八、二五七圓 (二〇・二〇%)
ロ、七分以上一割未満	一、二四五、一〇八圓 (二八・〇〇%)
ハ、一割以上	二、三〇三、四五一圓 (五一・八〇%)

即ち農漁村(山村も包含されてゐる)等の負債總額は一億七千七百二十一万餘圓で、農村は信用高いために多く、殊にこれ等の利子は高利が大部分である。

## 第三節 農村經濟更生計畫

### 一、指定狀況

窮乏町村の更生のため、本縣は政府の時局匡救事業による農漁山村經濟更生五ヶ年計畫、百五十ヶ町村の指定を企圖し、年々三十町村を選び、昭和十

一年度をもつて百五十ヶ町村の指定を終了、社會教育施設、個人經濟及び町村振興の立場から一路自力更生に邁進してゐると政府も縣も確信してゐる。しかして本縣の經濟更生指定町村の選定方針としては本縣の實狀に従ひ大體次の如き規準が置かれてゐる。

- (一)、町村の經濟狀態が中位以下に在ること
- (二)、町村における更生の意氣旺盛と認められ、計畫の樹立實行により更生の餘地比較的大にして將來に効果を收め他町村を啓發する可能性の多いと認められるもの
- (三)、町村農會その他町村における各種團體の活動十分で且つ相互の連絡圓滿なりと認められるもの

### 二、負債整理

昭和八年八月農村負債整理組合法は、農漁村の更生上最も重要視される負債整理問題解決のため施行された。かくて縣は五ヶ年において縣下農漁村負債總額一億七千七百二十一萬餘圓に對し、内約四千八百七十五萬圓(負債見込總額の約二割七分強)につき負債整理組合と信用組合を通じてこれが整理に當らせる方針を樹てた、而して昭和十年度末に於ては負債整理組合設立町村數三十一ヶ町村、組合數九十七組合、組合員數三千七百八十六名、内要整理組合員二千八百五十九名、その整理負債額三百八十七萬九千九百三十一圓で、整理のための資金所要額は百二十三萬四千五百四圓に及んでゐる。

しかるにこの中、資金の交付をうけ整理を完了したものは十二町村三十一組合、その要整理組合員九百十六名、整理負債額百二十二萬七千三十九圓のう

ち大藏省預金部の融通をうけた資金は僅か三十九萬六千五百圓で、所定の計畫とは程遠い整理状況であると云はねばならない。これに對して縣は負債整理班を專任して大いに組合設立に盡力してゐるが、負債整理組合設立の手續煩瑣と大藏省預金部融通の困難といふ根本的缺陷のため、獨り本縣のみならず、全國において負債整理事業の不振を來たしてゐることは既に周知の事實であらう。

### 第四節 勸業施設

福岡縣農業問題について、記者は必要以上の心配をしたかも知れない。そこで左に福岡縣當局の拂ひつゝある諸種の施設費の一般を記載して讀者の安堵を促すことゝしよう。

#### 福岡縣勸業費豫算表 (昭和十一年度 縣統計課調査)

##### 農 業

自作農審議會費	二〇八
農事試験場費	七五、〇五一
穀物検査所費	九三、八一九
病害蟲驅除豫防費	三、六六五
果樹母木園費	三、九一〇
小麥増殖獎勵費	三八、六八二
植物検査所建築費	三、〇〇〇
計	一三、一九一

金額(單位圓)

##### 蠶 業

蠶業試驗場費	一五、五一〇
蠶業取締所費	六、一四〇
繭檢定所費	六二、〇一〇
桑穗木園費	二、〇七〇
蠶糸業獎勵補助	一七〇、一三七
繭價協定委員會費	一、二〇〇
計	二五七、〇六七

##### 畜 産 業

種鶏場費	二一、四九七
畜牛結核豫防費	八一二
種畜場費	三六六
種畜購入費	三、九〇〇
家畜傳染病豫防費	五、六三九
種畜場建築費	五、〇〇〇
計	五〇、〇〇〇

##### 林 業

地方森林會費	七〇九
縣有林會	六、九三四
林業試驗費	二、〇〇〇
縣有林野收入交付金	八五二
公私林野縣行造林費	九三、五四九
林業獎勵補助	一〇七、一三九
木炭検査所費	一二、六五八
計	二二三、八四一

##### 水 産 業

水産試驗場費	四五、一三九
漁業取締費	二〇、一七二
水産製品検査費	六六〇
水産獎勵補助	三四、〇三五
水産増殖費	四、三〇八
計	一〇四、二一四

##### 蠶 業

荒廢地復舊費	六九、六〇六
用水改良費	九〇、〇〇〇
縣農會補助	一七八、八七七
農業倉庫獎勵補助	六九、七五〇
畑作改善獎勵費	三、六〇〇
普通農事獎勵費	一四、二五四
園藝獎勵補助	三、三六〇
茶業獎勵補助	七、六八〇
病害蟲豫防費補助	五、二三一
開墾地移住家屋建築費補助	一四、四〇〇
計	一、〇二二、二二七

##### 畜 産 業

商工獎勵補助	三八、二七三
航路費補助	一四、〇四〇
博覽會補助	五一、四五〇
工業試驗場建築費	五〇、〇〇〇
計	二八五、二〇五

##### そ の 他

地方測候所費	一九、三五八
副業獎勵費	六、八六五
産業調査費	一、〇〇〇
講習會費	二、八二二
勸業雜費	五、五九二
經濟更生施設費	一四、二九五
農事試験場、測候所建築費	一一三、八八八
副業獎勵補助	四五、七二六
農漁山村經濟改善獎勵補助	八、五六〇
産業組合補助	四八、二五五
負債整理委員費補助	一三、〇〇〇
計	二七九、三六一

福岡縣農業問題について、記者は必要以上の心配をしたかも知れない。そこで左に福岡縣當局の拂ひつゝある諸種の施設費の一般を記載して讀者の安堵を促すことしよう。

福岡縣勸業費豫算表 (昭和十一年度) (縣統計課調査)

業	金額(單位圓)
農	二〇八
自作農審議會費	七五、〇五一
農事試驗場費	九三、八一九
穀物検査所費	三、六六五
病害蟲驅除豫防費	三、九一〇
果樹母木園費	三八、六八二
小麥増殖獎勵費	三、〇〇〇
植物検査所建築費	
蠶業	
蠶業試驗場費	一五、五一〇
蠶業取締所費	六、一四〇
繭檢定所費	六二、〇一〇
桑穗木園費	二、〇七〇
蠶糸業獎勵補助	一七〇、一三七
繭價協定委員會費	一、二〇〇
計	二五七、〇六七
畜産業	
種鶏場費	二一、四九七
畜牛結核豫防費	八一二
種畜場費	三六六
種畜購入費	三、九〇〇
家畜傳染病豫防費	五、六三九
種畜場建築費	五〇、〇〇〇
商工業獎勵補助	三八、二七三
航路費補助	一四、〇四〇
博覽會補助	五一、四五〇
工業試驗場建築費	五〇、〇〇〇
計	二八五、二〇五

林	金額(單位圓)
畜産獎勵補助	一三、一九一
計	九五、四〇五
地方森林會費	七〇九
縣有林會	六、九三四
林業試驗費	二、〇〇〇
縣有林野收入交付金	八五二
公私林野縣行造林費	九三、五四九
林業獎勵補助	一〇七、一三九
木炭検査所費	一二、六五八
計	二二三、八四一

水産業	金額(單位圓)
水産試驗場費	四五、一三九
漁業取締費	二〇、一七二
水産製品検査費	六六〇
水産獎勵補助	三四、〇三五
水産増殖費	四、三〇八
計	一〇四、二一四

商工業	金額(單位圓)
工業試驗場費	七五、九七四
産業獎勵費	三九、六六八
工藝産業振興會費	二、六〇〇
商店改善指導費	五〇〇
販賣統制委員費	一、二〇〇
中小工業統制指導費	一、三〇〇
中小工業資金融通損失補償金	一〇、二〇〇

その他	金額(單位圓)
地方測候所費	一九、三五八
副業獎勵費	六、八六五
産業調査費	一、〇〇〇
講習會費	二、八二二
勸業雜費	五、五九二
經濟更生施設費	一四、二九五
農事試驗場、測候所建築費	一一三、八八八
副業獎勵補助	四五、七二六
農漁山村經濟改善獎勵補助	八、五六〇
産業組合補助	四八、二五五
負債整理委員費補助	一三、〇〇〇
計	二七九、三六一

合計	金額(單位圓)
歲出豫算總額	二〇、〇四五、〇〇〇
勸業費總計	二、二五七、四二〇
内 經常部	四九七、四〇〇
臨時部	一、七六〇、〇二〇

# 第六章 鑛業

## 第一節 概況

黒ダイヤ王國とまづ全國で指を屈せられるのは福岡縣である。福岡縣の山野は石炭に蔽はれてゐる感がある。昭和九年の鑛産額一億四千五百五十萬圓中その九割七分即ち一億三千八百二十二萬圓は石炭が占めてゐる。それがさらに十年度末では一億五千二百一十一萬四千二百六十六圓に飛躍し、その出炭高二千八萬四千九百四十六噸にして、常に本邦總出炭高の五割三分を占めるものと誇稱してゐる。試みに昭和十年の全國出炭高と對比してみれば左の如し。

全國	三七、六八三、二四二噸
福岡縣	二〇、〇八四、九四六噸

かくて石炭が濱口内閣時代の緊縮政策と撫順炭の内地移入時代の重壓で沈滞萎微し、炭坑地方に失業者續發の時代を顧みれば、まさしく隔世の感がある。滿洲事變、非常時の聲が高くなり軍需インフレの波にのつて重工業が殷盛を極めると同時に炭坑には朗歌が漲り、貯炭は不足し、いくら掘つても炭は足りない。炭價は昂騰し、福岡縣の黒ダイヤ王國は擴張に餘念がなく出炭も記録破りの好況である。

の將來を昭和七年商工省鑛山統計から引用すれば、福岡縣は三つの石炭地帯から成立されてゐる。そのうち遠賀川流域を含む筑豊炭田はわが國出炭總額の四割を産出し、既採掘炭量瀝青炭において、四億五千四百七十萬三千噸、無煙炭及び燧石において一千八百八十六萬八千噸、計四億六千六百五十七萬一千噸、大牟田市を圍む三池炭田既採掘炭量七千三百十八萬六千噸、未採掘炭量三億九千六百十四萬四千噸、福岡市東北の粕屋炭田既採掘炭量三千七十九萬七千噸、未採掘炭量二億四千萬噸となつてゐる。この三炭田の未採掘炭量から推定すれば黒ダイヤは無盡蔵といふも可能で

ば黒ダイヤは無盡蔵といふも可能で



近代採掘の備に坑内

## 第二節 鑛區

石炭業の好況は云はずもがな、金輸出再禁止にともなふ金價昂騰、政府の金買上價格引上げてゴールドラッシュ時代も現出され、近年頗る金銀の試掘、採掘願ひが激増してゐる。昭和九年末、福岡鑛山監督局調査による各種鑛業の採掘鑛の狀況は左の如し。

種別	稼業		休業	
	鑛區數	坪數	鑛區數	坪數
金	七	一、二六一、三一四	二三	四、一八〇、四一六
金、銀	八	一、七三九、七六七	二二	五、五八九、五四六
金、銀、銅	—	—	七	一、六三〇、一四〇
金、銀、銅、鉛	—	—	二	二八六、九〇〇
金、銀、銅、鉛、亞鉛、硫化鐵	—	—	四	六八〇、五四五
亞鉛、硫化鐵	一	一四八、二〇〇	二	三七三、六四六
金、銅、亞鉛、鉛	一	二六七、五〇〇	二	三二〇、〇〇〇
鋼	—	—	二四	一、六三六、九七一
鐵	—	—	一	二〇〇、七〇三
石炭	一七〇	一、三六、一一三、一四九	四一八	一、九二、六二二、七六一
その他	二	一、〇六九、九〇〇	一五	二、五八八、四二五
計	一八七	一、四〇、五九九、八三〇	五一九	二、〇九、八二三、〇五三

## 第三節 石炭

福岡縣の黒ダイヤ王國はいつまで續くか、縣産業の重大支柱をなす石炭業

炭層は數層で、その内現に採掘するものは二層にして、その一層は平均八尺の厚さを有し、又往々二十尺に達する部分もある。他の一層は前記層よりも僅かに六尺乃至十尺の下部に横たはりその厚さ六尺あり、而してその八尺層は良好なる粘結性の石炭である。炭質は發熱量が高い上に瓦斯分も多いので汽罐用並に瓦斯發炭製造用に適してゐる、主な炭坑は宮ノ浦、萬田、宮原、四ツ山の四坑で、送炭のために特設された三井所有のロツクハーバー三池港から積出される石炭は年々三十萬噸の移出と七十萬噸の輸出量に上つてゐる。

### イ、筑豊炭田

筑豊炭田の産炭量は全日本の四一% (縣内

に十年度末では一億五千二百一十一萬四千二百六十六圓に飛躍し、その出炭高二千八萬四千九百四十六噸にして、常に本邦總出炭高の五割三分を占めるものと誇稱してゐる。試みに昭和十年の全國出炭高と對比してみれば左の如し。

全 國	三〇、〇八四、九四六噸
福 岡 縣	二〇、〇八四、九四六噸
出炭高	三七、六八三、二四二噸

かくて石炭が濱口内閣時代の緊縮政策と撫順炭の内地移入時代の重壓で沈滞萎微し、炭坑地方に失業者續發の時代を顧みれば、まさしく隔世の感がある。滿洲事變、非常時の聲が高くなり軍需インフレの波にのつて重工業が殷盛を極めると同時に炭坑には朗歌が漲り、貯炭は不足し、いくら掘つても炭は足りない。炭價は昂騰し、福岡縣の黒ダイヤ王國は擴張に餘念がなく出炭も記録破りの好況である。

### 第三節 石 炭

福岡縣の黒ダイヤ王國はいつまで續くか、縣産業の重大支柱をなす石炭業

金、銀	八	一、七三九、七六七	二二	五、五八九、五四六
金、銅	一	一、六三〇、一四〇	七	二、八六、九〇〇
金、銀、銅、鉛	一	一、四八、二〇〇	四	六八〇、五四五
亞鉛、硫、鐵	一	二六七、五〇〇	二	三三三、六四六
金、銅、亞鉛、鉛	一	二六七、五〇〇	一	三二〇、〇〇〇
鋼、鉛	一	二四	一	一、六三六、九七一
鐵	一	一	一	二〇〇、七〇三
石 炭	一七〇	一三六、一三三、一四九	四一八	一九二、六二三、七六一
そ の 他	二	一、〇六九、九〇〇	一五	二、五八八、四二五
計	一八七	一四〇、五九九、八三〇	五一九	二〇九、八二三、〇五三

の將來を昭和七年商工省鑛山統計から引用すれば、福岡縣は三つの石炭地帯から成立されてゐる。そのうち遠賀川流域を含む筑豊炭田はわが國出炭總額の四割を産出し、既採掘炭量瀝青炭

において、四億五千四百七十萬三噸、無煙炭及び燐石において一千八百八十六萬八千噸、計四億六千六百五十七萬一噸、大牟田市を圍む三池炭田既採掘炭量七千三百十八萬六千噸、未採掘炭量三億九千六百十四萬四千噸、福岡市東北の粕屋炭田既採掘炭量三千七十九萬七千噸、未採掘炭量二億四千萬噸となつてゐる。この三炭田の未採掘炭量から推定すれば黒ダイヤは無盡藏といふも可能で實收可能見込量から云つても福岡縣の石炭王國の誇りは半恒久性をもつものと云ふも過言でない。

### ア、三池炭田

三池炭田は直方層群の上部に當る大牟田、萬田の二層群を夾炭層とし福岡、熊本兩縣（海底にも及ぶ）に亘り約五平方里の面積を有する一大炭田である。含有量は第三紀の始世期に屬し



近代採掘の坑内作業

炭層は數層で、その内現に採掘さるゝものは二層にして、その一層は平均八尺の厚さを有し、又往々二十尺に達する部分もある。他の一層は前記層よりも僅かに六尺乃至十尺の下部に横たはりその

厚さ六尺あり、而してその八尺層は良好なる粘結性の石炭である。炭質は發熱量が高い上に瓦斯分も多いので汽罐用並に瓦斯炭製造用に適してゐる、主な炭坑は宮ノ浦、萬田、宮原、四ツ山の四坑で、送炭のために特設された三井所有のロツクハーバー三池港から積出される石炭は年々三十萬噸の移出と七十萬噸の輸出量に上つてゐる。

### イ、筑豊炭田

筑豊炭田の産炭量は全日本の四一%（縣内の七七%）に達し、我が國五大炭坑の三つ迄をこゝに抱いてゐる盛況さである。こは北九州の優秀なる地理的位置と相俟つて、附近に一大工業地帯を作つた上に、新日本の産業的原動力をなしたのである。炭田は田川、嘉穂、鞍手、遠賀の四郡に跨り、遠賀川及びその支流たる嘉穂、徳波、彦山川の流域に、南北の延長八里乃至十三里に達し、東西の幅員四里乃至七里に亘り、夾炭層の主要なものは古三紀下部の所謂直方

層群に屬し、炭層は平均五百米の厚さをもつてゐるが、地層傾斜の關係上南部に行くに従つて厚さを増すので、主な炭坑は南部に密集し、採掘に耐ふる炭層中殊に主要なものは三尺炭、四尺炭、五尺炭、及八尺炭である。

筑豊炭田中の主要炭坑は三井田川、大ノ浦、二瀬、豊國、鯉田、飯塚、三井山野、中鶴、赤池、忠隈等で何れも二百萬圓以上の出炭量を示してゐる。而してこれが分布を見るに、遠賀川流域八百方籽中のほんの一小地域に、その大部分が集合してゐることは驚かされる。送炭には最初水運を利用したので數多の川港を生じ、且つ河口の芦屋をして股賑ならしめた。然し後には鐵道の開通によつて、陸路若松、小倉、門司、宇ノ島の四港に出すやうになつた。中でも若松は出炭港として古來から名が響き、同港の貯炭は全國炭價のパロメーターを示すものとして常に注目されるところで、年に七百五十萬噸の移出と六十五萬噸の輸出を行つてゐる。筑豊炭は主に瀝青炭で、粘結性のものと然らざるものとがあつて、船舶用、機關車用、骸炭及び瓦斯製造用に用ひられる。南部では火山岩の突入で無煙炭や燐石も出る。前者は家庭用に用ひられるが、後者は天然の骸炭であるため爆碎性が強いので、石灰やセメントの製造用に常用される。

ウ、粕屋炭田

粕屋炭田は福岡市の東方に位し、博多その他の諸港と鐵道を以つて連絡してゐる。地質は第三紀層にして宇美、志免の南部炭田と篠栗、久原方面の北部炭田に別れ、志免を中心とする海軍炭坑の石炭は主に西戸崎から海軍關係諸港に積出される。姪ノ濱附近の早良炭坑は鑛區の一割をもつ年産三十萬噸の

局部的な炭坑で、販路は地元の外、東京、大阪、朝鮮方面にも及ぶ。品質は瀝青炭で粘結性と揮發分が多いので、汽罐用、ガスコークス製造用には良いが、硫黄分の多いのが欠點である。

石炭鑛區別及び産額、鑛業權者

鑛區名	出炭高 (噸)	鑛業權者
三池	二、三二九、〇八三	三井鑛山株式会社
早良	三〇四、七八一	早良鑛山株式会社
池田	六一、五四〇	木原鑛業株式会社
海軍新原	四六四、四〇三	海軍省
高田	二四〇、六二三	明治鑛業株式会社
昭和田	一七六、五四七	中島徳松
龜山	一六八、七七八	東邦炭鑛株式会社
粕屋	一二八、一四三	日本鑛業株式会社
大谷	一四一、五六一	大谷炭鑛株式会社
長禮	六七、四八六	中島徳松
海老津	七三、一六五	金丸鑛業株式会社
梅木	六三、二四一	同
高松	一一二、六五五	日本炭鑛株式会社
高尾	三九六、九一七	同
中鶴	八三、八〇五	同
新井	六〇〇、五〇七	大正鑛業株式会社
岩崎	一三五、七三七	小林勇平
深坂	一二九、二一七	木曾重義
大辻	九六、八六〇	岩崎壽喜藏
木戸	三八六、七四〇	貝島炭鑛株式会社
	一三七、五四〇	木戸炭業株式会社

鑛區名	出炭高 (噸)	鑛業權者
豐田	五三八、一一五	同
方城	三九一、八五〇	三菱鑛業株式会社
宮尾	八八、五一七	宮尾鑛業株式会社
新糸禮	五二、一〇六	角銅朝太郎
三井田川	一、一五四、六〇四	三井鑛山株式会社
豐州	一二五、四六八	福岡田定次
大峰	二〇五、四三三	藏内鑛業株式会社
大峰三坑	一七五、八八二	同
大峰地	二六七、〇〇六	同

第四節 筑豊炭業の沿革

1、藩政時代

筑豊石炭發見の時代は特に史實に徴すべきものはない。既に本書巻頭「九州産業發達史」に於て述べられたところであるが、重複をいとはず、こゝで

大成	八六、四二八	藤井鑛業株式会社
木屋瀬	一三六、五二三	九州鑛業株式会社
新入	四〇五、四八八	三菱鑛業株式会社
大ノ浦	一、三二九、三七一	貝島炭鑛株式会社
古河目尾	三一一、九七七	古河石炭鑛業株式会社
鯉田	七一九、八一二	三菱鑛業株式会社
芳雄	二〇一、六一六	株式會社 麻生商店
綱分	四五五、二四八	同
豆田	一七一、〇四八	同
吉限	二〇四、四四二	同
平山	二三二、八一四	平山鑛業株式会社
製鐵所二瀬	九五一、九二八	日本製鐵株式会社
相田	八二、一〇二	秋山長三郎
稻築	一六五、六八四	日本製鐵株式会社
飯塚	五五七、二〇〇	飯塚鑛業株式会社
嘉穂	二六七、二三七	嘉穂鑛業株式会社
住友忠隈	四一三、四七一	住友炭鑛株式会社
	五五六、五七五	三井鑛山株式会社



た。中でも若松は出炭港として古来から名が響き、同港の貯炭は全炭炭價のバロメーターを示すものとして常に注目されるところで、年に七百五十萬噸の移出と六十五萬噸の輸出を行つてゐる。筑豊炭は主に瀝青炭で、粘結性のものと然らざるものとがあつて、船舶用、機關車用、骸炭及び瓦斯製造用に用ひられる。南部では火山岩の突入で無煙炭や燧石も出る。前者は家庭用に用ひられるが、後者は天然の骸炭であるため爆砕性が強いので、石灰やセメントの製造用に常用される。

#### ウ、粕屋炭田

粕屋炭田は福岡市の東方に位し、博多その他の諸港と鐵道を以つて連絡してゐる。地質は第三紀層にして宇美、志免の南部炭田と篠栗、久原方面の北部炭田に別れ、志免を中心とする海軍炭坑の石炭は主に西戸崎から海軍關係諸港に積出される。姪ノ濱附近の早良炭坑は鑛區の一割をもつ年産三十萬噸の

大成	八六、四二八	藤井鑛業株式會社
木屋瀬	一三六、五二二	九州鑛業株式會社
新入	四〇五、四八八	三菱鑛業株式會社
大ノ浦	一、三二九、三七一	貝島炭鑛株式會社
古河目尾	三一、九七七	古河石炭鑛業株式會社
芳雄	七一九、八一三	三菱鑛業株式會社
網分	二〇一、六一六	株式會社 麻生商店
豆田	四五五、二四八	同
吉隈	一七一、〇四八	同
平山	二〇四、四四二	同
製鐵所二瀬	二二二、八一四	平山鑛業株式會社
相田	九五、九二八	日本製鐵株式會社
稻築	八二、一〇二	秋山長三郎
飯塚	一六五、六八四	日本製鐵株式會社
嘉穗	五五七、二〇〇	飯塚鑛業株式會社
住友忠隈	二六七、二三七	嘉穗鑛業株式會社
三井山野	四一三、四七一	住友炭鑛株式會社
漆生	五五六、五七五	三井鑛山株式會社
古河下山田	一一五、〇二四	久恒鑛業株式會社
山田	三〇九、七三七	古河石炭鑛業株式會社
上山田	一六三、四八八	山田炭鑛株式會社
木城	三一二、四五五	三菱鑛業株式會社
玄王	七〇、六九九	中島徳松
上王	五二、〇四三	田籠鑛業株式會社
筑紫	九八、九九八	橋上鑛業株式會社
猪ノ鼻	一四四、五四八	野上鑛業株式會社
赤池	九一、九八八	久恒貞雄
	四一、二二〇	明治鑛業株式會社

福岡縣産業の巻

昭和	一七六、五四七	中島徳松
龜山	一六八、七七八	東邦炭鑛株式會社
粕屋	一二八、一四三	日本鑛業株式會社
大谷	一四一、五六一	大谷炭鑛株式會社
長禮	六七、四八六	中島徳松
海老津	七三、一六五	金丸鑛業株式會社
綠木	六三、二四一	同
梅老	一一二、六五五	日本炭鑛株式會社
高尾	三九六、九一七	同
新高	六〇〇、五〇七	同
岩崎	一三三、七三七	大正鑛業株式會社
深津	一二九、二一七	小林勇平
大井	九六、八六〇	木曾重義
木戸	三八六、七四〇	岩崎壽喜藏
	一三七、五四〇	貝島炭鑛株式會社
		木戸炭業株式會社

豐田	五三八、一一五	同
方城	三九一、八五〇	三菱鑛業株式會社
宮尾	八八、五一七	宮尾鑛業株式會社
新糸禮	五二、一〇六	角銅朝太郎
三井田川	一、一五四、六〇四	三井鑛山株式會社
豐州	一二五、四六八	福田定次
大峰	二〇五、四三三	藏内鑛業株式會社
大峰三坑	一七五、八八二	同
峰地	二六七、〇〇六	同

### 第四節 筑豊炭業の沿革

#### 1、藩政時代

筑豊石炭發見の時代は特に史實に徴すべきものはない。既に本書巻頭「九州産業發達史」に於て述べられたところであるが、重複をいとせず、こゝでは他の若干の資料より引用することとする。即ち貝原益軒の筑前續風土記、嘉穂郡山野炭坑の舊碑その他の口碑傳説に依つて、既に百五十年前に燃石又は五平太の名で世間に知られ、水風呂用その他の燃料として小規模ながら採掘されて居つたことは窺ひ知ることが出来る。明和年間(約百七十年前)となつては筑前國遠賀郡若松の庄屋和田佐平氏が始めてこれを製鹽用に使用し、鞍手地方の燃石を採掘して販路を中國、四國まで進めたが藩の忌むところとなつて投獄の厄に逢ひ、折角の事業も頓挫を來たしたことがある。其後約八十年を経て天保十一、二年頃、筑前の入松本平内氏(松本健次郎氏養母

四六三

の祖父)は石炭、鶏卵、生蠟の三物産に對する仕組法なるものを案出して藩に献策した結果、藩も之を容れて石炭採掘の權を郡奉行に委ね、その取締所を遠賀郡芦屋に置き、若松港に焚石會所の出張所を設け、毎年各郡の採炭高を豫定して鑛業者に採掘を請負はしめ、上納させた石炭は會所指定の間屋に拂下げ、この拂下代金の中から税金、前貸金等を控除した殘額を鑛業者に下附する仕組とし、明治維新の廢藩置縣の際までこの制度を踏襲して來た。福岡藩にこの仕組法の行はれた頃には、小倉藩の豊前田川郡にも同一の制度が行はれ、赤池川岸に赤池會所なるものがあつて採炭事業を總括し、藩の拂下を受けた間屋は赤池川から遠賀川を下つて焚石の一部を若松に送り、福岡藩の焚石會所に販賣を委託して居つた。即ち藩政時代の筑豊石炭鑛業は全く藩廳財源の一種又は公用として、その嚴然たる統制下に置かれてゐたもので、従つて當時の採炭、販賣の事業はともに家附の株となり、その權利は賣買、抵當の目的物として取扱はれてゐた。筑豊炭唯一の運搬機關として「川體」華やかなりし時、舟子等が塊炭を御用と呼んでゐたのは、藩政時代御用炭の名残りである。

## 2、明治時代の黎明期

明治二年の太政官布告第七十七號は「鑛山開掘の儀は、その地居住の者共その故障無之候はゞその支配の府藩縣へ願の上掘出不苦候、府藩縣に於ても舊習に不泥、速に差免し可申事云々」の示達の下に始めて鑛山開放の大原則が宣明され、ついで同五年の廢藩と共に太政官布告第百號「鑛山心得」同六年日本最初の成文鑛法たる「日本坑法」が發布され、茲に初めて全國劃一

的に鑛物所有權及び採取權の分限が明かにされた、この鑛山開放の大方針は長年月の間藩廳の特許制度たる仕組法の下に置かれてゐた石炭業に一大革命を齎らした。すなはち同九月實施と、もに政府は直接手を下して三池高島の兩炭山を官有に移し、同年十二月、高島炭坑は後藤象二郎伯が經營を引受けた、「日本坑法」によつて束縛一度に切れて、奔馬の勢を呈した石炭業は極端な干渉から極端の自由となり、濫掘、濫賣に伴うて小規模な炭坑が各地に續出、斯業の盛衰は勿論、興廢存續すら且夕を計るべからざるものがあり所謂山師横行の弊に堪へざるの結果、有力鑛業者中には明治六年中既に石炭一括販賣の企畫があつて、同七年には鑛稅取纏めの名義の下に、縣に乞うて採掘、販賣の監督を受くるに至り、一時稍々斯業統制の曙光を認めたのであるが、八年には監督制度も有名無實に終り、當時の採炭總高の如き、明治八年中には僅か一億五千萬斤(約九萬噸)に過ぎなかつた、かくの如き小坑徒らに分立し、採掘、販賣方法及炭坑經營の放縱不統一は、炭田將來の健全な發達を阻害する實情が明になつたので、時の福岡縣知事岸原俊介氏、同勸業課屬官石野寛平氏は第一に官憲の取締監督、第二に業者相互間に組合を組織せしめ、共同利益のために協力一致、自由統一の實をあげしむるの必要を感じ、中央政府にも奔走の結果、明治十八年十一月二十一日、若松村宇新地、六百二十三に筑豊五郡坑業組合取締所を設け、初代組合長に福岡縣屬官石野寛平氏を選任した、これが筑豊石炭鑛業令の前身である。明治八年から筑豊石炭鑛業令設立までが、筑豊炭業が自由競争の波に乗じて近代鑛業としての第一過程を踏出した時代で、片山逸太(田川郡糸田坑)、貝島太助(鞍手郡直方、宮田坑)、帆足義方(馬場山、香月、直方新入、溝堀、佐與、潤野)、

## 3、明治時代の發展期

の特別輸出港編入など、年に追つて次第に新色を加へ、中にも九州鐵道、筑豊鐵道、筑豊興業鐵道の一部開通は從來堀川運河の線にのみ依つて居つた筑豊炭の輸送上に、一大革新の機運となつたもので、明治二十四年には總採炭高九十二萬噸に上り、明治八年に比し約十倍の増加を見るに至つた。

杉山徳三郎(目尾坑)、安川敬一郎、松本潜(高雄坑)、山本貴三郎(豊國坑)、麻生太吉(鯉田坑)、藤田傳三郎(直方附近)、許斐鷹介(本洞坑)、斯波義兼(新入坑)、伊藤綱索(第二新坑)、柏木勘八郎(金田坑)、玄洋社の箱田六輔、頭山滿(嘉穂郡諸坑)、平岡浩太郎(赤池坑)の諸氏等當時の新人物が相次いで原始的狀態を出でなかつた斯業に第一指を染め、幾多の艱難と奮闘して波瀾起伏の間に歩一步を進めつゝあつた時代である、この間に

日清戰爭當時及びその後の筑豊炭業は、石炭の需要一時に増加して斯業始つて以來の好況を呈し、殊に戦後の二十九、三十、三十二年頃にかけては炭況の隆盛比なく、筑豊二州の炭業者は多くこの時期に大成したものである。その反動が三十三、四年頃より次第に現はれ、三十六年の不況時代となつて再び三十七八年の戦役に當面して炭價騰貴し、豊前上等炭の門司相場一萬斤六十圓になつた。四十一年の後期以降、漸く市場の不振を來たし、筑豊各炭坑とも事業整理の時期として、採炭費節約、採炭緊縮の方針を取つた結果、前年に比し次第に送炭を減じて來た。この時代に於いて發達史上特筆すべ

おいて明治十年の戦役に際しては、筑豊炭坑の鑛夫人夫が競うて軍夫を志願したため、各炭坑は一時殆ど休止の姿となり、たゞ、鑛夫人夫を得れば安

りに高賃を強要されて事業の收支償はず、戦後二ヶ年の長きに亘り、出炭著しく減少、事業が挫折を來たしたが、十三、四年後は戦後の經濟界稍や好轉し、京阪神地方に新事業振興して石炭の需要増加し漸次好況を呈して來た、此時期における筑豊炭の運搬は遠賀川、堀川、江川の水運に依るの外なく、石炭需要の大市場たる阪神地方に對しては小形の帆船に託したため、西北の風浪一度起れば芦屋、若松港頭幾百の運炭船は空しくその活動を停止され、

の形を以て見ても、自ずからその利益を享受するに至るが、八年には監督制度も有名無實に終り、當時の採炭總高の如き、明治八年中には僅か一億五千萬斤（約九萬噸）に過ぎなかつた。かくの如き小坑徒らに分立し、採掘、販賣方法及炭坑經營の放縱不統一は、炭田將來の健全な發達を阻害する實情が明になつたので、時の福岡縣知事岸原俊介氏、同勸業課屬官石野寬平氏は第一に官憲の取締監督、第二に業者相互間に組合を組織せしめ、共同利益のために協力一致、自由統一の實をあげしむるの必要を感じ、中央政府にも奔走の結果、明治十八年十一月二十一日、若松村字新地、六百二十三に筑豊五郡坑業組合取締所を設け、初代組合長に福岡縣屬官石野寬平氏を選任した。これが筑豊石炭鑛業令の前身である。明治八年から筑豊石炭鑛業令設立までが、筑豊炭業が自由競争の波に乗じて近代鑛業としての第一過程を踏出した時代で、片山逸太（田川郡糸田坑）、貝島太助（鞍手郡直方、宮田坑）、帆足義方（馬場山、香月、直方新入、溝堀、佐與、潤野）、

## 2、明治時代の黎明期

明治二年の太政官布告第七十七號は「鑛山開掘の儀は、その地居住の者共その故障無之候はゞその支配の府藩縣へ願の上掘出不苦候、府藩縣に於ても舊習に不泥、速に差免し可申事云々」の示達の下に始めて鑛山開放の大原則が宣明され、ついで同五年の廢藩と共に太政官布告第百號「鑛山心得」同六年日本最初の成文鑛法たる「日本坑法」が發布され、茲に初めて全國劃一

の特別輸出港編入など、年に追うて次第に新色を加へ、中にも九州鐵道、筑豊鐵道、筑豊興業鐵道の一部開通は従來堀川運河の一線にのみ依つて居つた筑豊炭の輸送上に、一大革新の機運となつたもので、明治二十四年には總採炭高九十二萬噸に上り、明治八年に比し約十倍の増加を見るに至つた。

## 3、明治時代の發展期

日清戰爭當時及びその後の筑豊炭業は、石炭の需要一時に増加して斯業始つて以來の好況を呈し、殊に戦後の二十九、三十、三十二年頃にかけては炭況の隆盛比なく、筑豊二州の炭業者は多くこの時期に大成したものである。その反動が三十三、四年頃より次第に現はれ、三十六年の不況時代となつて再び三十七八年の戦役に當面して炭價騰貴し、豊前上等炭の門司相場一萬斤六十圓になつた。四十一年の後期以降、漸く市場の不振を來たし、筑豊各炭坑とも事業整理の時期として、採炭費節約、採炭緊縮の方針を取つた結果、

杉山徳三郎（目尾坑）、安川敬一郎、松本潜（高雄坑）、山本貴三郎（豊國坑）、麻生太吉（鯉田坑）、藤田傳三郎（直方附近）、許斐鷹介（本洞坑）、斯波義兼（新入坑）、伊藤綱索（第二新坑）、柏木勘八郎（金田坑）、玄洋社の箱田六輔、頭山滿（嘉穂郡諸坑）、平岡浩太郎（赤池坑）の諸氏等當時の新人物が相次いで原始的狀態を出でなかつた斯業に第一指を染め、幾多の艱難と奮闘して波瀾起伏の間に歩一步を進めつゝあつた時代である、この間に於いて明治十年の戦役に際しては、筑豊炭坑の鑛夫人夫が競うて軍夫を志願したため、各炭坑は一時殆ど休止の姿となり、たま／＼鑛夫人夫を得れば妄りに高賃を強要されて事業の收支償はず、戦後二ヶ年の長きに亘り、出炭著しく減少、事業が挫折を來たしたが、十三、四年後は戦後の經濟界稍や好轉し、京阪神地方に新事業振興して石炭の需要増加し漸次好況を呈して來た、此時期における筑豊炭の運搬は遠賀川、堀川、江川の水運に依るの外なく、石炭需要の大市場たる阪神地方に對しては小形の帆船に託したため、西北の風浪一度起れば芦屋、若松港頭幾百の運炭船は空しくその活動を停止され、一塊の送炭すらも出來ず、明治十三年冬の如き、四十七日間連續の強風は阪神の在炭をして地を拂はしめ、一萬斤（約六噸）百二十圓の高値を唱へ、しかも航路一度開けては相場、最低十二圓の底値を見たことさへもある、石炭鑛業會設立の年、田川郡に海軍豫備炭田が指定、二十一年三池炭坑の拂下と年を同じうして、鞍手郡御徳方面及び嘉穂郡熊田村が愈々その選に入り、日本郵船（勝野坑、新入坑）、三井（田川坑）、三菱（鯉田坑）、住友（忠隈坑）等の大資本家が、次第に有力な組織と規模の下に筑豊の斯業に指を染める一方、若松、門司港、筑豊興業鐵道、九州鐵道、豊州鐵道會社の創立、門司港

前年に比し次第に送炭を減じて來た。この時代に於いて發達史上特筆すべき事は、一、門司、若松港の輸送機關の整備、二、全國の鐵道の敷設、紡績その他機械工業の勃興、海運事業の進歩の爲めの石炭需要の増加、三、筑豊炭田に近代的大規模企業が續々として組織された、即ち三十年に遠賀八幡村に製鐵所設置され、一寒村變りて煙突林立の工業街となり、附屬炭坑として高雄、潤野の兩坑が新設備の下に採掘され、三十九年には若松港頭、戸畑沿岸に百五十萬圓の石炭積込機設備され、また製鐵所二瀬炭坑の起工、海軍煉炭製造所の新設に續いて、三菱が鯉田のほかに新入、上山田兩炭坑を買収し、郵船會社の勝野坑が古河家に屬し、さらに鹽頭、目尾、下山田と擴張し、三









# 第七章 工業

## 第一節 重要工業部門

福岡縣における昭和九年における工業生産額は、五億九千三百二十一萬二千二百二十二圓にして、總生産額八億五千七百二十二萬二千七百三十圓の六割五分二厘に達してゐる、これは本縣が門司、若松、三池等の良貿易を有し、朝鮮、滿洲、支那及び南洋、濠洲に對して輸出、又は原料輸入に地の利を占め加ふるに原動力たる石炭については筑豊、三池、粕屋等の有力炭田を有し、阪神地方、京濱地方、名古屋地方ともわが國の四大綜合工業地區の一を形成し、躍進工業の姿は目撃しいものがある。しかして本縣における工業はその生産形態によつて二つに大別することが出来る。即ち固有工業によりて生産さるゝ所謂特産品と、特に近代工場工業によつて生産さるゝ工業品とである。由來、福岡縣は藩政時代から各種の家内工業固有工業を奨励して來たため縣下到處に著名な特産物、お國自慢がある。しかし藩政の保護がなくなり、資本主義經濟組織の發達と共に大企業的工業生産品が大量的に進出して來たため、家内工業的な手工工業製品は衰退し、或は消失し、近代工業に代位さるゝに至つた。殊に日清、日露役は自由競争を基調した資本主義的經濟に非常な勢で突入し、さらに歐洲大戰はこれが躍進に急拍車をかけた。かかる状態において原料輸入の良港と海外消費市場を近くにもち、更に豊富な

石炭を擁する福岡縣は力強い工業躍進の行進を開始した。西日本の重工業地帯として、日本經濟核心の一として健實な歩調を辿つてゐる様は驚異的存在である。福岡縣こそ、滿洲事變後の軍需インフレの波に乗つて飛躍をつづける重工業新興日本の象徴である。

## 第二節 重要工業地區

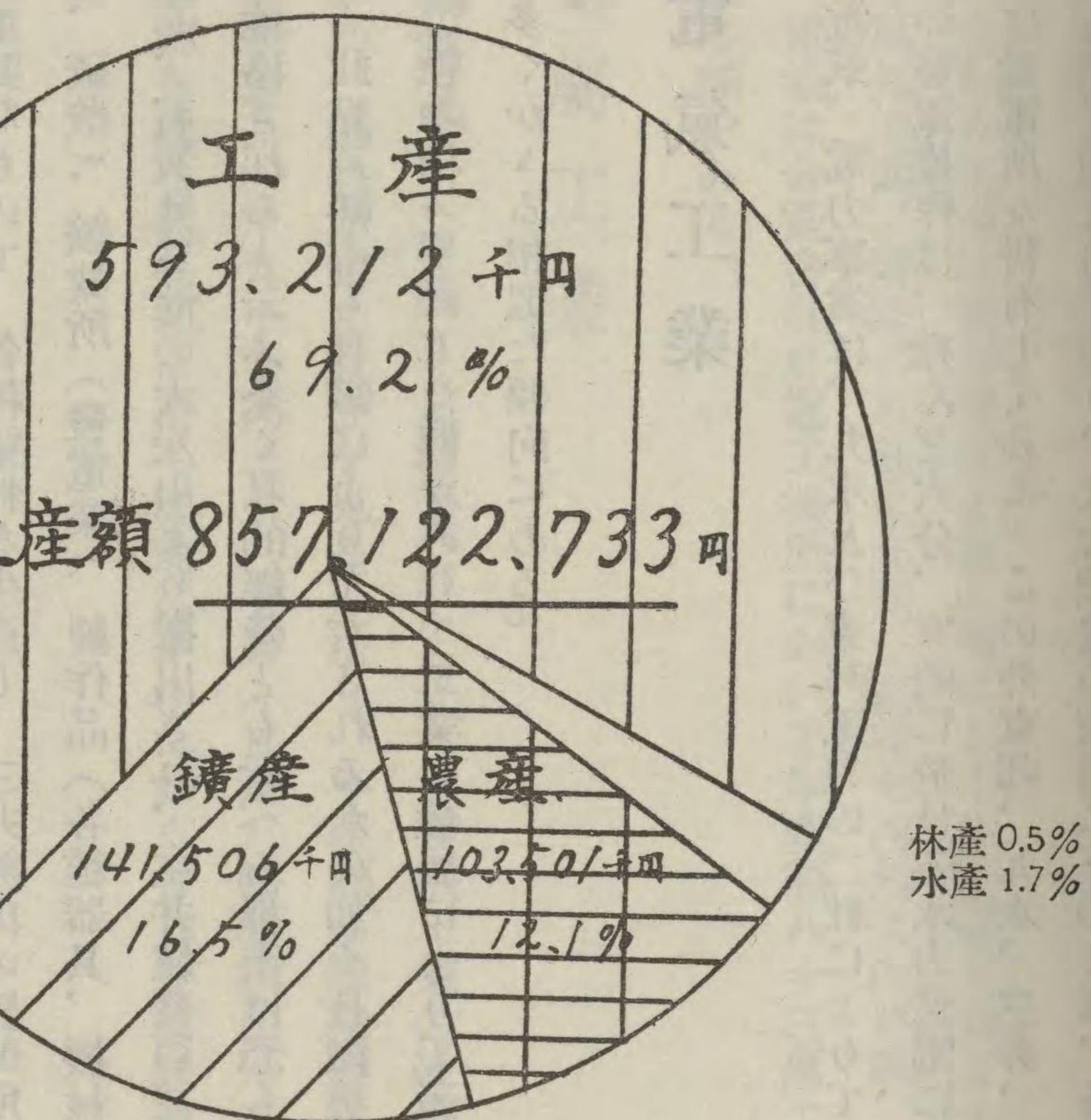
**北九州工業地區**——門司、八幡、小倉、戸畑、若松の五市と折尾町これに下關市まで包含する一帯は大工場の煙突林立して黒煙は空を覆ひ、海には船舶輻輳して眞に工業日本の動脈が力強く躍つてゐる。航路も鐵道も道路も、あらゆる綜合交通動脈が、こゝに向つて集中してゐる。背後からは石炭の供給と勞力を吸収し、前面に當つては原料を集注し製品を放散し、もの凄いい活動をつづけてゐる。福岡縣の工業額の半はこの地區の生産であると云つて過言でない。日本製鐵所はじめ大工場の擴張ぶりこそ、將來の躍進をさらに暗示してゐる。

**福岡地區**——傳統の美を誇る博多織、博多絞、箱崎縞、博多人形、高取焼等の固有工業が分布してゐるのに、近時日本足袋福岡工場、おたふく綿工場、鐘紡住吉工場、大日本ビール、渡邊鐵工所等々の近代工業が續々進出し都市計畫の進捗と敷地の安價、加ふるに博多港修築完成の暁には船舶の便がよくなり、益々工業區として發展するだらう。

**久留米地區**——この地區は筑後地方の中心地區をなす。由來、筑後地方

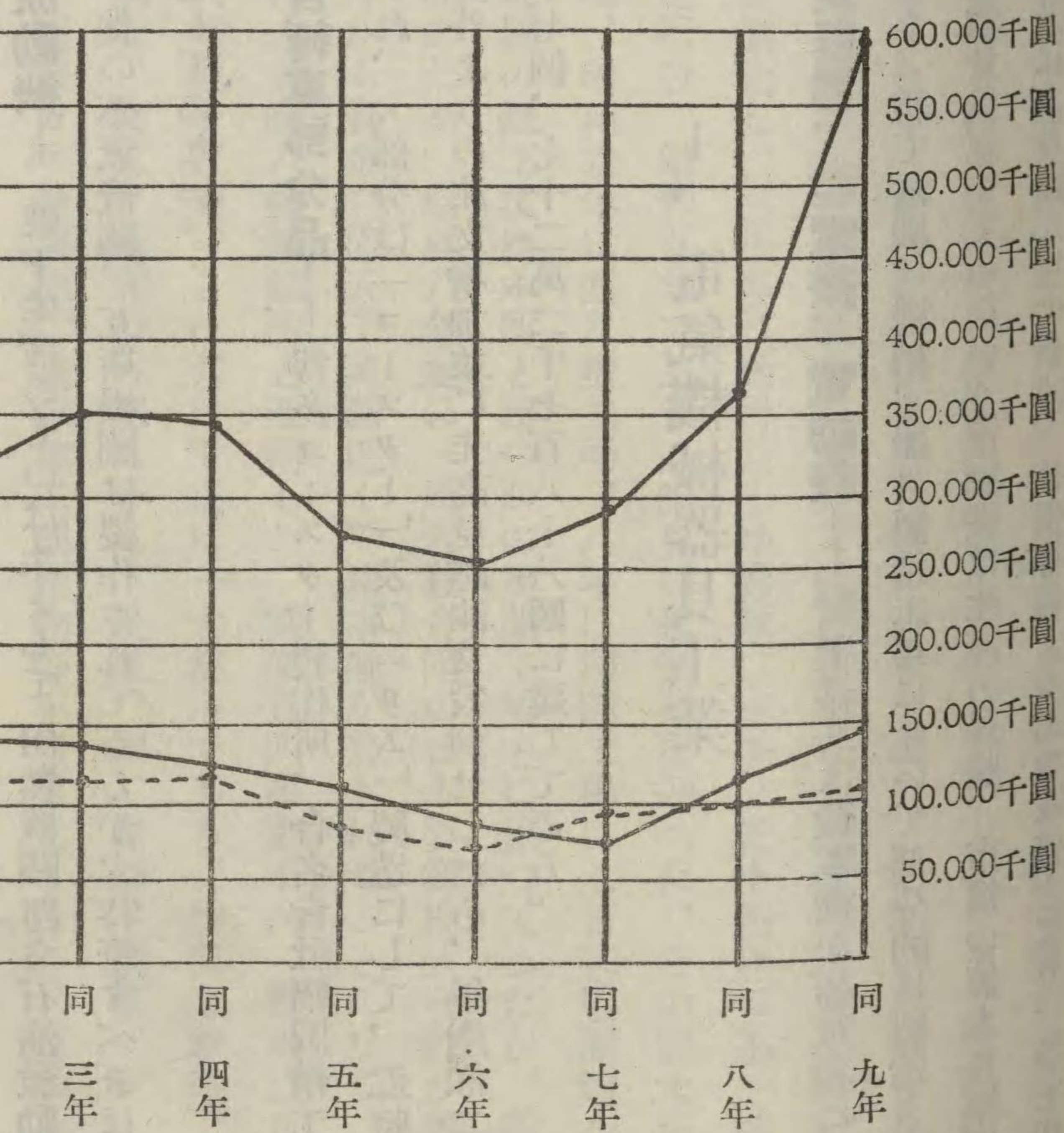
福岡縣總生産物と鑛工生産

(昭和9年)



同上移動狀況

(大正14年—昭和9年)



中に製織を含み農産額中に蠶産及び畜産を含むものとす



分二層に對しては、鮮、滿洲、支那及び南洋、濠洲に對して輸出、又は原料輸入に地の利を占め加ふるに原動力たる石炭については筑豊、三池、粕屋等の有力炭田を有し、阪神地方、京濱地方、名古屋地方ともわが國の四大綜合工業地區の一を形成し、躍進工業の姿は目撃しいものがある。しかして本縣における工業はその生産形態によつて二つに大別することが出来る。即ち固有工業によりて生産さるゝ所謂特産品と、特に近代的工場工業によつて生産さるゝ工業品とである。由來、福岡縣は藩政時代から各種の家内工業固有工業を奨励して來たため縣下到處に著名な特産物、お國自慢がある。しかし藩政の保護がなくなり、資本主義經濟組織の發達と共に大企業の工業生産品が大量的に進出して來たため、家内工業的な手工工業製品は衰退し、或は消失し、近代工業に代位さるゝに至つた。殊に日清、日露役は自由競争を基調した資本主義的經濟に非常な勢で突入し、さらに歐洲大戰はこれが躍進に急拍車をかけた。かかる狀勢下において原料輸入の良港と海外消費市場を近くにもち、更に豊富な

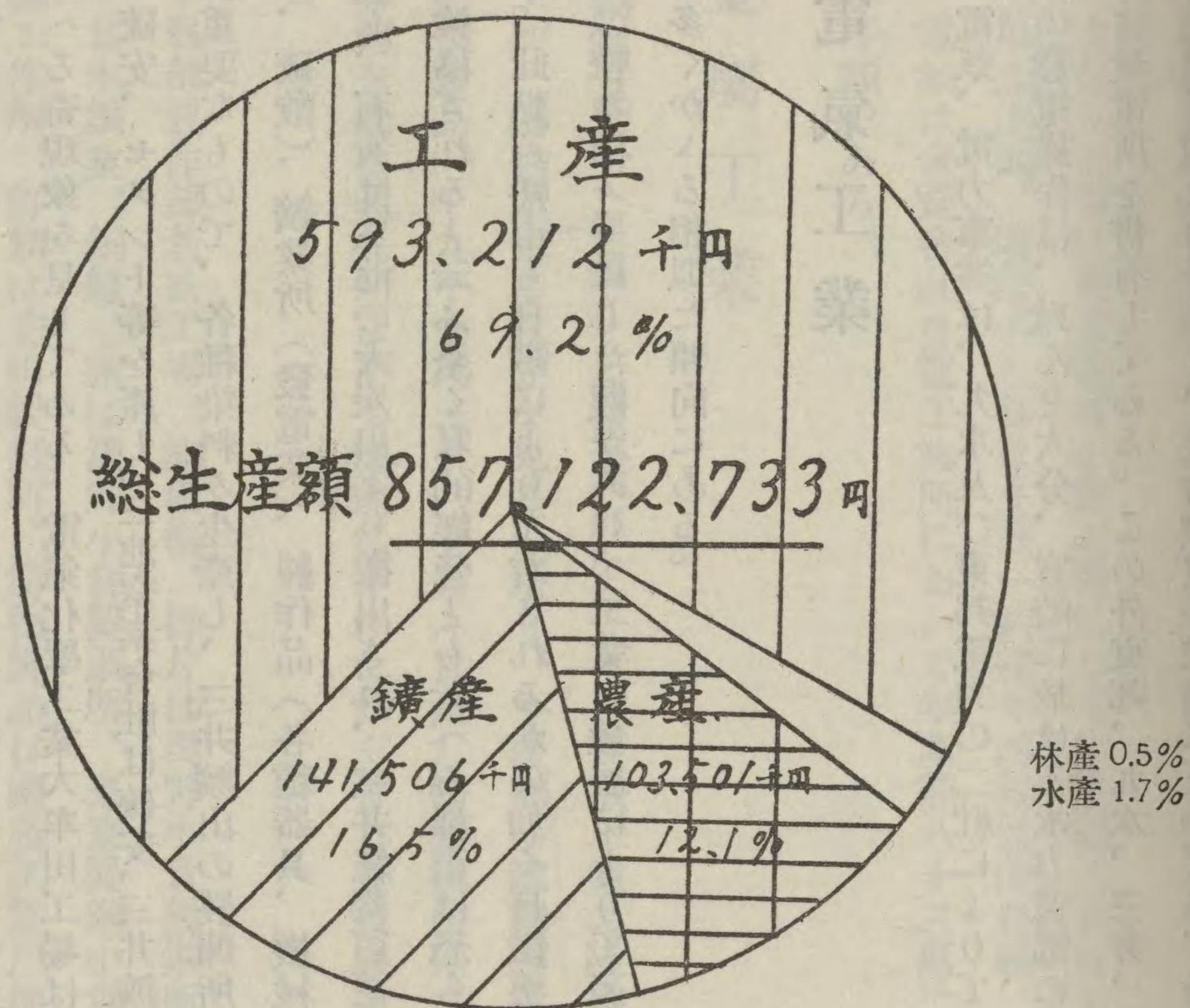
は船舶輻輳して眞に工業日本の動脈が力強く躍つてゐる。航路も鐵道も道路も、あらゆる綜合交通動脈が、こゝに向つて集中してゐる。背後からは石炭の供給と勞力を吸収し、前面に當つては原料を集注し製品を放散し、もの凄いい活動をつゞけてゐる。福岡縣の工業額の半はこの地區の生産であると云つて過言でない。日本製鐵所はじめ大工場の擴張ぶりこそ、將來の躍進をさらに暗示してゐる。

**福岡地區**——傳統の美を誇る博多織、博多絞、箱崎縞、博多人形、高取焼等の固有工業が分布してゐたのに、近時日本足袋福岡工場、おたふく綿工場、鐘紡住吉工場、大日本ビール、渡邊鐵工所等々の近代工業が續々進出し都市計畫の進捗と敷地の安價、加ふるに博多港修築完成の曉には船舶の便がよくなり、益々工業區として發展するだらう。

**久留米地區**——この地區は筑後地方の中心地區をなす。由來、筑後地方

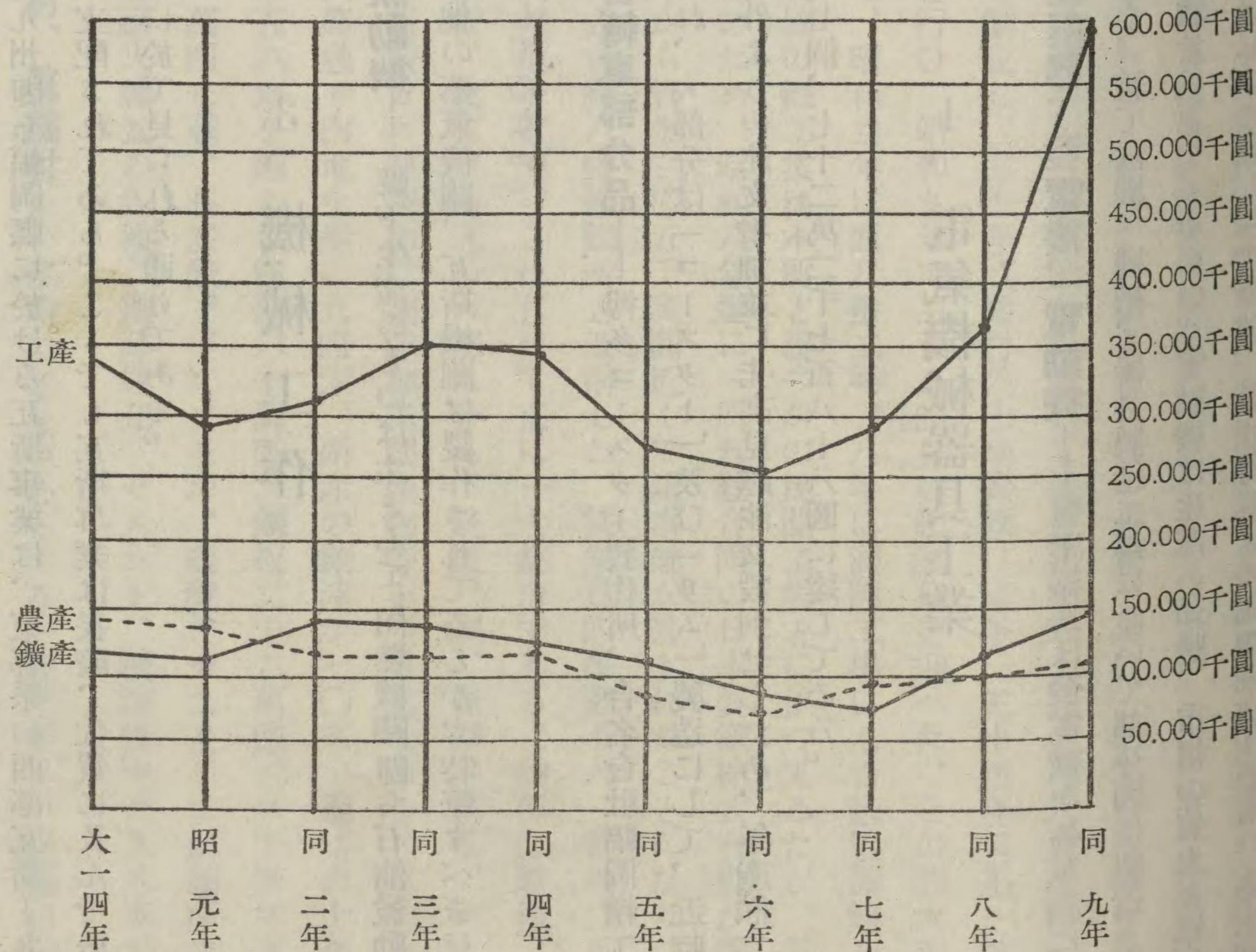
福岡縣總生産物と鑛工生産

(昭和9年)



同上移動狀況

(大正14年—昭和9年)



(註) 工業額中に製織を含み農産額中に蠶産及び畜産を含むものとす

は健實な家内工業をもつて名をとつて來た。櫛による木臘、緋、和紙、花菱等々みな筑後一圓の特産物として現金収入の助けとなり莫大な生産額を擧げ

て來たものが、新しい資本主義經濟下においては家内工業は衰退し、様式が近代工業化をとるに至つた。かくて城下町地方商業中心町たる久留米市が筑

後地方における工業地帯の代表となつた。つちや足袋會社、日本足袋會社久留米工場、ブリヂストンタイヤ會社、日本製粉久留米工場、鐘紡工場もあり殊に足袋やゴム工業が特色づけられる。

**大牟田地區**——この大牟田地區こそ純粹な意味での工業地帯であり、純然たる近代化學工業都市であり、一面都市そのものが三井の手に一切が經營されてゐるとも云へる奇現象を呈してゐる。電氣化學工業大牟田工場は炭化石灰、石灰窒素、硫酸、セメント等を産し、三池窒素會社は硫酸、三井鑛山三池染料所は國防上重要なもので、各種染料を生産し、三井鑛山の製煉所（亞鉛板、亞鉛、煉瓦、硫酸）、鑛業所（發電業）、製作品（各種器具、機械、造船車輛等）を生産し、石炭は三池の大炭田より搬出され、三井經營の三池港によりて、他國へ輸移されると云ふ全く私的經營とも云へる都市は恐らく大牟田のみであらう。此點八幡市も日鐵により左右されるかの如く日鐵勢力の巨大なること、その軌を稍々一にした觀があり、工業の發展によりて發達した北九州各都市は多くかゝる相似た傾向にある。

### 1、電氣工業

福岡縣に於ける電氣、電力事業は、九水及び東邦電力の二社によりて支配されてゐる。二社の發電操作は、殆んど大分、宮崎に於ける水力發電によるもので、九州水力は發電所を併有してゐる。この外東邦、九水、三井、熊電四社の出資による九州共同火力があり、火力發電の設備に至つては、各大工場はそれぞれ自家用の施設がある。

力に近い技能を發揮して操業したる結果年額一萬五千九百十三臺、三百七十二萬七千七百二十一圓に及んでゐる。

**電球、電池**——主なる工場は東京電氣小倉工場にして年産額八百五十六萬八千個、百九十三萬九千個、販路の六割は九州一圓残り四割は山口縣、臺灣、朝鮮等である。電池は合資會社日電工業所において年産額八十三萬二千個七萬六千三百圓の産額である。

### 5、金屬工業

**鐵鋼製品、鑄物製品**——豐饒なる筑豊炭田を有し、製鐵工業の隆盛と相俟つて各地に鐵工所、鑄物工場の設立を見るに至り、年産額は鐵鋼製品三千百六十九萬圓、鑄物製品一千九十七萬三千八百八十圓（日鐵八幡製鐵所は之に含まず）、特に洞海湾を繞る北九州に於ては前にふれた如く著しき發展を遂げてゐる。

### 2、瓦斯工業

北九州即ち福岡縣に於ける瓦斯事業は、東邦系の西部瓦斯と九州瓦斯によりて支配されてゐる。こゝでも瓦斯事業は長崎、佐賀に及んで居り、讀者が卷末に於て見られる通りである。

### 3、機械工作

**原動機**——縣下生産のものは主として内燃機關即ち石油發動機にして、その他の蒸氣機關、瓦斯機關は製作されてゐるが、特筆すべきほどの數量には達してゐない。

**自轉車部分品**——博多コースター製作所、合名會社福岡精工所で主に製作され、大部分は「コースター」及び「リム」製造にして、近時爲替安により海外よりの注文増加並に先高見越注文殺到せしため、年産額二十萬八千八百九十七個、七十二萬二千七百八十八圓に達してゐる。

### 4、電氣機械器具工業

**變壓器、發電機、電動機**——變壓器又は發電機を各單獨に製造するものなく、總て電機、機械、器具製造工場において部分的に製造され、特筆すべき數量に至つてゐない。電動機は生産の昂騰、市價の値上り軍需インフレの波及による諸工場の新設、擴張等による需要旺盛となり、各工場とも全能

る、正に本邦製鐵の王者である。淺原健三氏の名著「熔鑛爐の火は消えたり」で人に知られる製鐵所に鐵都八幡市が完全に依存してゐる。製鐵所あつての八幡市である、政府が製鐵事業官營の必要を認め、創立費を議會に要求したのは明治廿四年、第九議會において四百九萬五千圓の創立費を得、二十九年官制を制定し、三十年八幡市の土地買収に着手、三十四年に第一熔鑛爐の點火式を行ひ、昭和九年で三十五回目の起業祭を迎へた、その間大正十年に戸畑工場、昭和三年に西八幡工場、八年に洞岡工場に七百餘熔鑛爐を開始したが、我國の鐵工業は本所と幾つかの民間工場とに依つてゐるが、斯界の統制合理化のため、昭和八年遂に一所五社合同の日本製鐵株式會社が設立され、同九年から資金三億五千萬圓近くで諸事業が營まれることになり、爾來日本製鐵株式會社八幡製鐵所と改稱した、従業員四萬數千人、敷地二百十數萬坪工場内鐵道十五哩、これだけで正に一大都市である、内部は銑鐵、製鋼、條鋼、鋼板、化工、研究の六部に分れ、銑鐵、鋼、條鋼、鋼板、レール、コークス、石炭ガス副産物、鑄滓加工副産物等を産出してゐる。昭和七年銑鐵は

船車輛等)を生産し、石炭は三池の大炭田より搬出され、三井經營の三池港によりて、他國へ輸移されると云ふ全く私的經營とも云へる都市は恐らく大牟田のみであらう。此點八幡市も日鐵により左右されるかの如く日鐵勢力の巨大なること、その軌を稍々一にした觀があり、工業の發展によりて發達した北九州各都市は多くかゝる相似た傾向にある。

## 1、電氣工業

福岡縣に於ける電氣、電力事業は、九水及び東邦電力の二社によりて支配されてゐる。二社の發電操作は、殆んど大分、宮崎に於ける水力發電によるもので、九州水力は發電所を併有してゐる。この外東邦、九水、三井、熊電四社の出資による九州共同火力があり、火力發電の設備に至つては、各大工場はそれぞれ自家用の施設がある。

## 4、電氣機械器具工業

自轉車部分品——博多コースター製作所、合名會社福岡精工所で主に製作され、大部分は「コースター」及び「リム」製造にして、近時爲替安により海外よりの注文増加並に先高見越注文殺到せしため、年産額二十萬八千八百九十七個、七十二萬二千七百八十八圓に達してゐる。

變壓器、發電機、電動機——變壓器又は發電機を各單獨に製造するものなく、總て電機、機械、器具製造工場において部分的に製造され、特筆すべき數量に至つてゐない。電動機は生産の昂騰、市價の値上り軍需インフレの波及による諸工場の新設、擴張等による需要旺盛となり、各工場とも全能

力に近い技能を發揮して操業したる結果年額一萬五千九百十三臺、三百七十二萬七千七百二十一圓に及んでゐる。

## 電球、電池

主なる工場は東京電氣小倉工場にして年産額八百五十六萬八千個、百九十三萬九千圓、販路の六割は九州一圓残り四割は山口縣、臺灣、朝鮮等である。電池は合資會社日電工業所において年産額八十三萬二千個七萬六千三百圓の産額である。

## 5、金屬工業

鐵鋼製品、鑄物製品——豐饒なる筑豊炭田を有し、製鐵工業の隆盛と相俟つて各地に鐵工所、鑄物工場の設立を見るに至り、年産額は鐵鋼製品三千百六十九萬圓、鑄物製品一千九十七萬三千八百圓(日鐵八幡製鐵所は之に含まず)、特に洞海灣を繞る北九州に於ては前にふれた如く著しき發展を遂げてゐる。

## 鐵塔、柱骨

服部製作部若松工場、鋼板條、棒片は淺野小倉製鋼所、東海鋼業若松工場、日本鋼業、銅線、索は淺野小倉製鋼所、東京製鋼小倉工場、製罐類は、幸袋工作所、釘類は安田製釘所、鑄物製品は國産工業戸畑製作所、同若松製作所、幸袋工作所、深見鑄造所、昭和鐵工會社その他の機械工場である、近時軍需注文、爲替安に依る輸入杜絶、炭界の好況に恵まれ各工場とも受注手持高多く職工を増加し八割乃至全能力を以て操業してゐる、日本製鐵株式會社八幡製鐵所の昭和九年統計によれば、製鐵所だけで一億六千七百七十一萬千六百三十三圓の生産額で、縣下工産額の二割五分を示してゐる。

る、正に本邦製鐵の王者である、淺原健三氏の名著「熔鑄爐の火は消えたり」で人に知られる製鐵所に鐵都八幡市が完全に依存してゐる。製鐵所あつての八幡市である、政府が製鐵事業官營の必要を認め、創立費を議會に要求したのは明治廿四年、第九議會において四百九萬五千圓の創立費を得、二十九年官制を制定し、三十年八幡市の土地買収に着手、三十四年に第一熔鑄爐の點火式を行ひ、昭和九年で三十五回目の起業祭を迎へた、その間大正十年に戸畑工場、昭和三年に西八幡工場、八年に洞岡工場に七百餘熔鑄爐を開始したが、我國の鐵工業は本所と幾つかの民間工場とに依つてゐるが、斯界の統制合理化のため、昭和八年遂に一所五社合同の日本製鐵株式會社が設立され、同九年から資金三億五千萬圓近くで諸事業が營まれることになり、爾來日本製鐵株式會社八幡製鐵所と改稱した、従業員四萬數千人、敷地二百十數萬坪工場内鐵道十五哩、これだけで正に一大都市である、内部は鉄鐵、製鋼、條鋼、銅板、化工、研究の六部に分れ、鉄鐵、銅、條鋼、銅板、レール、コークス、石炭ガス副産物、鑄滓加工副産物等を産出してゐる。昭和七年鉄鐵は七十八萬噸で内地生産の九四%、副産の鑄滓が七〇%、銅は百十萬噸で本邦生産の五六%を越え、條鋼六十萬噸、鋼板二十六萬噸、コークス九十一萬噸、硫酸一萬四千噸、石炭酸、ベンゾール、硫酸、ナフタリンが副産する。その他にも耐火煉瓦の各種、鑄滓煉瓦、セメント、鑄滓綿やガラス等がある。

銅材、眞鍮材——軍需工業を中心とする一般産業界の好轉の結果、需要増加し、銅材二百六十五萬二千九百六圓、眞鍮材三百六十九萬五百六十圓である。

### 6、セメント工業

**セメント**——近代工業中軍事的にも特に重要性をもつて来たセメント工業の將來は注目すべきものがある。福岡縣は石灰石の産額に於て全國一であり、動力を多大に要するセメント工業の發達の上に大きな動力資源の供給地として役立つてゐる。即ち昭和八年の一箇年間の産額は二億八千三百三十一貫、價格二百十九萬圓にして福岡縣産物の中で石炭に次ぐ生産高を有し實に全國第一の産額である。而して之が主産は豊前地方、田川、企救、京都等石灰石の原料の豊富な地で、同地方にセメント資本の進出は新增設されるセメント工場によつて顯示されてゐる。

昭和五年以降の石灰石の産額次の如し。

年次	數量	價格
昭和五年	四四三、〇九一 <small>千貫</small>	一、六八二、八一〇
昭和六年	四九二、六九八	一、八八〇、五四四
昭和七年	二六二、一〇九	一、二八二、五八一
昭和八年	二八一、二一一	二、二九四、三八九

而してセメント工業の諸會社は、淺野セメント八幡工場、豊國セメント門司工場、産業セメント、電氣化學工業大牟田工場等で年産額は八十五萬四千四百七十七噸、一千七百九千五百三十四圓に達してゐる。

### 7、硝子工業

**硝子**——旭硝子牧山工場、日本板硝子二島工場にして年産額一千五百二十

社小倉工場にして、年産額二千九百八萬八千九百九十九圓にして近時滿洲國の成立に伴ひ同方面への需要増大しつゝある。

### 11、精製糖工業

**製糖**——工産品鐵を除き最高の生産額を有し、年産額二千七百七十八萬三千百二十一圓、主たる工場は大日本製糖株式會社大里工場、臺灣製糖株式會社九州製糖所、明治製糖株式會社戸畑工場にして本邦有数の主産地である。

### 12、麥酒工業

**麥酒**——大日本麥酒博多工場、櫻麥酒の二工場で、軍需工業活氣に基く一般經濟界好調の結果麥酒の需要増加し、年産額一千九百九十一萬七千三百三十圓に及んでゐる。

十六萬三千七百八十二圓、硝子器具及埴類は徳永硝子工業、中央硝子にして年産額百七萬四千六百五十圓に達してゐる。

### 8、硫酸工業

**硫酸**——三井、三池染料工業所、三井田川鑛業所、電氣化學工業大牟田工場、三池窒素工場の四工場が主として硫酸工業に當つてゐる。年産額五萬六千九百八十噸で價格にして五百一萬五千三百八十六圓である。

### 9、染料

**染料**——三井鑛山株式會社三池染料工業所、徳永化學研究所、帝國染料製造株式會社小倉工場等があり、需要は季節に依り變動するが、輸出向加工綿布の増産に伴ふ國內需要の増加並爲替安に依る輸出増加の爲、各工場とも生産設備を擴張し年産額一千二百七十六萬九千八百七十五圓、一千七十四萬六千八百四十四圓に達し、滿洲、支那、印度等に販路を擴大しつゝある。

### 10、製紙

**製紙**——本縣和紙の濫觴は三百年前、日蓮宗派の僧日源上人矢部川の水质製紙業に適するを見て此の業を傳授せしに初まり、領主立花宗茂の助長もあつて今日まで概して順境に進歩し、現在に於ては農家の副業として主に京花紙、傘紙、塵紙を製出し、年産額二百十二萬圓で八女、山門の特産であり手漉製品のため機械製品の追隨を許さぬものがある。洋紙は王子製紙株式會

### 14、苛性曹達及晒粉工業

**苛性曹達及晒粉工業**——苛性曹達は大阪曹達小倉工場に於て製造し、近時人絹及染色業方面よりの需要増加し、年産額八千三百九十七噸、五十六萬四千三百七十七圓、晒粉は大阪曹達小倉工場、三井三池染料工業所の二工場において年産額八千三百九十七噸、五十六萬四千三百七十七圓に上つてゐる。

### 15、紡織工業

**綿糸紡績**——鐘紡三池支店、同久留米支店、明治紡績合資會社、同行橋工場の四大工場にして、大日本紡績聯合會の決議に基き休鍾の結果、年産額四萬二千六百七十八圓、一千七十五萬六千四百五十七圓なり、年々生産額増加しつゝあるは、主として休鍾緩和及び太糸需要増加に伴ふ生産設備の擴張

ント工場によつて顯示されてゐる。

昭和五年以降の石灰石の産額次の如し。

年次	數量	價格
昭和五年	四四三、〇九一 <small>千貫</small>	一、六八二、八一〇
昭和六年	四九二、六九八	一、八八〇、五四四
昭和七年	二六二、一〇九	一、二八二、五八一
昭和八年	二八一、二一一	二、二九四、三八九

而してセメント工業の諸會社は、淺野セメント八幡工場、豊國セメント門司工場、産業セメント、電氣化學工業大牟田工場等で年産額は八十五萬四千四百七十七噸、一千百七萬九千五百三十四圓に達してゐる。

## 7、硝子工業

硝子——旭硝子牧山工場、日本板硝子二島工場にして年産額一千五百二

染料——三井鑛山株式會社三池染料工業所、徳永化學研究所、帝國染料

製造株式會社小倉工場等があり、需要は季節に依り變動するが、輸出向加工綿布の増産に伴ふ國內需要の増加並爲替安に依る輸出増加の爲、各工場とも生産設備を擴張し年産額一千二百七十六萬九千八百七十五噸、一千七十四萬六千八百四十四圓に達し、滿洲、支那、印度等に販路を擴大しつゝある。

## 10、製紙

製紙——本縣和紙の濫觴は三百年前、日蓮宗派の僧日源上人矢部川の水質製紙業に適するを見て此の業を傳授せしに初まり、領主立花宗茂の助長もあつて今日まで概して順境に進歩し、現在に於ては農家の副業として主に京花紙、傘紙、塵紙を製出し、年産額二百十二萬圓で八女、山門の特産であり手漉製品のため機械製品の追隨を許さぬものがある。洋紙は王子製紙株式會

社小倉工場にして、年産額二千九百八萬八千九百九十九噸にして近時滿洲國の成立に伴ひ同方面への需要増大しつゝある。

## 11、精製糖工業

製糖——工產品錢を除き最高の生産額を有し、年産額二千七百七十八萬三千二百二十一圓、主たる工場は大日本製糖株式會社大里工場、臺灣製糖株式會社九州製糖所、明治製糖株式會社戸畑工場にして本邦有数の主産地である。

## 12、麥酒工業

麥酒——大日本麥酒博多工場、櫻麥酒の二工場で、軍需工業活氣に基く一般經濟界好調の結果麥酒の需要増加し、年産額一千九百九十一萬七千三百三十圓に及んでゐる。

## 13、足袋工業

足袋——日本足袋久留米、福岡兩工場、つちやたび會社で年産額二千九百九十八萬二千圓に達し、製品は地下足袋、ゴム靴、ズック靴及その他の靴類にして、そのうち地下足袋は需要の大半を供給し、殆んど飽和點に達した觀あれど、將來は需要の自然増と販路の擴張に俟つべく靴は逐年運動熱の旺盛と、我が國民の生活形態の歐化に伴つて需要は愈々増大する一方であり、従つて製靴事業の前途は益々有望視されてゐる。

## 14、苛性曹達及晒粉工業

苛性曹達及晒粉工業——苛性曹達は大阪曹達小倉工場に於て製造し、近時人絹及染色業方面よりの需要増加し、年産額八千三百九十七噸、五十六萬四千三百七十七圓、晒粉は大阪曹達小倉工場、三井三池染料工業所の二工場において年産額八千三百九十七噸、五十六萬四千三百七十七圓に上つてゐる。

## 15、紡織工業

綿糸紡績——鐘紡三池支店、同久留米支店、明治紡績合資會社、同行橋工場の四大工場にして、大日本紡績聯合會の決議に基き休鍾の結果、年産額四萬二千六百七十八捆、一千七十五萬六千四百五十七圓なり、年々生産額増加しつゝあるは、主として休鍾緩和及び太糸需要増加に伴ふ生産設備の擴張に起因する。

廣巾綿布——鐘紡博多支店、明治紡績行橋工場、久留米織物工業組合によりて製造されてゐる。

## 第三節 特産物工業部門

こゝに述べるのは所謂お國自慢のお土産である。(後章特産物の卷参照)隨つて地方色を最もよく表現してゐるもので、中小工業者によつて或は副業的

に生産されるものであつて、工藝品たるものもあれば實用的なものもある。王朝時代から大陸關係の深い當地方は、特産品の上にもその歴史的文化が影響してゐる事は間違ひない。博多織は廣東織を傳へるものだと云ひ、高取焼は韓土傳來のもの云ふ、馬出の曲物は宮崎神社の用具に由來することである。現在の特産物は徳川時代の封建政治によつて決定された。各藩の幕府に献上したものは凡て之に依つたもので、藩政は種々の方策によつて保護助長した。業者の制限、免税、扶持施與、原料器具の授與はこれである。すなはち豊前地方の小倉縮、筑後地方の久留米絨、花菱、和紙等は多く藩政時代に發生し發展したもので、筑前地方の馬出曲物(千數百年前)、博多織(約七百年前)等の我國中世若くは近世初期に發祥してゐる。さらに最近労働都市八幡に發生したメリヤス工業の如きものもあり、これらを生産形體より見るときは未だ手工業、家内工業、副業的域を脱してゐないものもある。これ等の内、筑後地方の花菱、莫産の如く農村の副業に屬するものと、筑前地方の博多人形、高取焼、博多絞、筑後地方の大川指物、福島佛壇などの如く專業化せるものもあり。次に稍々近代的に機械化せるものに豊前地方の小倉縮、筑前地方の博多織、筑後地方の久留米絨、タオル等がある。こゝでは縣の特産物としてこれらの特産物工業の概況を簡單に述べることとする。(各部門の事業内容は、特産物工業の項において見られ度い。)

### 1、珓瑯鐵器

今日では珓瑯鐵器は、既に特産工業として取扱ふには、餘りに普遍化した感がある。然し福岡縣の珓瑯鐵器は、博多鐵器エナメルの製品でお國自慢の感がある。尺(浴衣地)を主とし、其の他風呂敷、ハンカチ等であるが、近來は正藍のみならず鳴海絞を加味したる色物絞、一方絞應用子供服地、パラソル、日傘地、コート地、座蒲團地、テーブル掛等を製出し、九州一圓、京阪、東京を始め、朝鮮、及滿洲國の一部にも最近は進出し、生産數量も累年増加しつつある。

### 5、甘木絞

甘木絞は朝倉郡甘木町を主産地とし、縣工業試験場の指導に依り鳴海絞を加味せるシバ及インダンスレン染、ナフトル及インデール染料の應用等研究改善の不斷の努力によつて近時品質精良となり、最近の生産高は一ヶ年四十萬三千餘圓で、製品の種類は絞、浴衣地、裏地、手拭等である。仕向地の主なるものは、九州、東京、阪神、四國、朝鮮等である。

最大なるもの一つであり、年産額六十二萬九千九百四十六圓、輸出先はアフリカ、印度、海峽植民地、シヤム、南洋諸島、滿鮮方面である。

### 2、陶磁器工業

福岡縣に於ける陶磁器工業は、縣下の工業中最古の歴史を有するものと云へるだらう。然し乍ら未だ經營及事業の規模に於ては近代的大企業化されてはゐない。只僅に小倉の東洋陶器會社が、近代工業組織を以つて、年産額二百三十三萬八千四百八十八圓の高記録と、滿洲、支那、英國、濠洲南米等に輸出販路をもつて福岡の陶磁器業のために氣を吐いてゐる。(小倉市の部参照)

### 3、博多織

博多織は中西、松居等の代表的織工場等があり、明治二十三年には僅々五萬四千三十點、十八萬九千餘圓に過ぎなかつたが、爾來幾多の變遷を経て昭和九年には二十九萬四千六百五十七點、三百十一萬餘圓の生産額に達し、又此の間に着尺博多涼、ネクタイ地等の新製品をも出し、廣く九州一圓、京阪東京等に販賣せられてゐる。近時歐米人によりて漸くその眞價が認められ徐海外輸出を見てゐることは嬉しい。

### 4、博多絞

博多絞は現在の生産總額は三十八萬九千餘圓に達し、製品の種類は元來着衰微したが、明治六年頃半縮と稱し絹綿交織絞の發明によつて復活し、現在は力織機を備へたる工場に於て大量に生産せらるゝに至つたものである。元來本縮は夏物着尺で、最近は二工場あり、年産七、八十萬圓以上を産する様になつた。主要なる仕向地は九州(四割)、大阪(二割)、其他(一割)等である。

### 8、八幡メリヤス

煙都八幡市の名特産八幡メリヤスは明治末年頃有高益次氏により京阪地方より移植されたもので、當初は軍用手袋のみの生産であつたが、現在では手袋の外縮毛交織の靴下、オーバセーター等をも製造し漸次製造過程も機械化され、又染色及整理に付ても縣市の補助、指導を受けて工場組織となり、製品規格の統一を圖り信用を得る様になつた、昭和九年中の生産高は五十七萬七千餘圓で、九州一圓、朝鮮、滿洲國に販賣せられてゐる。

### 6、箱崎縞

七百年前)等の我國中世若くは近世初期に發祥してゐる。さらに最近勞働都市八幡に發生したメリヤス工業の如きものもあり、これらを生産形體より見るときは未だ手工業、家内工業、副業的域を脱してゐないものもある。これ等の内、筑後地方の花菱、莫産の如く農村の副業に屬するものと、筑前地方の博多人形、高取焼、博多絞、筑後地方の大川指物、福島佛壇などの如く專業化するものもあり。次に稍々近代的に機械化するものに豊前地方の小倉縮、筑前地方の博多織、筑後地方の久留米縮、タオル等がある。こゝでは縣の特産物としてこれらの特産物工業の概況を簡単に述べることとする。(各部門の事業内容は、特産物工業の項において見られ度い。)

### 1、瑛瑛鐵器

今日では瑛瑛鐵器は、既に特産工業として取扱ふには、餘りに普遍化した感がある。然し福岡縣の瑛瑛鐵器は、博多鐵器エナメルの製品でお國自慢の

参照)

### 3、博多織

博多織は中西、松居等の代表的織工場等があり、明治二十三年には僅々五萬四千三十點、十八萬九千餘圓に過ぎなかつたが、爾來幾多の變遷を経て昭和九年には二十九萬四千六百五十七點、三百一十一萬餘圓の生産額に達し、又此の間に着尺博多涼、ネクタイ地等の新製品をも出し、廣く九州一圓、京阪東京等に販賣せられてゐる。近時歐米人によりて漸くその眞價が認められ徐海外輸出を見てゐることは嬉しい。

### 4、博多絞

博多絞は現在の生産總額は三十八萬九千餘圓に達し、製品の種類は元來着

尺(浴衣地)を主とし、その他風呂敷、ハンカチ等であるが、近來は正藍のみならず鳴海絞を加味したる色物絞、一方絞應用子供服地、バラソル、日傘地、コート地、座蒲團地、テーブル掛等を製出し、九州一圓、京阪、東京を始め、朝鮮、及滿洲國の一部にも最近は進出し、生産數量も累年増加しつつある。

### 5、甘木絞

甘木絞は朝倉郡甘木町を主産地とし、縣工業試験場の指導に依り鳴海絞を加味せるシバ及インダンスレン染、ナフトル及インデール染料の應用等研究改善の不斷の努力によつて近時品質精良となり、最近の生産高は一ヶ年四十萬三千餘圓で、製品の種類は絞、浴衣地、裏地、手拭等である。仕向地の主なるものは、九州、東京、阪神、四國、朝鮮等である。

### 6、箱崎縞

箱崎縞は粕屋郡箱崎町を主産地とし、製品は木綿の縦横縞及檜縞を主とし、これ又縣工業試験場の指導を受け、撚糸捺染機に依る解除染新製品を出し、優良堅牢と共に一般の好評を博し、其の生産高は綾木綿、粗布、其の他を合して三十萬一千百五十圓で仕向先は九州一圓及山口縣等である。

### 7、小倉縮

小倉縮は元來製品は苧と絹とを原料として製造されたる縮であつて、一時

衰微したが、明治六年頃半縮と稱し絹綿交織絞の發明によつて復活し、現在は力織機を備へたる工場に於て大量に生産せらるゝに至つたものである。元來本縮は夏物着尺で、最近は二工場あり、年産七、八十萬圓以上を産する様になつた。主要なる仕向地は九州(四割)、大阪(二割)、其他(一割)等である。

### 8、八幡メリヤス

煙都八幡市の名特産八幡メリヤスは明治末年頃有高益次氏により京阪地方より移殖されたもので、當初は軍用手袋のみの生産であつたが、現在では手袋の外綿毛交織の靴下、オーバセーター等をも製造し漸次製造過程も機械化され、又染色及整理に付ても縣市の補助、指導を受けて工場組織となり、製品規格の統一を圖り信用を得る様になつた、昭和九年中の生産高は五十七萬七千餘圓で、九州一圓、朝鮮、滿洲國に販賣せられてゐる。

### 9、久留米絣

寛政十一、二年頃、井上傳女によりて發明創始せられた久留米絣は、現在久留米市及び隣接地域一帯の主要産業として發展してゐる。累年需要は増加する一方である。明治三十三年重要物産同業組合法に依る組合を組織し、昭和九年同業組合を解散して、同年に工業組合及商業組合の設立認可せられ、統制と検査取締の嚴正なる實行に依り製品の向上に規格の統一に努め、殊に工業組合會を組織し一層之を強化すると共に販路の擴張に努めてゐる。

製品は現在久留米緋の外、筑紫新緋（板緋又は屋根板緋とも稱し正藍を以て染めざるもの）を製造し、其の従業員は地方業者の外全國刑務所に委託製造せしめてゐるが、實にその數七千五百名の多數に上てゐる、其の生産高は昭和九年度に於て四百九十餘萬圓に達してゐる。尙ほ仕向地の主なるものは東京、大阪、京都、名古屋及九州一圓である。

### 10、久留米縞

約二百年前に南筑の地に於て婦女子の手藝として點々製織せられたのを、小山トク女が新式の長機を以て織出したるに始まり、幾多の工夫を凝らし染色意匠に充分の注意を拂ひ、大正十年頃には使用馬力數二百七十馬力、力織機二千七百臺以上を算し、久留米市を中心として附近町村に於て盛に製織せられ、年産百四十萬反に達したる事もあつたが、現在では四十七萬五千四百八十七反、五十一萬三千九百八圓餘（昭和九年）程度で、主要仕向地は緋と同様、東京、大阪、名古屋、京都、九州一圓である。

### 11、久留米タオル

久留米タオルは其の生産地は久留米市を中心として、附近の三井、浮羽、八女、三潞四郡で、大正二年井上尙教氏が中桐式タオル足踏機を以て製造に從事したのに始まるもので、現在では全部力織機に變り、其の生産高は四十三萬四千六百六十打、三十四萬七千三百三十圓に達し、京阪、九州一圓、朝鮮、滿洲國等に仕向けられてゐる。

九州一圓、京阪、東京へ仕向けられ、最近は外國へも輸出せらるゝもの多く年間五萬圓を下らない状態である。

### 14、馬出曲物

馬出曲物は専ら福岡市馬出に於て生産せられ、現今は主として汽車辨當の容器の製造をなし、門司鐵道局管内及び朝鮮、臺灣、滿洲國に供給する外、神社屋根銅板葺、提灯曲、三寶、柄杓、菓子箱、醸造用室蓋、飯櫃類を製造して、其の生産高は七百三十萬個、二十六萬圓である。

### 15、筑後傘

産地は久留米、大牟田二市及び殆んど筑後各郡に亘る、元久留米藩に於て士分家中に内職として製作を奨励したるに始るといふ。近時々運の進展に従ひ、一層斯業の發展を期するため、之れが工業組合の組織をなし、目下五組

### 12、花 蕙

本縣の花蕙は數百年前農家の副業として、三潞郡、八女郡方面に於て製織せられたるに起源すといはれ、安政六年北島徳左衛門外六名屢々長崎に往來して、和蘭陀人、葡萄牙人に賣込みたるを本縣花蕙輸出の嚆矢と云はれてゐる。爾後幾度か消長の経過を経て今日に及び、昭和九年度に於ける生産高は九十八萬六千餘圓にして、全國四、五位にあり、其の主なる仕向地は九州一圓は勿論、殆んど全國に亘り、滿洲、南洋、北米、歐洲等に輸出せらるゝもの尠くない。

### 13、博多人形

博多人形の生産は目下福岡市内に限られ、慶長の頃、黒田長政播州より國更の際、同地より（御城瓦師）岩松文子を移住せしめたるに、岩松の末子宗七の人形造の餘技長じて、土俗玩具として起源をなし、其の後幾多名人輩出すると共に、意匠、着色、焼成等漸次改善工夫せられて、近日に至つたものである。博多人形は元來素燒素地に顔料を施したるものであつたが、近時共同窯により高火度一率の焼成をなし、フォルマリン加工による、防水及び顔料硬化の製品も市場に見らるゝに至り、製品の種類としては最近歴史的人形、現代的人形、歌舞伎人形、能人形、外國風俗人形等の外動物、果物、土鈴等の製品も亦多くなつた。

昭和九年度の生産は九十一萬九千三百個四十五萬五千三百五十圓にして、

ある。

### 17、籃胎漆器

産地は久留米市にして、目下二製作者あり、明和年間京都より藩主に招れて來れる塗師の堅地塗を川崎峰太郎なる者之れを籃胎に應用したる手法傳はりて今日に及んだもので、洋杖、文庫、茶盆、膳椀の外最近有田燒等と組合せたる製品がある。産額は多くないが、本縣獨特の製作工藝品にして、堅牢が特色である。年産十萬圓前後。

### 18、瓦

本縣の瓦は、筑前東部の遠賀、鞍手の二郡及び筑後地方の三潞、山門、三池の三郡が主産地で三潞郡の瓦は良品を以て有名である。年産八十萬圓前後にして、縣内各地、佐賀、熊本、長崎等にも仕向けらる。



小山トク女が新式の長機を以て織出したるに始まり、幾多の工夫を凝らし、染色意匠に充分の注意を拂ひ、大正十年頃には使用馬力數二百七十馬力、力織機二千七百臺以上を算し、久留米市を中心として附近町村に於て盛に製織せられ、年産百四十萬反に達したる事もあつたが、現在では四十七萬五千四百八十七反、五十一萬三千九百八圓餘（昭和九年）程度で、主要仕向地は併と同様、東京、大阪、名古屋、京都、九州一圓である。

### 11、久留米タオル

久留米タオルは其の生産地は久留米市を中心として、附近の三井、浮羽、八女、三瀬四郡で、大正二年井上尙教氏が中桐式タオル足踏機を以て製造に従事したのに始まるもので、現在では全部力織機に變り、其の生産高は四十三萬四千六百六十打、三十四萬七千三百三十圓に達し、京阪、九州一圓、朝鮮、滿洲國等に仕向けられてゐる。

### 13、博多人形

博多人形の生産は目下福岡市内に限られ、慶長の頃、黒田長政播州より國更の際、同地より（御城瓦師）岩松文子を移住せしめたるに、岩松の末子宗七の人形造の餘技長じて、土俗玩具として起源をなし、其の後幾多名人輩出すると共に、意匠、着色、焼成等漸次改善工夫せられて、近日に至つたものである。博多人形は元來素焼素地に顔料を施したるものであつたが、近時共同窯により高火度一率の焼成をなし、フォルマリン加工による、防水及び顔料硬化の製品も市場に見らるゝに至り、製品の種類としては最近歴史の風俗人形、現代的風俗人形、歌舞伎人形、能人形、外國風俗人形等の外動物、果物、土鈴等の製品も亦多くなつた。

昭和九年度の生産は九十一萬九千三百個四十五萬五千三百五十圓にして、

ある。

### 17、籃胎漆器

産地は久留米市にして、目下二製作者あり、明和年間京都より藩主に招れて來れる塗師の堅地塗を川崎峰太郎なる者之れを籃胎に應用したる手法傳はりて今日に及んだもので、洋杖、文庫、茶盆、膳椀の外最近有田焼等と組合せたる製品がある。産額は多くないが、本縣獨特の製作工藝品にして、堅牢が特色である。年産十萬圓前後。

### 18、瓦

本縣の瓦は、筑前東部の遠賀、鞍手の二郡及び筑後地方の三瀬、山門、三池の三郡が主産地で三瀬郡の瓦は良品を以て有名である。年産八十萬圓前後にして、縣内各地、佐賀、熊本、長崎等にも仕向けらる。

### 19、木 蠟

木蠟の主産地は久留米、大牟田二市始め、南筑後各郡にして、往時は相等の需要を見てゐたが、現代は代用品たる洋蠟の進出のために、稍々不振状態で、年産八十九萬八千貫、百七萬八千圓（昭和九年）に過ぎない。神戸、大阪、東京、名古屋に仕向けられてゐる。

### 20、和 紙

大川指物は既に四百年の歴史を有し、主産地は三瀬郡大川町を中心とする一圓である。夙に同業組合を組織し、粗製防止、製品の向上、徒弟の養成等、業界の發展に注意し、箆笥、戸棚、建具、火鉢、椅子、テーブル等、和洋家具を製作す。年産百六十萬圓以上に達し、販路は九州、滿洲、朝鮮に及んで

九州一圓、京阪、東京へ仕向けられ、最近は外國へも輸出せらるゝもの多く年間五萬圓を下らない状態である。

### 14、馬出曲物

馬出曲物は専ら福岡市馬出に於て生産せられ、現今は主として汽車辨當の容器の製造をなし、門司鐵道局管内及び朝鮮、臺灣、滿洲國に供給する外、神社屋根銅板葺、提灯曲、三寶、柄杓、菓子箱、醸造用室蓋、飯櫃類を製造して、其の生産高は七百三十萬個、二十六萬圓である。

### 15、筑後傘

産地は久留米、大牟田二市及び殆んど筑後各郡に亘る、元久留米藩に於て士分家中に内職として製作を奨励したるに始るといふ。近時々運の進展に従ひ、一層斯業の發展を期するため、之れが工業組合の組織をなし、目下五組合設立され着々事業を進めてゐる。昭和九年に於ける生産高は二百萬六千七百十本、百萬五百九十七圓にして、九州一圓、中國、滿洲、臺灣等である。

### 16、大川指物

和紙の産地は筑後地方(八女、山門二郡)及び筑前地方(朝倉、糸島二郡)で何れも數百年の歴史を有してゐる。其の製品は、京花紙、傘紙、障子紙、提灯紙、膏藥紙等で、元來は手漉法によるものであつたが、近時機械製糸擡頭し來り、生産額は二百萬七千緡二百十二萬圓(昭和九年七月—同十年六月)九州一圓、東京、大阪、朝鮮、臺灣、滿洲國に仕向けらる。

### 21、清酒

本縣の清酒の起源は遠く、天録、享保の頃にありと言はれ、優良酒を産し且つ造石高に於ても、年々三十萬石前後で、全國に於ても、兵庫縣に次ぐ銘酒地である。清酒の生産は全縣下に及び、就中三井、三瀨、山門の三郡最も盛んである。縣に於ても、或は酒造技術者を設け、或は工業試験場に醸造部を設置し、之れが指導助長をなしてゐる。

本縣の清酒は縣内消費と、東京、大阪、朝鮮、及び滿洲國建設以來特に滿洲向け輸出を見てゐる。

### 22、醬油

本縣の醬油は約二百七十年前、寛文年間に始まつたものと云はれてゐる。縣當局は技術者を置き、或は工業試験場内に醸造部を設置し、指導獎勵、分析、鑑定等をなし、極力之れが發達に努め現に品質に於ては全國一、二位を争ひ、生産數量に於ても、千葉、香川、兵庫、愛知に次ぎ第五位にある。

昭和九年に於ける生産高は二十萬二千三百二十石、四、三八八、四六九圓で

福岡縣に於ける工業は上述の如く、重要工業部門と特産部門の二大々別にしたことによりて、略讀者は縣下の工業状態を知られたであらう。そこで本項では説明を省略し、讀者に繁雜な感をしのんで貫つて、各工産額の品目別についての現況を、數字によりて示しておくことにする。

### 第四節 工産内容

種別	數量	價格
鐵製鋼	—	一五八、九四一、三〇三
鐵製糖	—	七五、三一七、七〇六
砂	一六七、六四四、六〇二斤	三〇、八四二、九〇一
護謨製品(タイヤを除く)	—	二九、四六七、二七〇
酒類	三六七、四四八石	二八、三三三、一三〇
工業用藥品	—	二二、三三二、六一六
肥料	六〇、八一、一〇四貫	一七、一九〇、一九二
硝子製品	—	一六、九三三、二三九
博多織(絹綿交織を含む)	—	三、〇七一、二〇四
其他絹織物	—	一六二、四三三
久留米緡	二、三二八、八〇七反	四、九〇二、五二六
久留米緡	—	五、一三、九〇八
其他綿織物	四七五、四八七	七、二八四、九四七

種別	數量	價格
絹綿交織物	—	四〇九、二〇四
麻織物	—	五二九
計	—	一六、三八四、七五一
石炭製品	—	一四、七四二、二四四
機械製麥粉	—	一四、四三四、三七〇
セメント	—	一二、三九九、四八六
電力	—	一二、一一二、一二九
綿糸紡績	—	一一、九三九、二二七
麥酒	—	一一、六一二、九八二
印刷物	—	一一、二二三、七七八
染料(中間品)	—	七、六九九、〇〇〇
亞鉛板類	—	七、六七七、八三〇
木製製品	—	七、六一三、〇〇一
菓子類	—	七、一三五、〇四三
植物油	—	六、〇七〇、二〇九
煉瓦	—	四、五四五、一〇五
鐵力製品	—	四、四三五、二九五
其他	—	四、三八八、四六九

種別	數量	價格
瓦及び土管	—	一、五一三、四一〇
紙器	—	一、四九二、三四八
味噌	—	一、四四九、九六四
擦糸	—	三三九、八一〇
藁製品	—	—
スレート	—	—
木臘	—	八九八、七五五貫
石鹼	—	六七三、八四六打
珫瑯鐵器	—	—
製氷	—	一六五、六一九噸
傘	—	二、〇〇六、七一〇本
莫蔭及花筵	—	—
漬物	—	—
皮革製品	—	—
皮製製品	—	四九九、三九〇枚
竹製品	—	—
清凉飲料	—	—
其他	—	一、九七八、四一〇打

酒地である。清酒の生産は全縣下に及び、就中三井、三瀨、山門の三郡最も盛んである。縣に於ても、或は酒造技術者を設け、或は工業試験場に醸造部を設置し、之れが指導助長をなしてゐる。

本縣の清酒は縣内消費と、東京、大阪、朝鮮、及び滿洲國建設以來特に滿洲向け輸出を見てゐる。

## 22、醬油

本縣の醬油は約二百七十年前、寛文年間に始まつたものと云はれてゐる。縣當局は技術者を置き、或は工業試験場内に醸造部を設置し、指導奨励、分析、鑑定等をなし、極力之れが發達に努め現に品質に於ては全國一、二位を争ひ、生産數量に於ても、千葉、香川、兵庫、愛知に次ぎ第五位にある。

昭和九年に於ける生産高は二十萬二千三百二十石、四、三八八、四六九圓で

種別	數量	價格
鐵製鋼	一五八、九四一、三〇三	
鐵製糖	七五、三一七、七〇六	
鐵製糖	三〇、八四二、九〇一	
鐵製糖	二九、四六七、二七〇	
鐵製糖	二八、三二三、一三〇	
鐵製糖	二三、三三二、六一六	
鐵製糖	一七、一九〇、一九二	
鐵製糖	一六、九三三、二三九	
鐵製糖	三、〇七一、二〇四	
鐵製糖	一六二、四三三	
鐵製糖	四、九〇二、五二六	
鐵製糖	五一三、九〇八	
鐵製糖	七、二八四、九四七	
鐵製糖	一六七、六四四、六〇二斤	
鐵製糖	三六七、四四八石	
鐵製糖	六〇、八一、一〇四貫	
鐵製糖	二、三二八、八〇七反	
鐵製糖	四七五、四八七	
鐵製糖	一、四四九、九六四貫	
鐵製糖	三三九、八一〇	
鐵製糖	八九八、七五五貫	
鐵製糖	六七三、八四六打	
鐵製糖	一六五、六一九噸	
鐵製糖	二、〇〇六、七一〇本	
鐵製糖	九八六、一八八	
鐵製糖	九四四、四六三	
鐵製糖	八八一、三二五	
鐵製糖	八四〇、三二一	
鐵製糖	八三六、三九二	
鐵製糖	八二〇、七〇三	
鐵製糖	七九六、三四五	
鐵製糖	七八三、九六四	
鐵製糖	七六八、〇三七	
鐵製糖	七〇三、一七二	
鐵製糖	六八七、八五二	
鐵製糖	五七七、七二六	
鐵製糖	五五三、八六四	
鐵製糖	五三七、四一二	
鐵製糖	五一六、三四三	
鐵製糖	五〇五、五二四	
鐵製糖	四六九、七〇〇	

絹綿交織物	四〇九、二〇四	一、五一三、四一〇
麻織物	五二九	一、四九二、三四八
石炭製品	一六三、五四五、九八九斤	一、四四九、九六四
機械製粉	一四、四三三、三七〇	一、三八四、〇五一
電機	一二、三九九、四八六	一、一九八、四九二
糸紡績	一一、九三九、二二七	一、一六三、六六九
印刷物	一一、六一二、九八二	一、〇七八、一六八
麥酒	一一、二二三、七七八	一、〇四一、一〇〇
印物	七、六九九、〇〇〇	一、〇三七、〇七一
染料(中間品)	七、六七七、八三〇	一、〇〇〇、五九七
亞鉛板類	七、六一三、〇〇一	九八六、一八八
木製品	七、一三五、〇四三	九四四、四六三
菓子類	六、〇七〇、二〇九	八八一、三二五
植物瓦	四、五四五、一〇五	八四〇、三二一
煉瓦	四、四三五、二九五	八三六、三九二
鋳力製品	四、三八八、四六九	八二〇、七〇三
醬油	三、九九六、五八〇	七九六、三四五
鋼板	三、七〇五、五四三	七八三、九六四
洋紙	三、六三四、〇〇〇	七六八、〇三七
西洋服	三、三九九、四七六	七〇三、一七二
電線	二、九八一、二五〇	六八七、八五二
製綿	二、四四〇、〇五二	五七七、七二六
陶磁器	二、一〇一、五九〇	五五三、八六四
銅管銅棒銅板	一、八七九、〇八三	五三七、四一二
電球	一、五七六、三一二	五一六、三四三
數物	一、五五三、四一二	五〇五、五二四
鑛物		四六九、七〇〇
瓦及び土管		
紙器		
味噌		
擦糸		
藥製		
スレト		
木臘		
石鹼		
珫瑯鐵器		
製水器		
傘		
莫蔴及花蔴		
漬物		
皮革製品		
疊製品		
竹製品		
清涼飲料		
染物		
麵類		
和紙		
船舶		
罐詰		
メリヤス製品		
田園		
鉛板鉛管類		
提燈		
表装		
彫刻		

福岡縣産業の巻

四七九

博多人形	九一九、三〇〇	九一九、三〇〇
小倉服	六四、五六〇	三七〇、五七〇
シヤツ、ズボン	—	三四九、一六九
筆	六、六九二、一〇〇	三三四、五八四
石灰	一一、五六九、五四五	二七〇、四二二
帽	五四、五四〇	二四九、七四七
粗製樟腦及樟腦油	—	二二六、〇二二
漆器	—	二二七、九七一
鑲鐵製品	—	二二六、三四四
車輔	八、四〇六	二〇六、六八五
足袋	五九八、六〇〇	一九一、四八〇
セメント製品	—	一九〇、四〇六
度量衡器	二五二、九六一	一六二、一七五
馬耕犁	一八、三二〇	一五五、七二〇
疊表	三八九、四三五	一四七、七六八
麻裏履	六三五、九二九	一三六、八九二
酢瓦	一一、〇三五	一三六、三三〇
酸素	—	一三一、二五九
麵粉	四、六四八	一二五、〇六三
燒酎	—	一一四、七九八
モルタル	—	一一二、三五〇
籐製品	—	一〇七、〇〇〇
麻糸	—	一〇五、二一〇
其他二十七種	—	九九六、二〇一
計	—	五九三、二一二、一二二

### 第五節 工場事情

福岡縣は工業額の多額なだけに、工場は大は重要産業部門より、小は特産工業の手工業的工業に至るまで、多かれ少かれ工場労働者の使用とこれに伴ふ各種の取縮法の適用を受けてゐる。近代の諸工業に或は特産工業に關心を有する者にとりては、當該工場の事情を悉知しておくことは絶對的必要條件であると考へるが故に、記者は工場法適用の工場に限定して、次に各工場所在地及び代表者、職工数を列擧し讀者の参考に資すると共に、工場一覽表の代りとしたい。

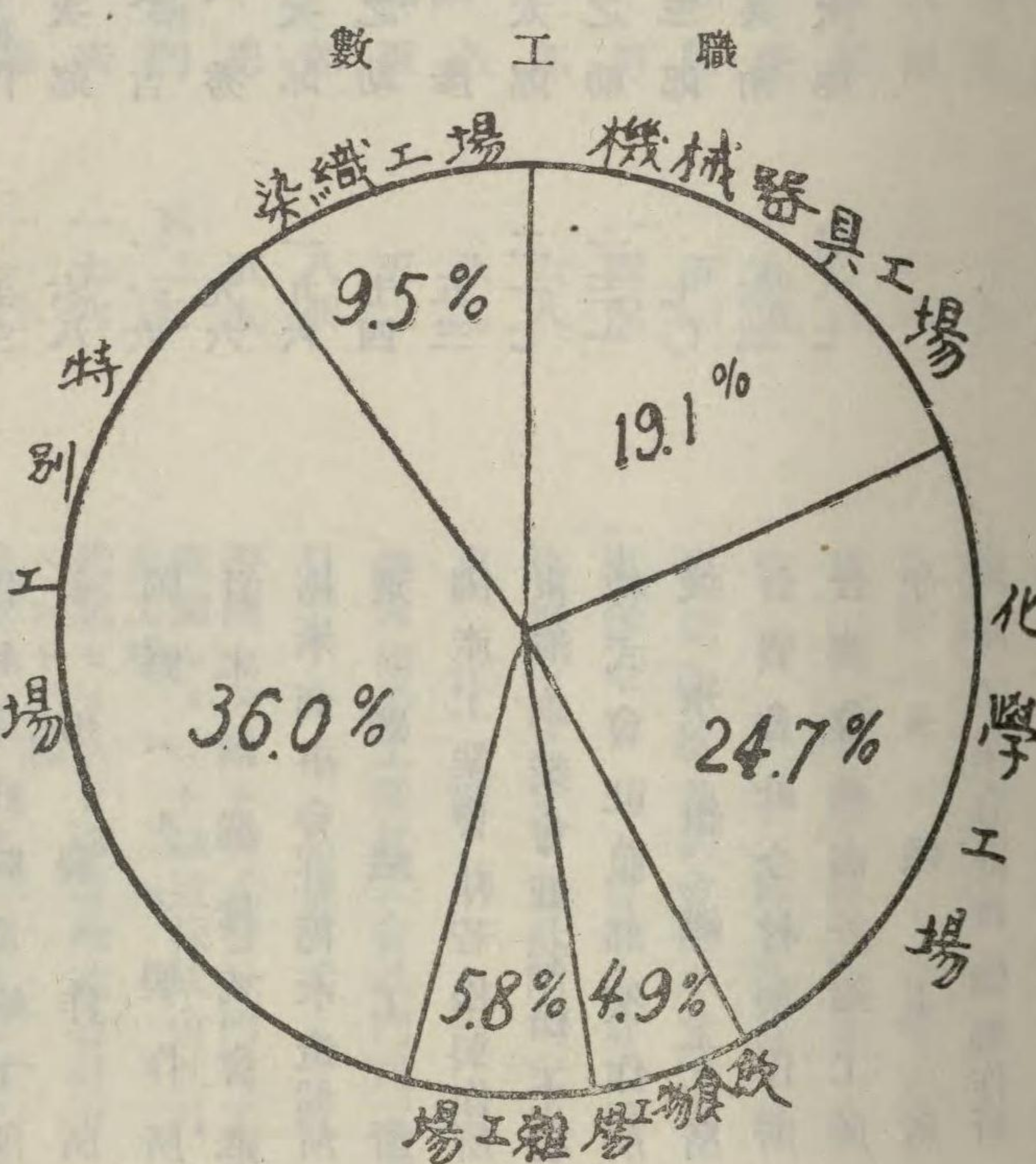
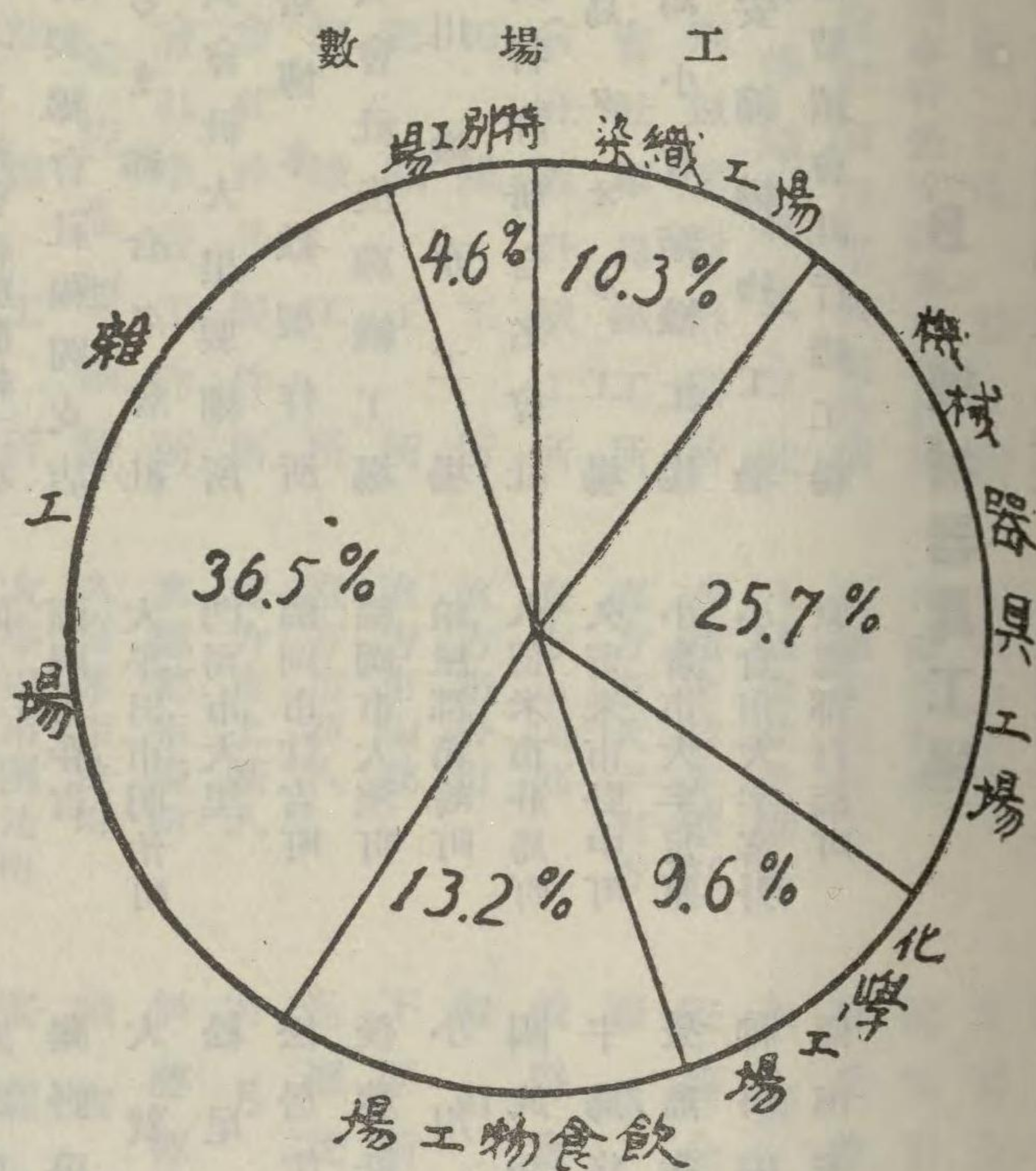
#### 1、工場法適用工場數

福岡縣下における工場法適用の工場數は左表の如くである。

(縣工場課昭和十年末現在調査に據る)

工場數	職工數		計
	男	女	
染織工場	二〇〇	一、四七一	七、七六九
機械器具工場	五〇〇	一七、三六〇	一、一四〇
化學工場	一八七	一四、三二八	九、五九七
飲食物工場	二五七	四、〇七〇	六四五
雜工場	七〇九	四、三三五	一、二九二
特別工場	八九	三三、四七二	一、四八七
計	一、九四二	七五、〇三六	二一、九三〇

表較比百分同



## 2、退職積立金及退職

の「五十人以上工場」は僅か百四十七工場で一割強に過ぎないのを知れば、大工場が多い福岡縣といつてもこの状況だから推して中小工業の多いこと、の百分の二を積立てる義務を有し、萬一に備へるので、資本家はさらに百分の三まで積立てられることになつてゐる。このため五十人以上使用工場における労働者は従來のごとき放任、傲慢な資本家的態度から若干救はるゝ事になり、一福音と稱して可なりであらう。この意味における「五十人以上使用工場」は、二十人、三十人の使用労働者の多いわが國家内工業工場労働者から羨望される譯である。即ち福岡縣下の工場法適用工場は二千十九(昭和十一年六月一日現在)に不拘、この退職積立金法案適用

セメント製品 二五二、九六一個  
 度量衡器 一八、三二〇  
 馬耕犁 三八九、四三五枚  
 疊表 六三五、九二九足  
 麻裏草履 一二、〇三五石  
 酢素瓦斯 四、六四八石  
 麵粉 一、一四七、七九八  
 燒酎 一一二、三五〇  
 モルタル 一〇七、〇〇〇  
 籐製品 一〇五、二一〇  
 麻糸 九九六、二〇一  
 其他二十七種 五九三、二一二、一二二

代りとしたい。  
 一九〇四〇六  
 一六二、一七五  
 一五五、七二〇  
 一四七、七六八  
 一三六、八九二  
 一三六、三三〇  
 一三一、二五九  
 一二五、〇六三  
 一一四、七九八  
 一一二、三五〇  
 一〇七、〇〇〇  
 一〇五、二一〇  
 九九六、二〇一  
 五九三、二一二、一二二

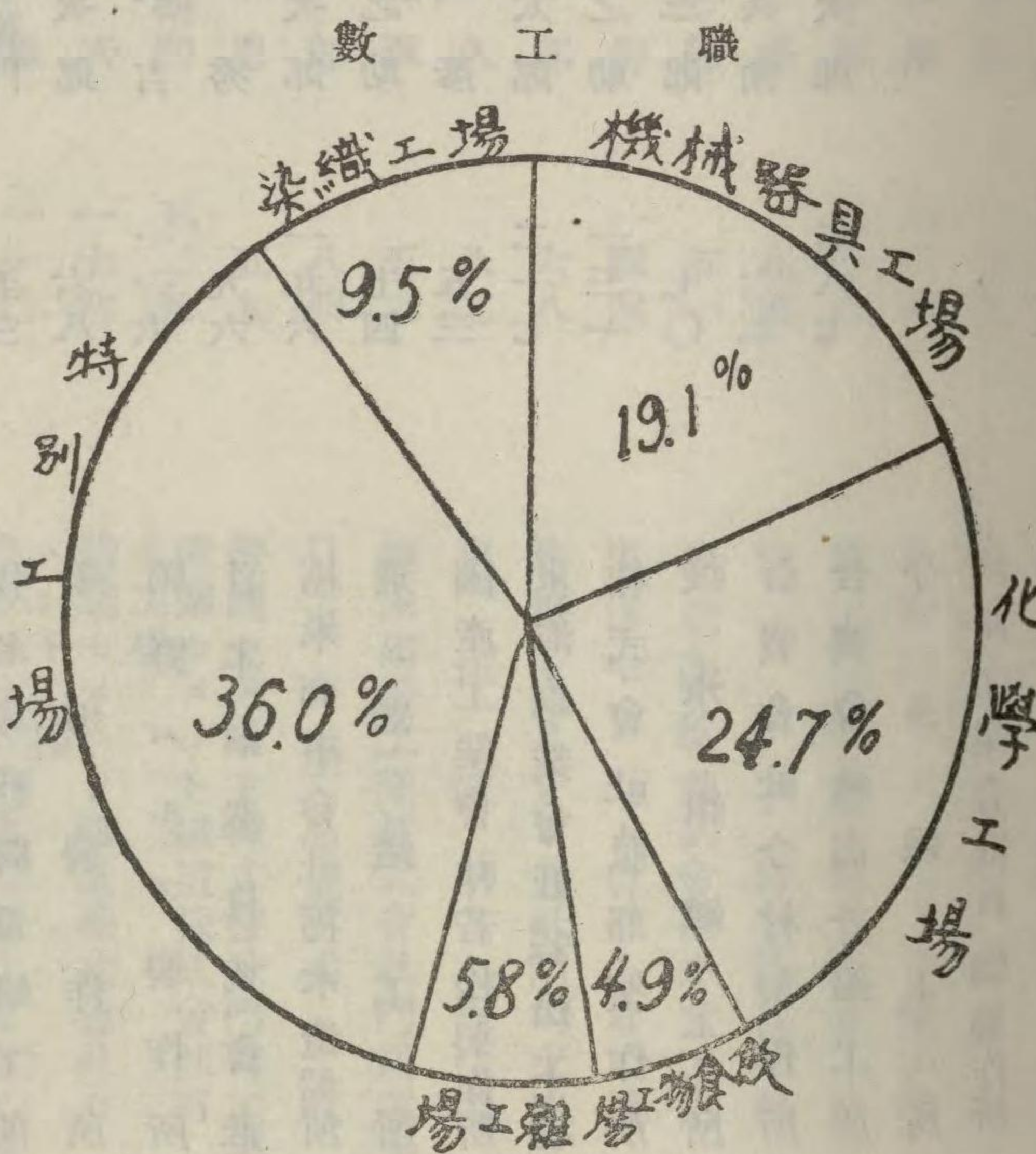
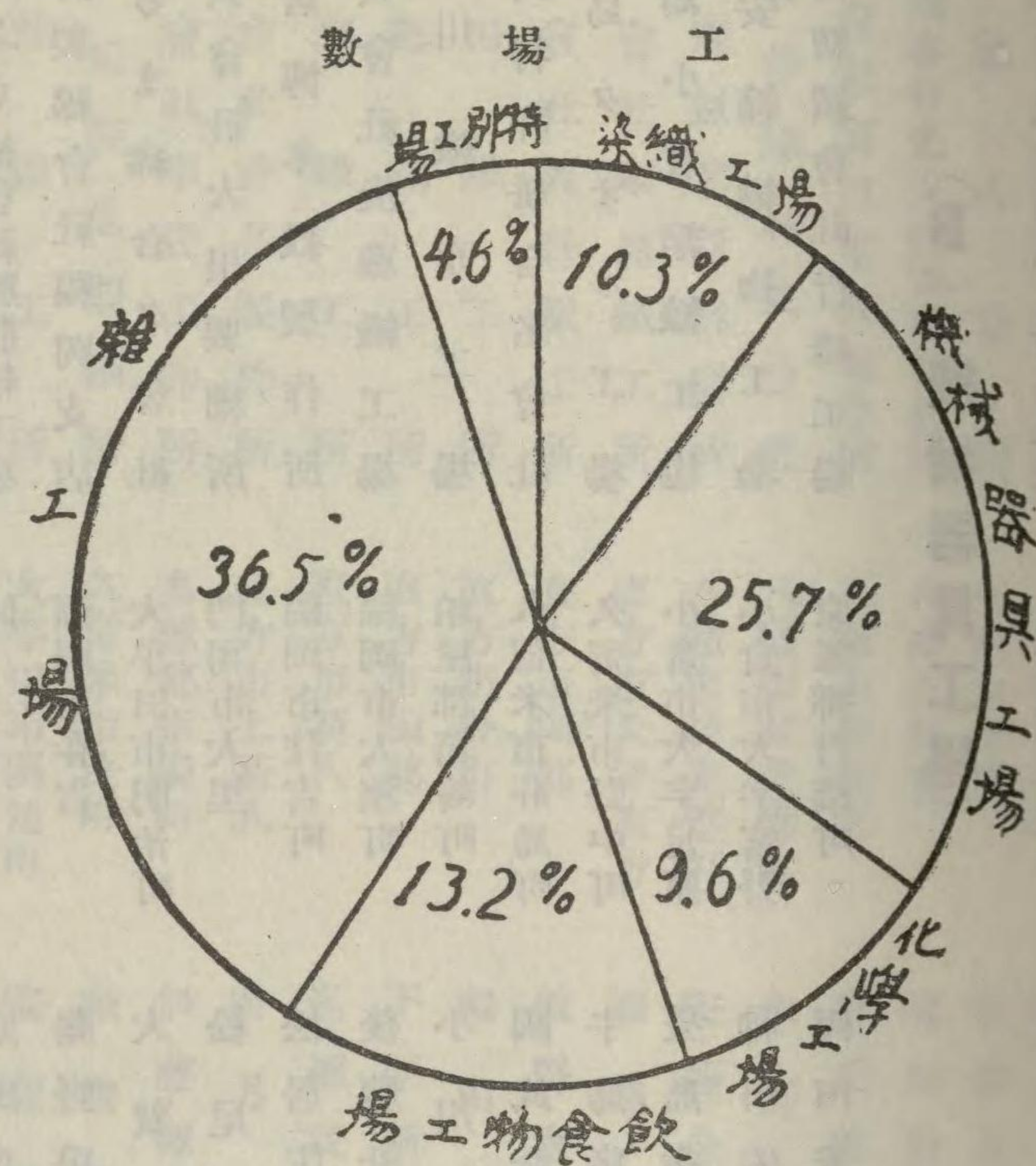
### 1、工場法適用工場数

福岡県下における工場法適用の工場数は左表の如くである。

(縣工場課昭和十年末現在調査に據る)

工場名	工場数	職工数	
		男	女
染織工場	二〇〇	一、四七一	七、七六九
機械器具工場	五〇〇	一七、三六〇	一八、五〇〇
化学工場	一八七	一四、三二八	九、五九七
飲食物工場	二五七	四、〇七〇	六四五
雑工場	七〇九	四、三三五	一、二九二
特別工場	八九	三三、四七二	一、四八七
計	一、九四二	七五、〇三六	二一、九三〇

表較比分百同



### 2、退職積立金及退職手當法適用工場

第六十九廣田内閣特別議會において、兎角の論難あつた退職積立金及退職手當法がとも角も修正され乍らも通過した。それは當初の立案から見れば十分に社會性が失はれはしたが、我國労働者に對する社會政策上の可なりな強化策として受取れないことはない。その法文の詳細をこゝに掲げることがは避けるが、この法案が労働者の生活改善上相當の機能を發揮することは事實で將來益々労働者の立場が改善される一前提條件と見てよいだらう。而してこの制度は「常時職工五十人以上を使用する工場」は資本金家及び労働者が賃銀

の「五十人以上工場」は僅か百四十七工場で一割強に過ぎないのを知れば、大工場の多い福岡県といつてもこの状況だから推して中小工業の多いこと、この新法案の恩典に均霑しない工場の如何に多いことが察せられる、福岡縣下の大工場の活況を見るためこの「五十人以上工場」を拾つてみる。

#### 常時職工五十人以上を使用する

工場数及職工調 (昭和十一年六月一日現在)

工場名	所在地	工場主又は 管理 人	職工数
(A) 染織工場			
旭製糸株式會社	朝倉郡甘木町	櫻井善七	一一〇

昭榮製糸會社二日市工場	筑紫郡二日市町	紫芝春美	六三〇
日之出製糸會社田主丸工場	浮羽郡田主丸町	岸田理一	一六七
若林製糸紡績大石工場	浮羽郡大石村	西岡一郎	六六九
浮羽製糸株式會社	浮羽郡吉井町	矢野貞助	一一一
郡是製糸宇之島工場	築上郡三毛門村	神保喜久	六三二
八屋製糸所	築上郡八屋町	幸大八	九四
博多ラミ紡績會社	福岡市吉塚	佐川淺市	一一〇
鐘紡會社博多支店	福岡市住吉町	藤田定	四一八
明治紡績合資戶畑工場	戶畑市明治町	岡田音次郎	一、三三八
鐘紡會社久留米支店	久留米市篠山町	足立茂	四六九
鐘紡會社三池支店	大牟田市明治町	柴田芳司	八七四
株式會社佐藤商店燃糸工場	久留米市京町	佐藤彌一郎	一八八
おたふく綿株式會社	福岡市大字比惠	原田平五郎	四八七
おたふく綿會社脫脂綿工場	同	原田忠右衛門	五三
藤野製綿會社福岡支店	福岡市春吉	藤野房次郎	六八
だるま綿合名會社	大牟田市明治町	大賀茂吉	一一六
合資會社大里製綿所	門司市大里	松尾久秀	九六
松居博多織製作所	福岡市住吉町	松居庄次郎	一九六
合資會社後藤織工場	福岡市大濱町	後藤丑之助	七四
小川織布工場	粕屋郡箱崎町	小川國彦	五三
國武特許緋合名會社	久留米市莊島町	國武金太郎	二一七
牛島タオル工場	久留米市野中町	牛島猪之助	一三一
榮島小倉縮織工場	小倉市大字足原	榮島幸三郎	七〇
神安縮織物工場	小倉市大字宮野	神田安兵衛	六三
明治紡績會社行橋工場	京都郡行橋町	岡田音次郎	二八七

(B) 機械器具工場

株式會社渡邊鐵工所兵器部

筑紫郡那珂村

渡邊福雄

一、二一三

合資會社末次鐵工所	福岡市堅粕	末次三男	二〇四
古賀鐵工所	福岡市堅粕	古賀徳一	六二
渡邊鐵工所航空機部	筑紫郡那珂村	渡邊福雄	八七一
合資會社福岡精工所	福岡市堅粕町	加藤作郎	一五七
福岡電車會社東車庫	福岡市馬出町	堀三太郎	五五
西部電氣工業所	福岡市比惠	福岡田稔	一五一
昭和鐵工株式會社	福岡市住吉町	飯田久次郎	三九四
博多コースター製作所	福岡市春吉	津田甚次郎	一四三
磯野七平鑄造所	福岡市上土居町	磯野七平	一〇六
合名會社深見鑄造所	福岡市上土居町	深見平次郎	六四
相互コースター製作所	福岡市西堅粕	石深見平次郎	八三
三木鍍金工場	福岡市下比惠	三木英男	五〇
松本旭工場	粕屋郡内村	松本市松	五〇
合名會社岡部鐵工所	粕屋郡内村	岡部繁	一八七
永田製製作所	若松市濱九番町	永田正男	五〇
岡野バルブ製作所	門司市小森江	岡野滿	一二二
日本鋼業株式會社	築上郡八屋町	仁田貞夫	六九三
栃木商會社社栃木造船所	若松市東海岸通り	栃木順作	三一〇
飛鷹鐵工所	若松市外町四丁目	飛鷹松次	七六
國産工業會社若松製作所	若松市惠比須通り	堀岡利一	五三九
東海鋼業會社若松工場	若松市濱ノ町開	伊藤九萬一	二四四
株式會社服部製作所	若松市濱五番丁	有田勇次郎	一七三
城水組鐵工所	若松市安政町	城水末吉	二四二
合資會社今村製作所	若松市濱ノ町	今村實	一七〇
合資會社高谷鐵工所	戶畑市大字新川	高谷實	一一一
今泉鐵工所	戶畑市堀町	今泉助七	七一
國産工業會社戶畑製作所	戶畑市戶畑	鳥井益友	六九四
竹内鐵工所	戶畑市戶畑	竹内留吉	六五

東洋製鐵株式會社	戶畑市沙井崎	稻本宇一	二五五
八幡工務所	八幡市枝光	安藤金五郎	一〇九
安田商事枝光支店安田製釘所	八幡市枝光	瀧川岩太郎	三一六
株式會社安川電機製作所	八幡市黒崎町	安川第五郎	九〇六
八幡伸鐵株式會社	八幡市枝光港町	永野管盛	九五
八幡電氣瓦斯熔接所	八幡市枝光港町	安藤金五郎	五一
合名會社福島鐵工所	直方市大字直方	飯野憲一郎	一四四
合資會社飯野鐵工所	直方市山部	飯野憲一郎	六八
福岡鐵工所	直方市外町	福田照久	八二
山部鐵工所	直方市山部	下原新之丞	五二
高瀬鐵工所	直方市新入	高瀬茂一郎	八四
合名會社香月製作所	直方市上新入	香月勇	五九
株式會社幸袋工作所	嘉穂郡幸袋町	伊藤傳右衛門	五二五
日本足袋旭製鋼所	久留米市洗町	秋吉勇夫	一七六
安部鐵工所	大牟田市明治町	安部貞雄	一一〇
株式會社若津鐵工所	三藩郡大川町	黒木健男	二七六
九州電氣軌道會社砂津車庫	小倉市砂津	村上巧兒	一二七
東京電氣會社小倉工場	小倉市權町	鳥井誠	一〇九

日本タール工業登山工場	戶畑市牧山	井上勝一	三一三
戶畑耐火煉瓦製造所	戶畑市大渡通り	林幸男	七八
小野田セメント八幡工場	八幡市藤田	中井勝	一六〇
黒崎窯業株式會社	八幡市藤田	松本健次郎	六五六
中央硝子株式會社	久留米市梅浦町	原文藏	六二
東亞陶器株式會社小倉工場	小倉市篠崎	坪井禮三	一〇四三
東洋セメント會社小倉工場	企救郡東谷村	永井一男	一五五
淺野セメント會社門司支店	門司市白木崎	一ノ瀬亮一郎	四七八
東洋硝子工場	門司市大里	塚田繁藏	一二五
徳永硝子工業株式會社門司工場	門司市大里	廣松繁吉	一一九
日東火工品株式會社	小倉市板櫃	木戸正三	一七四
豊國セメント株式會社門司工場	京都郡新田町	村瀬末一	三五五
産業セメント鐵道株式會社石	田川郡後藤寺町	渡邊卓	一一七
灰工場	田川郡後藤寺町	渡邊卓	一一七
産業セメント鐵道株式會社セ	田川郡香春町	武田忠	一九五
淺野セメント株式會社香春工場	田川郡香春町	鈴木金十	二一九
王子製紙株式會社小倉工場	小倉市篠崎	新井國吉	一三二
日本火藥製造株式會社小倉作	小倉市板櫃		
日本火藥製造株式會社折尾作	若松市板櫃		

おたふく綿株式會社	福岡市大字比惠	原田平五郎	四八七
おたふく綿會社脱脂綿工場	同	原田忠右衛門	五三
藤野製綿會社福岡支店	福岡市春吉	藤野房次郎	六八
だるま綿合名會社	大牟田市明治町	大賀茂吉	一一六
合資會社大里製綿所	門司市大里	松尾久秀	九六
松居博多織製作所	福岡市住吉町	松居庄次郎	一九六
合資會社後藤織工場	福岡市大濱町	後藤丑之助	七四
小川織布工場	粕屋那箱崎町	小川國彦	五三
國武特許併合名會社	久留米市莊島町	國武金太郎	二一七
牛島タオル工場	久留米市野中町	牛島猪之助	一三一
榮島小倉縮織工場	小倉市大字足原	榮島幸三郎	七〇
神安縮織物工場	小倉市大字宮野	神田安兵衛	六三
明治紡績會社行橋工場	京都郡行橋町	岡田晋次郎	二八七

(B) 機械器具工場

株式會社渡邊鐵工所兵器部 筑紫郡那珂村

渡邊 福雄 一、二一三

三木製鐵工場	福岡市上比惠	三木市松	五〇
松本旭製鐵工場	粕屋郡内村	岡部繁	一八七
合名會社岡部鐵工所	粕屋郡内村	永田正男	五〇
永田製鐵所	若松市濱九番町	岡野満	一二二
岡野バルブ製作所	門司市小森江	仁田貞夫	六九三
日本鋼業株式會社	築上郡八屋町	杉木順作	三一〇
杉木商會社杉木造船所	若松市東海岸通り	飛鷹松次	七六
飛鷹鐵工所	若松市外町四丁目	堀岡利一	五三九
國産工業會社若松製作所	若松市恵比須通り	伊藤九萬一	二四四
東海鋼業會社若松工場	若松市濱ノ町開	有田勇次郎	一七三
株式會社服部製作所	若松市濱五番丁	城水末吉	二四二
城水組鐵工所	若松市安政町	今村實	一七〇
合資會社今村製作所	若松市濱ノ町	高谷實	一一一
合資會社高谷鐵工所	戸畑市大字新川	今泉助七	七一
今泉鐵工所	戸畑市堀町	鳥井益友	六九四
國産工業會社戸畑製作所	戸畑市戸畑	竹内留吉	六五

東洋製鐵株式會社	戸畑市沙井崎	稻本宇一	二五五
八幡工務所	八幡市枝光	安藤金五郎	一〇九
安田商事枝光支店安田製釘所	八幡市枝光	瀧川岩太郎	三一六
株式會社安川電機製作所	八幡市黒崎町	安川第五郎	九〇六
八幡伸鐵株式會社	八幡市枝光港町	永野善盛	九五
八幡電氣瓦斯熔接所	八幡市枝光港町	安藤金五郎	五一
合名會社福島鐵工所	直方市大字直方	福島正男	一四四
合資會社飯野鐵工所	直方市山部	飯野憲一郎	六八
福岡鐵工所	直方市外町	福田照久	八二
山部鐵工所	直方市山部	下原新之丞	五二
高瀬鐵工所	直方市新入	高瀬茂一郎	八四
合名會社香月製作所	直方市上新入	香月勇	五九
株式會社幸袋工作所	嘉穂郡幸袋町	伊藤傳右衛門	五二五
日本足袋旭製鋼所	久留米市洗町	秋吉勇夫	一七六
安部鐵工所	大牟田市明治町	安部貞雄	一一〇
株式會社若津鐵工所	三潞郡大川町	黒木健男	二七六
九州電氣軌道會社砂津車庫	小倉市砂津	村上巧兒	一二七
東京電氣會社小倉工場	小倉市横町	島井誠	一〇九
東京製綱會社小倉工場	小倉市砂津	香月五郎	五三九
花田鐵工所	小倉市富野	花田一樓	五六
自念組造船所	門司市田ノ浦	自念春次郎	一一五
神戸製鋼所門司伸銅工場	門司市小森江	古知幸次郎	一〇二五
日本冶金株式會社	門司市小森江	岡田傳次	一二七

(C) 化學工場

博多鐵器エナメル會社	福岡市馬出	松本休治	三〇一
日本板硝子會社二島工場	若松市二島	大石公平	四七〇
旭硝子會社牧山工場	戸畑市牧山	八代保	五六七

日本タール工業牧山工場	戸畑市牧山	井上勝一	三一三
戸畑耐火煉瓦製造所	戸畑市大渡通り	林幸男	七八
小野田セメント八幡工場	八幡市藤田	中井勝	一六〇
黒崎窯業株式會社	八幡市藤田	松本健次郎	六五六
中央硝子株式會社	久留米市梅浦町	原文藏	六二
東亞陶器株式會社小倉工場	小倉市篠崎	坪井禮三	一〇四三
東洋セメント會社小倉工場	企救郡東谷村	永井一男	一五五
淺野セメント會社門司支店	門司市白木崎	一ノ瀬亮一郎	四七八
東洋硝子工場	門司市大里	塚田繁藏	一二五
徳永硝子工業株式會社門司工場	門司市大里	廣松繁吉	一一九
日東火工品株式會社	小倉市板櫃	木戸正三	一七四
豊國セメント株式會社門司工場	京都郡菊田町	村瀬末一	三五五
産業セメント鐵道株式會社石	田川郡後藤寺町	渡邊卓	一一七
産業セメント鐵道株式會社セ	田川郡後藤寺町	渡邊卓	一一七
淺野セメント株式會社香春工場	田川郡香春町	武田忠	一九五
王子製紙株式會社小倉工場	小倉市篠崎	鈴木金十	二一九
日本火藥製造株式會社小倉作	小倉市板櫃	新井國吉	一三二
日本火藥製造株式會社折尾作	若松市淺川	星野嘉一	一四五
日本火藥製造株式會社飯塚作	嘉穂郡穂波村	船木軍一	九五
業所	嘉穂郡穂波村	エービスコット	八三
ライジングサン石油株式會社	粕屋郡志賀島村	中森延一	二九五
西戸崎油槽所	若松市濱開	山榊儀寛	七二
日華製油株式會社若松工場	小倉市板櫃	大江力	四〇四六
山榊硬化油製造所	福岡市住吉袋島	小樋井覺	三、四七〇
日本足袋株式會社本社工場	久留米市洗町	倉田泰藏	二、五七六
つちや足袋株式會社	久留米市白山町	石丸忠男	六五一
ブリッヂストーンダイヤ株式會社	久留米市洗町	矢野寛	一二七
大阪曹達會社小倉工場	小倉市板櫃		

四八三

福岡縣産業の巻

第七章 工業

旭硝子會社曹達工場	戸畑市牧山	生野 稔	四九九
三井鐵山三池染料工業所	大牟田市稻荷町	莊原 和作	二、九四三
電氣化學工業大牟田工場	大牟田市新開町	西 雄一	四六九
三池窒素工業株式會社	大牟田市三坑町	古崎 秀次郎	三四六
東洋高壓工業會社工場	大牟田市新開町	荒木 道	四三六
淺野セメントスレート部門司工場	門司市白木崎	川島 誠	八六
日本タール工業會社黒崎工場	八幡市黒崎	野口寅之助	九〇

(D) 飲食物工場

大日本麥酒會社博多工場	筑紫郡那珂村	近藤 正雄	一〇四
小林 酒造 工場	粕屋郡宇美町	小林作五郎	六二
日本調味料醸造會社	粕屋郡席内村	木原 秀三	七一
富安 合名會社	三井郡山川村	富安猪三郎	八八
大日本酒類醸造大里工場	門司市大里	澁谷虎之助	六七
櫻ビール株式會社	門司市大里	木村 尚一	一九四
明治製糖 戸畑工場	戸畑市築地町	吉田 俊郎	八四
臺灣製糖九州製糖所	三藩郡荒木村	遠山 愿	一一一
日本食料工業戸畑工場	戸畑市汐井崎	畑 啓次郎	一〇六
大日本製糖大里工場	門司市大里	山ノ城寛平	一八二
日本製粉門司工場	門司市大里	椎名 進	六四

(E) 雑工場

福岡日日新聞社工場	福岡市下警固	永江 眞郷	一八八
九州日報社工場	福岡市天神町	占部徳三郎	一〇〇
福岡印刷株式會社	福岡市上名島町	大隈壯太郎	八〇
秀巧社印刷所	福岡市渡邊通り	間 藤次郎	七六
大阪朝日新聞社九州支社	門司市東本町	福井鉄次郎	一一六
大阪毎日新聞社西部總局工場	門司市清瀬町	新谷 重造	一二五

(F) 特別工場

圓佛濱町第一製材工場	大牟田市濱町	圓佛 七藏	六四
合名會社林商會八幡工場	八幡市通町	林 友吉	八三
帝國再製紙袋會社	八幡市通町	大石伊太郎	九三
森山被服工場	福岡市大字比惠	森山 馨	五〇
田中洋服工場	八幡市熊手	田中 清一	七一
石原 縫工 工場	直方市殿町	石原 務	八一
古川電氣工業九州電線製造所	門司市大里	松浦 英雄	一一〇
石川商店門司麻袋工場	門司市大里	高田 一	五〇
東邦電力名島發電所	粕屋郡多々良村	植山 修郎	九七
九州共同火力發電三池出張所	大牟田市新港町	太田 光久	七六
九州電氣軌道小倉發電所	小倉市平松	村上 巧兒	一四九
日本製鐵八幡製鐵所戸畑作業所	戸畑市戸畑	渡邊 義介	六六七
日本製鐵八幡製鐵所	八幡市枝光	渡邊 義介	一、四六九
三井鐵山會社三池製煉所	大牟田市淺牟田町	尾平 惣藏	一、四〇八
株式會社淺野小倉製鋼所	小倉市許斐町	清宮 岳壽	六九四

使用職工數別工場數調

使用數別	工場數
千人以上のもの	一〇
五百人以上—千人未満	一六
百人以上—五百人未満	七〇
五十人以上—百人未満	五一
合計	一四七

第八章 交通

第一節 道路

産業の躍進と人口の非常な増加に伴ひ交通量の飛躍的增加で土木は大いに普及發達に刺戟され、福岡縣下は道路の設備においては九州第一と言つても過言ではあるまい。門司を發して博多を経て熊本に入る第二號國道、同じく門司を出て日豊線に沿つて大分に入る第三號國道を中心として、大小無數の縣道及び市町村道四通連鎖し、總延長三三・六五二杆(約八千五百六十一里)うち國道一八〇杆(約四五里七九)、縣道三・四〇八杆(約八百六十六里九)、市町村道三〇・〇六四杆(約七千六百四十八里二八)に達し、これに伴ふ橋梁も改善され、堅牢善美なコンクリート造が多い。

總資本金は三千百九十二萬五千圓である。最近四ヶ年間の國鐵及び地方鐵道の旅客及び貨物の輸送状況を見れば左の如し。

年 度	輸 送 量		運賃收入 千圓
	旅 客 千人	手小荷物 千個	
昭和五年(國地)	二四、五〇〇	一八、九一五	二九、一〇九
同 六 年(國地)	四七、七六六	八〇、九	二六、三七〇
同 七 年(國地)	三三、八三三	一九、四三三	二六、八四三
同 八 年(國地)	四三、六一一	九、一〇	二二、四九
同 七 年(國地)	二、三五四	一八、四九	二七、二九
同 八 年(國地)	三、八八八	六、六	二二、六
同 八 年(國地)	三、七七七	五、九	三、〇〇五
同 八 年(國地)	四、八〇二	三、八五	二、五九七

第三節 電車、軌道、自動車

(1) 電車及び軌道

電車及び軌道の運輸事業は、福岡縣に於ては全部私營會社によるものであ



日本調味料醸造會社	粕屋郡席内村	木原秀三	七一
富安合名會社	三井郡山川村	富安猪三郎	八八
大日本酒類醸造大里工場	門司市大里	澁谷虎之助	六七
櫻ビール株式會社	門司市大里	木村尙一	一九四
明治製糖戶畑工場	戶畑市築地町	吉田俊郎	八四
臺灣製糖九州製糖所	三潯郡荒木村	遠山愿	一一一
日本食料工業戶畑工場	戶畑市汐井崎	畑啓次郎	一〇六
大日本製糖大里工場	門司市大里	山ノ城寛平	一八二
日本製粉門司工場	門司市大里	椎名進	六四
(E) 雜工場			
福岡日日新聞社工場	福岡市下警固	永江眞郷	一八八
九州日報社工場	福岡市天神町	占部徳三郎	一〇〇
福岡印刷株式會社	福岡市上名島町	大隈壯太郎	八〇
秀巧社印刷所	福岡市渡邊通り	間藤次郎	七六
大阪朝日新聞社九州支社	門司市東本町	福井鉄次郎	一一六
大阪毎日新聞社西部總局工場	門司市清瀬町	新谷重造	一二五

九州共同火力發電三池出張所 <th>大牟田市新港町 <th>太田光久 <th>七六</th> </th></th>	大牟田市新港町 <th>太田光久 <th>七六</th> </th>	太田光久 <th>七六</th>	七六
九州電氣軌道小倉發電所	小倉市平松	村上巧兒	一四九
日本製鐵八幡製鐵所戶畑作業所	戶畑市戶畑	渡邊義介	六六七
日本製鐵八幡製鐵所	八幡市枝光	渡邊義介	一、四六九
三井鑛山會社三池製煉所	大牟田市淺牟田町	尾平惣藏	一、四〇八
株式會社淺野小倉製鋼所	小倉市許斐町	清宮岳壽	六九四
使用職工數別工場數調			
使用數別	工場數		
千人以上のもの	一〇		
五百人以上—千人未満	一六		
百人以上—五百人未満	七〇		
五十人以上—百人未満	五一		
合計	一四七		

## 第八章 交通

### 第一節 道路

産業の躍進と人口の非常な増加に伴ひ交通量の飛躍的增加で土木は大いに普及發達に刺戟され、福岡縣下は道路の設備においては九州第一と云うても過言ではあるまい。門司を發して博多を経て熊本に入る第二號國道、同じく門司を出て日豊線に沿つて大分に入る第三號國道を中心として、大小無数の縣道及び市町村道四通連鎖し、總延長三三・六五二軒(約八千五百六十一里うち國道一八〇軒(約四五里七九)、縣道三・四〇八軒(約八百六十六里九)、市町村道三〇・〇六四軒(約七千六百四十八里二八)に達し、これに伴ふ橋梁も改善され、堅牢善美なコンクリート造が多い。

### 第二節 國鐵

縣内における國有鐵道は鹿兒島本線、日豊線の二大幹線を中心として筑豊本線、久大線、三國線、その他筑豊炭田地方を縦横に走る諸線連絡してその總延長四六四・八軒に達し、本縣鐵路交通の根幹をなしてゐる。地方鐵道は博多灣鐵道、北九州鐵道、小倉鐵道など諸線合して總延長二二六・四軒國鐵と相連絡して地方交通の便を補つてゐる。目下十鐵道會社に經營されてゐる

總資本金は三千百九十二萬五千圓である。最近四ヶ年間の國鐵及び地方鐵道の旅客及び貨物の輸送状況を見れば左の如し。

年 度	輸 送 量		運賃收入 千円
	旅 客 千人	手小荷物 千疋	
昭和五年(國地)	二四、五〇	一八、九五	二六、三七
同 六 年(國地)	四七、六六	八〇	三三、七〇
同 七 年(國地)	三三、八二	一九、四三	二六、八四
同 八 年(國地)	四三、八一	九一〇	三〇、六三
同 九 年(國地)	三二、五〇	一、四三	二五、八二
同 一〇 年(國地)	三三、八二	一、四三	二七、二六
同 一一年(國地)	三三、八二	一、四三	二七、二六
同 一二年(國地)	三三、八二	一、四三	二七、二六

### 第三節 電車、軌道、自動車

#### (1) 電車及び軌道

電車及び軌道の運輸事業は、福岡縣に於ては全部私營會社によるものであつて、昭和十一年度には十二會社、總資本金二〇六、四三三、五〇〇圓その經營路線の總里數は二四九・四軒で、その性能は一、二の瓦斯又は蒸氣利用によるものを除けば殆んど電氣によるもので、その路線は殆んど後段各市部の項に於て見る如く市街地を主としてゐる。

#### (2) 自動車

昭和五年度に於て僅かに二、六五一臺(内乗用一、九七〇臺、貨物用六八一)に過ぎなかつた福岡縣の自動車數は、昭和十年度には三、二九三輛(内乗用

二、五四四輛、貨物用七三八輛)となり著しき増加ぶりである。このほかバスは市郡部に縦横の路線網を張つて居り、九鐵の福岡、久留米の電車に沿つて熊本に通ずる縣外連絡自動車網の如きものがある。

### 第四節 海運

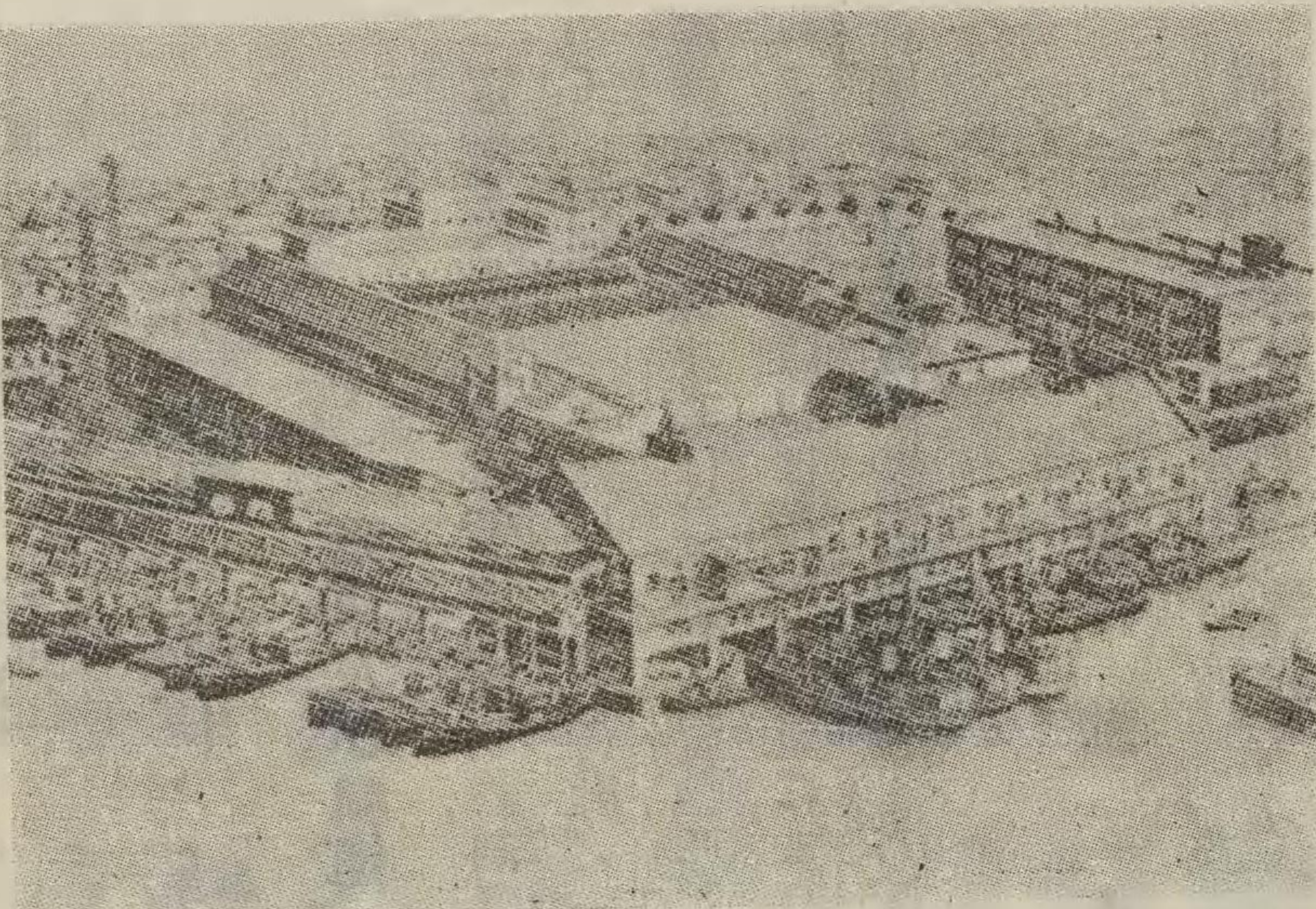
福岡縣の海岸線は三面海に臨み、海岸線屈曲に富み到る處良港に乏しからず、大小合して二十三港の多きに達し、就中、門司、若松、博多、三池の三四



門司税關岸壁

港は内外貿易上主要な役割を占め戸畑港は近時漁港として目躍しく發展して來た。その詳細なる解脫は各海港都市の項を参照せられ度い。こゝでは主要四港を略記するに止める。

**門司港** 九州の東北端、門司港は對峙する下關港と共に日本の重要な通過寄港地として通商上にも軍事上にも重要な使命を持つてゐる。福岡縣の今日の隆盛は、實に重要な海港として天恵の門司港灣あることにかゝつてゐると云つても過言ではない。隣邦滿洲、



戸畑港全景

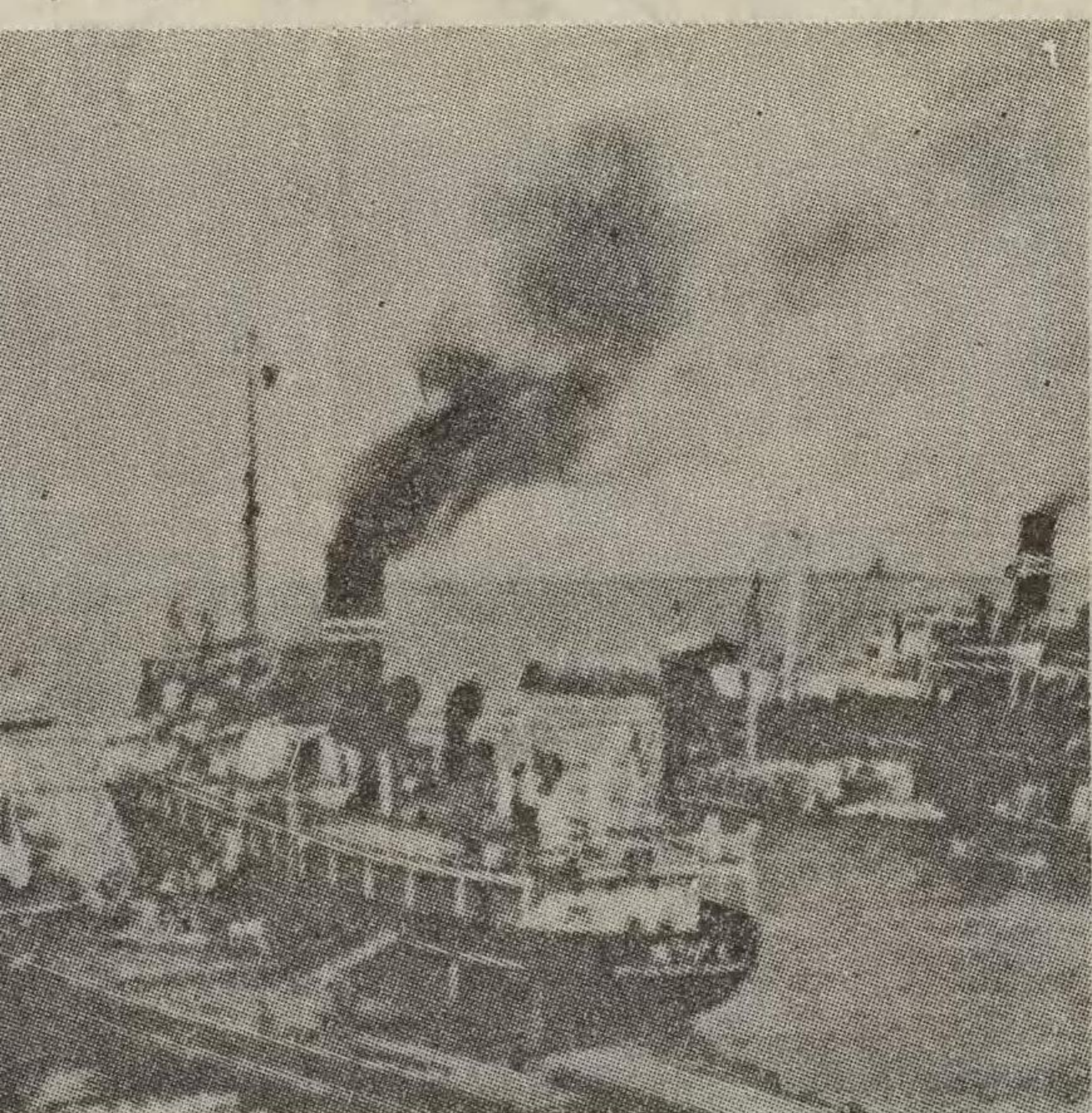
支那を始め、東洋、歐米、アフリカ等の各國との航通にとりて、門司港は横濱、神戸と共に日本最大の意義を持つ港である。往時、寂寥たる一寒村であつた門司港が今日の如き大飛躍を遂げるとは何人も夢想だになかつた處であらう。最近三、四十年間に鐵道の開通、築港の完成、關門海峡の大修築等により、殊に最近門司市が舉市一致的の大努力の下に完成した岸壁は、斷然良港としての申分のない設備を備へた譯で、一ヶ年間の出入船舶は五十一萬隻、貨物輸出入總額七億圓に達せんとしてゐる。

**戸畑港** 若松港と向ひ、北九州工業地帯特に筑豊炭田地方の開発に伴つて飛躍的發展をなし、大正十五年市營を以て埠頭の築造を完成し、續いて昭和四年右埠頭に戸畑冷蔵會社の創立されるや、共同漁業系統のトロール船は石炭、氷等の積取並に鮮魚の迅速處理上當港が極めて經濟的に優越せるを認め續々寄港するに至り、更に市が二十餘萬圓を投じ臨港鐵道を敷設した結果噸に漁港として經濟價値を増大し、今や本港を根據地とする漁船は支那沿岸は勿論遠く濠洲、南米、南極氷洋迄進出し、我が國有數の漁業港として飛躍

しつゝある。

**若松港** 洞海湾の灣口に位し、明治二十三年若松築港會社設立されて以來、筑豊炭田地方への鐵道の敷設とともに集散炭量の著しい増加、附近各市の工業の勃興發展に伴ふ商取引の活潑などにより最近出入する船舶は年間約十三萬隻で、その貿易額は石炭の七千二百萬圓をはじめ、出入總額三億七千七百萬圓を突破し、石炭の港として名高い。

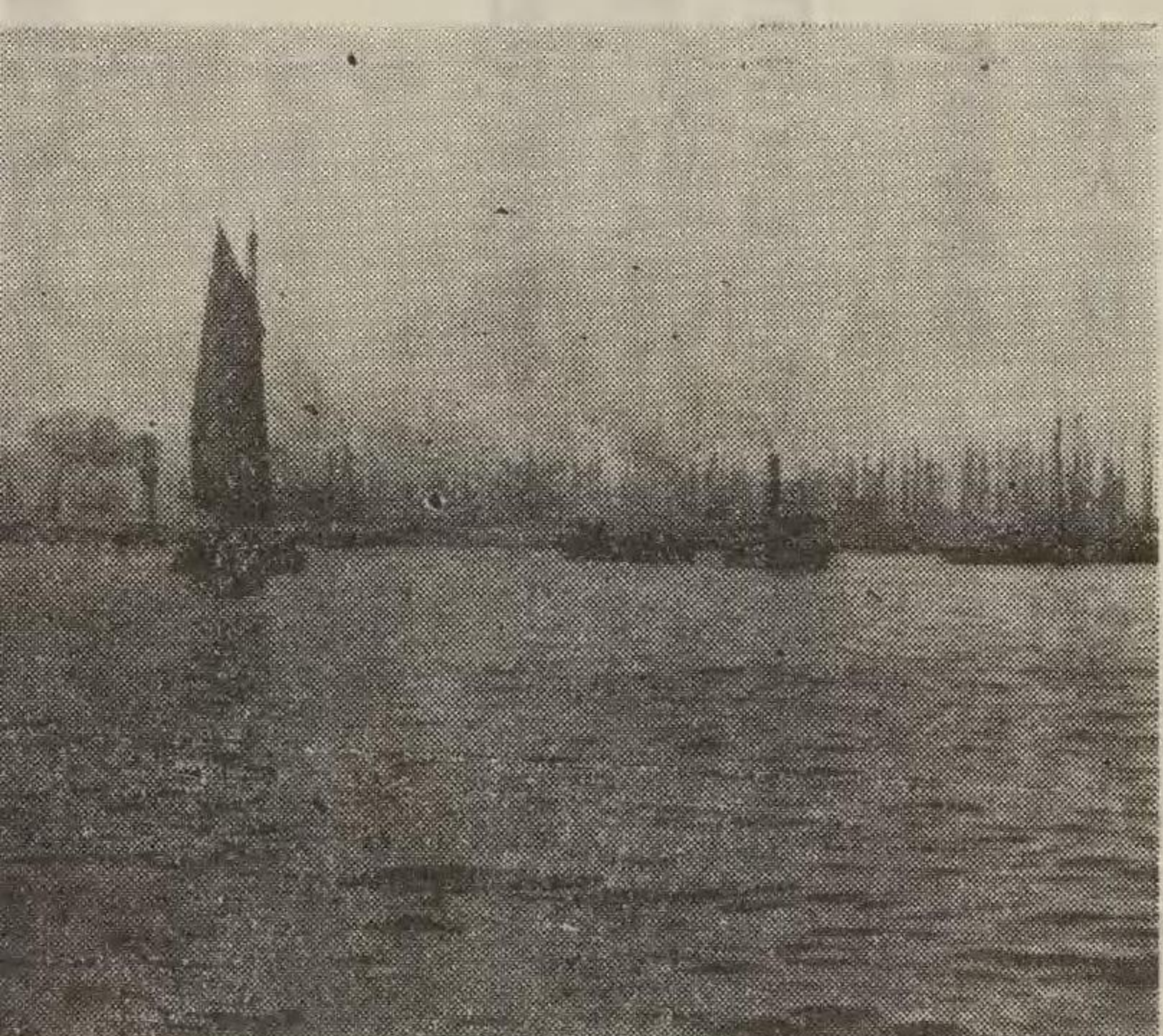
**博多港** 博多港は明治三十三年に開港として指定せられたものであるが、既に往時より元の大軍の襲來、博多小女郎浪枕等によりて知られてゐる如く、對外通商港として縣下各諸港のどれよりも早



博多港

あつた。

然し福岡市方面の築港は單に陸運の完備のみでは満足されない状態にあるも、滿洲事變以後、門司港を経ず直接滿洲、朝鮮、支那、臺灣等との通商を要望する聲が盛んになり、遂に福岡市は市營を以て大博多港の築港計畫を樹立し、昭和二年に第二種重要港灣の指定を受け、昭和四年より國費及縣費の補助により内務省直轄工事として、豫算總額三、七六一、五



若松港

一〇圓、八箇年繼續事業として起工に著手、殆んど完成を見るに至り、昭和十一年四月大博多築港完成記念の博覽會を開いて廣くその成果を中外に發揚したが、將來博多港がその地點と軍事的價値から



門司税關岸壁

戸畑港は近時漁港として目躍しく發展して來た。その詳細なる解説は各海港都市の項を参照せられ度い。こゝでは主要四港を略記するに止める。

### 門司港

九州の東北端、門司港は對峙する下關港と共に日本の重要な通過寄港地として通商上にも軍事上にも重要な使命を持つてゐる。福岡縣の今日の隆盛は、實に重要な海港として天恵の門司港灣あることにかゝつてゐると云つても過言ではない。隣邦滿洲、



景

により、殊に最近門司市が舉市一致的の大努力の下に完成した岸壁は、斷然良港としての申分のない設備を備へた譯で、一ケ年間の出入船舶は五十一萬隻、貨物輸出入總額七億圓に達せんとしてゐる。

### 戸畑港

若松港と向ひ、北九州工業地帯特に筑豊炭田地方の開発に伴つて飛躍的發展をなし、大正十五年市營を以て埠頭の築造を完成し、續いて昭和四年右埠頭に戸畑冷蔵會社の創立されるや、共同漁業系統のトロール船は石炭、氷等の積取並に鮮魚の迅速處理上當港が極めて經濟的に優越せるを認め續々寄港するに至り、更に市が二十餘萬圓を投じ臨港鐵道を敷設した結果頗る漁港として經濟價值を増大し、今や本港を根據地とする漁船は支那沿岸は勿論遠く濠洲、南米、南極氷洋迄進出し、我が國有數の漁業港として飛躍

しつゝある。

### 若松港

洞海灣の灣口に位し、明治二十三年若松築港會社設立されて以來、筑豊炭田地方への鐵道の敷設とともに集散炭量の著しい増加、附近各市の工業の勃興發展に伴ふ商取引の活潑などにより最近出入する船舶は年間約十三萬隻で、その貿易額は石炭の七千二百萬圓をはじめ、出入總額三億七千七百萬圓を突破し、石炭の港として名高い。

### 博多港

博多港は明治三十三年に開港として指定せられたものであるが、既に往時より元の大軍の襲來、博多小女郎浪枕等によりて知られてゐる如く、對外通商港として縣下各諸港のどれよりも早くから開港されてゐたものである。然し水深淺く、大船、巨船の碇泊に不便で、所謂沖碇泊を餘儀なくされてゐるために永く不振の状態に置かれてゐた。

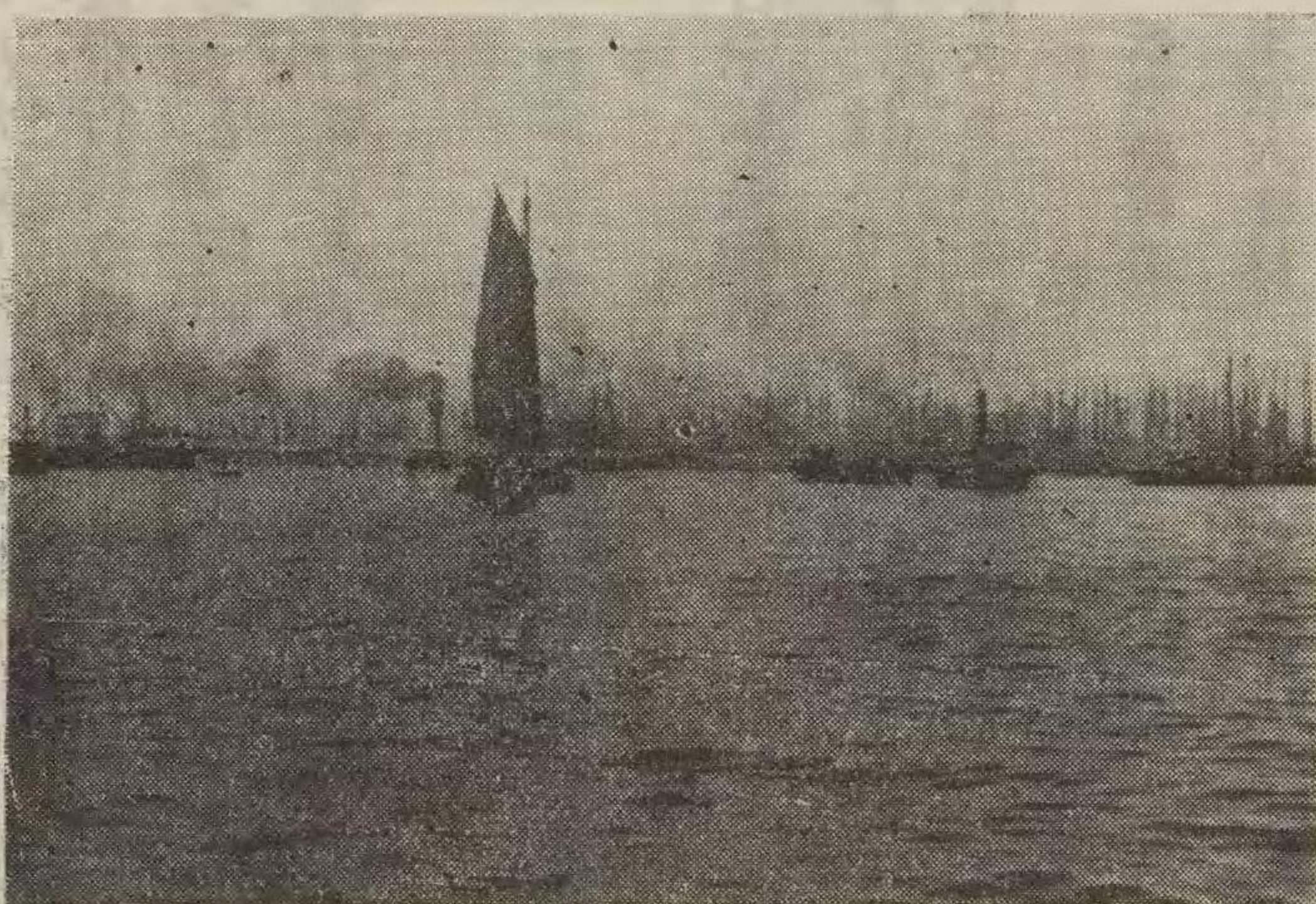


博多港

明治四十一年に博多築港株式會社が、現在の石堂川により那珂川に至る博多船溜築成を完備し、博多港の往時に勝る繁榮を誘引せんと試みたが灣内の遠淺には如何とも出來ず、單に近縣航路の小型船舶のみの出入を見るだけで

あつた。

然し福岡市方面の繁榮は單に陸運の完備のみでは満足されない状態にあるも、滿洲事變以後、門司港を経ずに直接滿洲、朝鮮、支那、臺灣等との通商を要望する聲が盛んになり、遂に福岡市は市營を以て大博多港の築港計畫を樹



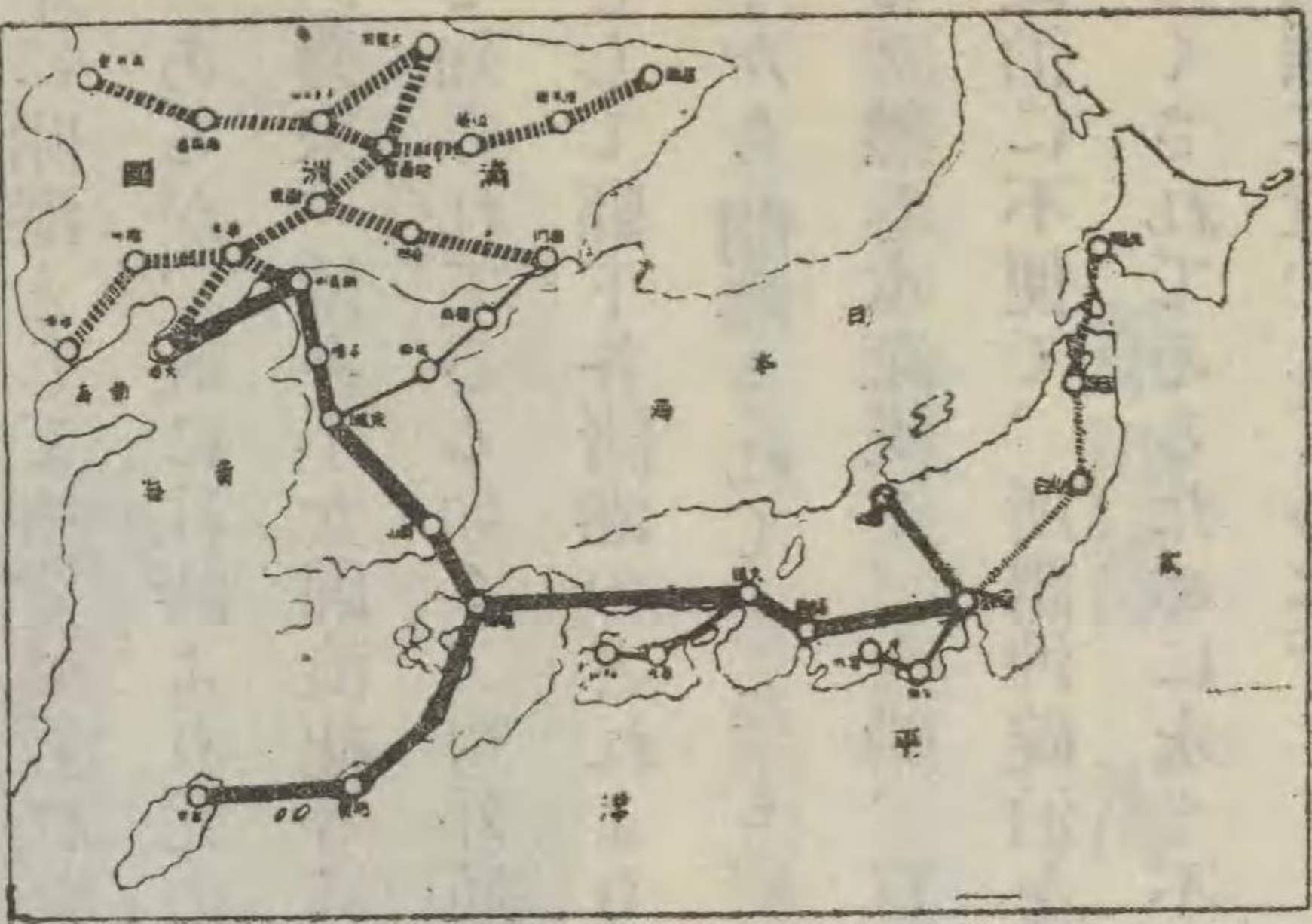
若松港

立し、昭和二年に第二種重要港灣の指定を受け、昭和四年より國費及縣費の補助により内務省直轄工事として、豫算總額三、七六一、五〇圓、八箇年繼續事業として起工に著手、殆んど完成を見るに至り、昭和十一年四月大博多築港完成記念の博覽會を開いて廣くその成果を中外に發揚したが、將來博多港がその地點と軍事的價值からも必ず相當の繁榮を見ることは明かであつて、現に博多港の對外通商状態は茲三、四年間驚くべき状態に立ち直つてゐる。

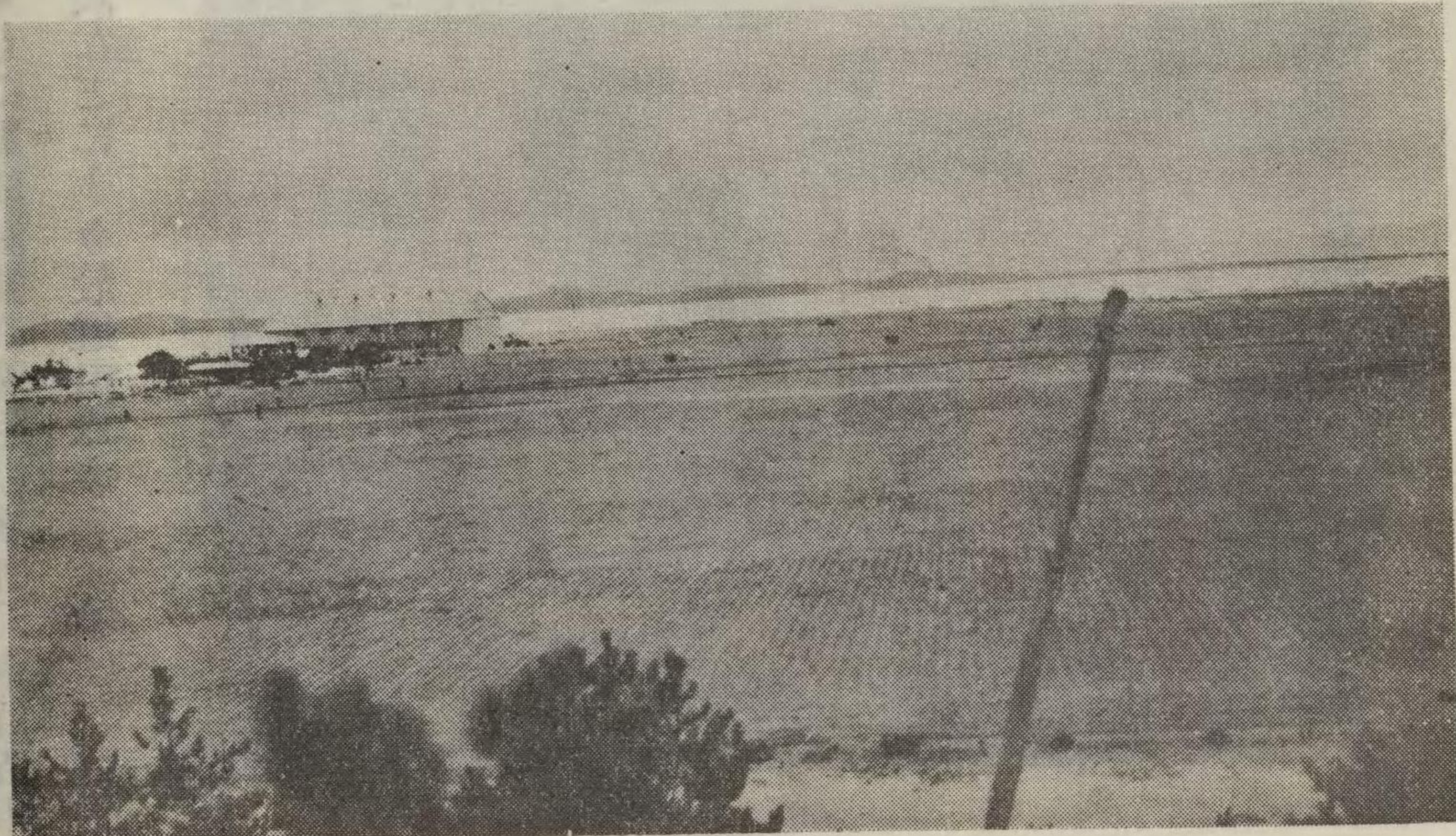
### 三池港

熊本縣との境四ツ山下にあり、有明海に於ける本縣唯一の開港にして、三井鑛山株式會社の築營に係り三池炭田の石炭輸出港として名をなし、港内は内港及外港の二部に分れ、内港は精巧なる船渠式設備にして同會社之を専用し、外港は一般に開放されてゐる。一箇年間の出入船舶は約五千

隻に及び、石炭の一千七百萬圓外染料、硫安等總額三千九百六十萬圓の輸出あり、大牟田市附近一帯の諸工業の發達と共に益々活況を呈してゐる。



上圖は日本航空の航空路線圖  
下圖は雁の集福岡第一飛行場



### 第五節 空 運

#### (1) 陸軍飛行場

航空の發達は軍事的重要性をもつのみならず、將來の運輸發達上忽緒に附せられないもので、本縣には太刀洗飛行第四聯隊(朝倉郡三井郡)にかゝる陸軍飛行場があり、遞信省の粕屋郡多々良村の福岡第二飛行場(名島水上飛行場)と、昭和十一年六月六日竣工式をあげた粕屋郡和白村雁ノ巢の福岡第一飛行場がある。

#### (2) 日本航空輸送株式會社

日本航空輸送會社は現在福岡市に營業所を、名島と雁ノ巢に支所を設け、朝鮮にはスリーM機が、南溟の空には巨鳳ダグラスの富士、新高號が、内地間はスーパー機が就航してゐる。

航空路線名	發着地	發航日	路線開始年月日
東京大連線	雁ノ巢	日曜を除き一日一往復	昭和七年四月一日
大阪上海線	名島	同	同
福岡臺北線	雁ノ巢	一週三往復	同 十年十月一日

目下大阪福岡間一部就航

## 第九章 内外貿易及倉庫業

### 第一節 概 観

莫大な生産額と滿鮮、支那、南洋その他各地との交通の要位によつて急速な發展をとけ縣内各港における大正元年における内外貿易の出入總額一億四千五百五十四萬圓が昭和元年には一躍七億三千六百八十四萬圓、さらに昭和九年においては十四億八千七百七十二圓といふ躍進膨脹のすがたこそ目覺しい、次の第一圖を参照せられ度い。

況で示すと次の通りである。

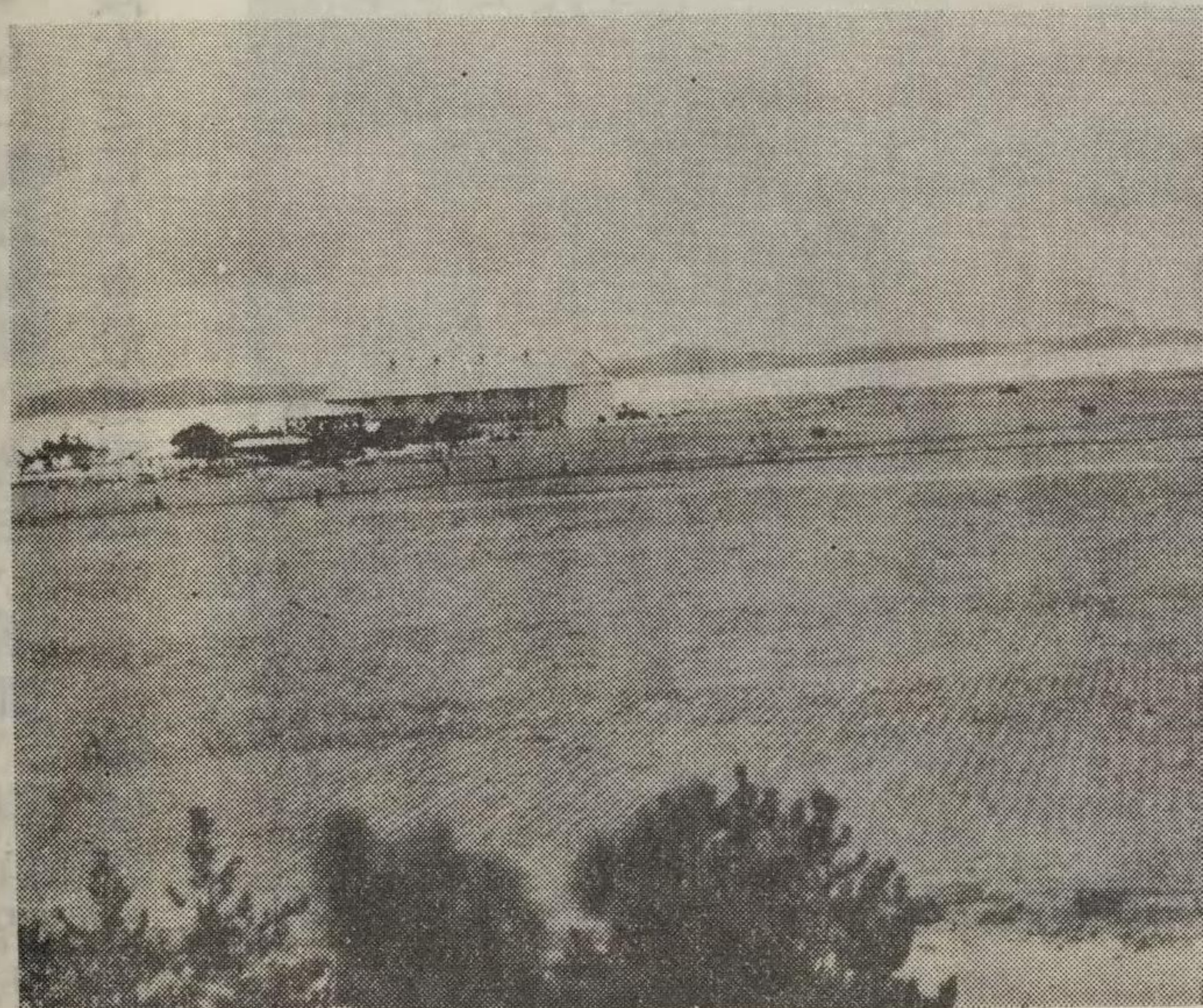
年次	貨物別		計
	移出額	移入額	
昭和五年	四九〇、〇六六、六九五	三三三、三六六、三九九	七二三、四三三、〇六五
同 六 年	三九八、八六九、〇三九	二七二、八二八、八三三	六七一、六九七、八七二
同 七 年	四八八、九九九、九四五	三四〇、九三三、三三四	八二九、九三三、二八九

之れが移出入港の主なるものは、門司、若松、博多、三池、西戸崎、宇島の諸港にして、最近五ヶ年間の内國貿易の躍進狀況を示せば左の如し。

### 第二節 内外貿易



上圖は日本航空の航空路線圖  
下圖は雁の集福岡第一飛行場



(2) 日本航空輸送株式會社

日本航空輸送會社は現在福岡市に營業所を、名島と雁ノ巢に支所を設け、朝鮮にはスリーM機が、南溟の空には巨鳳ダグラスの富士、新高號が、内地間はスパー機が就航してゐる。

航空路線名	發着地	發航日	路線開始年月日
東京大連線	雁ノ巢	日曜を除き一日一往復	昭和七年四月一日
大阪上海線	名島	同	同
福岡臺北線	雁ノ巢	一週三往復	同 十年十月一日

目下大阪福岡間一部就航

## 第九章 内外貿易及倉庫業

### 第一節 概観

莫大な生産額と滿鮮、支那、南洋その他各地との交通の要位によつて急速な發展をとけ縣内各港における大正元年における内外貿易の出入總額一億四千五百五十四萬圓が昭和元年には一躍七億三千六百八十四萬圓、さらに昭和九年においては十四億八千七百七十二圓といふ躍進膨脹のすがたこそ目覺しい、次の第一圖を参照せられ度い。

### 第二節 内外貿易

#### (イ) 内國貿易

本縣の内國貿易に於ける主要移出入先は京濱、阪神、瀬戸内海各地及朝鮮臺灣等にして、昭和九年中内國貿易に従事した船舶の本縣各港出入總額は三十五萬三千六百九十隻、四千十六萬五千噸(石數船は十石を以て、一噸に換算以下同)内汽船は十五萬九千三百八十隻、二千七百七十九萬七千噸、帆船は十九萬四千三百四隻、一千二百三十六萬七千噸にして、又其の出入貨物の價格は、總額十二億七千四百七十四萬圓、内移出額七億四千五百二十七萬圓、移入額五億二千九百四十七萬圓の多數を示してゐる。これを主要貨物別の概

況で示すと次の通りである。

貨物別	移出額	移入額	計
穀類	二六、五四、四三	三六、三九、三五	六四、九三、八五
酒類	一四、一五四、二七	一〇、〇三、一五〇	二四、二七六、五七
織物	一一、三三、〇六	三〇、四七九、三五	三、八四、三三
木材	五、三三、三七	一八、七八、五九	二四、〇三、八七
石炭	二五、八〇三、六三	一五、八〇、二二	一四、六三、八三
其他	五〇、九六、九七	四六、一六、四六	九七、〇八二、四五
合計	七四、七三、九三	五九、四六、二四	一、二七四、七四九、〇八七

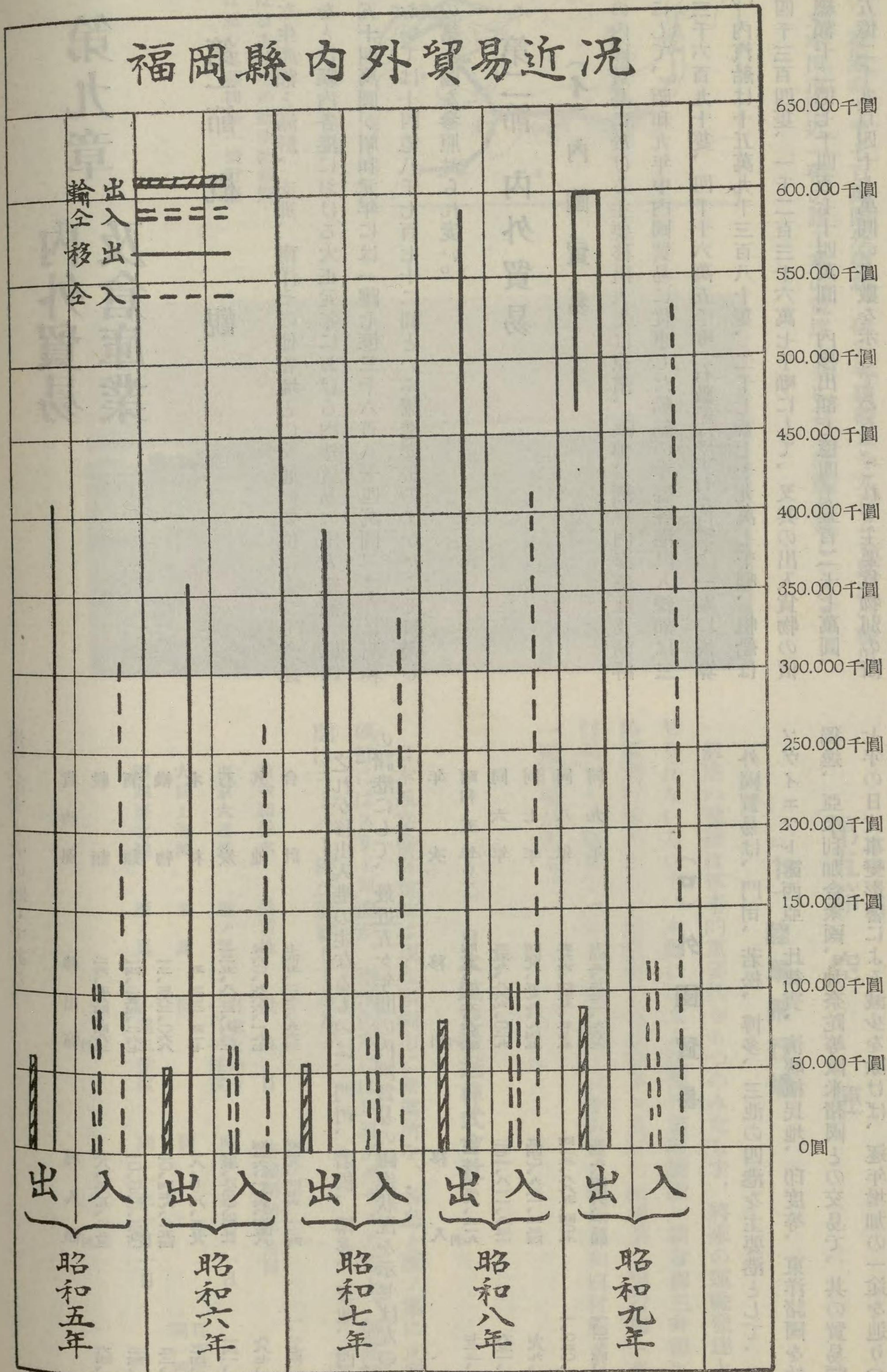
之れが移出入港の主なるものは、門司、若松、博多、三池、西戸崎、宇島の諸港にして、最近五ヶ年間の内國貿易の躍進狀況を示せば左の如し。

年次	移出	移入	計
昭和五年	四九、〇六、九五	三三、三六、三九	七三、三六五、〇四
同六年	三九、八六、〇九	二七、八一、八三	六三、六〇、八六〇
同七年	四六、五九、四五	三四、九三、三〇	七九、五三、一七九
同八年	五九、四九、五五	四三、八五、四五	一、〇三〇、三四、九〇
同九年	七四、三三、六三	五九、四六、二四	一、二七四、七四九、〇八七

#### (ロ) 外國貿易

外國貿易は、門司、若松、博多、三池の四港を主要港として、滿洲、支那ソヴイェット露西亞、比律賓、海峽植民地、印度等、東洋諸國を始め、英國獨逸、亞米利加合衆國、加奈陀等歐米諸國との交易で、其の貿易額も昭和六年の日支事變影響による減少を除けば、逐年増加の一途を辿りつゝあり、

### 福岡縣内外貿易近況



昭和五年以降の概要を挙げれば左の如し。

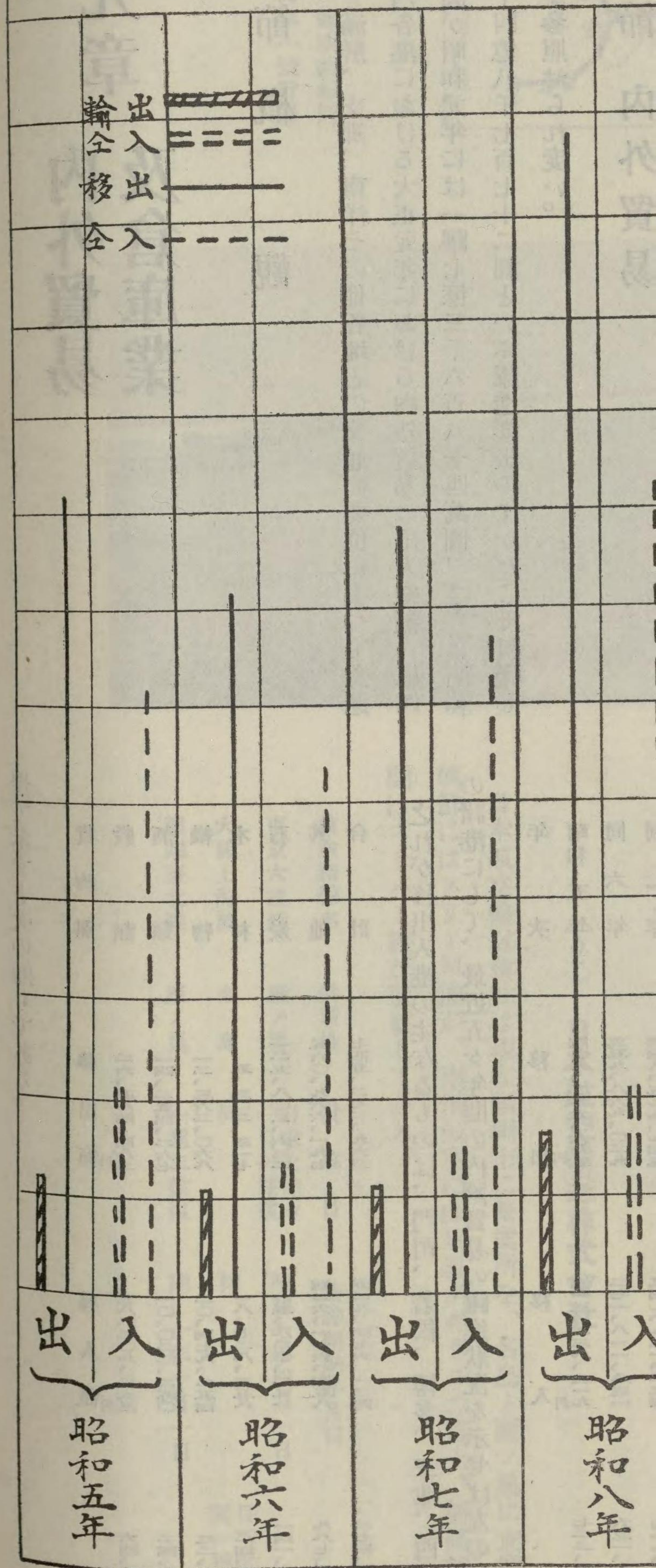
今昭和九年中に於ける本縣各港外國貿易の状況を見るに、輸出入總額は二億一千二百九十八萬圓、内輸出八千三百九十萬圓、輸入一億二千九百七萬圓である。

年次	輸出入額	計
昭和五年	六五、七五七、三三三	一七、七二八、〇三二
昭和六年	五、九三九、九九八	一三、〇三三、一九八
昭和七年	五、九三九、七七三	一三、〇三三、五五七
昭和八年	六、六六八、六三三	一三、〇三三、〇七九
昭和九年	八三、九〇四、四四三	二二、〇七六、四六六

品名	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年
其他の乾魚	五五、七〇九	一四九、七六四	一六三、七四三	一七九、五〇五	一四九、七六四
鹹魚	一四九、七六四	一六三、七四三	一七九、五〇五	一八二、二四〇	一六三、七四三
罐詰及罐詰食物	二八九、五四九	一八二、二四〇	五九九、六七九	二五〇、五六〇	一八二、二四〇
清酒	一八二、二四〇	五九九、六七九	二五〇、五六〇	一五五、五三四	一八二、二四〇
麥酒	五九九、六七九	二五〇、五六〇	一五五、五三四	四五九、三四六	五九九、六七九
鳥卵	二五〇、五六〇	一五五、五三四	四五九、三四六	一、九二五、二三三	二五〇、五六〇
硬油	一、五五三、五三四	四五九、三四六	一、九二五、二三三	三六六、六八	一、五五三、五三四
木蠟	四九、三四六	一、九二五、二三三	三六六、六八	九四六、一〇七	四九、三四六
コールドター	四九、三四六	一、九二五、二三三	三六六、六八	九四六、一〇七	四九、三四六
ル染料	一、二九八、七四	二九八、八九〇	三六六、六八	九四六、一〇七	一、二九八、七四
苛性曹達及	九四六、一〇七	三六六、六八	九四六、一〇七	三六六、六八	九四六、一〇七
曹達灰	七五、六六五	一六、〇六六	八三、一六九	四、五三三、八五九	七五、六六五
足袋	七五、六六五	一六、〇六六	八三、一六九	四、五三三、八五九	七五、六六五
紙靴	三、六三三、三七七	二、四九〇	四、五三三、八五九	三、一八九、八二六	三、六三三、三七七
ズツク靴	三、六三三、三七七	二、四九〇	四、五三三、八五九	三、一八九、八二六	三、六三三、三七七
紙	三、一八九、八二六	二、四九〇	四、五三三、八五九	三、一八九、八二六	三、一八九、八二六
石炭	三、一八九、八二六	二、四九〇	四、五三三、八五九	三、一八九、八二六	三、一八九、八二六
セメント	五、七七八、五三三	一、三七七、〇三三	五、一五六、一四八	六、六四九、三三九	五、七七八、五三三
窓硝子	一、二六三、四一六	一、七四、四八二	七、六六	五、九六〇、六六三	一、二六三、四一六

# 福岡縣内外貿易



昭和五年以降の概要を挙げれば左の如し。

今昭和九年中に於ける本縣各港外國貿易の状況を見るに、輸出入總額は二億一千二百九十八萬圓、内輸出八千三百九十萬圓、輸入一億二千九百七萬圓である。

輸出品目	門司港		若松港		博多港		三池港		計
	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	
米	3,600,930								3,600,930
小麥粉	2,264,633				3,000,289				5,264,922
果實	994,414								994,414
精糖	4,003,553						54,236		4,057,789
鮮魚介	28,004								28,004
乾鰯	1,678,833								1,678,833
計	12,071,738	71,733	23,346,594	48,386,940	3,000,289	3,627,840	58,133,734	71,733	104,673,028

輸出品目	門司港		若松港		博多港		三池港		計
	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	
其他の乾魚									55,709
鹹魚									149,764
煎魚									16,733
罐詰及罐詰食物									289,549
清酒									181,240
麥酒									599,679
鳥卵									25,560
硬油									1,553,554
木蠟									459,346
染料									299,890
苛性曹達及灰									946,107
曹達袋									75,645
足袋									26,066
布ツク靴									3,653,347
紙									3,298,816
炭									1,777,033
セメント									5,784,553
硝子									1,263,466
硝子製品									333,055
珫那鐵器									949,677
レール									15,525,243
條及竿鐵									1,977,393
硫磺									28,005
硝酸									19,531
炭化石灰									131,957
藥劑化學藥									374,033
雜品									6,548,873
合計									104,673,028







# 第十章 金融、證券及び保險界

## 第一節 商業

商業については、讀者は幾度か各都市の状況において當面されるところであるから左に會社數のみを示すに止め、本項では専ら金融機關の状況と證券業について簡單にふれておき度いと思ふ。

### (1) 會社數

合資會社	社數 九八四社	出資額 二五、二二七千円
全國順位	九	六
株式會社	社數五九七	公稱資本金四七〇、八九六千円
全國順位	八	六
		拂込資本金三三六、二一二千円

## 第二節 銀行

福岡縣に於ける本店銀行としては、十七銀行を筆頭に博多銀行があり、筑紫平野には農工商の機關として生吉銀行、八女銀行等がある。又飯塚地方には麻生系の嘉穂銀行、嘉穂貯蓄銀行他二十四行がある。(次表参照)  
これらの本店銀行以外に門司市には、山口、福岡、大分、佐賀、長崎各縣

の金融を統轄せる日本銀行門司支店があり、門司市には下關の金融をも包含した手形交換所があり、安田、三井、住友、第一、大分合同の各銀行の支店がある。  
小倉市には第一、安田、住友の各支店、若松市には安田、三井、住友の各支店がある。

福岡市は縣の主都であるだけに、博多、十七の地元兩銀行の外勸銀、興銀第一、安田、三井、住友、三和、野村、大分貯蓄、不動貯蓄其他の銀行の支店が軒を並べてゐるかの如く群立してゐる。

只獨り大牟田市のみは全市宛然三井の息吹きのかゝらざるところはないと云ふ位の有様であるだけに金融上にも一個の獨立的金融地帯をなしてゐる。即ち各種別に表示すると次の如くである。

### (イ) 普通銀行 (各項の左行の數字は全國順位を示す)

本店	支店	拂込資本金	積立金	純益金	配當金
三〇	一三〇	一七、五九九千円	四、一六四千円	一、一九六千円	八〇六
二	六	一四	二〇	一四	一三

### (ロ) 貯蓄銀行

三	九	四〇〇千円	一三八千円	四六千円	二〇
五	一四	二一	二三	二四	二一

### (1) 本店銀行概況

縣下の本店銀行を掲げると次の如くである。(昭和十年末縣商工課調査に據る)

同	北豐銀行	一、〇〇〇	昭和三、二、三	築上郡八屋町
同	椎田合同銀行	一、五〇〇	同 三、二、三	同 椎田町
同	三池貯蓄銀行	五〇〇	大正二〇、一、五	大牟田市旭町
同	嘉穂貯蓄銀行	五〇〇	同 一〇、一、三	飯塚市
同	筑豊貯蓄銀行	六〇〇	同 一〇、一、三	直方市殿町

以上の如くで、本店銀行は要するに大銀行が市町村及び農村の中産階級が金融に對して殆んど無關心であつたことに對する一つの反抗とも云へる程、各町村の金融機關として活躍して來た古い歴史を持つもので、これを單なる銀行經營の理想論より見た一縣一行主義の如き、恐らくは大銀行が中小商工業者及び小中農に對する金融、所謂庶民金融に無關心である限りに於ては、單に一理想論たるに終るのではあるまいか。

殊に産業組合及び諸他の機關が、稍もすれば本來の使命遂行を忘却したかの如き嫌があるとの世評を生むに至つては、庶民の頼るべき金融機關として、これらの本店銀行と無盡事業あるのみと云ふの他ない。

行名	公稱資本金	設立年月日	本店營業所々在地
株式會社十七銀行	一〇、一〇〇千円	明治〇、九、六	本店營業所々在地
博多銀行	二、一五〇	大正一五、一、〇	福岡市橋口町
壹岐銀行	一、〇〇〇	明治五、一〇、一〇	同 下土居町
生吉銀行	一、二〇〇	同 二四、三、四	同 姪濱町
八女銀行	一、〇〇〇	昭和四、七、三	浮羽郡吉井町
嘉穂銀行	二、〇〇〇	明治三、三、三	八女郡福島町
筑前銀行	五〇〇	大正九、三、〇	飯塚市向町
三池銀行	一、二〇〇	明治九、〇、一〇	粕屋郡箱崎町
鞍手銀行	一、〇〇〇	同 二九、八、八	大牟田市旭町
彌壽銀行	一、二〇〇	大正二、五、〇	直方市古町
甘木銀行	六〇〇	明治三、四、一	朝倉郡三輪村
三奈木銀行	五〇〇	大正一〇、五、五	同 甘木町
御笠銀行	五〇〇	明治九、一〇、三	同 三奈木村
筑紫銀行	五〇〇	同 三、五、三	筑紫郡二日市町
武石銀行	五〇〇	大正八、五、〇	同 二日市町
田主丸銀行	一、〇〇〇	明治二、五、五	同 田主丸町

業について簡単にふれておき度いと思ふ。

(1) 會社數

合資會社	社數	九八四社	出資額	二五、二二七
全國順位		九		六
株式會社	社數	五九七	公稱資本金	四七〇、八九六
全國順位		八		六
			拂込資本金	三三六、二一二
				六

第二節 銀行

福岡縣に於ける本店銀行としては、十七銀行を筆頭に博多銀行があり、筑紫平野には農工商の機關として生吉銀行、八女銀行等がある。又飯塚地方には麻生系の嘉穂銀行、嘉穂貯蓄銀行他二十四行がある。(次表参照)  
これらの本店銀行以外に門司市には、山口、福岡、大分、佐賀、長崎各縣

云ふ位の有様であるだけに金融上にも一個の獨立的金融地帯をなしてゐる。即ち各種別に表示すると次の如くである。

(1) 普通銀行 (各項の左行の數字は全國順位を示す)

本店	支店	拂込資本金	積立金	純益金	配當金
三〇	一三〇	一七、五九九	四、一六四	一、一九六	八〇六
二	六	一四	二〇	一四	一三

(2) 貯蓄銀行

三	九	四〇〇	一三八	四六	二〇
五	一四	二一	二三	二四	二一

(1) 本店銀行概況

縣下の本店銀行を掲げると次の如くである。(昭和十年末縣商工課調査に據る)

同	北豐銀行	一、〇〇〇	昭和三、二、三	築上郡八屋町
同	椎田合同銀行	一、五〇〇	同	同 椎田町
同	三池貯蓄銀行	五〇〇	大正一〇、三、五	大牟田市旭町
同	嘉穂貯蓄銀行	五〇〇	同	飯塚市
同	筑豊貯蓄銀行	六〇〇	同	直方市殿町

以上の如くで、本店銀行は要するに大銀行が市町村及び農村の中産階級が金融に對して殆んど無關心であつたことに對する一つの反抗とも云へる程、各町村の金融機關として活躍して來た古い歴史を持つもので、これを單なる銀行經營の理想論より見た一縣一行主義の如き、恐らくは大銀行が中小商工業者及び小中農に對する金融、所謂庶民金融に無關心である限りに於ては、單に一理想論たるに終るのではあるまいか。

殊に産業組合及び諸他の機關が、稍もすれば本來の使命遂行を忘却したかの如き嫌があるとの世評を生むに至つては、庶民の頼るべき金融機關としては、これらの本店銀行と無盡事業あるのみと云ふの他ない。

幸に過ぐる金融恐慌をもよく克服し、切り抜け得たこれらの地元銀行は、地元民唯一の金融機關として將來益々その特徴を發揮して、よく庶民金融の使命遂行に努力せんことを記者は希望しつつ、記者が視察した二、三の銀行内容を左に紹介してこの項を終ることにする。

A 十七銀行

福岡市博多橋口町五番地株式會社十七銀行は全國普通銀行中第十八位、九州に於て第一位の預金を擁し、期と共に隆々たる進展の狀を示して居る。安田

行名	公稱資本金	設立年月日	本店營業所々在
株式會社十七銀行	一〇、一〇〇	明治〇、九、一六	福岡市橋口町
博多銀行	二、一五〇	大正一五、一、三〇	同 下土居町
壹岐銀行	一、〇〇〇	明治三五、一〇、一〇	同 姪濱町
生吉銀行	一、二〇〇	同 二四、三、四	浮羽郡吉井町
八女銀行	一、〇〇〇	昭和四、七、三	八女郡福岡町
嘉穂銀行	一、〇〇〇	明治三、三、三	飯塚市向町
筑前銀行	五〇〇	大正九、三、三〇	粕屋郡箱崎町
三池銀行	一、一〇〇	明治九、〇、一〇	大牟田市旭町
鞍手銀行	一、〇〇〇	同 二九、八、八	直方市古町
彌壽銀行	一、一〇〇	大正二、五、一〇	朝倉郡三輪村
甘木銀行	六〇〇	明治三、四、一	同 甘木町
三奈木銀行	五〇〇	大正〇、五、五	同 三奈木村
御笠銀行	五〇〇	明治三、〇、三	筑紫郡二日市町
筑紫銀行	五〇〇	同 三、五、三	同 二日市町
武石銀行	五〇〇	大正八、五、三〇	同
田主丸銀行	一、〇〇〇	明治三、五、五	同 田主丸町
筑後銀行	八〇〇	同 三、九、八	同 水分村
興産銀行	一、〇五〇	大正三、四、三〇	同 吉井町
大東銀行	五〇〇	明治三、六、三	同 御幸村
北野銀行	五〇〇	同 三、九、一	三井郡北野町
草野銀行	五〇〇	同 三、九、二	同 草野町
明十銀行	五〇〇	同 一四、六、一	同 味坂村
筑後銀行	五〇〇	同 三、一、五	同 善導寺村
大溝銀行	五〇〇	大正九、九、元	三潞郡大溝村
水田銀行	一、〇〇〇	昭和四、三、三〇	八女郡水田村
野田銀行	一、〇〇〇	大正三、二、二五	同 上妻村
柳河銀行	一、〇〇〇	明治二、二、二八	山門郡柳河町

家の經營であり、新興商業都市福岡を本據に支店二十四、出張所二、北九州金融界の動脈たる使命を果しつゝある。

抑も同行は明治十年第十七國立銀行に創り、同三十二年營業滿期と共に茲に株式會社十七銀行と改稱、舊福岡藩主黒田家を主とし當地有力者を以て經營せられたのであるが、偶々日露戰後財界動搖に加へ、大銀行の支店設置等に鑑み、遂に經營の一切を安田家に委譲するに至り、斯くて同家の經營に移り着々内容充實し、其の間宗像銀行、福岡銀行、三潯銀行を合併業績著しく伸展し、現在資本金壹千貳拾萬圓、諸積立金百貳拾萬餘圓、預金は七千貳百餘萬圓を算し、縣下本店普通銀行二十九行の總預金高の約五割二分を占め、貸付金は四千九萬餘圓にして亦其の四割三分に相當するの實勢に在り、收益状態は益々佳良、年三分の低配に甘んじ、利益の約八割を社内保留として將來に備へる等最も堅實なる決算振を示してゐる。

尙同行は日本銀行代理店、縣金庫、市金庫の公金事務取扱をなせる外最近博多銀行の經營を引受け、相携へて地方中小商工業金融に本來の機能を發揮しつゝあり、又近く本店の營業所を博多川端町電車通り角の好適地に堂々四階建、延べ一千餘坪の新築を計畫し、着々進行中にて完成移轉の曉は更に業績一段の躍進が期待されてゐる。

現在役員並に高級行員は左の如し。

取締役頭取	安田善五郎	同	森 采一
常務取締役	土屋長衛	同	兒島健爾
取締役	伊藤傳右衛門	監査役	土斐崎三右衛門
同	安田善衛	同	溝口虎五郎

飯塚支店	溝口廣次	同	縣飯塚市
甘木支店	進三雄	同	縣朝倉郡甘木町
久留米支店	川島正雄	同	縣久留米市三本松町
榎津支店	中村健一	同	縣三潯郡榎津
城島支店	濱村正雄	同	縣同郡城島町
羽犬塚支店	百武浩然	同	縣八女郡羽犬塚町
福岡支店	崎田庄三郎	同	縣同郡福岡町
大牟田支店	宇美宣昭	同	縣大牟田市築町
唐津支店	西信次	同	佐賀縣唐津市
中津支店	本田泰	同	大分縣中津市
伊田出張所		同	福岡縣田川郡伊田町
黒崎出張所		同	縣八幡市黒崎

同	芳賀茂元	貸付課長	谷口信一郎
顧問	安田善次郎	庶務課長	水足安嗣
副支配人	阿曾山幸吉	保管課長	福富重一
同	小池潔	受託課長	武本尊輔
出納課長	西尾平次郎	調査課長	古森忠雄
預金課長	松田茂	計算課長	戸川正夫
爲替課長	佐久間確乎		
支店名	支店	長	所在地
藏本町支店	柴田謙造		福岡市藏本町
天神町支店	中村順吉		同市銀冶町
黒門支店	金川清		同市新大工町
大學通支店	松尾友喜		同市大學通一丁目
箱崎支店	今井大樹		福岡縣粕屋郡箱崎町
東郷支店	楠本實太郎		同縣宗像郡東郷町
折尾支店	原田茂助		同縣遠賀郡折尾町
八幡支店	古森本種		同縣八幡市
八幡中央區支店	久芳與八郎		同縣同市中央區
戸畑支店	宮本格一		同縣戸畑市
小倉支店	柴田貞藏		同縣小倉市
直方支店	帶屋政次郎		同縣直方市古町
後藤寺支店	森百藏		同縣田川郡後藤寺町
行橋支店	島津元輝		同縣京都郡行橋町

あつた。越えて昭和二年五月、佐賀縣田代町に本店を有してゐた松田銀行を合併し、支店も二日市、基山、田代、鳥栖、久留米の各地に増設し、第十期末は總預金七、〇〇八、〇〇〇圓、總貸金五、〇一七、〇〇〇圓、諸積立金七八、〇〇〇圓を算し、昭和三年五月に、本店を中土居町の現在地に移轉せしめたのである。

昭和十年十一月從來の川崎經營を安田經營に移し、現在總預金は、八、〇五〇、三九〇圓、總貸金四、五七七、二九二圓、積立金一九六、五〇〇圓、繰越金六八、七八五圓を擁してゐる。

現在株主配當も年六分を配當してゐるが、充分餘裕のある配當振りである博銀の使命は福岡地方の中小商工業者に對する唯一の庶民金融機關として、絶大な信用と支持を持ち、十七銀行の子銀行であり、大安田の孫銀行でありその確固たる地位は微動だにせず、將來益々業績は發展する一方であらう。當行の大株主は安田銀行、安田商事、十七銀行であることは言ふまでもないことである。

四千九萬餘圓にして亦其の四割三分に相當するの實勢に在り、収益状態は益々佳良、年三分の低配に甘んじ、利益の約八割を社内保留として將來に備へる等最も堅實なる決算振を示してゐる。

尙同行は日本銀行代理店、縣金庫、市金庫の公金事務取扱をなせる外最近博多銀行の經營を引受け、相携へて地方中小商工業金融に本來の機能を發揮しつつあり、又近く本店の營業所を博多川端町電車通り角の好適地に堂々四階建、延べ一千餘坪の新築を計畫し、着々進行中にて完成移轉の曉は更に業績一段の躍進が期待されてゐる。

現在役員並に高級行員は左の如し。

取締役頭取	安田善五郎	同	森 采一
常務取締役	土屋長衛	同	兒島健爾
取締役	伊藤傳右衛門	同	土斐崎三右衛門
同	安田善衛	同	溝口虎五郎

天神町支店	中村順吉	同	市銀冶町
黒門支店	金川清	同	市新大工町
大學通支店	松尾友喜	同	市大學通一丁目
箱崎支店	今井大樹	同	福岡縣粕屋郡箱崎町
東郷支店	楠本實太郎	同	縣宗像郡東郷町
折尾支店	原田茂助	同	縣遠賀郡折尾町
八幡支店	古森本種	同	縣八幡市
八幡中央區支店	久芳與八郎	同	縣同市中央區
戸畑支店	宮本格一	同	縣戸畑市
小倉支店	柴田貞藏	同	縣小倉市
直方支店	帶屋政次郎	同	縣直方市古町
後藤寺支店	森百藏	同	縣田川郡後藤寺町
行橋支店	島津元輝	同	縣京都郡行橋町

飯塚支店	溝口廣次	同	縣飯塚市
甘木支店	進三雄	同	縣朝倉郡甘木町
久留米支店	川島正雄	同	縣久留米市三本松町
榎津支店	中村健一	同	縣三潞郡榎津
城島支店	濱村正雄	同	縣同郡城島町
羽犬塚支店	百武浩然	同	縣八女郡羽犬塚町
福岡支店	崎田庄三郎	同	縣同郡福岡町
大牟田支店	宇美宣昭	同	縣大牟田市築町
唐津支店	西信次	同	佐賀縣唐津市
中津支店	本田泰	同	大分縣中津市
伊田出張所		同	福岡縣田川郡伊田町
黒崎出張所		同	縣八幡市黒崎

### B 博多銀行

博多銀行は明治三十年四月に資本金五萬圓一千株で、磯野七平氏(先代)が頭取となつて設立したもので、其後業務の發展によりて百萬圓に増資したが、たゞ大正九年六月資本金百萬圓で故大神太郎氏が頭取として設立した福岡住吉銀行と、大正十五年二月一日に合併し、資本金二百萬圓にて東京川崎家の經營に移り博多銀行となつて設立されたのである。當時頭取は川崎肇氏、専務取締役石橋友次郎氏で、支店は萬町支店、住吉町支店、馬場新町支店、千代町支店があり、總預金四、六五三、〇〇〇圓、總貸金四、二二〇、〇〇〇圓で

あつた。越えて昭和二年五月、佐賀縣田代町に本店を有してゐた松田銀行を合併し、支店も二日市、基山、田代、鳥栖、久留米の各地に増設し、第十期末は總預金七、〇〇八、〇〇〇圓、總貸金五、〇一七、〇〇〇圓、諸積立金七八、〇〇〇圓を算し、昭和三年五月に、本店を中土居町の現在地に移轉せしめたのである。

昭和十年十一月從來の川崎經營を安田經營に移し、現在總預金は、八、〇五〇、三九〇圓、總貸金四、五七七、二九二圓、積立金一九六、五〇〇圓、繰越金六八、七八五圓を擁してゐる。

現在株主配當も年六分を配當してゐるが、充分餘裕のある配當振りである。博銀の使命は福岡地方の中小商工業者に對する唯一の庶民金融機關として、絶大な信用と支持を持ち、十七銀行の子銀行であり、大安田の孫銀行であり、その確固たる地位は微動だにせず、將來益々業績は發展する一方であらう。當行の大株主は安田銀行、安田商事、十七銀行であることは言ふまでもないことである。

現在當行の幹部は左の通り。

頭取	安田善五郎
取締役	石橋友次郎、磯野七平、土屋長衛、國武金太郎
支配人有田昌	監査役小池潔、支配人代理鶴喜代二

### C 嘉穂銀行

飯塚市株式會社嘉穂銀行は明治二十九年三月故麻生太吉氏及野見山米吉、

瓜生長右衛門の諸氏相圖り、商工業の振興發展の助長を目的とし、郡内の金融を掌る爲、資本金十八萬圓を以て設立されたものである。明治三十三年六月に資本金を七十萬圓に増資し、更に大正九年には資本金二百萬圓に増資業態進展し内容堅實にして、昭和初頭の金融界の大動搖に微動だにもせず、今日その確固たる經營振を示し、縣下地方銀行中一流の地位を占めてゐる。支店は大隈町、幸袋町、小竹町、穂波村天道に有し、尙長尾、上山田にも設置されたるも、昭和十年二月廿日に廢止された。

頭取は初代麻生太吉氏、二代伊藤傳右衛門氏にして、共に全国的に名聲高き事業家である、常務取締役大和秀雄氏は昭和十年九月、十七銀行より轉じ來たれる人、趣味の人にして銀行事務には經驗深く、支配人伊藤久氏は幸袋町出身、銀行事務を趣味として日夜努力してゐる人である。

尙現在の重役は左の如くである。頭取伊藤傳右衛門、常務取締役大和秀雄取締役有田廣、麻生尙敏、野見山幡次郎、中野次郎、麻生太三郎、麻生太七郎、監査役金光寛、西園磯松、高取豊の諸氏である。

### D 八女銀行

福岡縣八女郡福島町に本店を有する八女銀行は、昭和四年七月八女郡内の五銀行、即ち株式會社福洲銀行、株式會社廣川銀行、株式會社星野銀行、合名會社長峰銀行、株式會社倉員銀行が合併して創立されたものである。創立當初は各銀行重役を以て經營にあつてゐたが、其の後幹部も變更され、現在では取締役頭取江口正雄、常務取締役倉員敏雄、取締役角謙三（羽犬塚支

店長）、同西田七郎（星野支店長）、同高木義雄、野田多吉（廣川支店長）、同江崎猪之助、同池田文太、倉員清（北川内支店長）、倉員光弘、原秀次郎（黒木支店長）、常任監査役檀保、監査役村上簡、同中島壽の諸氏が重職に當つてゐる。年に預金三十萬圓、貸出額も相當の増加を來し、八女地方に於ける金融界に臨んで、その確固たる歩調の跡は目覚ましいものがあり、將來に於いても益々活躍を囑望されてゐる地方銀行である。現在預金總額三百六十六萬餘圓、貸出總額二百四十一萬六千圓に上つてゐる有様である。

昭和十年四月、從來福島町の宮野町に位置してゐたが、益々好況に向つた同行は、現在の位置に本館七十坪、附屬建物四十坪の新築をなし、移轉したが家屋の新しさに加へて、營業上にも一大刷新を示し、益々盛況に向つたのである。

### E 生吉銀行

當社は、別表に示された如く明治廿四年三月四日の創立に係るもので、浮羽郡地方の唯一の銀行として古くより同地方民に親しまれて來た銀行である。現在營業所は浮羽郡吉井町千四百四十九番地ノ一と同千五百五十一番地ノ一で資本金は百二十萬圓（五十圓株）で株數二四、〇〇〇株、株主は三六〇名である。

當銀行の業態は、最近各種の農村金融事業が企圖されるにも不拘、殆んどその實を伴はざる事情にあるため、唯一の金融機關として當行に地元民が絶大の信望を繋いでゐることは何んと云つても當行の強味で、業績は累年向上

の一途を辿つてゐる。

現役員は左の如し。

取締役頭取	彌吉久吾	監査役	彌吉勘吾
専務取締役	松田均平		久保田惠三郎
取締役	田代彦郎		矢野玄三
	同		同
	古賀榮		矢野貞助
	同		同
	江島爲七		同
	同		同
支配人	魚落馨		同
			大津留弘

の諸氏である。

### F 嘉穂貯蓄銀行

當行は大正十年十一月二十四日の創立であつて、曾つて明治二十九年三月二十九日以來株式會社嘉穂銀行に於て兼營してゐた貯蓄銀行業務を分離獨立

取締役頭取伊藤傳右衛門、取締役有田廣、同麻生尙敏、同中野次郎、同麻生太三郎、同野見山幡次郎、同麻生太七郎、同大和秀雄、監査役金光寛、同高取豊、同西園磯松、支配人上野長之助の諸氏である。

#### 郵便貯金

而して一方郵便貯金に於ては預入金額七一、三七七千圓、拂戻金額六六、七〇四千圓、人員一、五〇九、七七二人で全國順位は各々第六位であり、郵便爲替では振出口數一、六四五、四九七口で金額三三、五三六千圓、拂渡口數一、四四六、六七八で金額は三〇、三三九千圓となり全國順位は振出は各第五位である

### 第三節 無盡業

福岡縣下における無盡業は、地元が無盡會社としては博多無盡及び博濟無盡等左の如く十二社がある。

來たれる人、趣味の人にして銀行事務には経験深く、支配人伊藤久氏は幸袋町出身、銀行事務を趣味として日夜努力してゐる人である。

尙現在の重役は左の如くである。頭取伊藤傳右衛門、常務取締役大和秀雄、取締役有田廣、麻生尙敏、野見山幡次郎、中野次郎、麻生太三郎、麻生太七郎、監査役金光寛、西園磯松、高取豊の諸氏である。

## D 八女銀行

福岡縣八女郡福島町に本店を有する八女銀行は、昭和四年七月八女郡内の五銀行、即ち株式會社福岡銀行、株式會社廣川銀行、株式會社星野銀行、合名會社長峰銀行、株式會社社員銀行が合併して創立されたものである。創立當初は各銀行重役を以て經營にあつてゐたが、其の後幹部も變更され、現在では取締役頭取江口正雄、常務取締役倉員敏雄、取締役角謙三（羽犬塚支

家屋の新しさに加へて、營業上にも一大刷新を示し、益々盛況に向つたのである。

## E 生吉銀行

當社は、別表に示された如く明治廿四年三月四日の創立に係るもので、浮羽郡地方の唯一の銀行として古くより同地方民に親しまれて來た銀行である。現在營業所は浮羽郡吉井町千四百九十九番地ノ一と同千五百五十一番地ノ一で資本金は百二十萬圓（五十圓株）で株數二四、〇〇〇株、株主は三六〇名である。

當銀行の業態は、最近各種の農村金融事業が企圖されるにも不拘、殆んどその實を伴はざる事情にあるため、唯一の金融機關として當行に地元民が絶大の信望を繋いでゐることは何んと云つても當行の強味で、業績は累年向上

の一途を辿つてゐる。

現役員は左の如し。

取締役頭取	彌吉久吾	監査役	彌吉勘吾
専務取締役	松田均平		久保田惠三郎
取締役	田代彦郎	同	矢野玄三
同	古賀榮	同	矢野貞助
同	江島爲七	同	大津留弘
支配人	魚落馨		

の諸氏である。

## F 嘉穂貯蓄銀行

當行は大正十年十一月二十四日の創立であつて、會つて明治二十九年三月二十九日以来株式會社嘉穂銀行に於て兼營してゐた貯蓄銀行業務を分離獨立したものである。

公稱資本金は五十萬圓で拂込資本金十二萬五千圓であり、現在總資産額は金二百四十二萬三千圓、現在總預金一百八十三萬六千六百圓に及んでゐることを見るも如何に當行が堅實なる營業方針を取つて居り、地元民の信望を繋いでゐるかが窺知されよう。

殊に當行は伊藤傳右衛門氏の經營に係るもので、嘉穂銀行とは不則不離の立場にあり、その前途は益々好調の一途を辿るものと見られてゐる。

現在の役員は左の如し。

取締役頭取伊藤傳右衛門、取締役有田廣、同麻生尙敏、同中野次郎、同麻生太三郎、同野見山幡次郎、同麻生太七郎、同大和秀雄、監査役金光寛、同高取豊、同西園磯松、支配人上野長之助の諸氏である。

## 郵便貯金

而して一方郵便貯金に於ては預入金額七一、三七七千圓、拂戻金額六六、七〇四千圓、人員一、五〇九、七七二人で全國順位は各々第六位であり、郵便爲替では振出口數一、六四五、四九七口で金額三三、五三六千圓、拂渡口數一、四四六、六七八で金額は三〇、三三九千圓となり全國順位は振出は各第五位である。

## 第三節 無盡業

福岡縣下における無盡業は、地元が無盡會社としては博多無盡及び博濟無盡等左の如く十二社がある。

その契約高は全體に於ては、近來向上しつゝあるが、東京、大阪に比すれば未だ及ばざるの状態にあると云へよう。

### (1) 福岡縣無盡業概況 (昭和十年末現在)

會社數	一二社
公稱資本金	一、三五〇、〇〇〇圓
拂込資本金	六〇七、五〇〇圓
組數	三、二二二組

口 數	一三〇、二九一口
給付金契約高	一〇九、〇七〇、二四九圓
給付 濟 高	四四、三七九、〇六五圓
掛金契約高	一一五、五三九、六九五圓
掛金受入濟高	四七、七六三、二八八圓
未收無盡掛金	三、七三四、二九五圓
濟口受入未濟高	二四、三四二、一二五圓
未濟口受入濟高	二四、九三八、三四四圓
當期新契約高	一三、四三五、四〇〇圓
當期滿期高	四、〇二五、二五〇圓
當期入金高	八、五一五、九八九圓
當期給付高	七、四四四、五三五圓
諸貸付高	三、四四〇、〇七八圓

次に、各社の最近の内容を示すと次の如くで、各社とも概して成績良好であり、福岡縣庶民金融機關としてその將來性は注目すべきものがある。

### (1) 大川無盡株式會社

當社は三瀨郡大川町大字榎津二五八ノ一にあり。支店數一で、公稱資本金は五〇、〇〇〇圓、拂込資本金二五、〇〇〇圓で、大正三年七月十五日の設立であり。營業區域は三瀨郡、山門郡、八女郡、三井郡、三池郡、久留米部の一市五郡である。

給付金契約高	二〇、一八七、四〇〇圓
掛金契約高	二一、七七二、九五六圓
口 數	五三一組
給付 濟 高	二〇、六三五圓
掛金受入濟高	八、八七九、八〇〇圓
當期新契約高	九、一四五、〇九〇圓
當期滿期高	一、三〇三、八〇〇圓
當期入金高	四二〇、〇〇〇圓
當期入金高	一、〇七四、一五三圓

煙、八幡、直方、飯塚の七市と嘉穂、鞍手、遠賀、企救、田川、京都、築上朝倉、宗像、粕屋、筑紫、早良、糸島の各郡で經營無盡は大阪式、折衷式を採用し、公稱資本金一〇〇、〇〇〇圓、拂込三二、五〇〇圓で、昭和十年年度の利益金は一一、四三四圓で、株主配當金は一割である。

當社は昭和十年年度の契約狀況は左の通りである。

給付金契約高	一〇、二五九、〇〇〇圓
掛金契約高	一〇、三五六、〇〇〇圓
口 數	五三三組
給付 濟 高	一五、五四七圓
掛金受入濟高	二、九二三、七五〇圓
當期新契約高	三、七一四、一一五圓
當期滿期高	二、六七〇、〇〇〇圓
當期入金高	五五五、二五〇圓
當期入金高	三、七一四、一一五圓

### (2) 共福無盡株式會社

當社は現役員は社長井口馨、常務深町清、近藤萬造、一ノ瀬節太郎、執行吳、宮崎伊豆彦、監査役近藤松五郎、松村佑の諸氏である。

當社は、大正四年十月十七日の設立であつて、營業所は久留米市日吉町八八、支店三、出張所四、代理店一を有し公稱資本金六〇、〇〇〇圓、拂込資本金三九、〇〇〇圓で營業區域は、久留米、大牟田の二市と三井、浮羽、八女三池、山門、三瀨(大川町を除く)六郡に亘り、經營無盡は折衷式を採用してゐる。昭和十年年度の契約狀況左の通り。

經營無盡の方法は、大阪式を採用してゐる。十年の利益金は六、七七九圓で一割配當をなしてゐる。

給付金契約高	一、八六二、七〇〇圓
掛金契約高	二、一一八、四三〇圓
口 數	六二組
給付 濟 高	二、七三九圓
掛金受入濟高	九八六、五〇〇圓
當期新契約高	一、一一八、八六二圓
當期滿期高	八四、〇〇〇圓
當期入金高	三、八四、〇〇〇圓
當期給付高	一、四四、九四一圓
濟口受入未濟高	一〇二、八〇〇圓
未濟口受入濟高	四二一、六七六圓
未濟口受入濟高	三五六、九三〇圓



当期満期高 四、〇二五、二五〇圓  
 当期入金高 八、五一五、九八九圓  
 当期給付高 七、四四四、五三五圓  
 諸貸付高 三、四四〇、〇七八圓

次に、各社の最近の内容を示すと次の如くで、各社とも概して成績良好であり、福岡県庶民金融機関としてその将来性は注目すべきものがある。

### (1) 大川無盡株式會社

當社は三瀨郡大川町大字榎津二五八ノ一にあり。支店數一で、公稱資本金は五〇、〇〇〇圓、拂込資本金二五、〇〇〇圓で大正三年七月十五日の設立であり。營業區域は三瀨郡、山門郡、八女郡、三井郡、三池郡、久留米部の一市五郡である。

掛金受入済高 一一八、八六二圓  
 当期新契約高 八四、〇〇〇圓  
 当期満期高 三八四、〇〇〇圓  
 当期入金高 一四四、九四一圓  
 当期給付高 一〇二、八〇〇圓  
 濟口受入未済高 四二一、六七六圓  
 未済口受入済高 三五六、九三〇圓

當社の現役員は社長井口馨、常務深町清、近藤萬造、一ノ瀬節太郎、執行吳、宮崎伊豆彦、監査役近藤松五郎、松村佑の諸氏である。

### (2) 共福無盡株式會社

當社は大正元年九月二十日の設立であつて、營業所は直方市大字直方七八四にあり。現在支店數三、出張所三あり。營業區域は福岡、小倉、若松、戸

畑、八幡、直方、飯塚の七市と嘉穂、鞍手、遠賀、企救、田川、京都、築上朝倉、宗像、粕屋、筑紫、早良、糸島の各郡で經營無盡は大阪式、折衷式を採用し、公稱資本金一〇〇、〇〇〇圓、拂込三二、五〇〇圓で、昭和十年度の利益金は一一、四三四圓で株主配當金は一割である。

當社十年度の契約狀況は左の通りである。

給付金契約高 二〇、一八七、四〇〇圓  
 掛金契約高 二一、七七二、九五六圓  
 組數 五三一組  
 口數 二〇、六三五組  
 給付済高 八、八七九、八〇〇圓  
 掛金受入済高 九、一四五、〇九〇圓  
 当期新契約高 一、三〇三、八〇〇圓  
 当期満期高 四二〇、〇〇〇圓  
 当期入金高 一、〇七四、一五三圓  
 当期給付高 八八〇、〇四五圓  
 濟口受入未済高 五、二二五、八一三圓  
 未済口受入済高 三、七六一、六六四圓

當社現在の役員は、社長石井徳久次、専務瓜生直三、岩崎重紀、堀寛平、監査役森田武の諸氏である。

### (3) 共立無盡株式會社

當社は大正四年十月十七日の設立であつて、營業所は久留米市日吉町八八、支店三、出張所四、代理店一を有し公稱資本金六〇、〇〇〇圓、拂込資本金三九、〇〇〇圓で營業區域は、久留米、大牟田の二市と三井、浮羽、八女三池、山門、三瀨(大川町を除く)六郡に亘り、經營無盡は折衷式を採用してゐる。昭和十年度の契約狀況左の通り。

給付金契約高 一〇、二五九、〇〇〇圓  
 掛金契約高 一〇、三五六、〇〇〇圓  
 組數 五三三組  
 口數 一五、五四七口  
 給付済高 二、九二二、七五〇圓  
 掛金受入済高 三、七二四、一一五圓  
 当期新契約高 二、六七〇、〇〇〇圓  
 当期満期高 五五五、二五〇圓  
 当期入金高 三、七一四、一一五圓  
 当期給付高 九八四、九四七圓  
 濟口受入未済高 一、九四七、八三五圓  
 未済口受入済高 四、六九四、〇八八圓

當社の昭和十年度の利益金は二〇、九七三圓で株主配當金は一割である。現役員は社長松崎清音、常務鍋島彌助、森田一男、元田二郎、中原隆三郎、北島儀平、監査役元田建藏、林梅次郎、原富哉の諸氏である。

### (4) 北九州無盡株式會社

當社は昭和六年十一月二十一日の設立であつて、營業所は八幡市大字尾倉七九ノ三で出張所三を有し、公稱資本金一五〇、〇〇〇圓拂込資本金五二、五〇〇圓で營業區域は門司、小倉、戸畑、若松、八幡、直方の六市と企救、遠賀、鞍手の三郡で經營無盡は大阪式を採用してゐる。當社昭和十年年度の契約狀況は左の通り。

給付金契約高	四、四七四、三〇〇圓
掛金契約高	四、七四一、三〇九圓
組數	一七三組
口數	六、五二四口
給付濟高	一、六六七、三〇〇圓
掛金受入濟高	一、九六二、〇六四圓
當期新契約高	七四二、六〇〇圓
當期滿期高	三一五、六〇〇圓
當期入金高	五五一、五一圓
當期給付高	五一〇、〇〇〇圓
濟口受入未濟高	九八九、六三〇圓
未濟口受入濟高	九二四、〇八八圓

當社昭和十年年度の利益金は九、六五五圓で株主配當金は年一割である。當社現在の役員は、社長入江八郎、常務田中三郎、西尾政次、後藤久、入江賢助、南部正雄、高島彌八郎、監査役安井源藏、木原七郎、山本貞藏、小田一

太郎、太田新一、村谷四郎の諸氏である。

### (6) 南筑無盡株式會社

當社は大正二年四月三十日の設立であつて、營業所は久留米市吳服町四三にあり、營業區域は久留米、大牟田の二市と三潁、三池、三井、八女、浮羽山門の六郡で、經營無盡は東京式を採用してゐる。當社の昭和十年年度の契約狀況は左の通り。

給付契約高	七、四七一、七〇〇圓
掛金契約高	八、一〇六、八一八圓
組數	一一三組
口數	七、八三三口
給付濟高	四、四九八、七〇〇圓
掛金受入濟高	三、一八〇、七九〇圓

一の諸氏である。

### (5) 戸畑無盡株式會社

當社は大正三年二月二十日の設立で、營業所は戸畑市大字戸畑八七ノ一にあり、公稱資本金一〇〇、〇〇〇圓拂込資本金四七、五〇〇圓で營業區域は戸畑、若松、八幡、小倉の四市と遠賀、企救の二郡であり、經營無盡は大坂式、折衷式を採用してゐる。當社の昭和十年年度の契約狀況は左の通り。

給付金契約高	二、八七七、九四九圓
掛金契約高	三、一六四、〇五〇圓
組數	四三組
口數	二、五七四口
給付濟高	一、四九三、〇一五圓
掛金受入濟高	一、七八五、一五五圓
當期新契約高	二二三、〇〇〇圓
當期滿期高	二三一、〇〇〇圓
當期入金高	二五六、〇四一圓
當期給付高	二九五、七三一圓
濟口受入未濟高	六〇八、四九四圓
未濟口受入濟高	一、二五二、八九九圓

當社の昭和十年年度の利益金は三〇、〇二七圓で株主配當金一割である。現役員は、専務竹内助四郎、大森永八、竹内清之助、小田愛左衛門、監査役篤海壽

久吉の諸氏である。

### (7) 博濟無盡株式會社

當社は大正二年十一月三日の設立であつて、本社は飯塚市大字飯塚三七三にあり、支店は福岡市、八幡市、行橋町に、出張所は久留米市、小倉市、後藤寺町、折尾町、八屋町にあり、公稱資本金二〇、〇〇〇圓、拂込資本金一五、〇〇〇圓で營業區域は飯塚、直方、八幡、若松、戸畑、小倉、福岡、久留米の八市と嘉穂、鞍手、遠賀、企救、田川、京都、築上、朝倉、宗像、粕屋、筑紫の各郡で、經營無盡は東京式、折衷式を採用してゐる。昭和十年年度の契約狀況は左の通り。

給付金契約高	一八、四二七、〇〇〇圓
掛金契約高	一九、〇一一、四五八圓
組數	五七四組

組	數	一七三組
口	數	六、五二四口
給付	高	一、六六七、三〇〇圓
掛金受入	高	一、九六二、〇六四圓
當期新契約	高	七四二、六〇〇圓
當期満期	高	三一五、六〇〇圓
當期入金	高	五五一、五一一圓
當期給付	高	五一〇、〇〇〇圓
濟口受入	未済高	九八九、六三〇圓
未済口受入	済高	九二四、〇八八圓

當社昭和十年度の利益金は九、六五五圓で株主配當金は年一割である。當社現在の役員は、社長入江八郎、常務田中三郎、西尾政次、後藤久、入江賢助、南部正雄、高島彌八郎、監査役安井源藏、木原七郎、山本貞藏、小田一

太郎、太田新一、村谷四郎の諸氏である。

### (6) 南筑無盡株式會社

當社は大正二年四月三十日の設立であつて、營業所は久留米市吳服町四三にあり、營業區域は久留米、大牟田の二市と三潞、三池、三井、八女、浮羽山門の六郡で、經營無盡は東京式を採用してゐる。當社の昭和十年度の契約狀況は左の通り。

給付	契約高	七、四七一、七〇〇圓
掛金	契約高	八、一〇六、八一八圓
組	數	一一三組
口	數	七、八三三口
給付	済高	四、四九八、七〇〇圓
掛金	受入済高	三、一八〇、七九〇圓
當期	新契約高	五一一、七〇〇圓
當期	満期高	ナシ
當期	入金高	二六七、一〇三圓
當期	給付高	二七三、〇〇六圓
濟口	受入未済高	二、九三二、七〇六圓
未済	口受入済高	一、一一二、五五二圓

當社の昭和十年度の利益金は八八五圓で株主配當金は、無配である。現役員は社長菊竹清、武藤林太郎、中野文藏、松本芳五郎、菊竹茂、監査役坂口

福岡縣産業の卷

掛金	契約高	三、一六四、〇五〇圓
組	數	四三組
口	數	二、五七四口
給付	済高	一、四九三、〇一五圓
掛金	受入済高	一、七八五、一五五圓
當期	新契約高	二二三、〇〇〇圓
當期	満期高	二三一、〇〇〇圓
當期	入金高	二五六、〇四一圓
當期	給付高	二九五、七三一圓
濟口	受入未済高	六〇八、四九四圓
未済	口受入済高	一、二五二、八九九圓

當社の昭和十年度の利益金は三〇、〇二七圓で株主配當金は年一割である。現役員は、専務竹内助四郎、大森永八、竹内清之助、小田愛左衛門、監査役爲海壽

久吉の諸氏である。

### (7) 博濟無盡株式會社

當社は大正二年十一月三日の設立であつて、本社は飯塚市大字飯塚三七三にあり、支店は福岡市、八幡市、行橋町に、出張所は久留米市、小倉市、後藤寺町、折尾町、八屋町にあり、公稱資本金二〇、〇〇〇圓、拂込資本金一五、〇〇〇圓で營業區域は飯塚、直方、八幡、若松、戸畑、小倉、福岡、久留米の八市と嘉穂、鞍手、遠賀、企救、田川、京都、築上、朝倉、宗像、粕屋、筑紫の各郡で、經營無盡は東京式、折衷式を採用してゐる。昭和十年度の契約狀況は左の通り。

給付	金契約高	一八、四二七、〇〇〇圓
掛金	契約高	一九、〇一一、四五八圓
組	數	五七四組
口	數	二四、四一七口
給付	済高	七、四七九、一〇〇圓
掛金	受入済高	七、〇六八、五六三圓
當期	新契約高	二、〇七八、四〇〇圓
當期	満期高	八一〇、〇〇〇圓
當期	入金高	一、二七四、九一三圓
當期	給付高	一、二七六、八一七圓
濟口	受入未済高	三、八〇七、五二七圓

五〇三

未済口受入済高

三、〇三七、六四九圓

當社の昭和十年度の利益金二五、四九二圓を確保し、配當金は年一割である。當社は伊藤傳右衛門氏を社長に専務取締役としての有田廣氏の手腕と相俟つて業績は年々向上する一方である。現在の役員は社長伊藤傳右衛門、専務取締役有田廣、取締役藤島伊八郎、麻生尙敏、中野次郎、麻生太三郎、麻生太七郎、金光寛、監査役西園磯松、高取豊、野見山幡次郎、支配人津田良利の諸氏である。

### (8) 博多無盡株式會社

當社は昭和四年十二月九日の設立で、營業所は福岡市掛町一にあり、出張所二を有し、公稱資本金二〇〇、〇〇〇圓拂込資本金五〇、〇〇〇圓で營業區域は福岡市及び早良、糸島、筑紫、朝倉、粕屋、宗像の一市六郡であつて、經營無盡は大阪式、折衷式である。當社の昭和十年度の契約の状況は左の通り。

給付金契約高	六、九六〇、八〇〇圓
掛金契約高	七、三八六、〇八七圓
組數	二五二組
口數	一〇、六四四口
給付済高	一、五五一、〇〇〇圓
掛金受入済高	三、〇四三、九八二圓
當期新契約高	一、三五七、五〇〇圓
當期満期高	五一六、〇〇〇圓

當期入金高

七七〇、〇四四圓

當期給付高

六三一、五〇〇圓

濟口受入未済高

一、二三九、〇四〇圓

未済口受入済高

一、四五七、〇二五圓

當社は社長坂田卯三郎氏が中小商工業者の庶民金融機關として無盡會社の使命重大なるを考へ創業したもので、累年新契約高は累進的に増加してゐる。昭和十年度の利益金は、四〇、七一七圓に達し、配當は一割である。現在の役員は社長坂田卯三郎、取締役山本次三郎、的野作七、讚井芳毅、山崎春庵、監査役田中伊三次、武石岩平の諸氏である。

### (9) 福岡無盡株式會社

當社は大正十三年六月八日の成立で、營業所は福岡市天神町二にあり、出張所三を有し、公稱資本金二〇〇、〇〇〇圓、拂込資本金一〇〇、〇〇〇圓で、營業區域は福岡縣一圓であり、經營無盡は大阪式、折衷式を採用してゐる。當社昭和十年度の契約の状況は左の通り。

給付金契約高	一六、二三七、五〇〇圓
掛金契約高	一七、三七五、四六八圓
組數	四八八組
口數	一九、六八七口
給付済高	五、四二二、〇〇〇圓
掛金受入済高	六、一五〇、九八七圓

當期新契約高

三、六四一、〇〇〇圓

當期満期高

五三三、五〇〇圓

當期入金高

一、一八七、三五七圓

當期給付高

一、〇二九、〇〇〇圓

濟口受入未済高

三、一〇八、六〇三圓

未済口受入済高

二、七〇二、六八三圓

當社昭和十年度の利益金は二三、九一五圓で、八分の株主配當をなして居り、現役員は専務四島一二三、取締役速水梓、齋藤廣路、監査役菊池武美、山川七藏の諸氏である。

### (10) 三池無盡株式會社

當社は、大正五年七月二十五日の設立で、營業所は大牟田市築町一七ノ一

掛金受入済高

九九九、六三〇圓

當期新契約高

三六九、〇〇〇圓

當期満期高

一二六、〇〇〇圓

當期入金高

二七一、〇七六圓

當期給付高

二五八、二〇〇圓

濟口受入未済高

五七一、六九八圓

未済口受入済高

六六六、六六四圓

當社の昭和十年度の利益金は、六、二八八圓で配當額は年一割である。現役員は社長村田瀧十郎、取締役白田久内、圓佛七藏、平山喜録、監査役江口政平、猿渡秀雄、林田詳二の諸氏である。

### (11) 門司金融無盡株式會社

當社は大正二年五月三日の設立であつて、營業所は門司市大字門司一〇

(8) 博多無盡株式會社

當社は昭和四年十二月九日の設立で、營業所は福岡市掛町一にあり、出張所二を有し、公稱資本金二〇〇、〇〇〇圓拂込資本金五〇、〇〇〇圓で營業區域は福岡市及び早良、糸島、筑紫、朝倉、粕屋、宗像の一市六郡であつて、經營無盡は大阪式、折衷式である。當社の昭和十年年度の契約の状況は左の通り。

給付金契約高	六、九六〇、八〇〇圓
掛金契約高	七、三八六、〇八七圓
組	二五二組
口	一〇、六四四口
給付 濟高	二、五五一、〇〇〇圓
掛金受入 濟高	三、〇四三、九八二圓
当期新契約高	一、三五七、五〇〇圓
当期満期高	五一六、〇〇〇圓

(9) 福岡無盡株式會社

當社は大正十三年六月八日の成立で、營業所は福岡市天神町二にあり、出張所三を有し、公稱資本金二〇〇、〇〇〇圓、拂込資本金一〇〇、〇〇〇圓で、營業區域は福岡縣一圓であり、經營無盡は大阪式、折衷式を採用してゐる。當社昭和十年年度の契約の状況は左の通り。

給付金契約高	八、一六、二三七、五〇〇圓
掛金契約高	三、三七五、四六八圓
組	四八八組
口	一九、六八七口
給付 濟高	五、四二二、〇〇〇圓
掛金受入 濟高	六、一五〇、九八七圓

當期新契約高 三、六四一、〇〇〇圓  
当期満期高 五三三、五〇〇圓  
当期入金高 一、一八七、三五七圓  
当期給付高 一、〇二九、〇〇〇圓  
濟口受入未濟高 三、一〇八、六〇三圓  
未濟口受入濟高 二、七〇二、六八三圓  
當社昭和十年年度の利益金は二三、九一五圓で、八分の株主配當をなして居り、現役員は専務四島一二三、取締役速水梓、齋藤廣路、監査役菊池武美、山川七藏の諸氏である。

(10) 三池無盡株式會社

當社は、大正五年七月二十五日の設立で、營業所は大牟田市築町一七ノ一で、出張所一あり。公稱資本金は六〇、〇〇〇圓、拂込資本金三六、〇〇〇圓で、營業區域は大牟田市及び三池、八女、山門、三潞の四郡で、經營無盡は大阪式を採用してゐる。

給付金契約高	二、六三一、六〇〇圓
掛金契約高	二、八七〇、八六四圓
組	一〇二組
口	三、一五四口
給付 濟高	八六六、二〇〇圓

當社の昭和十年年度の利益金は、六、二八八圓で配當額は年一割である。現役員は社長村田瀧十郎、取締役白田久内、圓佛七藏、平山喜録、監査役江口政平、猿渡秀雄、林田詳二の諸氏である。

(11) 門司金融無盡株式會社

當社は大正二年五月三日の設立であつて、營業所は門司市大字門司一〇九にあり。出張所二を有し、公稱資本金一〇〇、〇〇〇圓、拂込資本金四五、〇〇〇圓で、營業區域は門司、小倉、戸畑、若松、八幡の五市と企救、遠賀田川、築上、京都の五郡である。當社の經營無盡は大阪式、折衷式を採用してゐるが、昭和十年年度の契約状況は次の如くである。

給付金契約高	一〇、四二三、三〇〇圓
掛金契約高	一一、〇五四、二四一圓
組	一七一組
口	八、二七五口

給付 濟高 五、三三五、七〇〇圓  
 掛金受入 濟高 六、〇七〇、八八六圓  
 当期新契約高 九四九、〇〇〇圓  
 当期満期高 一六五、〇〇〇圓  
 当期入金高 七六六、七一二圓  
 当期給付高 五九四、一〇〇圓  
 濟口受入未濟高 二、〇六六、三一八圓  
 未濟口受入濟高 二、三七九、六〇四圓

當社の昭和十年度の利益金は八、〇四八圓で配當金は年一割である。〇〇〇圓  
 當社現役員は社長西田林之助、専務兼支配人と田端、取締役徳永清行、松  
 本時藏、吉永義一、大倉喜三郎、大西安太郎、石場秀吉、監査役安藤甚之丞  
 中野仁助、隅田武夫の諸氏である。

### (12) 若松信用無盡株式会社

當社は大正十四年十月十五日の設立で、營業所は若松市本町七ノ四三二で  
 あり、出張所二を有し、公稱資本金は一〇〇、〇〇〇圓、拂込資本金二五、〇  
 〇〇圓である。營業區域は若松、戸畑、小倉、八幡の四市と遠賀郡で、經營  
 無盡は大阪式、折衷式を採用してゐる。當社昭和十年度の契約狀況は次の如  
 し。

給付金契約高 七、二五七、〇〇〇圓  
 掛金契約高 七、五八一、九七六圓

多々あるが、これらは後章福岡市の部に於て見る如く金融及び證券業の地元  
 機關として特異な存在を示してゐる。

### 第五節 保 險 業

福岡縣下は十市の大商工業都市をもつてゐるだけに、生命保険及び火災保  
 險業の活躍は目覚ましきものがあり、その契約高に於ても全國で有数の地と  
 されてゐる。左に福岡市火災、生命保険協會最近の契約高を示しておかう。

#### ア、福岡地方火災保險概況

福岡市に於ける保險事業としては、生命保険と共に活躍してゐる大日本聯  
 合火災保險協會福岡地方會が結成されて居り、加盟會社は左記三十五社で總  
 契約高は最近著しく増加し、其總契約高は可成りの巨額に達してゐる。事

組 數 一七〇組  
 口 數 八、二六二口  
 給付 濟高 二、四七六、〇〇〇圓  
 掛金受入 濟高 三、五二三、一六四圓  
 当期新契約高 一〇四、四〇〇圓  
 当期満期高 三七、九〇〇圓  
 当期入金高 七七二、四一六圓  
 当期給付高 六〇九、五〇〇圓  
 濟口受入未濟高 一、四二三、七八八圓  
 未濟口受入濟高 二、五九二、四九八圓

當社昭和十年度の利益金は八、三二一圓で配當は年一割、現役員は、専務  
 小野田彦助、取締役久野惣吉、川原金作、白川藏六、植野太一郎、監査役小  
 幡榮、植野憲五の諸氏である。

### 第四節 證 券 業

而して證券及金融事業方面に於ては博多株式取引所を中心として、これに  
 對應する諸取引員廿六名を以つて組織する博多取引員組合がある。その外に  
 は山一證券、野村證券、藤本ビル、勸業證券、日興證券等の支店がある。何  
 れも本店は後章に見る如く東京及び關西であり、九州における金融方面に大  
 きな動きを見せてゐる。

又取引所の外部的存在として證券及び金融方面に於て活躍してゐるものは

- 水義治) 大倉火災海上九州出張所(大久保仁三郎) 横濱火災海は福岡支店(本田三次) 大福海上火災九州支部(宮崎英雄) 太平火災海上福岡出張所(藤田誠一) 太平海上火災福岡支店(土井彰夫) 大北火災海上運送九州支店(妻木房吉) 第一火災海上福岡出張所(鈴木雅男) 大正海上火災福岡支店(佐藤薫) 福壽火災福岡支店(高羽哲夫) 扶桑海上火災福岡出張所(大塚秀吉) 富國火災海上福岡支店(田島正三) 神戸海上火災福岡支店(國光準太) 帝國火災福岡支店(鈴木梶江) 帝國海上火災福岡支店(高田三郎) 朝日海上火災福岡出張所(江副武高) 尼崎海上火災九州出張所(水谷義男) 共同火災福岡支店(石見良聿) 明治火災福岡支店(森協雪) 三菱海上火災福岡出張所(永山實) 新日本火災海上福岡支社(野守憲治) 昭和火災福岡出張所(西尾重太郎)

#### イ、福岡生命保險協會

福岡縣に於ける生命保險の事業は全部東京及び關西に本店を有するものゝ

當社の昭和十年度の利益金は八〇四、四〇〇圓で、前年度に比し一割増である。當社現役員は社長西田林之助、専務兼支配人と田端、取締役徳永清行、松本時藏、吉永義一、大倉喜三郎、大西安太郎、石場秀吉、監査役安藤甚之亟中野仁助、隅田武夫の諸氏である。

### (12) 若松信用無盡株式會社

當社は、大正十四年十月十五日の設立で、營業所は若松市本町七ノ四三二であり、出張所二を有し、公稱資本金は一〇〇、〇〇〇圓、拂込資本金二五、〇〇〇圓である。營業區域は若松、戸畑、小倉、八幡の四市と遠賀郡で、經營無盡は大阪式、折衷式を採用してゐる。當社昭和十年度の契約狀況は次の如し。

給付金契約高 七、二五七、〇〇〇圓  
掛金契約高 七、五八一、九七六圓

多々あるが、これらは後章福岡市の部に於て見る如く金融及び證券業の地元機關として特異な存在を示してゐる。

### 第五節 保險業

福岡縣下は十市の大商工業都市をもつてゐるだけに、生命保險及び火災保險業の活躍は目覚ましきものがあり、その契約高に於ても全國で有数の地とされてゐる。左に福岡市火災、生命保險協會最近の契約高を示しておかう。

#### ア、福岡地方火災保險概況

福岡市に於ける保險事業としては、生命保險と共に活躍してゐる大日本聯合火災保險協會福岡地方會が結成されて居り、加盟會社は左記三十五社で總契約高は最近著しく増加し、其總契約高はかなりの巨額に達してゐる。事務所は市内天神町三〇（昭和生命館二階）括弧内は支店長又は出張所長を示す。

- 神國海上火災福岡出張所（瀬戸口福雄） 日本火災九州支店（松浦忠雄） 日本海上福岡出張所（上田芳太郎） ニュジランド、ローヤルエクスチェンジ九州總代理店（深川廣三） 豐國火災九州支店（前田秀郎） 東京火災福岡支店（豊島次郎） 東京海上火災福岡營業所（田邊鐵次） 東邦火災九州支店（龜井幸一） 東神火災福岡出張所（久保義美） 東洋火災福岡出張所（石原洋太郎） 東洋海上火災福岡出張所（渡邊源治） 千代田火災福岡支店（黒河内安行） 中央火災傷害福岡營業所（鈴木瀨平） 大阪海上火災福岡支店（清

未濟口受入濟高 二、五九二、四九八圓  
當社昭和十年度の利益金は八、三二一圓で配當は年一割、現役員は、専務小野田彦助、取締役久野惣吉、川原金作、白川藏六、植野太一郎、監査役小幡榮、植野憲五の諸氏である。

### 第四節 證券業

而して證券及金融事業方面に於ては博多株式取引所を中心として、これに對應する諸取引員廿六名を以つて組織する博多取引員組合がある。その外には山一證券、野村證券、藤本ビル、勸業證券、日興證券等の支店がある。何れも本店は後章に見る如く東京及び關西であり、九州における金融方面に大きな動きを見せてゐる。

又取引所の外部的存在として證券及び金融方面に於て活躍してゐるものは

- 水義治） 大倉火災海上九州出張所（大久保仁三郎） 横濱火災海は福岡支店（本田三次） 大福海上火災九州支部（宮崎英雄） 太平火災海上福岡出張所（藤田誠一） 太平海上火災福岡支店（土井彰夫） 大北火災海上運送九州支店（妻木房吉） 第一火災海上福岡出張所（鈴木雅男） 大正海上火災福岡支店（佐藤薫） 福壽火災福岡支店（高羽哲夫） 扶桑海上火災福岡出張所（大塚秀吉） 富國火災海上福岡支店（田島正三） 神戸海上火災福岡支店（國光隼太） 帝國火災福岡支店（鈴木梶江） 帝國海上火災福岡支店（高田三郎） 朝日海上火災福岡出張所（江副武高） 尼崎海上火災九州出張所（水谷義男） 共同火災福岡支店（石見良事） 明治火災福岡支店（森脇雪） 三菱海上火災福岡出張所（永山實） 新日本火災海上福岡支店（野守憲治） 昭和火災福岡出張所（西尾重太郎）

#### イ、福岡生命保險協會

福岡縣に於ける生命保險の事業は全部東京及び關西に本店を有するものゝみで、福岡市に支店、支社又は支部を設置してゐるものは三十社で、現在協會加盟會社は二十九社に達してゐる。各社共其營業區域は、九州一圓又は其一部で、從業社員は數千名に及んでゐる。福岡生命保險協會の成立は去る明治四十一年五月で、當初土曜會の名に於て結成されたものであるが、當時は加盟會社は十六社に過ぎなかつた。其後懇話會と會名を改め、大正六年九月には加盟會社は四十社に達したので、九州生命保險協會と改稱し、昭和十一年二月福岡生命保險協會と改め今日に及んだもので、現在加盟會社の總契約高十二億七千餘萬圓を有し、東

京、大阪に次ぐ盛況であり、北九州の鑛山、工業の景氣上昇と一面に中、南部九州への進出によつて、更に今後飛躍的契約を見るものと信ぜられる。現在の加盟會社名を示すと次の如くである。

加盟會社及契約高

(契約高は「保險銀行時報」所載による)  
(昭和十一年四月末現在(順不同))

社名	所在	支店幹部名	契約高
明治生命福岡支店	福岡市中島町	坂本神太郎	一、四五六、二〇七
帝國生命福岡支店	同 中土居町	數納 清	一、一二五、九〇三
日本生命福岡支店	同 橋口町	石井 俊徳	一、八八三、五四〇
太陽生命九州支店	同 上小山町	竹下 常喜	一、二三、四〇〇
安田生命福岡支店	同 下西町	押本 壽昇	四六七、三六九
有隣生命福岡支店	同 上小山町	橋本 眞三	一二九、八二五
日本共立生命九州支店	同 天神町	山本 三生	七五、八〇四
仁壽生命福岡支店	同 同	松園 喜平	一九六、九七一
野村生命福岡支店	同 上小山町	守屋 範雄	二五六、五七八
愛國生命九州支店	同 天神町	伊藤 盛雄	二五一、九〇二
第一徵兵福岡支店	同 上吳服町	米倉 芳彦	五四七、一七六
大同生命福岡支店	同 西中洲	下村新次郎	三五〇、一二五
第一生命福岡支店	同 天神町	久恒 重幸	一、七七一、三二三
千代田生命福岡支店	同 下土居町	桑原 利市	一、五八三、四八八
板谷生命福岡支店	同 下新川端町	松尾 治三	五五、五五六
日清生命福岡支店	同 上店屋町	黒田 爲雄	二〇七、六二三
住友生命福岡支店	同 下土居町	古賀龜太郎	三八五、五一八
福壽生命九州支店	同 上小山町	森 堅一	五一、三六八
富士生命福岡支店	同 下名島町	木村 久治	四三、五九三
太平生命福岡支店	同 上吳服町	小林彌太郎	一一、〇四六

社名	所在	支店幹部名	契約高
日本徵兵福岡支部	同 天神町	小泉 吉道	二一三、四四六
福徳生命福岡支店	同 中奥堂町	木佐木 功	一〇六、一四六
常盤生命福岡支店	同 天神町	高橋清五郎	五一、六一五
大正生命福岡支店	同 蓮池町	大崎 重春	—
三井生命福岡支店	同 福岡市西中洲	吉田 信夫	四四九、七九二
日華生命福岡支店	同 渡邊通り	伊藤 正克	二一九、五二三
昭和生命福岡支店	同 天神町	鹿野嘉次郎	一七三、七一
片倉生命九州支店	同 上吳服町	唐澤代治郎	—
國華徵兵福岡支部	同 下土居町	神野 義明	—

第六節 信託業

福岡縣に於ける純粹の信託業は、福岡市下土居町にある住友信託支店の存在のみである。同社については福岡市の項に於て改めて述べることとしやう。

第十一章 産業組合運動

第一節 概観

福岡縣に於ける金融上の一機關であり、農村にとりて重大な使命を持つ産業組合は、別項に見る如く、縣産業組合設立以來累年強大な勢力になりつゝある。即ち表にして示すと次の如くである。

(1) 産業組合 (昭和九年末現在で左行の數字は全國順位を示す)

總組合數	調査組合數	組合員數	出資總額	積立金	借入金
四二九	四〇三	二六一、一〇八	一、一八三五	五、六三八	七、六六六
八	八	一	六	二	七

(2) 各利用別狀態

A 福岡縣産業組合

福岡縣の産業組合は、明治三十四年九月八幡市(當時遠賀郡内)に有限責任製鐵所職員購買組合の設立を以て嚆矢とし、同年中には僅かに三組合の設立を見るに過ぎなかつた。爾來毎年十餘の新設組合の出現を見たが、法令の趣旨が徹底しなかつたのと經營方法に宜しきを缺いた爲め、その發達も遅々として振はぬ状態にあつた。産業組合中央會福岡縣支會ではこの點に深く鑑みて明治四十一年専任主事を設置し、年々講習會或ひは講演會を開催して、組合精神の普及涵養と理事者の教養指導に努め、一面會報を發刊して既設組合の充實擴大を圖ると共に、新組合の創設を促した結果、大正四年には二百五十有餘の組合數を算し、事業分量も漸次増大するに至つた。

然しながら、一々是等組合の内容を検討するときは大革正を要するもの、或ひは又、整理振興を必要とする組合など續出し、殊に組合の普及歩合は縣下町村數の六割に滿たず、未設置市町村なほ三市百七十ヶ町村の多きに及ん



太陽生命九州支店	同	上小山町	竹下 常喜	一三三、四〇〇
安田生命福岡支店	同	下西町	押本 壽昇	四六七、三六九
有隣生命福岡支店	同	上小山町	橋本 眞三	一二九、八二五
日本共立生命九州支店	同	天神町	山本 三生	七五、八〇四
仁壽生命福岡支店	同	上小山町	松園 喜平	一九六、九七一
野村生命福岡支店	同	天神町	守屋 範雄	二五九、五七八
愛國生命九州支店	同	天神町	伊藤 盛雄	二五一、九〇二
第一徴兵福岡支店	同	上吳服町	米倉 芳彦	五四七、一七六
大同生命福岡支店	同	西中洲	下村新次郎	三五〇、一二五
第一生命福岡支店	同	天神町	久恒 重幸	一、七七一、三二三
千代田生命福岡支店	同	下土居町	桑原 利市	一、五八三、四八八
板谷生命福岡支店	同	同下新川端町	松尾 治三	五五、五五六
日清生命福岡支店	同	上土居町	黒田 爲雄	二〇七、六二三
住友生命福岡支店	同	下土居町	古賀龜太郎	三八五、五一八
福壽生命九州支店	同	上小山町	森 堅一	五一、三六八
富士生命福岡支店	同	下名島町	木村 久治	四三、五九三
太平生命福岡支店	同	上吳服町	小林彌太郎	一一二、〇四六

## 第六節 信託業

福岡縣に於ける純粹の信託業は、福岡市下土居町にある住友信託支店の存在のみである。同社については福岡市の項に於て改めて述べることとしやう。

# 第十一章 産業組合運動

## 第一節 概観

福岡縣に於ける金融上の一機關であり、農村にとりて重大な使命を持つ産業組合は、別項に見る如く、縣産業組合設立以來累年強大な勢力になりつゝある。即ち表にして示すと次の如くである。

(一) 産業組合 (昭和九年末現在で左行の數字は全國順位を示す)

總組合數	調査組合數	組合員數	出資總額	積立金	借入金
四二九	四〇三	二六一、一〇八	一一、八三五	五、六三八	七、六六六
八	八	一	六	二	七

(二) 各利用別状態

(イ) 信 用		(ロ) 販賣、購買	
貯 金	貸 付 金	販 賣 價 格	購 買 價 格
六六、六七九	五三、〇五五	一一、一三九	一〇、三四一
二	三	四	二
			八

組合の沿革史や現實の利用状況を示すことは、讀者にとりて、決して興味なきことではないと思ふ。そこで福岡縣産業組合、福岡縣購買販賣組合聯合會並に信用組合聯合會の状態を示すことによつて、この項に代へることとする。

### A 福岡縣産業組合

福岡縣の産業組合は、明治三十四年九月八幡市(當時遠賀郡内)に有限責任製鐵所職員購買組合の設立を以て嚆矢とし、同年中には僅かに三組合の設立を見るに過ぎなかつた。爾來毎年十餘の新設組合の出現を見たが、法令の趣旨が徹底しなかつたのと經營方法に宜しきを缺いだ爲め、その發達も遅々として振はぬ状態にあつた。産業組合中央會福岡縣支會ではこの點に深く鑑みて明治四十一年専任主事を設置し、年々講習會或ひは講演會を開催して、組合精神の普及涵養と理事者の教養指導に努め、一面會報を發刊して既設組合の充實擴大を圖ると共に、新組合の創設を促した結果、大正四年には二百五十有餘の組合數を算し、事業分量も漸次増大するに至つた。

然しながら、一々是等組合の内容を検討するときは大革正を要するもの、或ひは又、整理振興を必要とする組合など續出し、殊に組合の普及歩合は縣下町村數の六割に満たず、未設置市町村なほ三市百七十ヶ町村の多きに及んでゐた。茲に於て福岡縣當局は關係者と凝議の結果、産業組合網擴充十ヶ年計畫を樹立し、その前五ヶ年を以て町村數と組合數を同一にし、後半五ヶ年を以て既設組合の内容整備並に不振組合の整理に充て、一意正常なる組合網の整備の爲め關係者の總動員を行つた。

かくて大正五年組合の表彰規定を設け、優良組合を選彰して組合の發達と後進組合の誘導に資し、翌六年採長補短の實を擧げる目的を以つて縣外に派遣員を特派して調査見聞を擴め、組合の新設督勵と指導監督に全力を傾注し各種の施設計畫を樹立し、その實現に努めた結果非常な成果を收め、大正七

年秋初めて産業組合縣下大會を開催する運びに至つた。越えて大正八年十月大戦後の影響を受けた全國民の思想急變と財界の大動搖に備ふる爲め、日



福岡縣知事 山田四男氏



福岡縣信用組合理事 原清次郎氏



購買販內山氏



購買販務理事 春一氏

本精神の作興と共存同榮の思想を鼓吹すべく關係者の大評定を縣廳内に於て行ひ、全面的に猛運動を開始した結果、着々成果を収めると共に組合網の整備、擴充に役立ち、同年末には組合數三百六十七、組合員數八萬六千五百五十人、出資總額二百四十六萬三千二百二十一圓、貯金千三百三十四萬五千四百八十八圓、貸付金千九百八千餘圓、購買高四百六十二萬九千餘圓、販賣高二百一萬八千餘圓、農業倉庫の總坪數三千九百七十五坪の多きに達した。爾來關係者の不撓の努力により、逐年隆盛に赴き、更に昭和八年には中央會の指示に基き擴充五ヶ年計畫を樹て、翌々昭和十年八月には未加入農家の解消運動に成功し、同年十二月末には組合數四百四十五、組合員數三十萬五千

他農村副業品の販賣並に生活必需雜貨の購買等凡ゆる部門に進出し、昭和十年度の取扱ひ量の如き、二千二百萬圓を突破してゐるが、この十ヶ年間の過程は決して順調なコースばかりではなかつた。

第一次五ヶ年計畫、第二次五ヶ年計畫と矢継ぎ早やに事業計畫は樹てたが經營方針は極めて地味な經營第一主義を採り、漸進的に内容の充實を圖つて來たもので、そこには關係者の涙ぐましき異常な努力がある。

さて歐洲大戦後の經濟恐慌に未だ基礎の強固でなかつた「郡聯」(郡を單位に結成された産業組合の聯合機關)は、破綻の危機に陥り、其間組合關係者は勿論のこと、縣當局の懸命の努力も効を奏せず、遂に解散の止むなきに至り、大正十三年當時の産業組合福岡縣支會の事業を擴張して、購買販賣の事業を創始し「郡聯」の代位をなさしめ、一面解散後の善後措置に當らしめたのであつたが、これが縣購販聯誕生の因子となつたのであつた。かくて當時の福岡縣知事柴田善三郎氏は縣購販聯設立の必要を提唱し、昭和二年四月九日機熟して有限責任福岡縣購買販賣組合聯合會は産聲をあけたのである。當

百九十九人、出資總額千三百六萬九千餘圓、貯金八千三百七十二萬餘圓、貸付金五千九百三十九萬餘圓、購買高千七百二萬二千餘圓、販賣高二千四百萬九千餘圓の事業分量を示し、名實共に組合王國の威名を擅用するに至つたのである。最近十三年間に亘る主要事業の累年進展表を示せば左の如し。

	大正十二年 十二月末	昭和二年 十二月末	昭和六年 十二月末	昭和十年 十二月末
組合數	元八	四七	四四	四四五
組合員數	一三、六四三	一六三、七四	二四七、三三	三〇五、九九
出資總額	四、三三、〇三七	八、五五、三三	一、一七、二〇八	一三、〇六九、三
貯金	一八、九四、四四	四、五九、七三	五、二四、七六三	八三、七二、〇九〇
貸付金	一四、六九、八六四	三、四〇、三七五	五三、四一、〇一一	五九、三九〇、四九五
購買高	五、六五、二九八	八、三四、六九九	六、〇四、七五三	一七、〇三、〇一七
販賣高	二、三四、四八一	四、三三、五五〇	六、四四、九三三	二〇、四九、三四
利用料	九、三、七五	二〇七、七四	二四、三、四	三、一八、七三

### B 福岡縣購買販賣組合聯合會

こゝに「福岡縣購販聯」と云つても一般人には一寸判りかねるが、正式の名前は、保證責任福岡縣購買販賣組合聯合會と云ふ至極長たらしい名稱である。その購販聯こそ實は農村經濟の中樞機關として、繊細な神經と鋭敏な感觸を二六時中縣下農民の頼りの親ともなり、柱ともなつてゐる存在である。この購販聯が設立されたのは過ぐる昭和二年の金融パニックに由るものである。爾來十年の歲月は経過したが、其間異常の進展膨脹を示し、福岡縣が組合王國の異名を擅用し得るのも、購販聯の不撓の努力の結果に負ふ所尠くはない。今日では主要農産物の販賣統制、肥料購入の全部統制の域に達し、其

を借入れて事業を開始し、初年度に於て販賣事業に五四三、九〇九圓、購買事業に一三二、三三三圓の取扱ひを行つて三百十圓の剩餘金をあげ、これに力を得て、第二年度の昭和三年三月の通常總會に於ては、事業の擴大好轉を計る爲専任役員設置の必要が提唱せられ、現在の會長山内範造氏、同専務理事春孝一氏が當選就任し、今日に至つた。其間事業の進展擴大に伴ひ、縣下各郡に出張所を開設して専任職員を常設し、昭和七年には從來の有限責任制度を保證責任制度に改組し、近くは農業倉庫事業、茶種油製油事業にまで手を延ばし、事業分量も異常の膨脹を示してゐる。

即ち創業當時よりの事業分量を示せば左の如し(單位圓)。

### 取扱事業成績表

年次	販賣高	購買高	合計
昭和二年	五四三、九〇九	一三二、三三三	六七六、二四二
同三年	二九三、〇〇八	八〇二、九七三	一、〇九五、九八〇
同四年	九六、二六七	一、三三、三三	一、〇九一、九九五



長 會 聯 販 購  
氏 造 範 內 山



聯 販 聯 販 聯 販  
事 理 務 務 務  
氏 一 孝 春 春

貸付金	四、六四八、八六四	三、四一七、七五二	五、三〇四、〇一七
購買高	五、六五、二九八	八、三四、六九九	六、〇四一、七五二
販賣高	三、三四、四八一	四、二七、五五〇	六、四四、九三三
利用料	九、三、七五	二、七、七四	二、四、七四
			三、一、八七三

### B 福岡縣購買販賣組合聯合會

本精神の作興と共存同業の思想を鼓吹すべく関係者の大評定を縣廳内に於て行ひ、全面的に猛運動を開始した結果、着々成果を収めると共に組合網の整備、擴充に役立ち、同年末には組合數三百六十七、組合員數八萬六千五百八十人、出資總額二百四十六萬三千二百二十一圓、貯金千三百三十四萬五千四百八十八圓、貸付金千九百八千餘圓、購買高四百六十二萬九千餘圓、販賣高二百一萬八千餘圓、農業倉庫の總坪數三千九百七十五坪の多きに達した。爾來關係者の不撓の努力により、逐年隆盛に赴き、更に昭和八年には中央會の指示に基き擴充五ヶ年計畫を樹て、翌々昭和十年八月には未加入農家の解消運動に成功し、同年十二月末には組合數四百四十五、組合員數三十萬五千

こゝに「福岡縣購買販賣」と云つても一般人には一寸判りかねるが、正式の名前は、保證責任福岡縣購買販賣組合聯合會と云ふ至極長たらしい名稱である。その購買販賣こそ實は農村經濟の中樞機關として、繊細な神経と鋭敏な感觸を二六時中縣下農民の頼りの親ともなり、柱ともなつてゐる存在である。この購買販賣が設立されたのは過ぐる昭和二年の金融パニックに由るものである。爾來十年の歲月は経過したが、其間異常の進展膨脹を示し、福岡縣が組合王國の異名を擅用し得るのも、購買販賣の不撓の努力の結果に負ふ所尠くはない。今日では主要農産物の販賣統制、肥料購入の全部統制の域に達し、其

他農村副業品の販賣並に生活必需雜貨の購買等凡ゆる部門に進出し、昭和十年度の取扱ひ量の如き、二千二百萬圓を突破してゐるが、この十ヶ年間の過程は決して順調なコースばかりではなかつた。

第一次五ヶ年計畫、第二次五ヶ年計畫と矢繼ぎ早やに事業計畫は樹てたが經營方針は極めて地味な經營第一主義を採り、漸進的に内容の充實を圖つて來たもので、そこには關係者の涙ぐましく異常な努力がある。

さて歐洲大戰後の經濟恐慌に未だ基礎の強固でなかつた「郡聯」(郡を單位に結成された産業組合の聯合機關)は、破綻の危機に陥り、其間組合關係者は勿論のこと、縣當局の懸命の努力も効を奏せず、遂に解散の止むなきに至り、大正十三年當時の産業組合福岡縣支會の事業を擴張して、購買販賣の事業を創始し「郡聯」の代位をなさしめ、一面解散後の善後措置に當らしめたのであつたが、これが縣購買販賣誕生の因子となつたのであつた。かくて當時の福岡縣知事柴田善三郎氏は縣購買販賣設立の必要を提唱し、昭和二年四月九日機熟して有限責任福岡縣購買販賣組合聯合會は産聲をあげたのである。當時の陣容は

- (一)役員 會長理事城島春次郎、理事清水喜一郎、添田義太郎、橋本郁太郎、橋崎彦四郎、山口大造、塚本榮太郎、監事城丸磯吉、倉富強五郎、西村亭、松本勝五郎、松田巳之助
- (二)所屬組合數並に出資金 所屬組合八四、出資一口金額三〇〇圓、出資口數一六二口、出資總額四八、六〇〇圓
- (三)系統機關加入 全購聯二〇一、〇〇〇圓、縣信聯二〇一、〇〇〇圓

右の如く寔に貧弱な内容であつたが、差當り四二二、〇〇〇圓の事業資金

を借入れて事業を開始し、初年度に於て販賣事業に五四三、九〇九圓、購買事業に一三二、三三三圓の取扱ひを行つて三百十圓の剩餘金をあげ、これに力を得て、第二年度の昭和三年三月の通常總會に於ては、事業の擴大好轉を計る爲専任役員設置の必要が提唱せられ、現在の會長山内範造氏、同専務理事春孝一氏が當選就任し、今日に至つた。其間事業の進展擴大に伴ひ、縣下各郡に出張所を開設して専任職員を常設し、昭和七年には從來の有限責任制度を保證責任制度に改組し、近くは農業倉庫事業、茶種油製油事業にまで手を延ばし、事業分量も異常の膨脹を示してゐる。

即ち創業當時よりの事業分量を示せば左の如し(單位圓)。

#### 取扱事業成績表

年次	販賣高	購買高	合計
昭和二年度	五四三、九〇九	一三二、三三三	六七六、二四三
同 三年度	二九三、〇〇八	八〇三、九七二	一、〇九五、九八〇
同 四年度	九五六、二六七	一、五〇、三三八	一、〇九一、九九五
同 五年度	二、六〇、三三〇	一、一〇九、五五五	三、七一九、八三五
同 六年度	四、三四、五九四	一、三四三、一八三	五、六七八、七七七
同 七年度	四、一八、九四六	二、二九五、八八一	六、四七九、八二七
同 八年度	八、五九、五四〇	三、四二六、四八九	一、一九三、〇三九
同 九年度	九、八、一七二	五、〇〇〇、六六一	一、四八七、四三三
同 十年度	一四、三、八、三三八	七、八二、三三二	二、二、二八、六八九

更に同會の現勢を摘記すれば左の通りである。

- (一)役員 會長理事山内範造、専務理事春孝一、理事清水喜一郎、川島樊造、本松太三、井村初次、塩田内藏太郎、山口大造、島益次郎、沖藏

末松由承、監事城戸磯吉、石井善三郎、西村亭、原田治、松本勝五郎、毛利一

- (一) 所屬組合數並に出資金 所屬組合數三八三組合、出資口數一、〇三七口 出資一口金額五〇〇圓、出資總額六一八、五〇〇圓、拂込出資金額三八二、二五〇圓
- (二) 系統機關加入 全購聯出資三九口、全販聯出資六三口、縣信聯出資五口
- (三) 職員 本會五四名、出張所(三十一ヶ所)五一名、聯合農業倉庫一〇名、茶種油工場二三名

(五) 事業分量

- (1) 購買事業
  - イ、肥料 金肥取扱高 七四、一一六噸(五、五一四、〇一九圓)
  - ロ、雜貨 取扱高 二、三〇六、二〇〇圓
- (2) 販賣事業
  - イ、第一部
    - 白米 二、五八九石 八〇、六四九圓
    - 玄米 二三四、二二九 六、八〇三、二八二
    - 小麥 二三一、三二五 四、一四九、九〇二
    - 茶種 一六一、七四八 二、九六五、八二三
  - ロ、第二部
    - 鶏卵 八、七九四箱 六三、九五一
    - 叭繩 三二七、三四八
    - 木炭 三、六六三俵 二、〇二〇

- 牛乳 三一、八七六立 五、四一八
- (六) 聯合農業倉庫 (羽犬塚一棟)
  - 入庫保管
    - イ、玄米 一四、〇五五噸
    - ロ、小麥 一八、五五四袋
    - ハ、叭 九一、五八二枚

(以上昭和十一年二月二十八日現在)

尚ほ聯合農業倉庫は、京都郡行橋町に昭和十一年四月より一棟を建設し、目下久留米驛前に更に一棟の増設計畫中である。

**A 茶種製油事業** 茶種販賣の市價維持の爲め、昭和十年度より計畫した茶種油の搾油加工事業は、筑紫郡那珂村竹下驛附近に昭和十一年七月工場竣成し、八月より操業を開始してゐる。

(1) 工場概況

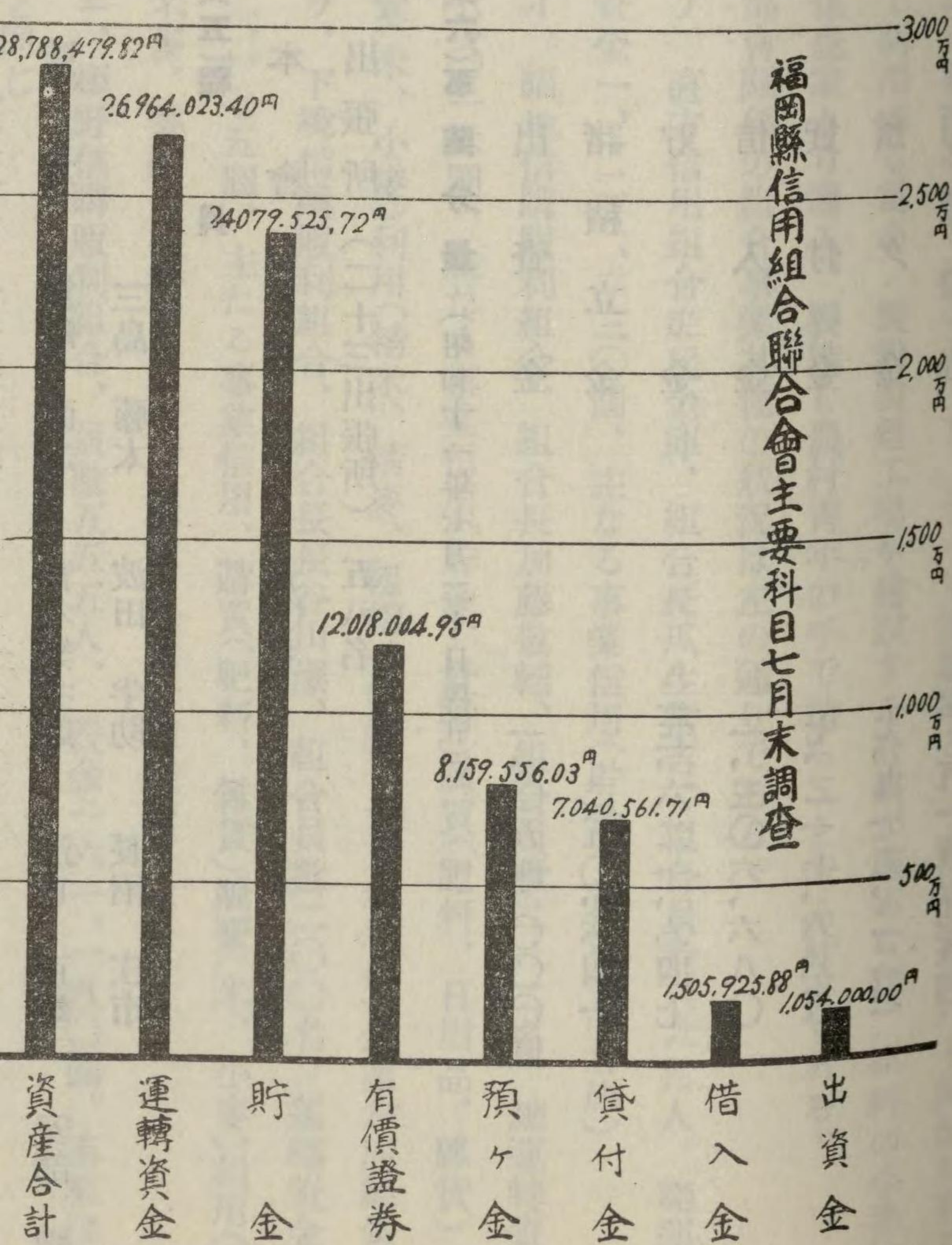
工場敷地	坪數	二、二九三坪
事務所	所 (二階建々坪)	四〇坪
搾油工場	建坪	九〇坪 (水壓機二〇臺)
精製工場	同	四〇坪
粕置場	同	一〇〇坪
原料倉庫	同	六〇坪
油荷造場	同	四八坪

- 雜品倉庫 同 九六坪
- 分析室 同
- 工場長住宅 同 二五坪
- 職工合宿所 二階建々坪 四八坪
- (2) 生産能力
  - 茶種原油 原料 一日三百袋搾油
- (3) 製品
  - 茶種油 白絞油

C 福岡縣信用組合聯合會

福岡縣下組合金融の總元緒である福岡縣信用組合聯合會の創立は、大正六年十二月である。時の縣知事谷口留五郎氏が設立の必要を力説し、同年一月

福岡縣信用組合聯合會主要科目七月末調査



(1) 購買事業

イ、肥料 金肥取扱高 七四、一一六吨(五、五一四、〇一九圓)  
 ロ、雜貨 取扱高 二、三〇六、二〇〇圓

(2) 販賣事業

イ、第一部  
 白米 二、五八九石 八〇、六四九圓  
 玄米 二三四、二二九 六、八〇三、二八二  
 小麥 二三一、三三五 四、一四九、九〇二  
 菜種 一六一、七四八 二、九六五、八二三  
 ロ、第二部  
 鶏卵 八、七九四箱 六三、九五一  
 叭繩 三一七、三四八  
 木炭 三、六六三俵 二、〇二〇

目下久留米驛前に更に一棟の増設計畫中である。

**A 菜種製油事業** 菜種販賣の市價維持の爲め、昭和十年度より計畫した菜種油の搾油加工事業は、筑紫郡那珂村竹下驛附近に昭和十一年七月工場竣成し、八月より操業を開始してゐる。

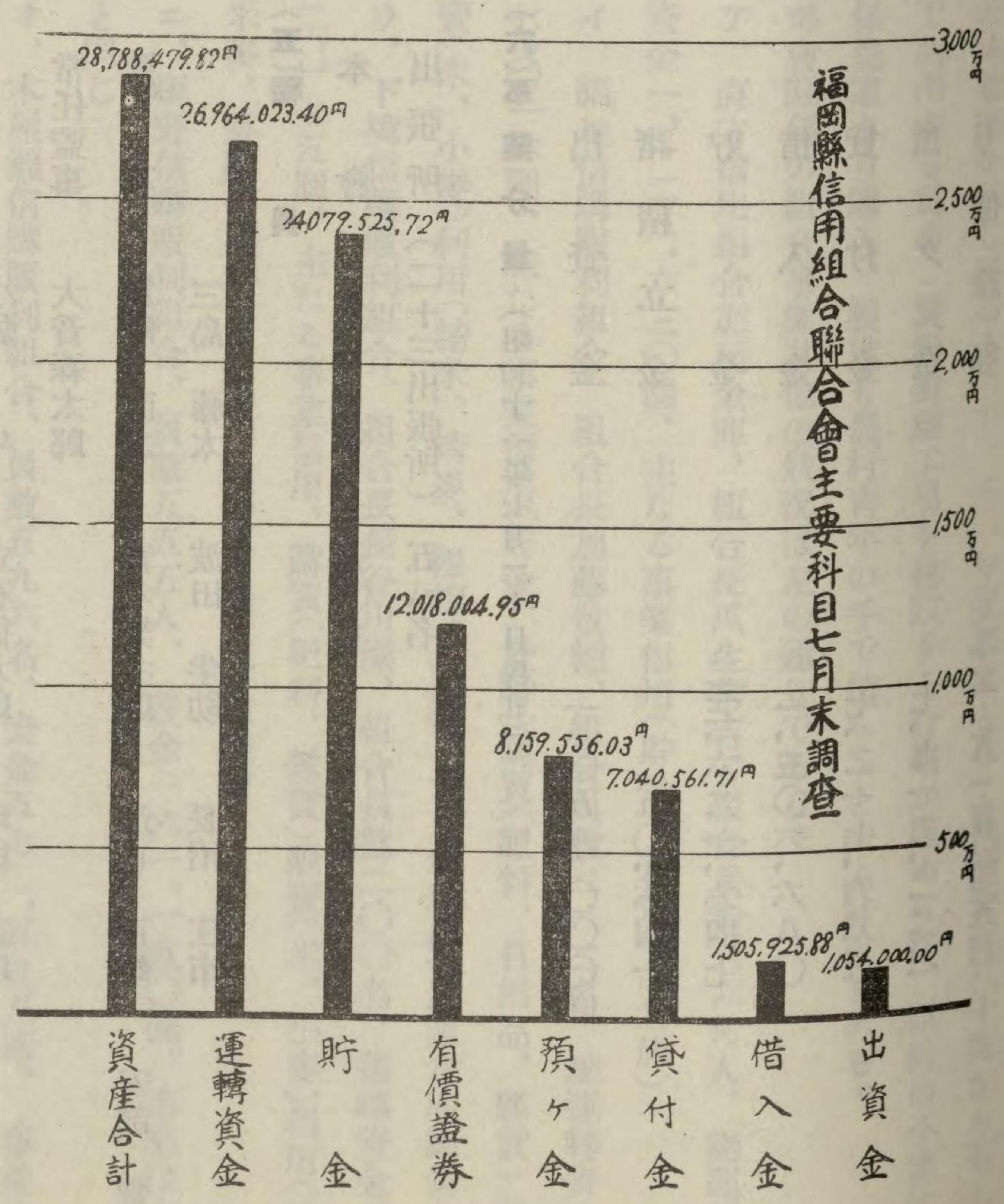
(1) 工場概況

工場敷地	坪數	二、二九三坪
事務所	(二階建々坪)	四〇坪
搾油工場	建坪	九〇坪 (水壓機一〇臺)
精製工場	同	四〇坪
粕置工場	同	一〇〇坪
原料倉庫	同	六〇坪
油荷造場	同	四八坪

雜品倉庫	同	九六坪
分析室	同	九六坪
工場長住宅	同	二五坪
職工合宿所	二階建々坪	四八坪
(2) 生産能力		
菜種原油	原料 一日三百袋搾油	
(3) 製品		
菜種油	白絞油	

C 福岡縣信用組合聯合會

福岡縣下組合金融の總元締である福岡縣信用組合聯合會の創立は、大正六年十二月である。時の縣知事谷口留五郎氏が設立の必要を力説し、同年一月十三日の産業組合福岡縣支會の總會に於て滿場一致決定、十一月二十六日創立委員會を開き、定款の制定、理事監事の互選を行ひ、十二月十三日附に認可されたのである。事業初年度の成績は、所屬組合數九十六、出資總額三萬五千四百圓、貯金四萬四千六百餘圓の寥々たるものであつたが、事業年度を加ふる毎に業績頓に上がり、大正十一年三月には宗像、田川、朝倉、築上の各郡に支所を設け、更に大正十四年の第九年度總會に於ては、先例を破り役員を全部所屬組合より選任することとなり、本格的に自主機關としての機能を發揮し得ることとなつた。



越えて大正十五年四月、若松、直方、行橋、飯塚、前原に支所を増設し、昭和二年には支所を出張所と改稱し、久留米、柳河に出張所網を擴大し、其間自作農創設維持資金、舊債整理資金、中小商工資金など新規貸出規定を制定して、遊資の消化に努めると共に、共済貯金、相互貯金を創設して庶民の貯金奨励に萬全を期してゐる。

かくて年を逐ふに従つて事業分量の増大と經營に堅實味を加へ、昭和十

年七月には實に出資總額百五萬四千圓、貯金二千三百六十二萬千餘圓、貸付金七百二十一萬七千餘圓の多額に上り、事業分量の多いこと、經營の堅實であることは、全國道府縣信用組合聯合會の冠をなしてゐる。

次に創立以來の陣容並に經營の内容を指記すれば左の通りである。

(一) 創立當時の役員

- 會長理事 川越 壯介 (福岡縣書記官)  
 常務理事 南波清三郎 (福岡縣農會技師)  
 理事 久保豊四郎(福岡縣理事官) 城島春次郎(福岡縣理事官)  
 監事 佐藤準藏、吉田環、石井房次、鶴田正夫  
 立花親俊、宮崎九内、林田春次郎

(二) 歴代の會長

- 第一代 川越 壯介 (福岡縣書記官)  
 第二代 伊東喜八郎 (同)  
 第三代 石垣倉治 (同)  
 第四代 對馬郁之進 (同)  
 第五代 佐藤 準藏  
 第六代 林田春次郎  
 現任 石井徳久次

(三) 歴代の専務理事

- 第一代 南波清三郎 (福岡縣農會技師)  
 第二代 城島春次郎 (福岡縣理事官)  
 第三代 郡 茂徳 (同)

(七) 創立以來の事業累年進展表

	大正七年	大正十一年	昭和元年	昭和五年
所屬組合	九六	一九七	三六五	四八
出資金	三五、四〇〇	七五、六〇〇	五五三、五〇〇	一、〇四、五〇〇
貯金	四、六九	五三、六四	五四五、六六七	一、六五、四〇〇
借入金	一、四〇六	一、四八、五〇	二、三九、五〇	一、三六、六〇
貸付金	一	四六、九六	一、七六、四六	六、四八、三六
預ケ金	一	一五三、六九	一、四九二、三三	二、一五、八三四
所有證券	一	二八、七七	二、八八二、〇九四	五、九二、六九

(二十一年七月二十日現在)

D 直方鞍手産業組合

産業組合中央會福岡縣鞍手郡部會事務所は直方市南多賀町にあり、所屬組合二五の統制機關として努力しつゝあるか、會長に瓜生常吉、主事蟹川政一郎、主事補野中光諸氏があり、縣の産業組合擴充五ヶ年計畫中三ヶ年を通じて

現任 清原勘次郎

(四) 現役員

- 會長理事 石井徳久次  
 専務理事 清原勘次郎  
 常任理事 浦野 岩吉 富安 重行 森部 隆輔 下川 清  
 井上 種馨 倉富強五郎 菊地四郎吉 大場 謙造  
 小袋 半 立石徳太郎 坪根 吉助  
 常任監事 大音森太郎  
 監事 旗崎 直之 宮本樂次郎 江口 正雄 安部 豊敏  
 三島 藤太 波田 半助 長沼 庄市

(五) 職員

- 本會 五〇名  
 出張所 (二十三出張所) 五八名

(六) 事業分量 (昭和十一年七月二十日現在)

出資金	一、〇五四、〇〇〇圓
諸積立金	二五〇、六四一
貯金	二二三、六二二、六四七
借入金	一、三〇六、六八〇
貸付金	七、二一七、六六五
預ケ金	七、九一二、二二三
有價證券	一一、五一五、四五四

と云ふ數字を示してゐるので、十一年度事業として餘裕金百八十萬から有るので活用する爲め、製粉製麵工場を建設する計畫が進められ、原料の小麥は關係農家より購入、製造も農村青年の手で造らうと云ふ計畫である。郡部會關係の組合事業其他の狀況は左の通りである。

ア、直方信用組合庶民金庫、組合長瓜生常吉、組合員數八六九人、總運轉資金一、二二八、六三〇圓、主なる事業信用(貯金、貸付商品倉庫)

イ、福地信購販利組合、組合長加藤敬輔、組合員數二八二名、總運轉資金七、〇一六圓、主たる事業信用(貯金、貸付)購買(肥料、日用品、雜貨)販賣(米、小麥)利用(精米、精麥、粃摺、麥壓、大豆粕粉碎)農業倉庫經營

ウ、下境信購販利組合、組合長長谷川潔、組合員數二〇〇名、運轉資金五二、一七五圓、主たる事業信用、購買(肥料、雜貨)販賣(米、小麥)利用(精

米、麥壓、製粉、大豆粕粉碎)、農業倉庫經營

エ、頓野信購販利組合、員數五五五人、資金一六一、一五〇圓、事業は右と同じ

監事 立花親俊、宮崎九内、林田春次郎

(二)歴代の會長

- 第一代 川越壯介 (福岡縣書記官)
  - 第二代 伊東喜八郎 (同)
  - 第三代 石垣倉治 (同)
  - 第四代 對馬郁之進 (同)
  - 第五代 佐藤準藏
  - 第六代 林田春次郎
  - 現任 石井徳久次
- (三)歴代の専務理事
- 第一代 南波清三郎 (福岡縣農會技師)
  - 第二代 城島春次郎 (福岡縣理事官)
  - 第三代 郡 茂徳 (同)

監事 旗崎直之、宮本樂次郎、江口正雄、三島藤太、波田半助、長沼庄市、安部豊徳

(五)職員

本會 五〇名  
出張所 (二十三出張所) 五八名

(六)事業分量 (昭和十一年七月二十日現在)

出資金	一、〇五四、〇〇〇圓
諸積立金	二五〇、六四一
貯金	一三三、六二一、六四七
借入金	一、三〇六、六八〇
貸付金	七、二一七、六六五
預ヶ金	七、九一二、二二三
有價證券	一一、五一五、四五四

(七)創立以來の事業累年進展表

所屬組合	大正七年	大正十一年	昭和元年	昭和五年	(二十一年七月二十日現在)
出資金	二五、四〇〇	七五、六〇〇	五五、五〇〇	一、〇四、五〇〇	一、〇五四、〇〇〇
貯金	四、六九	五五、六四	五、四〇、六七	二、六五、四三	三三、六二、六四七
借入金	—	—	一五、四六	四六、五	一、三〇六、六八〇
貸付金	—	—	四六、九六七	一、七六、四六	七、二一七、六六五
預ヶ金	—	—	一五、六九	一、四三、三三	七、九一二、二二三
所有證券	—	—	二八、七七	二、八二、九四	一一、五一五、四五四

D 直方鞍手産業組合

産業組合中央會福岡縣鞍手郡部會事務所は直方市南多賀町にあり、所屬組合二五の統制機關として努力しつゝあるか、會長に瓜生常吉、主事蟹川政一郎、主事補野中光諸氏があり、縣の産業組合擴充五ヶ年計畫中三ヶ年を通じて縣下組合で第一位の榮冠を獲得し續けて、あと二ヶ年も第一位を目ざして奮闘してゐる。

所屬組合數二五、信用一、信購販利一五、信購販二、購販利(郡市聯合)一、購買二、電気利用四あり、組合員數は一、一八八人で出資金四一〇、四九〇圓、貯金四、二〇五、八八九圓、貸付金二、四九五、〇五九圓、諸積立金三二八、七三七圓、購買總額一、一三一、二一九圓、販賣總額八〇二、一六七圓、利用料一四、二〇〇圓、米小麥茶種入庫數一一二、九四七俵、運轉資金總額五、二二七、八五四圓、農業倉庫數二十棟。

と云ふ數字を示してゐるので、十一年度事業として餘裕金百八十萬から有るので活用する爲め、製粉製麵工場を建設する計畫が進められ、原料の小麥は關係農家より購入、製造も農村青年の手で造らうと云ふ計畫である。郡部會關係の組合事業其他の狀況は左の通りである。

- ア、直方信用組合庶民金庫、組合長瓜生常吉、組合員數八六九人、總運轉資金一、二二八、六三〇圓、主たる事業信用(貯金、貸付)商品倉庫)
- イ、福地信購販利組合、組合長加藤敬輔、組合員數二八二名、總運轉資金七、〇一六圓、主たる事業信用(貯金、貸付)購買(肥料、日用品、雜貨)販賣(米、小麥)利用(精米、精麥、製粉、大豆粕粉砕)農業倉庫經營
- ウ、下境信購販利組合、組合長長谷川潔、組合員數二〇〇名、運轉資金五二、一七五圓、主たる事業信用、購買(肥料、雜貨)販賣(米、小麥)利用(精米、精麥、製粉、製茶、大豆粕粉砕)、農業倉庫經營
- エ、頓野信購販利組合、員數五五五人、資金一六一、一五〇圓、事業は右と同じ
- オ、木屋瀬信購販利組合、員數五九六名、資金五七二、五九五圓、事業は信用(貯金、貸付)、購買(肥料、飼料、雜貨)、販賣(米、麥、製茶)、利用(精米、精麥、製粉、製茶、大豆粕粉砕、商品倉庫)、農業倉庫經營
- カ、植木信購販利組合、員數三二四名、資金一九九、六二二圓、事業は信用、購買(右同)、販賣(米、麥、製粉)、利用(精米、精麥、製粉、大豆粕粉砕、商品倉庫)、農業倉庫
- キ、劍信購販組合、員數三六三名、資金二〇五、二〇三圓、信用、購買(肥

料雜貨)、販賣(米、麥)、農業倉庫

ク、西川信購販利組合、員數五九六名、資金一三五、〇一九圓、信用購買

(右同)、販賣(米、麥、茶種)、利用(大豆粉粉碎)、農業倉庫

ケ、古月信購販利組合、員數三五一名、資金五〇五、七七二圓

コ、宮田信購販利組合、員數六六三名、資金二二三、九四一圓

サ、香井田信購販利組合、員數五一三名、資金六六、六八八圓

シ、小竹信購販利組合、員數六九九名、資金二一〇、〇三三圓

ス、笠松信購販利組合、員數三九一名、資金一一、五六六圓

セ、若宮信購販利組合、員數六八五名、資金五九三、八二四圓

ソ、吉川信購販利組合、員數六一四名、資金三四三、二三五圓

タ、中信購販利組合、員數二八四名、資金一八八、三〇三圓

チ、山口信購販利組合、員數三五一名、資金一六二、二八四圓

ツ、古河西部鑛業所購買組合、員數二、八〇七名、資金六六、三二二圓

テ、中販賣購買組合△吉川電氣利用組合△湯原電氣利用組合△黒丸電氣利

用組合△山口畑電氣利用組合

# 商、工、同業組合 運動と特産品の 諸様相

## 第一節 總 說

工産品額に於て全國中優位を占める福岡縣に於ける工産額中、近代機械工業システムによる大經營組織による工業品は、本章の埒外に屬する。本章では専ら所謂父子相傳的特殊工業作品たるお國自慢とも稱すべき縣下の特産工業を取扱ふことが目的である。従つて縣下の特産品或は之に類似する凡て

「博多帶しめ 筑前絞

歩む姿が 柳腰

博多に来るときは 一人で来たが

歸りは人形と 二人連れ」

古來から博多節によりて廣く知られてゐる意氣な博多織、博多絞、博多人形を始めとして、由緒ある高取焼や、左黨に歡迎されてゐる灘の生一本に匹敵する清酒、大川指物の和家具類、おたふく綿、醬油、陶磁器類等々。これ等の多くの縣下の特産物は、實に量と質に於て卓越したものが多し。然も一様に古い歴史を持つてゐる點でも誠に特徴的であると云はねばならない。

最近、此種の特産工業部門に亘つて、全般的に同業組合や工業組合の成立を見つゝあることは、斯業發達の上に喜ばしき現象である。先づ工業組合から見よう。昭和十一年五月調査によれば、縣下工業戸數は八萬七千餘戸、人口四十四萬二千五百餘人で、工場法の適用を見るものは千九百四餘場、これに従事する職人數は九萬六千九百餘人で、縣下總戸數五十一萬二千五百餘に對



セ、若宮信購販利組合、員數六八五名、資金五九三、八二四圓  
ソ、吉川信購販利組合、員數六一四名、資金三四三、一三五圓  
タ、中信購販利組合、員數二八四名、資金一八八、三〇三圓  
チ、山口信購販利組合、員數三五一名、資金一六二、二八四圓  
ツ、古河西部鑛業所購買組合、員數二、八〇七名、資金六六、三二二圓  
テ、中販賣購買組合△吉川電氣利用組合△湯原電氣利用組合△黒丸電氣利  
用組合△山口畑電氣利用組合

## 商、工、同業組合 運動と特産品の 諸様相

### 第一節 總 說

工産品額に於て全國中優位を占める福岡縣に於ける工産額中、近代的機械工業システムによる大經營組織による工業品は、本章の埒外に屬する。本章では専ら所謂父子相傳的特殊工業作品たるお國自慢とも稱すべき縣下の特産工業を取扱ふことが目的である。従つて縣下の特産品或は之に類似する凡ての製品について詳述するであらう。而して特産品と云つても、他府縣のそれと異つて、本章における特産品の製造工程については、讀者は甚しくその規模の大なるを觀取されるであらうし、その故に特産品として取扱ふことの不當をさへ思はれるやも知れない。然し、この一見不當に見える大規模組織の故にこそ、實に福岡縣特産工業製品の特異性があるのであつて、既に單なる縣外移出の水平線を越え、遙かに遠く滿洲、支那、歐米にまで輸出されてゐることは、日本にその類を餘り見ない點で、特に福岡縣特産工業の誇りとするところであり、記者が特にこの一章を設ける所以でもある。

「博多帯しめ 筑前絞

歩む姿が 柳腰

博多に来るときは 一人で来たが

歸りは人形と 二人連れ」

古來から博多節によりて廣く知られてゐる意氣な博多織、博多絞、博多人形を始めとして、由緒ある高取焼や、左黨に歡迎されてゐる灘の生一本に匹敵する清酒、大川指物の和家具類、おたふく綿、醤油、陶磁器類等々。これ等の多くの縣下の特産物は、實に量と質に於て卓越したものが多し。然も一様に古い歴史を持つてゐる點でも誠に特徴的であると云はねばならない。

最近、此種の特産工業部門に亘つて、全般的に同業組合や工業組合の成立を見つゝあることは、斯業發達の上に喜ばしき現象である。先づ工業組合から見よう。昭和十一年五月調査によれば、縣下工業戸數は八萬七千餘戸、人口四十四萬二千五百餘人で、工場法の適用を見るものは千九百四餘場、これに従事する職人數は九萬六千九百餘人で、縣下總戸數五十一萬二千五百餘人に對し一七%、總人口數二百七十萬七千五百餘人に對して一六%強に當る譯で、生産高では、昭和九年度は五億九千三百二十一萬餘圓を示してゐるから總生産額八億五千七百萬圓の約七割を占めるといふ有様で、如何に福岡縣下の此種工業品の生産額が大なるものであるか判るであらう。

生産額のこの様な累増は、然し恐らくは個々の力を以つてしては達し得られなかつたに違ひない。それは只工業組合に統一され、その統制の下に各製造工業家が結束し、製品の向上に努力した結果であるのではないかと思ふ。



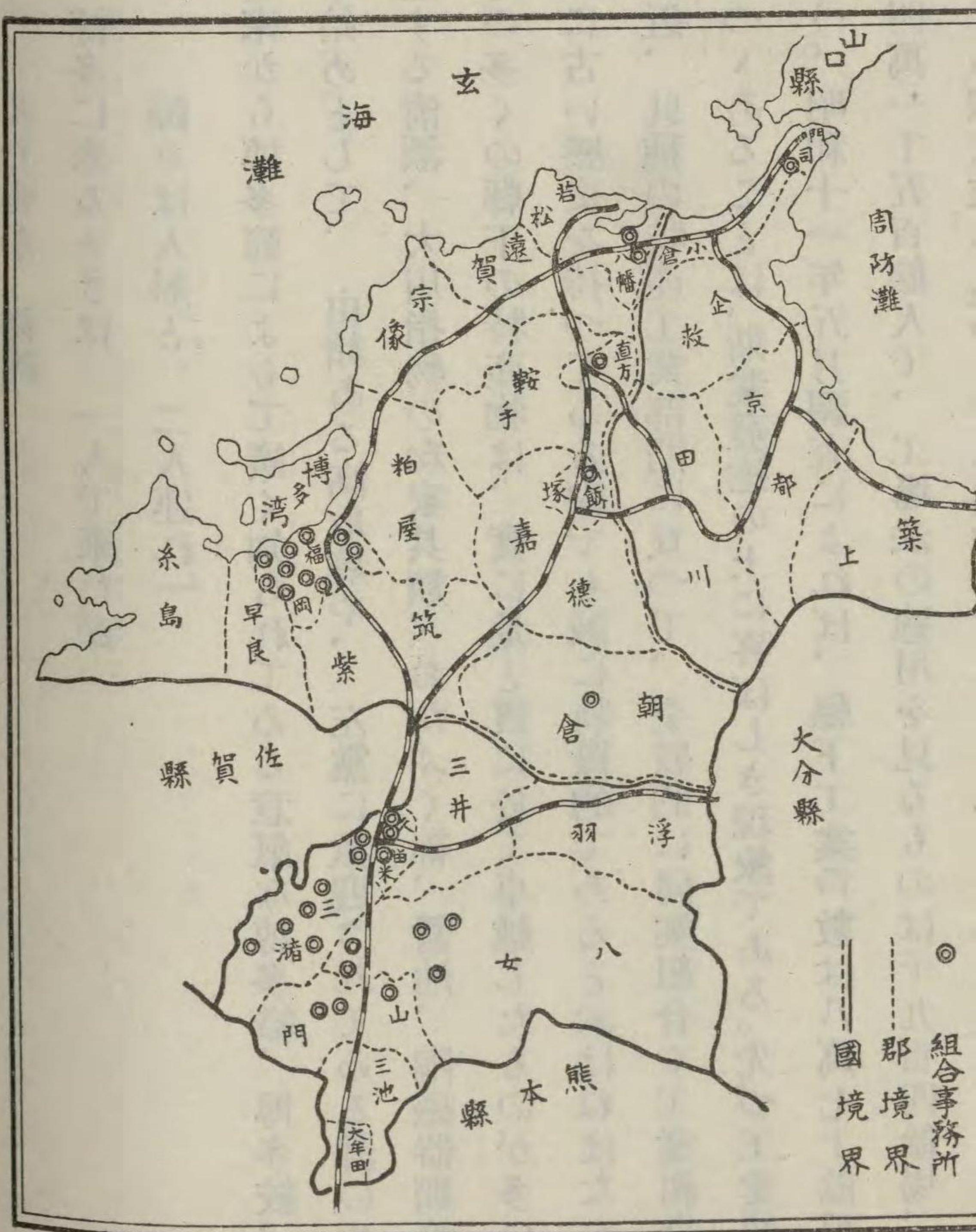
勵の宜しきと、一般業者の組合制度に對する認識が漸次深められつゝあるに主因せるものにして、本縣工業組合運動上洵に悦ぶべき所なり」

(工業組合中央會福岡縣支部發行「福岡縣の工業組合」二頁)

然しながら、組合運動を全般的に見るときには、未だその運用全く善しきを得てゐるとは云へない點も多々見受けられる。幸に福岡縣商工課及び工業組合中央會福岡縣支部では、これが改善と發展のために不斷の努力が拂はれつゝあるので、茲數年間には飛躍的な向上を遂げることは自明の事實であらう。

(2) 現 勢

縣下に現在設立せられてゐる組合數は三十四組合であるが、年次別普及は次表に示すが如く、昭和九年度の十三組合が最近五箇年中最も多數の設立を見た年度であつた。



工業組合分布圖

組合員生産狀況

(昭和九年度末調査によるもの推定額による)

組名	數量	價格
北九州輸出莫大小工業組合	一	四六、六〇〇
筑後輸出小物花筵工業組合	一	五七、七〇〇
福岡縣製氷工業組合	七、〇三三	七、〇三三
九州石鹼工業組合	六三、三二反	二、三九、八八八
久留米第一工業組合	一三、五六、八〇反	一、七四、七三三
久留米第二工業組合	七、四三反	二九、七三九
久留米第三工業組合	一、四、四三反	四三、三三九
久留米第四工業組合	一、四、四三反	二、三三、六三三
筑後瓦工業組合	三、一八〇萬枚	七九、五〇〇
南筑瓦工業組合	二、三〇〇萬枚	五、六〇〇
福岡縣木蠟工業組合	一、二〇、八〇〇斤	三、六八〇
八幡機械工業組合	—	四六、〇〇〇
北九州煉炭製造工業組合	八九、〇〇〇箱	三、七四、四〇〇
久留米タオル工業組合	二、五三、〇七九打	一、九、四五三
筑後傘第一工業組合	一、四七、五〇〇本	五、三、四九〇
筑後染紙工業組合	二、四、〇〇〇束	一三、〇〇〇
久留米耕工業組合聯合會	二、二、七五反	一〇九、〇六六

工業組合一覽

組名	地 區	設立認可年月日	出資一口金額	出資總額	役員々數	組合員數	事務所々在地	代表者氏名
北九州輸出莫大小工業組合	八幡市外四市 企救郡外二郡	昭和五、八、三六	五〇〇	三、〇〇〇	理事 二 監事 二	三三	八幡市西尾倉町字大正町一七五〇	安部 讓 作
筑後輸出小物花筵工業組合	三藩郡木佐木村、浦池村 田口村、木室村	同 八、五、二五	五〇	二、一、五〇〇	理事 五 監事 五	三三	三藩郡田口村大字三九七	古賀 初太郎

以上に於て讀者は福岡縣工業組合現勢のアウトラインだけは知られたであらう。そこで記者は次に工業組合の一覽表と各組合の設立理由を左に記して讀者の理解の一端とすることにしよう。

(昭和十一年四月一日現在)

筑後八坂傘工業組合 一五、〇〇〇本  
福岡地方瓦工業組合 七七四、〇〇〇枚  
福岡地方茶種油工業組合 一四、〇〇〇  
筑後竹製品工業組合 一〇、五〇〇石  
直方機械工業組合 四七、〇〇〇個  
福岡醬油工業組合 一、〇三石  
筑後地方味噌工業組合 八〇、〇〇〇貫  
福岡縣炭酸飲料工業組合 一五、五八、〇〇石  
福岡地方煉瓦工業組合 五〇萬個  
筑後傘第三工業組合 四八、〇〇〇本  
筑後久留米傘工業組合 二八、三〇〇本  
筑後傘三藩南部工業組合 三六、〇〇〇本  
博多織工業組合 二九、六七點  
高取燒陶磁器工業組合 二七、六〇〇個  
筑後木蠟工業組合 二、七五、二〇〇  
計 二、八九、五〇六

福岡縣製氷工業組合	福岡縣	同 八、六、二	五〇	二、七五〇	監理事 一五	三	福岡市石城町二ノ一九	林田春次郎
久留米織物工業組合	久留米市、三井郡、浮羽郡、朝倉郡、三潞郡、八女郡	同 八、七、四	五〇	二五、〇〇〇	監理事 三七	四	久留米市津福本町	國武金太郎
久留米緋第一工業組合	八女郡(水田村、羽犬塚町、岡山村大字前津を除く)	同 八、一、三〇	五〇	五、一〇〇	監理事 一五	三	八女郡中廣川村大字新代一九五〇	山下喜次郎
九州洗濯石鹼工業組合	福岡縣、佐賀縣、長崎縣、熊本縣、鹿兒島縣、宮崎縣、大分縣	同 八、三、二	五〇	七、〇〇〇	監理事 一〇	四	福岡市行ノ町五三	山下貞一
久留米緋第二工業組合	三潞郡	同 八、三、二	五〇	一四、九〇〇	監理事 一四	三	三潞郡犬塚村	吉武千太郎
久留米緋第三工業組合	久留米市、三井郡、浮羽郡、朝倉郡	同 八、三、六	五〇	五、一〇〇	監理事 五八	五	久留米市莊島町七〇ノ一	國武金太郎
久留米緋第四工業組合	八女郡羽犬塚町、水田町、岡山村大字前津	同 八、三、六	五〇	九、五〇〇	監理事 四八	六	八女郡水田村大字高江四四六	重富初太郎
筑後瓦工業組合	三潞郡(濱武村を除く)	同 九、一、五	三〇	一五、〇〇〇	監理事 一〇	八	三潞郡城島町大字城島	梯三喜次郎
南筑瓦工業組合	山門郡、三池郡、三潞郡、濱武村	同 九、三、五	五〇	一〇、九〇〇	監理事 一〇	三	山門郡三橋村	田北不磋人
福岡縣木蠟工業組合	福岡市、早良郡、糸島郡、鞍手郡、嘉穂郡、遠賀郡、浮羽郡	同 九、二、〇	五〇	一〇、〇〇〇	監理事 五五	三	福岡市瓦町二一	正木八十八
八幡機械工業組合	八幡市	同 九、三、九	五〇	七、〇〇〇	監理事 三五	二	八幡市大字前田濱ノ町	土田鹿太郎
北九州煉炭製造工業組合	八幡市、小倉市、戸畑市、若松市、門司市、企救町、折尾町	同 九、三、三	二〇	六、〇〇〇	監理事 七九	四	門司市大字大里門瀨町	穴吹直一
久留米タヲル工業組合	久留米市、三井郡、浮羽郡、八女郡、三潞郡、朝倉郡、八女郡水田村、羽犬塚町及古川村	昭和九、三、三	五〇	一〇、〇〇〇	監理事 二二	一	久留米市野中町九一〇	牛島猪之助
筑後傘第一工業組合	八女郡水田村、羽犬塚町及古川村	同 九、六、六	五〇	四、五〇〇	監理事 四五	七	八女郡水田村大字水田	下川熊太郎
筑後染紙工業組合	山門郡、八女郡	同 九、六、二九	五〇	一四、〇〇〇	監理事 二二	二	山門郡東山村廣瀬	末次重太郎
久留米緋工業組合聯合會	久留米市、三井郡、浮羽郡、朝倉郡、八女郡	同 九、六、三〇	五〇	一、〇〇〇	監理事 一〇	四	久留米市兩替町七〇ノ一	國武金太郎
筑後八媛傘工業組合	八女郡(水田村、古川村及羽犬塚町を除く)	同 九、七、六	五〇	一〇、六五〇	監理事 三六	七	八女郡長峰村大字宅間田	室園勘七
福岡地方瓦工業組合	福岡市、粕屋郡、筑紫郡、早良郡、糸島郡	同 九、九、七	五〇	一〇、〇〇〇	監理事 三八	六	福岡市渡邊通山本アパート内	深澤直吉
福岡地方茶種油工業組合	福岡市、早良郡、粕屋郡、宗像郡、遠賀郡、八幡市	同 九、二、八	五〇〇	一一、〇〇〇	監理事 五七	一	福岡市藤田	中村久次郎
兩筑茶種油工業組合	朝倉郡、浮羽郡	同 九、二、八	五〇〇	一五、〇〇〇	監理事 三五	二	朝倉郡甘木町	上野淺次郎
筑後竹製品工業組合	八女郡上廣川村	同 一〇、二、八	二〇	二、七〇〇	監理事 五九	三	八女郡上廣川村役場内	原口菊次
直方機械工業組合	直方市	同 一〇、四、六	五〇	一五、〇〇〇	監理事 一五	七	直方市役所別館	飯野憲一郎

筑後染紙工業組合	山門郡、八女郡	同 九、六、二九	五〇	一四、〇〇〇	監理事 二二	二	山門郡東山村廣瀬	末次重太郎
久留米緋工業組合聯合會	久留米市、三井郡、浮羽郡、朝倉郡、八女郡	同 九、六、三〇	五〇	一、〇〇〇	監理事 一〇	四	久留米市兩替町七〇ノ一	國武金太郎
筑後八媛傘工業組合	八女郡(水田村、古川村及羽犬塚町を除く)	同 九、七、六	五〇	一〇、六五〇	監理事 三六	七	八女郡長峰村大字宅間田	室園勘七
福岡地方瓦工業組合	福岡市、粕屋郡、筑紫郡、早良郡、糸島郡	同 九、九、七	五〇	一〇、〇〇〇	監理事 三八	六	福岡市渡邊通山本アパート内	深澤直吉
福岡地方茶種油工業組合	福岡市、早良郡、粕屋郡、宗像郡、遠賀郡、八幡市	同 九、二、八	五〇〇	一一、〇〇〇	監理事 五七	一	福岡市藤田	中村久次郎
兩筑茶種油工業組合	朝倉郡、浮羽郡	同 九、二、八	五〇〇	一五、〇〇〇	監理事 三五	二	朝倉郡甘木町	上野淺次郎
筑後竹製品工業組合	八女郡上廣川村	同 一〇、二、八	二〇	二、七〇〇	監理事 五九	三	八女郡上廣川村役場内	原口菊次
直方機械工業組合	直方市	同 一〇、四、六	五〇	一五、〇〇〇	監理事 一五	七	直方市役所別館	飯野憲一郎

久留米耕第四工業組合	八女郡羽犬塚町、水田町 岡山村大字前津	同八、二、二六	五〇	九、五〇〇	監理事	四八	五	八女郡水田村大字高江四 四六	重富初太郎
筑後瓦工業組合	三潯郡(濱武村を除く)	同九、一、三五	三〇	一五、〇〇〇	監理事	一〇	一八〇	三潯郡城島町大字城島	梯三喜次郎
南筑瓦工業組合	山門郡、三池郡、三潯郡 濱武村	同九、三、五	五〇	一〇、一九〇	監理事	一〇	一三	山門郡三橋村	田北不礎人
福岡縣木蠟工業組合	福岡市、早良郡、糸島郡 鞍手郡、嘉穂郡、遠賀郡 朝倉郡、浮羽郡	同九、二、一〇	五〇	一〇、〇〇〇	監理事	五五	三	福岡市瓦町二一	正木八十八
八幡機械工業組合	八幡市	同九、三、九	五〇	七、〇〇〇	監理事	三五	三〇	八幡市大字前田濱ノ町	土田鹿太郎
北九州煉炭製造工業組合	八幡市、小倉市、戸畑市 若松市、門司市、企救町 折尾町	同九、三、二	二〇	六、〇〇〇	監理事	七九	四	門司市大字大里門瀨町	穴吹直一
久留米タヲル工業組合	久留米市、三井郡、浮羽 郡、八女郡、三潯郡、朝 倉郡	昭和九、三、二	五〇	一〇、〇〇〇	監理事	二二	一六	久留米市野中町九一〇	牛島猪之助
筑後傘第一工業組合	八女郡水田村、羽犬塚町 及古川村	同九、六、六	五〇	四、九〇〇	監理事	四五	七〇	八女郡水田村大字水田	下川熊太郎

筑後染紙工業組合	山門郡、八女郡	同九、六、二九	五〇	一四、〇〇〇	監理事	二二	三	山門郡東山村廣瀬	末次重太郎
久留米耕工業組合聯合會	久留米市、三井郡、浮羽 郡、朝倉郡、八女郡	同九、六、三〇	五〇	一、〇〇〇	監理事	一〇	四	久留米市兩替町七〇ノ一	國武金太郎
筑後八媛傘工業組合	八女郡(水田村、古川村 及羽犬塚町を除く)	同九、七、六	五〇	一〇、六五〇	監理事	三六	三	八女郡長峰村大字宅間田	室園勘七
福岡地方瓦工業組合	福岡市、粕屋郡、筑紫郡 早良郡、糸島郡	同九、九、七	五〇	一〇、〇〇〇	監理事	三八	九	福岡市渡邊通 山本アバウト内	深澤直吉
福岡地方菜種油工業組合	福岡市、早良郡、粕屋郡 宗像郡、遠賀郡、八幡市	同九、一、八	五〇	一一、〇〇〇	監理事	五七	一	福岡市藤田	中村久次郎
兩筑菜種油工業組合	朝倉郡、浮羽郡	同九、一、八	五〇	一四、〇〇〇	監理事	三五	二	朝倉郡甘木町	上野淺次郎
筑後竹製品工業組合	八女郡上廣川村	同九、一、八	二〇	一一、七〇〇	監理事	五九	二	八女郡上廣川村役場内	原口菊次
直方機械工業組合	直方市	同九、四、六	五〇	一五、〇〇〇	監理事	一一	七	直方市役所別館	飯野憲一郎
福岡醬油工業組合	福岡市	同九、六、二〇	二〇〇	一〇、〇〇〇	監理事	三七	三	福岡市西堅粕	柴藤精藏
筑豊地方味噌工業組合	飯塚市、直方市、遠賀郡 鞍手郡、嘉穂郡、田川郡	同九、六、三三	五〇	七、〇〇〇	監理事	二六	三	飯塚商工會議所内	平野久三郎
福岡縣炭酸飲料工業組合	福岡縣一圓	同九、八、七	二〇	一〇、〇〇〇	監理事	三三	九	福岡市蓮池町八ノ四	麻生尙敏
福岡地方煉瓦工業組合	福岡市、粕屋郡、筑紫郡 早良郡、糸島郡	同九、九、三	五〇	五、五〇〇	監理事	二二	二	福岡市住吉町三三	久我八郎
筑後久留米傘工業組合	久留米市、三井、浮羽兩 郡	同九、二、二六	五〇	四、九五〇	監理事	五七	七	久留米市東通町	清水龜次郎
筑後傘三潯南部工業組合	三潯郡南部	同九、二、二六	五〇	五、七五〇	監理事	五八	五	三潯郡木室村	植田清三郎

筑後傘第三工業組合	三潯郡北部	同10、11、16	三〇	二、八〇〇	監理事 六八	二六	三潯郡江上村	永松太三郎
高取焼陶磁器工業組合	福岡市西新町	同二、三、三	五〇	10、500	監理事 一三	七	福岡市西新町	原幸六
博多織工業組合	福岡市、早良、糸島、筑紫、粕屋、朝倉各郡部	同二、三、三	三〇	三、四〇〇	監理事 五〇	三二	福岡市須崎土手町	兒島紀七郎
筑後木蠟工業組合	山門郡一圓	同二、四、一	五〇		監理事 五七		山門郡三橋村々役場内	

### (1) 久留米絣工業組合聯合會

久留米絣の名は始祖井上傳女の名と共に日本の津々浦々にまで響きわたつてゐる。

大正八年の我國經濟界の好況時代には久留米絣は百四十六萬四千二百二十二反、價格にして一千五百九十九萬五千五百二十六圓の巨額に上り、實に我國の地方機織界を席卷したことを想起する時、記者は井上傳女の功績が新に追憶されてならない。

我國經濟界の不況は、久留米絣界にも大きな打撃を與へ、昭和七年には價格に於て三百二十四萬二千五百五十三圓といふ先の好記録に對照する時甚しき低落を見せてゐる。然しこれは一面絣業者の連絡機關として存在してゐた同業組合機構の無力に起因するところ、この故に過般久留米市を中心として近隣五郡の同業者を以つて、第一より第四迄の四個の工業組合を組織し、之れを更に聯合會の下に統制し、販賣業者は別に商業組合を組織してこれらの工業組合と連絡し、經濟恐慌による業者の窮乏に對して金融其他の共濟の方

法と、製品の向上及生産高の制限等の統制を敢行したる結果、大正八年の好記録は別として最近では全く業績立直りを見るに至つた。之に力を得て組合聯合會では、各組合に指示して木綿絣の生産過剰を調節し、絹絣の大量生産と洋服地、ネクタイ、洋室用品等の新製品の考案をすゝめ、これによつても新に市場を獲得し得たので、昭和十一年五月には久留米絣販路擴張のための宣傳其他の計畫を決議し、再び年産七、八百萬圓の額を見んとしつゝある。



井 上 傳 女

久留米絣について附言しておかねばならないことは、久留米絣と筑紫絣との相異で、この兩者の判別は明治四十三年時代の要求に應じて、久留米絣に

### (3) 久留米第二絣工業組合

往年産額壹千萬圓餘を突破したる本縣下久留米絣が、一般經濟界の不況に著しき影響を蒙るに伴ひ、本地區内に於ける製造業者も亦打撃頗る甚大であつた。即ち販路の梗塞は生産額の減少を齎し、同業者間の競争を激化し、仲間販賣業者の乗する所となり、業者の困窮を益々深むるに至り特に本地區内に於ける機業者は、他産地の如く、副業とせるものなく、殆んど絣製造専業者なるを以て、資金の缺乏と相俟つて窮乏の度甚しかつた。故に本地區内業者幹部は之れが打開策に付數十度協議を重ねた結果工業組合を設立し、事業の刷新を圖るの最も適切なるを自覺するに至り、製品の改良、新製品の研究を爲し、販路の擴張と共に業者間の融和協調に依る事業の進展を圖らんとし、昭和八年十二月二十一日本組合を設立したものである。

### (2) 久留米第一絣工業組合

化學染料による染色を試みたが、結果は久留米絣の生命である正藍色が現はれないので、染色絣は筑紫新絣と名づけ、久留米絣と劃然と區別してゐる點である。尙久留米絣の今日の販路擴大の蔭には大塚太藏、牛島ノシ、牛島次郎、齋藤藤助、原野與平、仲初太郎、井上宗、上杉寅次郎、國武金太郎諸氏の力があることを忘れられてはなるまい。

明治三十三年重要物産同業組合法に基き設立せられたる久留米絣同業組合は、三十四年鑑定所を地區内樞要の地四十餘個所に設置し、織立の劃一と工賃の均衡を圖ると共に、他面に於て織工の争奪を防止し、且つ不正織工の取締に努め、以來本制度の成績極めて良好にして、組合の業務は逐年發展し生産高も著しく増大し、斯くて久留米絣の需要者は全國的となり、其の聲價を

久留米緋の名は始祖井上傳女の名と共に日本の津々浦々にまで響きわたつてゐる。

大正八年の我國經濟界の好況時代には久留米緋は百四十六萬四千二百二十二反、價格にして一千百五十九萬五千五百二十六圓の巨額に上り、實に我國の地方機械界を席卷したことを想起する時、記者は井上傳女の功績が新に追憶されてならない。

我國經濟界の不況は、久留米緋界にも大きな打撃を與へ、昭和七年には價格に於て三百二十四萬二千五百五十三圓といふ先の好記録に對照する時甚しき低落を見せてゐる。然しこれは一面緋業者の連絡機關として存在してゐた同業組合機構の無力に起因するところで、この故に過般久留米市を中心として近隣五郡の同業者を以つて、第一より第四迄の四個の工業組合を組織し、之れを更に聯合會の下に統制し、販賣業者は別に商業組合を組織してこれらの工業組合と連絡し、經濟恐慌による業者の窮乏に對して金融其他の共濟の方



井 上 傳 女

く業績立直りを見るに至つた。之に力を得て組合聯合會では、各組合に指示して木綿緋の生産過剰を調節し絹緋の大量生産と洋服地、ネクタイ、洋室用品等の新製品の考案をすゝめ、これによつても新に市場を獲得し得たので、昭和十一年五月には久留米緋販路擴張のための宣傳其他の計畫を決議し、再び年産七、八百萬圓の額を見んとしつつある。

久留米緋について附言しておかねばならないことは、久留米緋と筑紫緋との相異で、この兩者の判別は明治四十三年時代の要求に應じて、久留米緋に

化學染料による染色を試みたが、結果は久留米緋の生命である正藍色が現はれないので、染色緋は筑紫新緋と名づけ、久留米緋と劃然と區別してゐる點である。尙久留米緋の今日の販路擴大の蔭には大塚太藏、牛島ノシ、牛島次郎、齋藤藤助、原野與平、仲初太郎、井上宗、上杉寅次郎、國武金太郎諸氏の力があることを忘れられてはなるまい。

## (2) 久留米第一緋工業組合

明治三十三年重要物産同業組合法に基き設立せられたる久留米緋同業組合は、三十四年鑑定所を地區内樞要の地四十餘箇所を設置し、織立の劃一と工賃の均衡を圖ると共に、他面に於て織工の爭奪を防止し、且つ不正織工の取締に努め、以來本制度の成績極めて良好にして、組合の業務は逐年發展し生産高も著しく増大し、斯くて久留米緋の需要者は全國的となり、其の聲價を擧ぐるに至つた。殊に検査鑑定事業の功績は實に著大にして、地區内に製品鑑定人兼検査員四十一名及助手十名を配置し、尙專任検査員二名をして業者の居所に隨時臨檢し、染料、染色等の検査を爲し、不正品を防遏すると同時に品質の向上を計つてゐる。

工業組合設立の議起るや率先して昭和八年十一月三十日に組合の設立をなし、從來より遂行せられし業績を更に顯著ならしめ、製品の規格統一、品質の改良を爲し、販路の擴張に努め、他面商業組合と提携し、業界の發展を期せんとし、本組合を設立したるものである。

## (3) 久留米第二緋工業組合

往年産額壹千萬圓餘を突破したる本縣下久留米緋が、一般經濟界の不況に著しき影響を蒙むるに伴ひ、本地區内に於ける製造業者も亦打撃頗る甚大であつた。即ち販路の梗塞は生産額の減少を齎し、同業者間の競争を激化し、仲間販賣業者の乗ずる所となり、業者の困窮を益々深むるに至り特に本地區内に於ける機業者は、他産地の如く、副業とせるものなく、殆んど緋製造業者なるを以て、資金の缺乏と相俟つて窮乏の度甚しかつた。故に本地區内業者幹部は之れが打開策に付數十度協議を重ねた結果工業組合を設立し、事業の刷新を圖るの最も適切なるを自覺するに至り、製品の改良、新製品の研究を爲し、販路の擴張と共に業者間の融和協調に依る事業の進展を圖らんとし、昭和八年十二月二十一日本組合を設立したものである。

## (4) 久留米第三緋工業組合

本地區内に於ける久留米緋業者も一般經濟界の不況に禍され、疲弊の窮地に陥らんとした。之れは實に原料並に材料たる糸、藍等の高價なるに反し、製品の無統制なる販賣に因る中間業者の利潤の搾取に基因する所にして、更に金融難と相伴ひ、業者の覺醒を圖る合法的組合組織の必要を益々深め、茲に工業組合組織を敢行し、久留米緋聲價の向上、大衆的需要の確保に努むる目的を以て昭和八年十二月二十六日組合を設立したのである。

### (5) 久留米第四緋工業組合

本地區内に於ける生産額は年産三十三萬八千餘圓に及び、業者の比較的接近せる爲、從來より統制ある組織の下に置かれたるも、經濟界の不況と機業界の變轉に伴ふ需要の減退、金融の梗塞等の爲、往々にして仲間業者の乗する所となり、生産價格と販賣價格との著しき差額は、直接間接需要者に對する久留米緋の經濟的價值を低下せしむる傾向を生ずるに至つた。そこで本地區内業者は曩に同業組合組織の下に在りしも、之のみの機能にては不十分なりとし、昭和八年十二月二十六日に工業組合を組織したるものである。

### (6) 久留米タオル工業組合

久留米タオル工業組合は久留米市野中町に事務所を設け、久留米、三井、八女、浮羽、朝倉、三瀬、一市五郡の業者をもつて組織され、生産の大半は久留米の牛島商店が占めてゐる。昭和十年度の生産高は百萬打價格八十萬圓に及び、前年の生産額に比すると實に三十萬圓の激増振りを示し「雄縣福岡」の輝ける産業陣に一異彩を放つてゐる。製品はタオルの加工品たる浴布、寝巻、子供服、カーテン等を出し、内地は勿論朝鮮、臺灣、滿洲にまで進出、素晴らしい需要を喚起してゐる。工業組合が認可となつたのは昭和九年四月現在組合員二十一名理事長は牛島猪之助氏、組合の統制活動により日を逐ふて目ざましい進展を見、今や九州全部（大分縣を除く）を打つて一丸とする工業組合に組合を強化せんとする計畫まで進められてゐる。

### (7) 久留米織物工業組合

久留米緋同業組合は、打續く財界不振によつてその打撃甚しく、組合員の營業繼續困難を極むる者多く、之が對策として、先年末より大巾織機の据付獎勵及大巾、小巾綿ネルの製造に着眼し、一部製品の轉換を計り、着々其の効果を收めつゝあり、昭和八年始より現在の工業組合設立者一同相寄り織物工業會を組織し、以て生産の統制販賣事業、又は組合員の金融を圓滑ならしむる爲、季節的閑散期に生じたる製品は工業會借入の倉庫に倉入せしめ、之に對して工業會より金融の便を圖り、營業上の利益を増進し來る等、工業組合の基礎的訓練を経たるを以て、茲に合法的組合の設立を企圖し、進んで現下業界に於て最も適當なる共同設備を完成し、以て時勢に順應したる經營をなさんとして一同努力してゐる。

### (8) 高取焼陶磁器工業組合

福岡縣の名産高取焼については、本書巻頭の「九州産業發達史」において詳しく紹介されてあるから、こゝでは繰返さないことにする。現在高取焼の製造販賣は傳統的規約によつて少數の由緒ある人々の手に委ねられてある。高取焼は主として、床置、花瓶、茶器、酒器等の高級品及び火鉢、甕類であつて、舊藩時代は江戸將軍家への献上品として有名なることは、こゝに再言するまでもないことであらう。

近來製造能率増進の爲め、各種の機械を据付けて、生産の品質向上及増産



高取焼

のために鋭意研究中であり既に高取焼陶磁器工業組合を結成して理事長に原幸六理事に伊佐善次郎、高取善五郎、幹事に龜井彌太郎の諸氏がそれらに就任して一致結束、高取焼の維持に努めてゐる。四氏の各營業別をすれば左の如くである。

植木鉢  
原幸六氏（高取焼、火鉢）  
樺島喜三郎氏（高取焼、耐酸陶器、土管）

一九〇一年、福岡地方瓦工業組合を設立し、共同販賣、石炭の共同購入、業務の統制を圖つた。組合結成されるや益々業績は上り、一躍福岡瓦の眞價を九州全般に亘つて認めしめたのも理事長深澤直吉氏始め組合員の努力に依るものである。當初組合員は福岡市、早良郡、粕屋郡、筑紫郡、糸島郡の一市四郡の業者のみだつたのが、現在では嘉穂郡、北九州の業者も續々と同組合に加入し、愈々工業組合の施設は完備するに至つた。

同組合の製造瓦は必ず組合當局の厳格なる検査をうけ、不合格品は斷じて販賣せしめざる方法をとつてゐる故需要者は安心して購入し得るのである。特に黒色素焼、屋根瓦は福岡地方に於ける最も優秀瓦として定評があり、年産額一千萬枚を優に越え、福岡地方は勿論、長崎、關西方面にまで移出されてゐる有様である。

創立以來日尙ほ淺きにも拘らず、工業組合として日々發展を遂げ、昭和十年八月には規格統制工場を福岡市住吉町に設置し、大いに福岡瓦に刷新を加へ、その聲名を高からしめてゐる。更に近き將來に於いては共同工場を建設



りとし 昭和八年十二月二十六日に工業組合を組織したるものである。

### (6) 久留米タオル工業組合

久留米タオル工業組合は久留米市野中町に事務所を設け、久留米、三井、八女、浮羽、朝倉、三潞、一市五郡の業者をもつて組織され、生産の大半は久留米の牛島商店が占めてゐる。昭和十年度の生産高は百萬打價格八十萬圓に及び、前年の生産額に比すると實に三十萬圓の激増振りを示し「雄縣福岡」の輝ける産業陣に一異彩を放つてゐる。製品はタオルの加工品たる浴布、寝巻、子供服、カーテン等を出し、内地は勿論朝鮮、臺灣、滿洲にまで進出、素晴らしい需要を喚起してゐる。工業組合が認可となつたのは昭和九年四月現在組合員二十一名理事長は牛島猪之助氏、組合の統制活動により日を逐ふて目ざましい進展を見、今や九州全部(大分縣を除く)を打つて一丸とする工業組合に組合を強化せんとする計畫まで進められてゐる。

に對して工業會より金融の便を圖り、營業上の利益を増進し來る等、工業組合の基礎的訓練を経たるを以て、茲に合法的組合の設立を企圖し、進んで現下業界に於て最も適當なる共同設備を完成し、以て時勢に順應したる經營をなさんとして一同努力してゐる。

### (8) 高取焼陶磁器工業組合

福岡縣の名産高取焼については、本書巻頭の「九州産業發達史」において詳しく紹介されてゐるから、こゝでは繰返さないことにする。現在高取焼の製造販賣は傳統的規約によつて少數の由緒ある人々の手に委ねられてゐる。高取焼は主として、床置、花瓶、茶器、酒器等の高級品及び火鉢、甕類であつて、舊藩時代は江戸將軍家への献上品として有名なることは、こゝに再言するまでもないことであらう。

近來製造能率増進の爲め、各種の機械を据付けて、生産の品質向上及増産



高 取 焼

のために鋭意研究中であり既に高取焼陶磁器工業組合を結成して理事長に原幸六理事に伊佐善次郎、高取善五郎、幹事に龜井彌太郎の諸氏がそれ〴〵就任して一致結束、高取焼の維持に努めてゐる。四氏の各營業別をすれば左の如くである。

植木鉢

原幸六氏(高取焼、火鉢)

樺島喜三郎氏(高取焼、

耐酸陶器、土管)

伊佐善次郎氏(土管専門)

龜井彌太郎氏(高取焼専門)

而して高取焼工業組合の組合員數の少なるを決して少なりと謂ふなかれ。この少數なる故にこそ、高取焼工業組合の權威があるのであつて、由緒と一子相傳的家業として絶大なる價値を有するのである。高取焼は將來永く福岡縣の唯一の誇るべき陶磁器として榮えるであらう。

### (9) 福岡地方瓦工業組合

瓦製造業の隆盛に伴ひ昭和九年九月福岡地方に於ける瓦製造業者は打つて

一九となり、福岡地方瓦工業組合を設立し、共同販賣、石炭の共同購入、業務の統制を圖つた。組合結成されるや益々業績は上り、一躍福岡瓦の眞價を九州全般に亘つて認めしめたのも理事長深澤直吉氏始め組合員の努力に依るものである。當初組合員は福岡市、早良郡、粕屋郡、筑紫郡、糸島郡の一市四郡の業者のみだつたのが、現在では嘉穂郡、北九州の業者も續々と同組合に加入し、愈々工業組合の施設は完備するに至つた。

同組合の製造瓦は必ず組合當局の厳格なる検査をうけ、不合格品は斷じて販賣せしめざる方法をとつてゐる故需要者は安心して購入し得るのである。特に黒色素焼、屋根瓦は福岡地方に於ける最も優秀瓦として定評があり、年産額一千萬枚を優に越え、福岡地方は勿論、長崎、關西方面にまで移出されてゐる有様である。

創立以來日尚ほ淺きにも拘らず、工業組合として日々發展を遂げ、昭和十年八月には規格統制工場を福岡市住吉町に設置し、大いに福岡瓦に刷新を加へ、その聲名を高からしめてゐる。更に近き將來に於いては共同工場を建設する計畫であるが、如何に同組合が躍進しつゝあるかと窺はれる。

現在同組合の役員は(理事長)深澤直吉、(常務理事)石橋熊次郎、(理事)早川藤十郎、横川孫次、岡野倉雄、鎌田幾太、田中三致、案浦清兵衛、田中平三、案浦吉郎、石田徳一、八木友市、淺原光太郎、山下増藏、(監事)佐々木乙市、養原馬次郎、安河内繁吉、末永元美、小西梅吉の諸氏である。

### (10) 筑後瓦工業組合

管下三潞郡に於ける瓦の生産額は、年産七十萬圓以上に達すと雖も、年來

の不況は斯業經營難を一層深刻化し、經營不可能の工場續出するに至つた。之れが匡救策として何等の機關もなく、業者の資力薄弱なるに乗ずる中間仲買人、或は石炭商人の重壓の下に甘んずるの已むなき状態で、縣外市場への進出性を多分に有しながらも、直接業者の手による販賣を爲し得ず、従つて價格の如きも主要原料たる石炭の値上あるにも不拘、依然として無統制なる状態に於て寧ろ低下する結果を齎し、徒らに中間商人に左右せらるゝ状態であつた。

そこで工業組合の設立により斯業の統制を確立し、業者の互讓的相互協助の精神の鼓吹により其の發展を期せんとし、昭和九年一月二十三日に組合を設立した。

### (11) 南筑瓦工業組合

本地區内に於ける生産額は約五十萬圓にして、其の殆んどが内地に於てのみ需要せらるゝものにして、元來瓦工業は、當初農村の副業所謂手工的工業として創始せられし結果、其の設備も大部分が小規模である。従つて品質甚だ粗悪なる上に、重量の點よりして運搬費等を多額に要し、自然販路の擴張困難なる現狀に在る。

然し乍ら一時財界の好況時代には活況を呈し、需要者の數も相當増加せしが、業者概ね資力薄弱なる上に、生産販賣等に付何等統制機關なかりし爲、同業者は勢ひ粗製濫造に陥り、濫賣の結果價格の低落、品質の低下を來し、需要者の減少を見るに至つた。

八月七日工業組合を設立し、如上の缺陷を補正し、衛生的見地と相俟つて業界の發展と組合員の福利増進に努力しつゝある。

### (14) 福岡醤油工業組合

地區内に於ける醤油の生産高は年産約四十七萬四千餘圓にして、其の需要は内地は勿論、臺灣、朝鮮及滿洲に及び、業者は明治三十九年三月縣下を一圓とする福岡縣醤油同業組合を組織し、事業の發展に努めたりしも、事務の推移は同業者をして更に一層相互的連繫を密にすべき有機的組合組織の設立を必要とするに至り、縣下同業者に率先して工業組合を組織し、業界の發展を期せんとして目下努力しつゝある。

かくて業者の困窮は其の度を増し、他面建築材料の發達に脅威を受くるに至り、遂に業者相計つて工業組合を設立し、業者の覺醒に依る生産品の濫賣と、之に伴ふ粗製濫造の弊を矯正し、製品の統一、販賣の統制等を圖り本地區内における瓦の特性を保持せんとして努力してゐる。

### (12) 福岡地方煉瓦工業組合

地區内煉瓦の生産額は、年産六萬餘圓に及び、數年前より任意組合を組織し、爾來専心營業上の弊害を矯正し、組合員の福利増進を圖り來つた。業者の無自覺と建築業界の進歩により、生産並販賣上に於て業界の不振を招き、相互的に窮狀に陥る傾向を見たるを以て、更に強固なる組合組織により同業者の連絡を圖り、親密を増し、他面各種關係業者と相提携し、業界の覺醒を圖らんとし、昭和十年九月十三日工業組合の設立を了した。

### (13) 福岡縣炭酸飲料工業組合

組合設立地區内に於ける炭酸飲料の生産高は年産額約九十九萬圓にして、其の需要は縣下一圓に及べるが、本縣に於ける炭酸飲料製造業者は、斯業の發展を期する爲、大正二年縣下を地區としたる同業組合を組織し、爾來専心營業上の弊害を矯正し、組合員の福利を圖り來たりしも、組合員の自覺之に伴はず、遂に解散の止むなきに至つた。

同業組合の解散原因は、一般財界不況の爲購買力の減退に基因すると雖も其の主因と見る可きは業者の無統制にあるので、これを補ふために昭和十年

するために昭和十年六月二十二日に設立をなした。

### (16) 北九州輸出莫大小工業組合

本組合は縣下工業組合に率先して昭和五年八月二十八日設立せられ、工業組合として最も古き歴史を有するもので、創立前に於ては業者間の競争と大資本による大企業に壓迫せられ、加ふるに變轉窮り無き棉糸紡績業界の影響を受け、業者の疲弊甚しかつたので、工業組合を組織し、農業者の更生に努めんとしたことが始まりで、由來本縣莫大小製品産額は五十七萬七千餘圓に及び支那、朝鮮、滿洲等に輸出せられつゝあるが、之等は主として大資本經營によるものなるを以て、本組合の活動如何は重大なる意義を有してゐるが現在は設立當時の事由に比し組合機能の發揚に努むる必要がある様である。

### (15) 筑豊地方味噌工業組合

### (17) 筑後輸出古、物産工業組合

設立した。

### (11) 南筑瓦工業組合

本地區内に於ける生産額は約五十萬圓にして、其の殆んどが内地に於てのみ需要せらるゝものにして、元來瓦工業は、當初農村の副業所謂手工的工業として創始せられし結果、其の設備も大部分が小規模である。従つて品質甚だ粗悪なる上に、重量の點よりして運搬費等を多額に要し、自然販路の擴張困難なる現狀に在る。

然し乍ら一時財界の好況時代には活況を呈し、需要者の數も相當増加せしが、業者概ね資力薄弱なる上に、生産販賣等に付何等統制機關なかりし爲、同業者は勢ひ粗製濫造に陥り、濫賣の結果價格の低落、品質の低下を來し、需要者の減少を見るに至つた。

の無自覺と建築業界の進歩により、生産並販賣上に於て業界の不振を招き、相互的に窮狀に陥る傾向を見たるを以て、更に強固なる組合組織により同業者の連絡を圖り、親密を増し、他面各種關係業者と提携し、業界の覺醒を圖らんとし、昭和十年九月十三日工業組合の設立を了した。

### (13) 福岡縣炭酸飲料工業組合

組合設立地區内に於ける炭酸飲料の生産高は年産額約九十九萬圓にして、其の需要は縣下一圓に及べるが、本縣に於ける炭酸飲料製造業者は、斯業の發展を期する爲、大正二年縣下を地區としたる同業組合を組織し、爾來専心營業上の弊害を矯正し、組合員の福利を圖り來たりしも、組合員の自覺之に伴はず、遂に解散の止むなきに至つた。

同業組合の解散原因は、一般財界不況の爲購買力の減退に基因すると雖も其の主因と見る可きは業者の無統制にあるので、これを補ふために昭和十年

八月七日工業組合を設立し、如上の缺陷を補正し、衛生的見地と相俟つて業界の發展と組合員の福利増進に努力しつゝある。

### (14) 福岡醬油工業組合

地區内に於ける醬油の生産高は年産約四十七萬四千餘圓にして、其の需要は内地は勿論、臺灣、朝鮮及滿洲に及び、業者は明治三十九年三月縣下を一圓とする福岡縣醬油同業組合を組織し、事業の發展に努めたりしも、事務の推移は同業者をして更に一層相互的連繫を密にすべき有機的組合組織の設立を必要とするに至り、縣下同業者に率先して工業組合を組織し、業界の發展を期せんとして目下努力しつゝある。

するために昭和十年六月二十二日に設立をなした。

### (16) 北九州輸出莫大小工業組合

本組合は縣下工業組合に率先して昭和五年八月二十八日設立せられ、工業組合として最も古き歴史を有するもので、創立前に於ては業者間の競争と大資本による大企業に壓迫せられ、加ふるに變轉窮り無き棉糸紡績業界の影響を受け、業者の疲弊甚しかつたので、工業組合を組織し、農業者の更生に努めんとしたことが始まりで、由來本縣莫大小製品産額は五十七萬七千餘圓に及び支那、朝鮮、滿洲等に輸出せられつゝあるが、之等は主として大資本經營によるものなるを以て、本組合の活動如何は重大なる意義を有してゐるが現在は設立當時の事由に比し組合機能の發揚に努むる必要がある様である。

### (15) 筑豊地方味噌工業組合

地區内味噌生産額は年産約三十二萬圓餘に達し、其の殆んど大部分が筑豊地方に於て需要せられ、殊に人口稠密なる筑豊炭田に位せるを以て其の需要大なるものがある。故に一部業者は相計り、昭和五年任意組合を組織し、製品の改善、價格の統制等に努めたるも、其實績思はしからず。原料、材料等の價格の昂騰は製品價格の値上を必要とするにも不拘、業者間の無統制なる販賣と、外部諸勢力の壓迫により、動もすれば業勢沈滞に陥りがちなるを以て、茲に合法的工業組合組織の下に、其の機能の發揮に依る生産原價の低減品質の向上等より來たる一般生活必需品としての價値を更に増加せしめんと

### (17) 筑後輸出小物花蒔工業組合

從來輸出花蒔は、凡そ捺染生地として無地の儘神戸市場へ發送し、同地に於て捺染加工を施し、海外貿易商へ賣込んで来たために、中間業者に左右せられがちであつた。この弊を除去するために、昭和八年五月二十三日工業組合設立をなしたものであるが、農家副業として發達せる斯業は、業者の生産品に對する加工、販賣業に於ける認識不充分なりし爲積弊は牢固として抜く能はず、故に既に同業組合と協助し合つて業界の刷新に努めつゝある。

地區は福岡縣三潞郡木佐村、蒲池村、田口村、木室村

(18) 福岡縣製氷工業組合

製氷工業は他の工業と異り季節的影響を蒙ること大にして、需給調節頗る困難であり、殊に本縣の如きは業者多數なる上に、近縣移入氷の侵出に需給著しく不均衡となり、業者の蒙る打撃甚大なるを以て、内部的統制と對外的壓迫に對する合法的、合理的自存權の確保の爲に組合の設立を率先して行ひ更に衛生的見地より品質の改善を圖らんがために昭和八年六月二日に設立せられた。

(19) 九州石鹼工業組合

九州に於ける洗濯石鹼の生産額は年産二百五十一萬五千圓餘に達し、資力薄弱なる小規模業者なるを以て、動もすれば仲間業者に左右せらるゝ處となり、業者間の統制を欠き、石鹼主要原料たる硬化油の價格協定の結果、最近著しく騰貴せるに不拘、商品の値上げを斷行するを得ず、生産費の高率なるに甘んずるの已むなき事情に置かれたのに鑑み、昭和八年十二月十一日福岡市行ノ町に組合を設立し、業者の自覺ある連絡統制を嚴にし、殊に事業の性質より他縣との關係密接なるを以て、九州一圓の工業組合設立を爲し、業者經濟の立直しを圖る可く邁進しつゝある。

(20) 福岡縣木蠟工業組合

合の認可せられ居るを以て、相提携し、業界の發展と組合員の福利増進に努力せんとし本組合の設立を見たる所以である。

(22) 八幡機械工業組合

地區内に於ける金屬機械器具の製作加工額は、年産約二百五十萬餘圓に達し、北九州工業地帯の中軸とも謂ふ可き八幡市に位し、製鐵所を控へ、其必要なる原料、材料等の購求容易にして、之等製品の消費地亦近接し、殊に滿蒙及北支の開發せらるゝに従ひ、益々重視せられ、軍需工業の發達は更に斯業の進展上見逃し難き所である。

然るに業者概ね小規模經營なると、資金の圓滑を欠ける爲、如上の發展素因を具有せるにも不拘、業界の躍進を妨ぐる傾向あるために昭和五年三月九日工業組合を組織し、業者の有機的統制の下に、組合組織の眞價を發揮し、業者の覺醒による業界の振興を圖らんとし、現に著々と發展しつゝある。

福岡縣特産品とも云ふべき木蠟は其の最近に於ける年産額二百二十萬圓餘にして本組合の地區内に於ける生産額は三十五萬圓を超えてゐる。從來業界の開發に付ては重要物産同業組合法に依り、明治三十七年十二月筑前木蠟同業組合を組織し、爾來専心營業上の弊害を矯正し、斯業の發展に努力し來たりたるも、時代の推移と一般經濟界の現狀は同業組合の活動のみにては疲弊困憊せる組合員の統制の確保或は金融難の緩和等、到底不可能なるを以て組合に於ては、之等難局の打開策に腐心せしも何等適當の方策を見出し得ず、業者の窮乏は更に深刻を極め、事業中止の已むなきに至るものさへ生ずるに至つた。

然るに幸にして工業組合法の制定せらるゝに至り、同法による工業組合の設立を爲し、以て業界の更生を圖らんとする計畫の下に之れが設立を見、爾來統制を嚴にし、品質改良等による特産品たるの價値を向上せしめ、他面海外市場への進出を企圖してゐる。

(21) 筑後木蠟工業組合

縣下年産額二百二十餘萬圓の内約七十萬圓を本地區内に於て生産せる筑後地方に於ける木蠟業者は比較的近接し、六、七十年前創業せられてより以來業界の開發に専心努め、殊に特産品として海外への輸出貿易たるを以て重要物産同業組合法制定せらるゝや明治三十四年七月筑後木蠟同業組合を組織し弊害矯正の實績著しきものあつたが、時代の推移と一般經濟界の變移とは無統制なる現狀と消極的事業のみを以て甘んずるを得ず、既に福岡縣木蠟工業組

つて業者の自滅を惹起するの窮狀に陥つたので、組合の組織を爲し、爾來専心生産統制を圖り、極力品質の向上に努めたる結果、相當の効果を擧げ得たるも、工業組合を組織し、一段の健實なる事業の發展を期せんが爲め昭和九年三月十二日工業組合を設立したものである。

(24) 筑後傘第一工業組合

農村副業として興つた筑後和傘工業は、次第に隆盛となり、今日に至つたが、一度好況を呈するに至れば、群小企業簇出し、生産過剩を惹起し、無謀の競争による販賣を敢て行ひ、中間商人の乗する所となり、製品價格の動搖極り無く、遂には同業者相互を窮地に陥れる結果を誘發するので、夙に同業組合の設立を見、弊風の一掃に努めてゐるが、其の實績思はしからざるために、比較的同業者の集合せる本地區内に於て、昭和九年六月六日工業組合を設立し、之れが機能の發揮に依り、從來の不合理極まる原料、材料等の購入